
ざわざわ

千里 / 快晴 3 1 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ざわざわ

【Nコード】

N9032V

【作者名】

千里 / 快晴310

【あらすじ】

普通から少しずれた人たちのお話。

千里を探している謎の青年。

角がある以外はいたって普通な青年である千里。

顔を紙袋で覆っている男。

有刺鉄線と鋏を手放さない好青年。

四人が出会い、千里の孤独で無機質な日々は変化する。

外見の違いや種族の違いだけで差別される主人公達の間にある関係。それに重点を置いた作SF色のあるファンタジー。

1・雨の再会

子が生まれたとき、我等は絶望の末に彼を殺そうとした。矜持ゆえに我等がとろうとした行動は子を恐れての行動。自らを上回る力を持つことを許さず、抹殺しようとした。

それを生んだのは我等自身だというのに。

小雨が降っていた。

車道も歩道も雨水が洗い流す。傘をさして歩く人達の中、傘を忘れた数名が駆け足で帰途につく光景が見られる。

車は水溜りのの上を通って泥水を跳ね上げ、それを避けるように人々は車道から離れた歩道を歩く。

空は真つ黒だ。曇天、加えて夜間だということもあり月も星さえも見えない空は真つ黒に塗りつぶされている。

二度と関わることもないだろう人とすれ違いながら千里は歩いていた。

人の間を縫うように、黒い傘をさして俯き加減に歩いている。職務が終わって帰宅する人達で込み合う中、千里は特に目的もなく歩いていた。

特に珍しくない黒く長い髪は、低い位置で二つに結んでいた。傘をさしていても風で雨水は流れ、多少千里の髪を湿らせていた。

腰の位置まで伸ばした髪から雫が落ちる。

シャツにジーパン、どちらも跳ね返った雨で濡れてしまっていた。肌にとわりつくような感触が嫌で眉を顰めた。髪の色と同じ黒目が傘の下から周囲を窺う。

「お母さん！」

前方から迷子になったのか、母親を呼びながら走ってくる子供がいた。小さな子供で千里の腰ほどの身長しかなかったが、思いつきりぶつかられて千里はバランスを崩した。

ほとんど反射的に子供を庇い、自分が背中から地面に倒れた。傘が手から離れて少し離れた場所に落ちる。

「痛っ」

強く背中を打って痛みに呻きつつ、自分の上につつ伏せて倒れこんでいる子供の無事を知る。

「いててて…」

雨で濡れたアスファルトに思い切り寝そべったせいで背中までびしょぬれになってしまった。

子供が無事であることを知ると千里は忌々しそうに子供を突き放した。体の上から体重が消えると立ち上がる。

泥水を頬から拭い周囲を見渡して気づいた。

人目を集めている。

街中でいきなり転倒したのだ、それで多少は目立つだろうが、そんな面倒なことに関わっているほど行きかう人々は暇ではない。

しかし立ち止まり、こちらを凝視する人達が多い。

(また…か)

慣れた視線、自分と違うものを見て恐怖する、あるいは軽蔑する視線。白い目…とても表現するべきだろうか。

千里は無意識のうちに自分の額にある二本の角に触れた。自分で見ることは出来ないが皮膚との接合部分から先端に向かうほど紅色になっているはずだ。

昔話に登場する鬼とは違い、人間と同じで何も変わらない。特別な力もなければ特殊な術が使えるわけでもない。

ただ角が生えている…ついでに獅子のような尾があるだけの人間だ。しかし周囲はそうは思わないらしい。

「お、鬼だ！」

この世界で自分の存在は有名らしい、勿論悪い意味でだが。

角のある人間だ…珍しがられ、怖がられ、研究対象としてしばらくの間は捕らえられたこともある。

千里は体を払うと落ちた傘を拾った。

(傘をさしていれば隠せると思ってたけど)

そうでもないようだ。常にイレギュラーというのは存在するのだな…と周囲の喧騒を無視してそう思う。

ざわつき始めた人々が千里を見て顔を顰める。

不快ならば見なければいいのに見世物のように扱われ、千里はなれたことはいえ溜息をもらした。

「退け」

目の前で呆然と自分を見ている子供を邪魔だと押しつける。

「あれが噂の鬼？」

「化物みたいだな…マジで角が生えてんぞ？あれ飾りじゃねえだろ？」

「近付くと食われるぞ」

根も葉もない噂が事実となってしまうている。

(誰が人間なんて食べるか)

口には出さずに毒づきながら群がる人々を無視して歩き出す。誰かに悪口を言われるのは慣れていたが、それでも不愉快なことに変わりはない。

「翔太！」

「おかーさん！」

どうやらぶつかってきた子供の母親のようだ。子供に駆け寄って抱き締めると、千里をキッと睨みつける。

「私の翔太に何をしたんですか！」

「は？」

「汚らわしいっ…翔太が呪われたらどうするつもりなの！」

「……」

(ああ…なるほど)
そういうことが、と納得いった千里はヒステリックな金切り声を上げる女を無視して歩き出そうとする。

何もせずに立ち去る千里の背中に女の罵声があびせかけられた。

「気持ち悪い！気持ち悪い気持ち悪い！どうしてあんたみたいな化

物が生きてるのよ！どうして私達は何もしていないのに手を出してくるのよ！私も翔太もあんたに何もしてないでしょ！」

「帰れ化物！」

「死ね化物！俺達の生活を乱すな」

周囲の人間も母親に便乗して罵声を上げ始める。

つまりはそういうことだった。

千里は立ち止まると目を伏せる。

つまり、自分は人間たちにとって得体の知れない存在であり、邪魔であり、恐怖の対象なのだろう。

母親という小さな火種から一気に燃え広がり、千里を罵る喧騒はだんだんと大きくなって騒音と呼べるほどになった。

(ざわざわ…ざわざわと)

「…うるさいんだよ、人間共が」

小さな呟きだったがその言葉は失望に満ちており、聞いているだけで耳から冒されそうな響きがあった。

怒りを通り越した千里の呟きに一瞬で騒音が止む。

雨が地面を打つ音が耳障りなほどに大きく感じられた。

静かになったことに満足した千里はそれ以上関わるつもりはないようで、無言のまま歩き出す。

誰もが千里のことを見ていながら、誰も追うことができなかった。

「説明してもらいたいな、僕は」

金髪を一つ結びにした男は黒髪の男に問いかけた。

黒髪の男の目は黄金色だったが目を閉じて椅子に座っているため今はそれが見えない。

それに対して金髪の男は温厚そうな顔をした好青年であったが、今だけは黒髪に迫るようにして問い詰めている。

「…何をだ、俺はお前に説明できることは説明したはずだ。これ以上何を知りたがる？」

鉄と呼ばれた金髪の男は困ったように眉根を寄せた。カジュアル

な格好に黒い腰エプロン、しかし名前にあるように、彼の胸元には銀色の鍔が揺れていた。

植物を切るときに使うような先端の尖った鍔で、鍔の首から有刺鉄線の糸が伸び、その先に吊り下げられていた。

鉄線の棘が首を突き刺し、所々白い皮膚が赤くなっている。

更に鍔の左手首と左足首は鎖で繋がれている。動けないわけではないだろうが、明らかに動きが制限されていた。

「佐藤、肝心なところが説明されてないよ。どうして千里は」

目蓋があがって黄金の目が鍔を睨んだ。

「そのことをどうしてお前達が知れたがる？千里の耳に入れば面倒なことになる…俺はお前達を信用していない。だから話さない」

佐藤と呼ばれた黒髪の男は白い浴衣に身を包んでいた。肩から西洋風の黒いマントを羽織っているため、少し合わない。

冷淡な口調で返答すると、これ以上話すことはない佐藤は目を閉じて再び眠りにつこうとする。

呆れたように鍔は首を振った。

その合図を受けて離れた席に座っていた銀髪の男は予想通りだ…とクスクス笑った。

そこはバスだった。

バスの乗客は三人、佐藤が一番後ろの席に足を組んで座っており、情眼を貪っている。

それに鍔…最後の一人は少し、いや、大いに特徴的な姿だ。

銀髪だがその髪はほとんど見えない。頭から紙袋をかぶって鼻先より上の顔は覆われていて見えなかった。

紙袋には所々破けている箇所があり、そこから銀色の癖毛が飛び出している。

「やあやあ失敗か？相変わらずあいつは口堅いぜ」

「紙袋の変人つぶりも相変わらずだよ。僕だけに任せないで君も手伝ってくれたら助かるのに」

佐藤から離れた場所に座っている紙袋は片手に白い皿、片手に銀

色のフォークを手にしていた。

皿の上に乗っているのはイチゴの乗ったショートケーキ。

彼の口元に白いクリームがついているのもそのせいだろう。

のんびり一人でケーキを貪っている紙袋を見て鉄は再び呆れたように溜息をつく。

個性的な三人の中で苦労人が鉄なのは一目瞭然だった。

「そうだなー俺のこと紙袋様って呼んでくれたら考えてやらなくもねえぜ」

「そんな趣味ないよ…それに、僕がそんな言葉吐いてるの見て楽しいかい？」

「なんでだよ、メイドは正義だろ」

「……次元の違う話をされてるみたいだ。僕には理解できない僕には理解できない僕には理解できない……」

自分に言い聞かせるように耳を手で塞いで連呼する鉄を見て紙袋はケラケラ笑う。

「おっと」

ガタンっ！

バスが停車したようで一度大きく上下に揺れた。座っていた佐藤はともかく、ケーキを食べていた紙袋は少しクリームを頬に受けただけで済む。

しかし鉄は立っていたため少しバランスを崩して椅子を掴んだ。

「着いたのか？」

「そうみたいだね…佐藤！」

「分かってる」

揺れで覚醒したらしい佐藤はひょいっと椅子を飛び降りると、バスの真ん中をどうどうと歩いて降車口から外に出た。

佐藤に続いて鉄、紙袋も外に出る。

時間帯は深夜、空は暗くどうやら雨も降っているようでポツリポツリと雨粒が佐藤の浴衣を濡らした。

紙袋の感心は天候にはないようで、周囲を見回して感嘆の声をあ

げる。

「すげ、文明進んでるな。地面が固てえぞ」

「アスファルトってやつだよ…うん、僕の生まれたところとは少し似ているかな。こっちのほうが進んでるみたいだけど」

「…」

佐藤は手を出して掌に落ちる水滴を暫く観察していたが、無言で手を胸の前で横に振る。

青白い光が佐藤の指先の後を追うと、佐藤の体はそれ以上濡れなくなつた。

雨粒が佐藤の体に触れる前に全て蒸発しているようだった。

「行くぞ」

「おま、それずりいぞ！俺にもかけてくれよ」

「自分でやれ」

「できるわけねえだろ！」

「紙袋、これ貸してあげるから…ね？」

鉄の差し出したビニール傘を受け取って渋々それを広げる。

「傘って持たないといけねえのが面倒だよな」

「贅沢言い過ぎだよ」

もう一つ、自分のために持っていた傘を鉄も広げる。利き腕である左手で傘を持つとするが鎖の限界であがらない。

仕方なく右手に持ち替えた。

二人のやり取りを傍観していた佐藤が指示を出す。

「…千里を探せ」

月の隠れた夜、頼りになるのは街灯の明かりだけだ。

蛍光灯の頼りない明かりの中、千里は静かに歩いていた。傘は途中で捨てた…濡れてしまった今必要ないものに思えたからだ。

それ以上に…角を隠している自分に虚しいものを感じたからだ。

「…俺は一体何してるんだらうな」

自分を嘲る。

傘を捨てたのは角を隠さないという意味の表れだったはずなのに、それでも人間の少ない道を選んでいる自分に気付いて嘲笑する。

怖がりな鬼だ、嫌われることには慣れているはずなのに。

（罵声を浴びせられるのは嫌なのか、俺は）

小さな道を歩いていると小さな工房が見えてくる。どこかの車の部品を作っている工場らしいが分からない。

その工場の裏手に回る。小さな路地裏を通って安っぽい扉に鍵を差し込んで開けた。

そこが自分の住むことが許された場所だ。

「……だいま」

誰も返事をしてくれる人はいないと分かっている。分かっているも何故か毎回言ってしまう言葉だった。

薄暗い部屋に入って手探りでスイッチを探した。

明るくなつた狭い部屋、家具はほとんどない…必要なかった。

最低限の寝床として使っている場所だ。家と呼べるかも怪しい。濡れた服を脱いで工場の人が捨てるといっていたのを拝借した作業用のズボンをはく。

細い腰には似合わない大きさが動きやすいので気に入っていた。半裸だと冷えた。体を震わせて早目に拭くべきだとタオルを取り出して頭に乗せる。

暫く考えて髪を結っていた白い紐も外した。長い黒髪が背中に落ちる。

「…伸びたな」

切るうとは思っているのだが面倒なのでそのままにしておいたのだ。それに髪が長いほうが角が隠れやすい気がした。

ゴシゴシとタオルで黒い髪を拭く。

壁に背中を預けてやることもなく木製の天井を見上げた。

「……」

ぼんやりしていると眠気が襲ってくる。

するとそれを妨害するように、今まで一度も人の尋ねてきたこと

のなかつた扉がノックされた。

驚きから一気に覚醒する。

「！」

(…誰だ?)

警戒心から息を殺して居留守をすることにする。じつと玄関を睨みつけているとノックは途切れた。

どうやら扉の外にいるのは一人ではないらしく、暫く話し声が小さく聞こえた。会話の内容までは分からない。

言葉が途切れると同時に、勝手に鍵が開く音がした。

「ここだ」

佐藤が立ち止まった場所は裏路地と呼ぶに相応しい、建物と建物との間の細い道、その半ばだった。

大人一人がようやく通れるような道だ。佐藤が立ち止まると必然的に後に続く二人も立ち止まることになる。

「本当か?こんな場所に俺の千里がいるのか?」

「君の…じゃないよ。また変なこと考えないでね紙袋」

「変な事ってなんだよ!」

「君の考えそうなことだよ」

「お前な」

「静かにしろ」

佐藤が一瞥してそう言うと二人とも俯いて黙り込む。

「でも本当にここなのか、佐藤?」

「ああ」

佐藤が二階扉を手の甲で叩く。

「……」

しかし応答はない。

「まずこんな場所に人住んでるのかよ、大丈夫なのか?」

「開ける気はないようだな」

「居留守かよ、お前も嫌われてんなあ」

「……」

その言葉に佐藤が紙袋を睨みつける。殺意すらこもった冷たい視線に紙袋は言葉を詰まらせて黙り込んだ。

鍵穴に視線を戻した佐藤は鍵を宛がうべきそこに人差し指の腹を押し当てた。

指先が青白く発光して鍵穴に光が灯る。指を横にずらすと光が指と鍵穴の間に尾を描いた。

ガチャンつと開錠の音がする。

「へー、盗人みたいなことできるんだな」

「行くぞ」

扉を押し開けて佐藤がはじめに入る。部屋の中は明るかった。

誰かがいることは確かで、すぐにその誰かの姿を見つけた。

「…っ！」

佐藤が息を呑む。

「誰だよ…お前達！」

警戒したように三人を睨みつけて壁側に座っている青年、それは間違いなく三人の探していた千里だった。

「千里…だ」

「?…俺のこと知ってるのか？」

名前を呼ばれたことで少し警戒心を緩めた千里が首を傾げる。それを見てずつと黙り込んでいた紙袋が数歩前にでた。

紙袋越しだから見えていないはずなのに千里がいるということは分かるようで、小刻みに震えて俯いている。

「紙袋？」

「なんで…」

「紙袋…」

いつもと様子の違う紙袋を見て鉄は伸ばした手を戻した。今紙袋に触れるのは無粋な気がした。

「なんで…」

「?」

「なんで半裸なんだよ！」

大きく叫ぶといきなり千里に向けて一直線に駆け出す。

両手を広げて狂気すらも感じられる勢いで迫る紙袋を見て千里も怯えたように体を縮めた。

「どうして君はそっち方向に思考が飛ぶんだよ！」

「げへっ！」

瞬時に移動した鍔のとび蹴りが横から飛んできて、横っ腹にそれを受けた紙袋は吹き飛ばされる。

それでも暴れて千里に近付こうとする紙袋の首を鎖で絞める。

「うぐぐ… 鍔貴様、殺す気か」

「殺しはしないまでもブラックアウトぐらいしてもらわないと千里の貞操が危険だからね」

「ぐっ… 同志よ！お前には分かんのか千里の可愛さが！」

「勝手に同類にしないでくれるかな！」

「ごちゃごちゃと争いを続ける鍔と紙袋を横目に、佐藤はその隣を悠々と歩いて千里の下へ近付くと膝を突いて視線を合わせた。

「千里」

「あんたには話、通じそうだな」

「…突然無礼な訪問だったとは思っている。そこは謝罪しよう…すまなかった」

突然の襲来者が妙に礼儀正しく謝罪することに居心地の悪さを感じたのか、千里は目を逸らして髪を拭いていたタオルを首にかけた。いきなりあがりこんできたことに憤りを覚えるべきなのだろうが、佐藤の冷たく、しかしどこか慈しむような色のある瞳を見てそんな感覚は消え去ってしまった。

「別に、驚いたけど」

「色々質問があるだろう？」

「ああ、疑問だらけだ。まずあんたら誰だ？どうして俺の名前を知ってるんだ？鬼を殺しに来た連中か？」

鬼を殺しに来た…という質問で佐藤が不快感から眉を顰める。

だがゆっくりと首を振った。

「俺達…少なくとも俺はお前を殺しに来たわけじゃない。俺は佐藤…奴らは鉄と紙袋だ」

「鉄？紙袋？…佐藤？」

どちらがどちら…とは説明されなかったが、その容姿から計り知ることが出来る。それにしても似合わない名前だ。

「偽名だ…本名を知られると困る仕事もあるものでな」

「仕事？それで、殺しにきたんじゃないならどうして俺のところに来たんだ？」

「千里に共に来て欲しかったからだ」

「俺に？」

「ああ…三人の共通する願いだ、俺達の本来の目的でもある。とりあえず一緒に来て欲しい…話はそれからだ」

差し出された手をじつと見つめる。

千里は暫く相手を見定めるように佐藤と…その背後でいまだに小競り合いを続ける二人を交互に見た。

二人はともかく、佐藤は信用に足りる男だと感じる。

「突然来襲した不審者についていけてることか？」

「それに関しては何も反論できない。ただ信じて欲しい」

「……」

「それとも、こんな日常に縋り付く理由でもあるのか？」

（…ないな）

この手をとった事を後悔したとしても、手をとらず生き地獄のような生温い日々を過ごすよりはマシな気がした。

（それに…少なくともこの人達は俺の角を見て何も言わなかった）意識するほどでもないことなのかもしれないが、それでも千里の中では大きな問題だった。

自覚はなくとも心は正直だ。

胸の奥が確かに暖かくなるのを感じる。

「……のか？」

「？」

「いいのか？…俺みたいな化物と一緒にいて」

黄金の双眸を見ていると心が見透かされているような気がして、千里は目を逸らすために俯いて呟いた。

「鬼と一緒にいれば呪われるかもしれない…いや、呪いなんてあつてもなくても一緒だ。俺と一緒にいるだけで周囲から疎まれる。ははっ…呪いと一緒だな」

「……」

「きつとあんた達に不幸しかもたらさないぞ、俺は。そんな俺と関わっていいのか？」

黙って千里の言葉を聞いていた佐藤だったが、ふつとその顔に初めて微笑みを浮かべた。

笑っただけでその印象はガラリと変わる。

冷酷な印象は消えて、暖かい雰囲気へと変わった。

「化物か、お互い様だ」

「…どういう意味だ？」

言ってから後悔したのか、自嘲するような笑みを浮かべた佐藤はどこか悲しげに見えて千里は思わず問いかける。

しかし佐藤はそれに応じることなく、無言で千里を見ていた。

顔をじつと見ているがそれが楽しいのだろうか？

「お前は呪われてなんていない…他者を呪うこともない。千里は優しいからな」

「優しい？俺が？…どうして初対面のあんたにそんなことが分かるんだ？」

「分かる」

差し出していないほうの腕で佐藤は口元を拭った。何も着いていないのに何度も何度も…癖なのだろうか。

「千里」

「……分かった」

差し出された手をとった。思っていた以上に冷たくて千里は驚く。

そして予想以上に強い力で引き上げられ、千里は立ち上がった。

この男の手をとったのは初めてのことであるはずなのに、どこか安心できた。どうしてなのか考えるが答えは出ない。

「そういえば…千里に会ったら言わないといけない言葉がある」

「ん？」

「…ありがとう」

「何のことだ？」

お礼を言われる覚えはなく千里が尋ねると、佐藤は無言で目を逸らす。答えるつもりはないようだ。

「てめえ！俺より先に千里と手を繋いだな！」

「…うるさい」

「うるさいって何だようるさいって！分かったぞさてはお前、お前も千里と…ふぎやああ！」

何かを言いかけた紙袋の顔面を鋏が蹴り飛ばす。

「それはちよつと言葉が過ぎるね紙袋くん」

蹴られた紙袋は這いつくばったまま蹴った張本人を見上げる。

「ぐっ…無念」

「なあ」

「何だ？」

「どうしてあの袋の奴は鼻から血流してるんだ？」

「…知らん」

白い鳥を彷彿とさせる青年は薄暗い部屋の中ひとり、違う世界を映し出す鏡を覗き込んでいた。

鏡の向こうに写るのは雨の止まない世界。

自分がせめてもの償いと、自己満足のために彼に与えた世界。

「千里」

呟いて鏡に手を当てた。自分らしくない行動だ…と笑う。

冷やかな感触だけで、その先に指が進むことはない。行こうと思えば行けるのだ。

会おうと思えば会えるのだ。

しかし青年はそれを自ら拒み、見守るだけとした。
佐藤が鏡に映ると目をすっと細める。

「どうして…？」

すぐにその答えに思い当たり、世界の狭さとあまりの滑稽さに笑いが止まらなくなった。

一人、ケラケラと笑い続け、そろそろ腹が痛くなってきたころ、ふっと表情を消して悲しそうに眼を伏せた。

「因果だね、本当に。どうしてこう…神様ってやつは僕に試練ばかり与えるのかな？僕のこと嫌いなのかい？」

自問自答すればすぐに答えがでた。

「ああ」

納得して再び自嘲的な笑いがこみ上げてくる。

「罰ね」

1・雨の再会（後書き）

つづきます

呼んでいただければ幸いです。

誤植等ございましたらご報告いただけると助かります。

2・交通手段

連れて行かれた場所に到着すると千里は驚いた様子だった。

目の前に聳え立っているのはアンティークのような建物、繁華街の一角にあり、しかし交通量の多い大通りからは一本違う道にある。落ち着いた色で統一された建物で、お菓子を取り扱う…もしくは小物を取り扱うようなお洒落な見た目をしている。

おとぎ話に出てきそうな…と表現したらいいだろうか。

二階建てらしく、見た感じはかなりの広さだろう。

二つ結びに戻し、白いTEEシャツを着た千里が感嘆の声をあげる。ゆっさゆっさと腰から飛び出した尾が揺れた。

「凄いな…これ、佐藤の家なのか？」

「…いや」

「ふおおお！千里の尻尾が揺れてる！なあなあべるぺろしていいか？いいな！」

「いいわけない！」

開いていた傘を閉じてそれで袂が紙袋を殴る。

「ぎゃああ！」

本気で殴ったのか、紙袋は倒れて動かなくなる。雨に濡れている姿は少し可哀想だ。

「その家は僕が用意を。といっても…佐藤のツテを使ったんだけどね。僕はこの世界は初めてだから」

傘を再び広げてながら袂が微笑む。

「初めて？」

「うん…ああ、そうか。佐藤、説明はまだなんだ」

「どうせ信用しない。見せたほうが早いだろう」

「をあい…なんでそいつと千里は相合傘してんだ！」

「千里が濡れたら困るだろう」

「お前がさしてやる必要ねえだろ！」

うるさい…と大袈裟に佐藤は不快感を露にした。
「とりあえず中に入るう？話はそれからだ」

中に入るとほとんど空き家に近い状態だった。

何も家具はなく、一階は大きな玄関を過ぎてすぐ広い部屋があり、そこには最初から机と椅子が幾つか用意されていた。

二階に何かあるのかと聞くと、どうやら個室が幾つかあるようだ。
「千里に見せたいのはこっちの部屋だ」

佐藤に案内されるまま机のある部屋を通って突き当たりの扉の前に立つ。

何故かその扉だけ他とは違い曇ったガラス張りで、まるでステンドグラスのように色分けがされている。枠もないガラスだけの扉だが鍵の部分だけは金属で出来ており鍵穴がある。

どうやら部屋に入るためには鍵が必要なようだった。

佐藤が胸元に手をつ込み、浴衣の内側から何かを取り出す。

「鍵…それがこの鍵か？」

「ああ」

しかし佐藤の掌の上にある鍵は一つだけではなかった。合計で三つ乗っている。

同じ部屋の鍵ならば当然鉄、紙袋、佐藤のものなのだろう…と考えていた千里の掌に冷たい鍵が落とされた。

突然のことに取り落としそうになって慌てる。

「え、え？」

「千里が持つておけ…個人で使うことはないと思うが、念のためだ」

「うん、なくさないようにね千里。特に紙袋」

「なんで俺は無くす事前提なんだよ」

鉄は有刺鉄線に鉄と一緒に通す。紙袋は一度鍵を噛む。

「まず」

「当たり前…どうして食べようと思うかな」

勿論食べられるわけもなく、紙袋はそれを自分の頭部を覆ってい

る袋の中に穴から放り込んだ。

自分はどうしようか…と千里が鍵とにらめっこをしていると、横からのびてきた白い手が鍵を取り、茶色い革紐に通して首に掛けてくれた。

「あ…りがとう」

「…礼を言われる立場じゃない」

ボソツと佐藤が呟いた。

その表情は憂いを帯びている。悲しい気持ちにさせてしまったのかもしれない、と千里は考える。

自分にとっては礼を言うという単純な行動に過ぎなかったのだが、佐藤にとってはそれが何か大切な意味をもつこともある。

「そういえば佐藤は要らないのか？」

重苦しい話題から話を切り替えようと千里が提案する。

「俺には不要だ」

その言葉を証明してみせるように、佐藤は鍵穴に触れて横に指を引く。青白い線が浮かんで開錠の音がした。

魔術と呼ぶに相応しい芸当を目にして千里は絶句する。

この世界にそんな非科学的なものは存在しないと思っていたからだ。

「それで俺の家も…どんな仕掛けだ？」

「仕掛けなどないが、信じろとは言わない」

ステンドグラスの扉を押し開けると中は壁も天井も床すらも真っ白な空間だった。光源などないのに明るい。

入口で立ち止まっていると紙袋に背中を押された。

「ほら、早く入れよ」

「あ、ああ」

何も無い部屋…しかし四人が入っても余裕がある大きさだ。

「何だ、まだ繋げてないのか」

「無茶言うなって…僕にそんな力ないよ。こればかりは佐藤にやっってもらわないと」

部屋の中央に立った佐藤は懐から取り出した何かを放り投げた。重力にしたがって落下したそれは着地することなく、地面からメートルほど浮いた場所で静止した。

(浮いてる)

驚きの連続だったが堪える。

浮いているのは茶色い枝、先端にはピンク色の花が咲き誇っている。実物を見るのは初めてだが知っている花だ。

「桜？」

「造花だ…枯れることもない」

言われてよくみると花弁の部分が薄いガラスで出来ている。

「大事なもののなのか？」

「…大切なものだからこそ対価になる」

辛そうに目を伏せた佐藤だったが、思い切ったように突然花の部分に手を伸ばすと強く握り締めた。

パキンッ！

軽い音がして花が砕ける。

手を離すと桜は浮遊したままだったが、花弁は砕けてゆらゆらと動きながら宙を漂っていた。

その様を見て千里は首を傾げる。

(…何だ？)

空、黒い鳥。

一瞬過ぎたその映像は白昼夢に似たものなのかもしれない。頭を振って訳の分からないイメージを振り払う。

決して表情に出さないが辛そうな佐藤はたった今桜を砕いた自分の掌をじっと見つめている。

「怪我、してるのか！」

ガラスを直接割ったから当然ではあるのだが、佐藤の掌は浅く切れて血があふれ出していた。

「お前は…こちらを…いや、心配するな」

「大丈夫だぜ千里、そいつ化物じみてるからそんな怪我舐めとけば

治るんだよ」

化物という言葉に反応して佐藤が紙袋を一瞥する。

「けっ…なんだよ本気でキレんなよ」

「ならば余計なことを言うな」

「あ、でも舐めるなよ千里！そんなこと俺以外にはゆるさ」

「黙ろうか」

「…分かったから鎖構えるの止めてくれ、いや止めてください」

鍔が左手足を拘束する鎖を両手で持って構えると、効果抜群なように紙袋は静かになる。

「ごめん邪魔したね佐藤、続けて」

毎度のことながら鍔は本当に笑顔を崩さない。

微笑みを浮かべた優男が男の首を絞めているというのは、なかなかシニールな光景なのだが。

「いや、これで完了だ。後は行きたい場所を魔術式に組み込めばバスが来る」

「へえ、結構簡単な作業なんだね」

「ちよつと待ってくれ…バスって何だ？」

まったく話についていけない千里が尋ねると、鍔がそうだったと手を打って口を開こうとする…が喋る前に口を閉じた。

「見たほうが早いね…佐藤、何か依頼は来てるのかな？」

「前の店で受けたものがある。内容は化物退治…比較的単純な依頼だ」

「じゃあそれ、駄目かな？」

「いや」

佐藤は桜の前に立つと指先を桜に触れさせて目を閉じた。

桜が一度光り、それを確認して一歩下がる。

白い壁から突然何かが飛び出してきて、桜の前に停車した。それは大きな、しかし見たことのある乗り物。

「バス？」

「そ、これが僕らの言ってるバスだよ」

目的地の表示のないバスが停車していた。

何か特別なつくりをしているのかと疑いながら乗り込んでも、普通に見たことのあるバスとは何の違いいもない。

強いて述べるなら広告等がまつたくないことだろうか。

鉄に案内されてバスの後ろ側に近い席へと腰を下ろす。

「なんで壁からバスが…」

「驚いた？僕等も最初は驚いたけどね…佐藤に何度説明されても理解できないから千里にも上手い説明は出来ないかな」

「…まさか本当に魔法なのか？」

「いろんな世界があるってことだよ…僕や君の世界みたいに現実主義な世界もあれば、佐藤のいたところのように空想世界のような場所もある。多重世界っていえば分かるかな？」

「多重世界…」

聞いたことのある言葉…というよりフィクション作品では使われすぎている言葉であり世界観だ。

自分達のいる世界は時空間上に並べられた世界の一つでしかなく、幾つかの世界が他にも存在しているという根拠のない話。

しかしそれが事実だとするなら、佐藤達の言っていた自分達の世界、初めての世界という意味も分かってくる。

(そんなことが本当にあるのか？)

しかし今まで生きてきた中で身についた常識がそれを安易に信じるということを拒んだ。

「疑り深いんだな千里は」

「紙袋の言えたことじゃないと思うけどね…君はなかなか信じなかつただろう？」

「うるせえな…俺は目で見て信じる派なんだよ。それにだ、俺だつて目的さえなけりゃ、てめえらみたいな怪しい連中についていくかつての」

「目、見えてないくせに」

「放つとけ…というかそこは言っちゃいけないところだろ、気使えよ」

「紙袋…さんか？」

初めて名前を呼ぶとなってなんと呼べばいいのか分からず、とりあえず敬称をつけて呼んでみる。

「呼び捨てで構わね…で、で！俺に何の用だ？」

期待に満ちた目で千里の続ける言葉を待つ。

「紙袋は気にしてるのか？」

「あ？…あー、これのことか。これは俺の意思でかぶってるもんだ。目が見えないが他の感覚で補える。別に気にしてねえよ…今はもう」
本当に気にしていないらしく、むしろそこを気遣われることのほうが気恥ずかしいのか紙袋はがさがさと頭を掻いた。

袋がわさわさと音を立てる。

「ま、とにかくだ。見たほうが早いんだよ！」

「珍しく意見が合うね。…そういえば佐藤」

「何だ」

佐藤は三人がバスの後部に集まっているのに対し、一人だけ前方本来なら運転手の座る位置の近くで何かをしている。

険しい顔をしているため何か細かい作業なのかもしれないが、声をかけられて不承不承ながらも顔を上げた。

「次、魔法とかつてある世界かな？」

「魔術だ…呼ばれ方は異なっているが、記憶が正しければ僅かだが存在していた世界のはずだ」

「うん、丁度良かった。千里、今から行く世界は魔法とかがある世界みたいだから…君もきつと信じてくれると思うな」

「…どうして佐藤は詳しいんだ？」

ずっと気になっていたことを尋ねてみる。

三人は聞いた話から推測するに一緒に千里を何故か探していたようだ。つまり三人で旅をしていたということになる。

だが紙袋に関してはあまり多重世界に関する知識はないよう

に思え、鉄は慣れているようだが分からないことは佐藤に頻繁に尋ねていた。

「佐藤が一番古参だからかな…僕も詳しいことは知らないけど、僕が佐藤に会ったとき彼は一人で時空移動を繰り返していた。目的が重なったから僕は彼に協力することにしたんだ。紙袋も一緒だよ」

「目的？」

「うん、目的…強面に見えてね、佐藤の目的は本当に些細な夢なんだよ」

「鉄っ！」

それ以上を言わせないように佐藤が叫ぶ。

珍しく激情をはらんだ佐藤の声に鉄は口を噤み、微笑むと千里から離れて席に座った。

二人のやり取りを見ていた紙袋も珍しく何も冷やかすことなく千里の近くの椅子に座った。

(何か…聞いちゃいけないことだったのか?)

突然静かになった車内の空気に居心地の悪さを感じた。

前方でなにやら機材を弄っていた佐藤が作業を終えたようで、溜息をつくと最後尾の椅子に座る。

運転手がいないはずのバスは暫くすると自動的に起動し、エンジン音と共に壁に向かって走行を始めた。

ぶつかると思いきや壁を突き抜けて真っ白な空間へと移動する。

「なんだよ…これ」

見たことのない風景に啞然とする。

千里の問いには誰も答えない。見て判断しろということなのだろ

う。誰も喋らない車内は沈黙に包まれている。紙袋しか能動的に喋る人はいないようで、その紙袋が黙った今沈黙だけが続いていた。

退屈を紛らわせる為に窓の外をぼんやりと見ているが、ずっと白い光景が続いているだけ…二秒もしないうちに飽きてしまった。

退屈は睡魔を呼ぶ。

うとうとしていた千里は、断続的に繰り返されるバスの揺れのせいもあって次第に意識を手放していった。

「……」

(…チャンスじゃね?)

バス内は静かだ。移動時間のある程度かかるバスの中、特にやることもなく退屈だったのか、千里は眠ってしまった。

珍しく鉄も俯いて目を閉じている。

当然のようにいつも眠っている佐藤も鉄と同じように目を閉じて静かな寝息を立てていた。

一人密かに起きていた紙袋はそっと座席を離れる。

そっと足音を立てないように千里の眠っているほうへと近づく。

(寝顔：ブフオッ！)

声をあげるわけには行かないので口元を押さえて悶える。

そんな紙袋を常に殴ったり蹴飛ばしたりする鉄は今はいなかった。

(可愛すぎだろ！可愛すぎだろ千里！)

じっと凝視し続けて五分近く経ったが誰も起きる気配がない。

(…これは…チャンスだ！)

そっと千里に手を伸ばす。

(神様がきつと日頃鉄に蹴飛ばされてばかりいる不憫な俺にチャンスを与えてくださっただに違いな…)

「何をしている」

「ひっ」

千里まで後一センチ…というところまで指先が到達したとき、予想外の冷たい声が聞こえた。

こんな低い声の持ち主は一人しかいない。

見て確認するまでもなく誰なのか分かって背筋が寒くなる。

「ちっ、化物かよ」

「その呼び方は止めろといっている。それよりお前今何をしようとしていた」

「べ、別に何も疚しい事など！」

「なるほど…な」

納得していないだろう雰囲気で閉じていた目を開く。立ち上がる
と千里の席に近付いて紙袋の手を払った。

「…なんだよ、いつも俺と関わりたくもねえって顔してスルーし
やがるくせによ、こんなときだけ邪魔するの？」

「お前がどうなるうと何をしようと思った事ではないが、千里が関
わることなら別だ」

「はっ、随分べつたりなこった…言つとくけどな、お前だけの夢じ
やねえつてことを覚えとけ。お前が過去に何をやったのかは知らね
えし聞くんつもりもねえけど、俺達だって」

「…新参者が調子に乗るな。お前達とは桁が違う」

「桁？…一体お前は何だよ？」

答えない佐藤はじつと紙袋を睨みつける。

そのときバスが大きく揺れて何の支えもなかった紙袋は倒れこん
だ。佐藤は揺れなど問題にしないように平然としている。

「いてえ！」

揺れと紙袋の悲鳴で千里は目を覚ます。すると何故か近くにいた
佐藤に気づいて驚いた。

「なんだよ？」

「別に、虫が寄っていただけだ」

素っ気無く言い放つとすぐにバスを降車してしまう。千里も慌て
て席から腰を浮かせると、倒れている紙袋を無視して佐藤を追った。
少し遅れて鉄も目を覚まして、すぐに倒れている紙袋を発見して
首を傾げた。

「どしたの？」

「…失恋」

「は？」

「いいんだよ俺は失恋如きでは諦めない、何度だって蘇るゴキブリ

のような遅しい人間になるって」

「ゴキブリ…うん、もう充分だと思っよ」

何故か落ち込んでいる紙袋を慰めるように鉄が背中を撫でる。

エンジン音の止んだバスの前に四人はいるのだが、佐藤はバス全体を見てなにやら考え込んでいて、千里は初めてみる光景に感嘆の声をあげていた。

人工の地べたではなく、自然の芝が生い茂っている。

その先に見えるのは灰色の建物ではなく緑の山々。空が青い、そして太陽が出ていて雲が白い。

灰色ではない雲だというだけで珍しく思えた。

「凄い…な」

「…初めてなのかな？」

「鉄さん…ああ、俺の世界は晴れることがない世界なんだ。空が青いって知識では知ってても、実際に見るのは初めてだ」

雨が毎日降っているわけではないが、環境汚染か何かが原因で空が見えることはない世界になってしまっていた。

太陽が雲間から出ることであっても、今見ている空のように美しい色を見せてくれることはない。

そのことを伝えると鉄は違うところが気になったようだった。

「あれ、どうして僕だけさん付け？」

「あ…なんとなく、常識人だから。嫌だったら変える」

「大丈夫だよ、千里の呼びたいようにしてくれれば」

「そうか」

呼び名が受け入れられたことが喜ばしく、些細なことだが千里は笑う。

ずっと一人でバスを見ていた佐藤が動き出し、バスを一周するところから取り出したのか黒い鴉の羽のようなものを手に取り、息を吹きかけた。

羽が白い炎に包まれる。

熱がる様子もなく燃えた羽を落とすと、バスが消えた。白い炎に

包まれたかと思えば、炎がバスの向こう側の光景を映し出した為だ。そこにあるのかもしれないが視覚で感じることは出来ない。

「…凄いな」

「俺の力など大それたものじゃない。こうやって見ることは出来ないようにしたが、触れれば分かる…それに臭いや気配で分かるだろう、完全じゃない」

「臭い？バスに臭いなんてあるのか？」

「あるぜ…化物が何をしたのかは大体予想つくけどよ、俺からすると何も変わってねえように感じる。元々視力には頼ってないからな。紙袋は視力に頼らず行動をしていると聞いた。

つまり視力以外が特化した人間にはバスが発見される危険性があるということだった。

「これだから俺はそいつが嫌いなんだ」

「お、何だ…俺に嫉妬してるってわけか？」

「そういう態度が嫌いってことだと思っよ紙袋。佐藤…地理は分かる？」

尋ねられて佐藤は先程までの千里と同じように周囲をぐるっと軽く見回した。

思い出すように考え込む。

「発展の世界…この辺りは覚えがある、大丈夫だ」

(また佐藤に聞いてるな…)

古参だといっていた。彼の発言から推測すると佐藤は一度この世界に来たことがあるようだった。

「発展の世界ね…この世界の正式名称じゃないよね？」

「俺が勝手につけた名前だ、あまり気にしなくていい」

「どうということだ…勝手に？」

「多重世界を知らない人間が自分の世界に名前をつけるわけがない。千里は自分の世界の名前を知っているか？」

「…国名とかなら分かるが、そう言われてみれば知らないな。国を総纏めにした名前なんて聞いたことがない」

「そういうことだ…ただ、俺達は世界を判別する為に便宜上呼び分ける必要性がある」

世界を旅する上で世界に名前がなければ不便ということだろう。

佐藤の言葉で納得した千里は頷いた。

「…こつちだ」

じつと地平線の辺りを眺めていた佐藤が歩き出す。

向かう方向には木々が茂った森があった。何の知識も持たずに入るには自殺行為だが、佐藤の迷いのない歩調を見る限り道は分かっているようだ。

「つたく、どこに向かうんだよ？」

「……」

「無視かよ！」

「佐藤？…どこに行くんだ？」

「この近くに以前この世界を訪れた際世話をした人間の家がある。とりあえずはそこに…それから情報収集だ。討伐依頼だが、対象の情報がないとはどうしようもない」

「なんで千里にはすらすら答えるんだよ！」

無視された紙袋が喚く。

鉄が明らかに哀れみを含んだ微笑を浮かべて宥めているが、その程度で収まるような紙袋ではない。

「うるさい」

「てめえっ、お前は俺に悪口言うときしか口利かねえよな！」

「…だからうるさい、少し静かにしろ」

「本当に仲悪いな、君達。ほら紙袋、これ上げるから静かにしてて」
黒い腰エプロンに取り付けられた大きなポケットから小さな何かを取り出して鉄が紙袋に投げつける。

「いつてえ！」

放り投げるといふ表現ではなく投げつけるという表現のほうが正しい。

一直線に風を切つてとんだ小さな飴はビシィッという大きな音を

たてて紙袋の額に直撃する。投げた本人が笑顔なのが少し怖い。袋越しのためよく分からないが赤くなるほどの力だろう。

「お前、悪意を感じる投げ方しやがって。あーあ…これ多分中身粉砕してんぞ」

「紙袋は食べられれば何でもオツケーでしょ？」

「俺をなんだと思つてやがんだ…」

文句を言いつつ包装紙を開け、粉々になった中身を口に流し込む。何かを食べると機嫌が良くなるのか、騒いでいた紙袋が大人しくなる。

(餌付けみたいだな)

紙袋が犬だとすれば鉄は飼い主、佐藤は猿だろう。

(どっちかっていうと紙袋のほうが猿っぽいけどな)

犬猿の仲というやつなのだろう。

「千里、何か失礼なことを考えていないかな？」

犬な佐藤に莫迦にされる猿な紙袋…という構図が頭の中に出て来上がっていたのだが、顔に出てしまっていたのか…と心配になる。

「いや…別に」

「うぐっ…何故だ。俺の千里が化物と一緒にいるせいで悪い子に」

目元を押さえて、しかし紙袋は立ち止まることはない。目元を押さえたところで周囲からみれば紙袋を押さえつけているようにしか見えないのだが。

「あーあー泣くなよ紙袋、ゴキブリなんだろ？」

「すでに心が折れそうなんだよ！」

「大丈夫だ紙袋、あんたは猿であつて昆虫では…痛っ」

跳ね返った枝が顔を打つて小さく悲鳴をあげた。一番前は佐藤が歩いているが、それでも開拓もされていない森の中を歩くのに多少枝にぶつかつてしまう。

「大丈夫か？」

「あ…ごめん、大した怪我じゃ」

大袈裟にも立ち止まつて枝のぶつかつた場所を凝視してくる佐藤

を見て、慌てて両手を振るが遅い。

佐藤は舌打ちをすると森を見回した。

「いつそ焼き尽くして……」

「考えが物騒なんだよ……君。巨大すぎる力つてのも困りものかな。もつと細かいところから工夫すればいいんだよ……紙袋」

「お、何だ？」

「武器持つてるよね……先頭歩いて邪魔な枝とかを切り落としていつてくれないか？」

「そんなことかよ、おー、やってやんぜ」

ひょいっと軽く三人の頭上を飛び越えると、最後尾にいた紙袋が一番前を歩く形になる。

だが紙袋は武器など持っていない。

「武器？」

手ぶらな紙袋は自分の頭部を覆う袋の中に右手を突っ込んでこそごと動かし。中から銀色のフォークを取り出す。

「あーこれじゃねえ」

「ちゃんと片付けてないからすぐに見つからないんだよ」

フォークをもう一度放り込んでこそごともう一度動かし、どうやら目的のものを掴んだようだ。

「ういうい、ちょっと離れててください……っな！」

一気に右手を引き抜く。

最初に現れたのは鉄パイプに似た銀色の棒、ずるずると出てきた棒の先端は三又に分かれていて、フォークのような形状をしていた。驚くべきはその長さ、到底紙袋の中には納まらない長さで、少なく見積もってもメートル半ぐらいはあるだろう。

「どうなってるんだその中」

「企業秘密……と言いたいところだが、まあ四次元ポケットぐへえ！」
何かを言いかけた紙袋の口にシュークリームが放り込まれる。

強制的に黙らせようと鉄が投げつけたものだが、相変わらず加減ができていない。

もごもごと口を動かしてシュークリームを胃に収めた後、紙袋はもう一度口を開いた。

「フーかお前、どうしてシュークリームとか持ち歩いてるんだよ」「紙袋がお腹空かしていざというとき身代わ…戦えなくなったら大変だろ?」

(不憫だ)

鉄の台詞を聞いて初めて紙袋に同情を覚える。

知らぬが花、幸いなことに鉄の非情な台詞の一部は紙袋に届かなかつたらしく、ふーんと適当な返事をするフォークを持ち上げた。「そやつ!」

振り上げたフォークを思いつき振り下ろす。紙袋は巨大なフォークを片手で軽々と扱ってみせた。

前方を遮っていた枝や葉が切り裂かれて腐葉土に落ちる。

次々と切り裂いては前に進む。その繰り返しのおかげで人が通れる道ができた。

「紙袋つて…へらへらしてるけど強いのか?」

「へらへら…っていうか、あんなに莫迦になるのは千里絡みのときだけだよ。佐藤と仲が悪いのは前からだけど、強いよ、彼は」

「…たまには役に立つな」

「一言余計なんだよ化物!」

鬱憤晴らしも込めて紙袋はフォークを振り下ろした。

「…?」

千里達が進んでいる森の中、少し離れた場所にある崖。その上から白い髪をした人間が彼等を見下ろす。

白目も黒目もなく、眼球全体が真っ赤な両目。

長い白髪の間には白い兎のような長い耳が飛び出していた。

「人?」

兎のような格好をしていた。足下は獅子のような肉球のある足、それに白い毛並みをしている。

半人と呼ぶに相応しい格好だ。

半人は興味深そうに千里を見つめた。その額には人のものではない角が生えている。

「角…？人？」

分からなかった。人なのに角がある人間のことが不思議で仕方なかった。

だから襲いかかることをやめ、手に持っていた毒矢を投げ捨てた。

3・獣、月花。

森を抜けた先に現れたものは見慣れた光景、できれば違う世界に
来てまでは見たくないと思っていた風景だ。

灰色の町、草原だった大地は突然灰色に変化する。

あまりに突然すぎる変貌に、まるで違う世界に来たようだった。

「これは」

「へー、なるほど。佐藤が言っていた発展の世界っていうのはそ
うことか」

「開拓の進む世界ってことか、ここも俺達のいた場所みたいになる
んだらうぜ。ま、人様の世界のことなんて気にする余裕ないけどな」
未開拓の地では見ることもなかった人間が多くみられる。

整備された道路では、まだ少ないが車もちらほら見かけることが
できた。空気も確実に変わっている。

「…行くぞ、こっちだ」

すでにこうなっていることを知っていた佐藤は驚く様子も見せず
に淡々と歩き出す。

時折立ち止まっては記憶を辿り、再び進むの繰り返しだ。

人の多い場所を歩くのは苦手だった。

佐藤も紙袋も鉢も何も言っただけだが、明らかに人の目を引いて
いる。角があるのだから当然だろう。

(…ここでもか)

角がある人間が普通…という世界のほうが珍しいのだから、そ
れでも異世界に来てまで奇異の視線に曝されるというのは少し心
くるものがある。

店の並ぶ通りを歩いていくとき、思い出したように佐藤が立ち止
まって振り返り、千里を吟味するように見た。

「千里」

「ん？何…うわっ」

頭から何か黒いものをかぶせられて視界が真っ黒になる。引き上げて視界を確保する位置まで布を持ち上げた。

「…何するんだ」

開けた視界、再び映った佐藤は先程までと何かが変わっている。印象が軽くなったというべきか…その原因を探す。

すぐに分かった。

(あ…マント)

佐藤が浴衣の上からはおっていたマントを千里の頭からかぶせたらしい。

出会って一日も経っていないはずなのに落ち着く匂いがした。

(俺が角のこと気にしてたの、気づいたのか)

「あ、ありがとう」

「千里が角を気にする必要はないんだが、視線を集めるのも気分が悪いだろう？…千里がいなくても鉄や莫迦のせいで随分人目を集めているからあまり意味はないが」

言われてみれば佐藤はともかく、紙袋は頭部を隠した怪しい変人、鉄は拘束具や鉄を持った危ない人に見える。

(佐藤も充分目立ってると思うけどな)

見た目が他とは逸脱していた。

美しいという面でもあるのだが、何か生氣のないような顔立ち、普通の人間とは違う異様な雰囲気纏っている。

見た目は普通でも佐藤は人を惹きつける何かを持っていた。

千里の角がなくとも充分に人目は集めている。

確かに…と千里は苦笑する。

「本当はあまり目立つのは良くないんだがな…早めに何とかする」
悩ましげに瞳を伏せて誰にともなく呟く。

突然佐藤が立ち止まり、一軒の店の看板を見上げた。

「ここだ」

「ここ？…何の店だ？読めない」

「異世界の言葉だ…骨董品を取り扱う店だったはずだが」

「どーしてお前がそんなこと知り合いなんだよ？」

「……」

紙袋の問いかけを無視して佐藤は遠慮なしに店に踏み入る。室内は薄暗く、人の気配はない。

もしかすると閉店時間なのかもしれないが、遠慮してしまう千里の背中を紙袋が押す。

「おら、佐藤のお友達なら大丈夫だろ」

「お邪魔します…佐藤が友人じゃなくて世話をした…って言うところからなんとなく想像つくけど、多分佐藤と店のご主人良好な関係じゃないと思うな」

「あー、そりゃ何となく想像つくわ」

「そうか？」

確かに冷たい言動や素っ気無い態度、愛想はないと思うがそれは佐藤の一部分だけのように思える。

千里が疑問を浮かべると鉄と紙袋は顔を見合わせて苦笑する。

「化物が優しいのはお前限定だよ、千里が思うほどあいつは優しくねえぞ？心の底まで化物だ」

「紙袋のはちよつと偏見混ざってるけど…佐藤は確かに冷たいよ。損得勘定で全てを割り切れる冷静さを持つてる」

「…佐藤が」

信じられないという思いだけだった。

自分の名前が呼ばれたことに気がついたのか、佐藤がこちらを振り返る。薄暗闇の中で光る黄金色の目はやはりどこか人外のものを感じさせた。

「どうした？」

「…いや、なんでもない」

埃っぽい室内に足を踏み入れる。佐藤の言っていた通りどこか古びた小物が幾つか机の上に並べられている店内だった。

中には価値のありそうなアンティークもある。

「居ないみたいだね…留守かな？」

「いや…これは」

佐藤はレジの近くに置いてあるマリオネットに近付いてその頭を指先でなぞった。

なぞった指先を目の前に持ってきて息を吹きかけると埃が舞う。

「逃げたようだな」

「逃げたって…何からだ？」

「決まっている、俺からだ」

「あんたから？」

「…助けてもらったときには俺の力に感謝を示したくせに、解決した途端に恐ろしくでもなつたんだろう。世界を渡る化物がな」

化物…と自嘲するように表現する。

「佐藤…」

「どうしてお前が悲しそうにする？…別にお前が気に病むことじゃない。こんなことには慣れてる」

マリオネットの感情の灯ることのない眼球を指で弾いた。衝撃を受け止めることができずに人形は倒れる。

その様をみて無様だな…とせせら笑った。

「壊してやってもいいが、今はそんなことより優先すべきは化物討伐だ。この店の主人は情報通だったからな…良い情報が得られると思っただが」

「やっぱり風潰しにあたっていくしかないのかな？」

「んなちまちまやってられっかよ。バスと何時までも放置しておくわけにもいかねえぞ？俺みたいなのに見つかったら面倒だ」

「いや…これに聞こう」

これといって佐藤は倒したマリオネットを立たせる。金髪の少女の形をした人形は無表情に風景を映した。

しかし人形は喋ることは出来ない。

「そんなことできるのか？」

「こいつの見ていた光景を、聞いた言葉を読みとることはできる」

「んな面倒なことしなくても依頼主に聞けば…」

「依頼主はこの世界の住人だけど確か匿名希望だったからね、あんまり期待できないんじゃないかな」

「そういうことだ」

目を閉じると佐藤が人形の額に手を添えて目を閉じる。指先から白い炎が立ち上って人形が一気に燃え上がった。

「何やって」

「黙っている」

暫くして目を開けると、佐藤は掌にまとわりついた白い炎を紙袋に向かって投げつけた。

突然炎を投げつけられた紙袋は慌てるが、避けるにはすでに遅く、それを正面から受けてしまう。

「熱っ…くない？」

炎は紙袋に燃え移ることなく、彼の胸の少し前で浮遊している。

「読み解いた記録から推定される討伐対象の居場所を割り出した。

そいつが進む方向へ向かえば会えるはずだ…その化物とやりに」

「これ、動くのか？」

「入れ物に入れてやればいい…こんなのはどうだ？」

適当にその辺においてあったものを見繕ったのか、緑色の頭部のでかいぬいぐるみを千里に向かって放り投げる。

眉尻の下がった顔、小さな黒い点の目、三角の口。

どうして小物店にあるのか分からないようなゆるいキャラだ。

「お前がこんなぬいぐるみ投げるなよ。イメージ壊れて俺の心がダメージだわ」

「訳の分からないことをいう前に早く入れてみる」

「へいへい」

一度威嚇するように舌を出してから、紙袋は胸の前にあった炎を千里の抱える大きなぬいぐるみに突っ込む。

「うわっ」

動かないはずの綿と布だけの体がパタパタと動き、驚いて緩んだ千里の腕から抜け出した。

声帯はないので喋ることは出来ないようだが、ぼふぼふと数回飛び跳ねると満足気に座り込んだ。

首をフラフラ揺らしている。

「えんどう豆みたいだな」

「遠藤さんで良いんじゃないか？」

適当に思いついた名前を千里が口に出すと鋏と紙袋が閉口した。

「千里、とうとうネーミングセンスまで化物に影響されて…」

「……」

遠藤さんとたった今名づけられたぬいぐるみはぺたぺたと地面を歩くと、千里の足にしがみ付いて上り始める。

「てめえ、千里の生足触ってんじゃねえよ！俺だってまだ…ぐえっ」

「だから君はもう少し発言を慎もうか！」

(ついに手が出たな)

今までは足だったわけだが、今回は疑いようもなく鋏が紙袋を殴り飛ばした。

二メートルほど吹っ飛んだ紙袋は地面に突っ伏す。

冷静に傍観していると呆れたように佐藤が歩き出す。

「行くぞ…さつさと化物とやらを始末して帰る」

「ちよつと待…」

「っ！」

慌てて千里が後を追おうとするがその必要はすぐになくなる。突然佐藤は崩れ落ちて膝をつく。

胸を押さえて床を睨みつけた。

「なっ、佐藤！」

千里の悲鳴で争っていた二人も異常に気づいたらしく、すぐに駆け寄ってきた。

「何の騒ぎだ？」

「…かはっ…鋏、近くに…罨が」

幾度か咳き込み、息を詰まらせながら訴えかける。

鋏は頷くとすぐに周囲を見回し、小さな木箱を見つけると佐藤の

視界に入るような位置に置いた。

「このこと？」

「…貸せ！」

オルゴールのようだった。千里にとっては美しいだけの旋律なのだが、どうやら佐藤にとつては違うらしい。

苦痛を伴う旋律に顔を顰めながらオルゴールを力づくで殴りつけた。甲高い音がして木箱が砕ける。

中に金属で出来た音の原因があり、それを壊そうと手を伸ばすのだが指先が震えて定まらないようだった。

「く…そつ」

「貸して！」

見ていられなくなった千里は佐藤が壊そうとしているオルゴールを奪いとると紙袋に視線を向ける。

「壊してくれ！」

オルゴールを突き出して懇願した。

「ちっ…ったく、千里の頼みだと断れねえだろーが！」

「鋏、これ！」

フォークを出す時間がもつたいないと判断したのか、どこから見つけてきたのか鋏がナイフを投げて渡した。

上手く柄の部分をつ掴んで受け取ると、紙袋は思いつき振り上げたナイフを深くまで突き刺した。

不協和音が鳴り響いて金属片が砕け散る。

砕け散った破片の中に青色の輝きを放つ光があり、槍のような形状に変化するとまっすぐに佐藤へと飛んだ。

疲弊した佐藤の反応が遅れ、数本の槍が体を貫く。

「ぐっ」

「佐藤！」

慌てて千里が駆け寄るが、佐藤は荒い息を繰り返すだけで意識は随分とはつきりしているようだった。

鋏がすぐに駆け寄って怪我の様子を確認する。

「二重に罾が、でも出血はない。最初のが本命だったみたいだね。阻止できて良かった。お手柄だよ千里」

鉄が手を貸して立ち上がらせようとすると、佐藤はその手を払って自分で立ち上がる。

相変わらず胸に槍は刺さったままだったが、フラフラと移動すると店の端に置かれたソファに崩れ落ちた。

「状態は？」

「この程度で俺は死なん…だが、暫くは動けない。あの人間、面倒なことをしてくれた。そこまで俺が怖かったか」

「おいおい、どうすんだよ。俺達だけで情報も何もない化物相手にするのはキツイぜ？」

「…回復でき次第俺も参加する。それまではお前達だけだ」

「そんなに酷いのか？」

いつも余裕があつたはずの佐藤の表情が、今だけは苦痛に歪んでいる。槍を抜こうと千里が手を伸ばすが、実体を持たないのか触れることが出来ない。

心配そうに覗き込む千里を見て苦しそうにしながらも笑った。

「大丈夫だ…心配するな」

さつさと言行けという風に佐藤が手を振る。

そう言われても怪我人を置いていくということに抵抗があるのか、千里はなかなか立ち上がろうとしなかった。

そんな千里を見かねて鉄が声をかける。

「行こう千里、佐藤なら大丈夫だよ。こんなことじゃ死なないって僕が保証する」

「…分かった、出来るだけ戻るからな」

「期待しないで待っておく」

頭からかぶっていたマントを佐藤にかぶせた。風邪でない今この処置が正しいものなのかは分からないが、何かしてやりたいという気持ちからの行動だった。

マントを受け取った佐藤は暫く黙って三人を見送っていたが、最

後尾を歩く千里を呼び止めた。

「？」

「持っでいけ」

手渡されたのは全体的なシルエットが丸みを帯びている大きな帽子と、聞いたことはあるが実物を見たことはない…拳銃だった。

黒一色に塗装された二つの拳銃、そのグリップの位置には見たことのない動物が刻まれている。

長い耳をした獅子のような動物だ。

「これは？」

「角が嫌なら隠せ…拳銃は俺が守れない間お前が自衛のために使えるだけ使わずに済むことを祈るが」

「…分かった、ありが…」

「礼を言うのは俺のほうだ。紙袋は絶対に俺を助けるために行動しないからな…お前のおかげでさつきは助かったようなものだ」

懐かしむように佐藤が遠くを見る。

「行け」

短い言葉だった。これ以上ここに留まられて無様な姿を見られるのは彼のプライドに反するのかもしれない。

千里は帽子をかぶると踵を返した。

一人残された佐藤は、忌々しげに自分の体を貫く槍を見下ろした。手を伸ばして槍に触れる。千里にはどうやら触れることができなかったようだ、化物ならば触れるだろう。

（それにしても…）

目下にある条件発動の妨害魔術、これはかなり高レベルのものだ。（この世界に魔術は存在するが…人間がこのレベルの術式を組めるものなのか？）

魔力は数人が結託すれば苦しいが何とかできると推測しても、人知を超えた術式というものも存在する。

それができるような器には、この店の店主は見えなかった。

「仕掛け人は誰だ」

自分達の行動を予測し、そして明らかに佐藤だけを狙った魔術を放ってきている。通常の人間に効果のない魔術などを防犯用に仕掛けるわけもないだろう。

恨みならかなりの数がかっている。

思い当たる相手は多いが、その中にこのレベルの魔術を使える人間が見当たらずに首を傾げた。

(…推測だけしていても意味がない…か。ならば今優先すべきなのは、早く動けるようになること…そして千里との合流だ)

突き刺さった槍を一本両手で掴んで引き抜こうと力を入れる。肉体ではなく精神的なものに突き刺さった槍を抜くには激痛が伴った。

肉体的な激痛ではなく精神的な激痛だ。

「…くっ」

引き抜くたびに思い出したくもない過去が蘇る。

古臭い店内の光景が記憶の中の光景と入れ替わり始めた。

後悔の記憶、懺悔の記憶。

降りしきる雨の中、雨に打たれて落ちているのは桜の模造品。水溜りを汚しているのは真っ赤な血。

「これを忘れたことなどない…こんなもので思い出さなくても、俺の中にはいつもこの光景がある」

顔を顰めながら槍を引き抜いた。

町の中を歩くのに流石にあの格好は目立つと判断したのだろう。

千里の前にある鉄の背中中はマントのようなもので覆われていた。

体中をすっぽり包み込むことで手足を拘束する鎖を隠すのと、有刺鉄線と鉄も隠す意味があるのだろう。

千里に並んで歩く紙袋はやはりそのままの格好で隠すようなことはしていないが、頭を覆う袋もそういうファッションだと思えば割り切れないこともない。

「鉄さん、どこに向かっているんだ？」

「うん、佐藤抜きだと初見討伐は辛いからね。とりあえず一回近くのギルドみたいな場所に行って情報でも貰おうかなって」

「けっ、鉄はビビりすぎなんだよ。あんな化物いなくても俺が充分補ってやるつてのによ！」

「戦闘要員は君だけなんだから、やつぱり相手のことを探るのは大事だよ。遠藤さんの案内は正しいのかな？」

千里の抱えるぬいぐるみ、遠藤さん。

両腕の中の緑のぬいぐるみに顔を寄せて尋ねる。

「こつちに情報があるのか？」

コクコク…と遠藤さんは頷いて腕を伸ばして道を指し示した。

「…佐藤が心配だ。早く終わらせて戻ろう」

「うぐっ、千里は化物の心配ばっかで俺なんて眼中にないのね」

「佐藤のことなら本当に心配いらぬよ。紙袋と千里にとっては初めての経験かもしれないけど、ああいったことは今回が初めてじゃないんだ」

「以前にもあったのか？」

歩みを止めずに尋ねる。

「うん、度々ね。魔術がある国に来るとああいうことがたまにあるんだよ。魔力なんて皆無の僕達には影響ないけど佐藤は別だ。影響を強く受けて倒れることもある…まあ死なないけど」

淡々と話す鉄の様子はあまり佐藤を心配していない風だった。佐藤の次に古参だと言っていた…どうやら佐藤と過ごしている時間は紙袋よりずっと長いらしく、今回の事態にもあまり動じていない。

冷静な鉄の言葉を聞いていると少しだが安心できた。

「ひひひっそれにしても随分嫌われてんだな化物。あのトラップは化物狙ったもんだろ？」

「不謹慎！」

「いてえ！」

バシツと小気味いい音を出して鉄が紙袋の頭部を叩いた。

「予告もなく何叩いてくれてんだ！これ以上身長縮んだらどう責任とってくれんだよ！」

確かに千里と大差はないが、佐藤や鉄に比べれば身長の低い紙袋は叩かれた箇所を両手で押さえる。

「身長気にしてたのか…じゃなくて、千里の前でそういう不安を煽るような発言を止めるって言ってるの」

「んむっ…千里、不安になったのか？」

「…多少」

そんなことはないのだが悪戯っ子のような鉄の目配せを受けてそう答える。

すると紙袋は面白いほどにうるたえ始めた。

「ご、ごご…ごめんな！俺は別にそんなつもりで言ったんじゃねえんだ！俺は化物のことは確かにいけ好かねえけど本当に死んで欲しいって思ってるわけじゃなくてだな！」

わさわさと両手を振って必死に弁解するか紙袋。

「…ぷっ」

「へ？」

そんな彼の動転している様子を見て耐えていた笑いが零れた。

一度決壊してしまえば止まらない。千里は声をあげて笑い出す。

突然笑い出した千里に呆然とした紙袋ははっとした様子で鉄を睨みつけた。

「だ、騙したな！」

「うーん、身に覚えがないですね」

「鉄てめえ！ちよっと止まれ、その優男面今日こそ恐怖に歪めてやらあー！」

走り出した鉄に腕を引かれて千里も走り出す。意外なことに戦闘の得意な紙袋より鉄のほうが早いようだった。

追いつかない千里は引き摺られるように走る。

身長之差…というより一歩の大きさの問題だろう。

「あ、鉄さんちよっと止まって」

「ん？」

後を必死で追ってくる紙袋の姿が随分小さくなった頃、千里は遠藤さんの動きを感じて立ち止まった。

今まで道を指し示していた遠藤さんの手が建物を示している。

大きな建物で、鉄筋コンクリートのつくりをしている…無駄な装飾のない質素な建物だが、人で賑わっていた。

ガラス張りの開けっ放しの入口から中に入った頃にようやく息を切らした紙袋が追いつく。

「ぜえ…ぜえ…覚えてろよ鉄」

「ここか…少し紙袋は少し休んでて、ご老体に差し障るとあれだから。千里、少し情報収集といこう」

「誰がご老体だ、俺はまだ二十歳だっつもの。そういうのは化物に言ってやれ」

文句を言いつつもホールの端に置かれている椅子にどっかりを腰を下ろした紙袋を放っておいて、千里は鉄についてギルドの受付らしき場所へと向かう。

「すみません」

接客の笑顔を常に称えた女性に鉄が声をかけた。

「いらつしゃいませ、ギルドへようこそ…あら、どうやらギルド参加者ではないようですね。依頼の受付ですか？」

「いえ、僕らは少し情報提供をして欲しくて」

「…申し訳ありません。我がギルドでは利用者様の情報は安易に公開できないことになっております。お引取りを」

(ま…当然だろうな)

予想通りの展開だ。

だが鉄はそこで引き下がることなく、カウンター上に両手を組んで乗せると身を乗り出して女性を見上げる。

突然の出来事に受付の笑顔が一瞬乱れた。

「…まだなにか御用でも？」

「うーん…ちよっとだけでも駄目かな？僕達が知りたいのは山に最

近出沒してる人間の敵…って呼ばれてる化物のことなんだけど」

「…ですからお答えできませんと」

「ね、個人的にお願い。君が見聞きした情報でいいんだ。僕はギルドの情報を出せって言ってるんじゃない」

ギルドの受付である女性の見聞きしたことはギルドの情報に等しいだろう。正論を言っているようであるが言い方を変えたただけでまったく要求していることは変わっていない。

それでも少し堅苦しい雰囲気を崩すことはできたようだ。

鋏のやり口と常ではありえない相手の心理の奥を突くような鋭い表情に感心する。

(自分の見た目を最大限に生かしてる…鋏さんって…)

こういう人間がひよっとすると化物より怖いのかもかもしれない。

「口外無用でお願いします」

そろそろと周囲を見回して自分達に関心が向いていないのを確認すると、声のトーンをさげて囁くように女性が口を開いた。

「おそらく探されている化物は「月花」のことでしょう。人間を滅ぼすと噂されている化物のことです」

どうやら話す気になったようだった。元々噂話が好きなタイプのようで、一度口を開けば言葉が流れ出す。

「月花…聞いたことないね」

(げっか…月の花?)

口を挟むことはしないが千里も鋏に同意する。

「そうですか？噂話になる程度には有名ですが。この町に来て浅いのですか？」

「うーん…まあ旅の人間かな」

まさかこの世界の住人ではない…などといえるわけがない。

「でしたらご存じないのも無理はありませんね。この町…いえ、この国はここ百年で急激な成長を遂げました。それはご存知だと思いません。自然と共存する狩猟生活と決別し、人間は文化というものを手に入れました。私達の国も成長を始め、勿論この町も例外ではあ

りません」

発展の国。佐藤が言っていた内容と似ている。

鉄は相槌を時折はさみながら言葉に聞き入っていた。千里も鉄の隣で聞き漏らさぬように耳を澄ました。

「あまり有名ではないのでご存知ないのも無理はありませんが、この町付近の森には古よりこの地方にしか生息しない動物がいるんです。呼び名は様々ですがこの町の住民は彼等のことをモゼルと呼んでいました。安易なものです。魔術を操ることのできる人間に近い脳を持った雑食の動物です」

「高度な知能を持った獣つてことだね」

「はい、モゼルは長い耳に白い毛並み、強靱な足を持つ動物です。知能を持つ彼等が人を襲うことは少なかつたのですが、逆は別でした」

(白くて長い耳…強靱な手足)

知っている中に当てはまる動物が見つからずに千里は首を捻った。受付の女性が言うとおり認知度が低く、この世界にしかない生物なのかもしれない。

「人間がモゼルの狩る」

「魔術を扱うモゼルはその身に魔力を宿しました。この世界はご存知の通り魔術によって発展をしている町です。急激な成長に魔力は不足していくらあっても足りないほどでした」

「つまり大量に狩猟を始めたわけ…か」

「はい、モゼルは今では絶滅危惧種です。お探しの化物というのはおそらくモゼルの親玉…月花と呼ばれるものではないかと」

「親玉？」

「伝説上の存在とされていたのですが、最近になって目撃者が急増している獣です。月花は人を狙って襲うような兆候が見られるので、ギルドとしても対応に困っているところ…というのが現状でしょうか」

「なるほど」

顎に手を当てて考え込むように黙り込んだ鉄、それを見て受付の女性はどうしていいのか戸惑っている様子だった。

これ以上鉄にいいように利用されているのを見るのも可哀想だったので千里は一礼して鉄を引っ張る。

その場を離れて紙袋のいる場所へ戻ると退屈そうに欠伸をしていた紙袋が気づいて顔を上げた。

「分かったのかよ？」

「大体はね…でも敵の正体がいまいち掴めない。残念だけど戦闘に役立ちそうな情報はなかったかな。いけるかい？」

「はっ、何が来ても力押しでぶっ潰すつてのが俺達のやり方だっただろうが」

「それは佐藤がいたからできた荒業だ」

「あんな奴がいなくても俺一人で何とかする。ほら、行くぞ。案内しろ緑人形」

違う名前で呼ばれたことが気に入らないのか、遠藤さんは手足をじたばた振って怒りを表現する。

だが暫くすると収まって方向を指し示した。

この町に来る際に通った大きな森、その方角を示している。

「きつと森の中にいるだろうね…月花は。どうかした？」

ずっと考え込むように浮かぬ表情をしていた千里に気づいて鉄が声をかける。

「いや…なんでもない。行こう」

月花。

人に迫害されて人を憎んで人を襲っている獣。

その境遇に何か同情に似た気持ちを抱いた自分に気がついて千里は自分の考えをかき消した。

(直接会ったほうが早いな)

狩るといふ目的だけではなく、千里は月花に会ってみたいと願い始めていた。

4・月花、惨殺。

道も分からない森の中を千里と紙袋、それに鉄は歩いてきた。三人のうち誰も現在地を特定できず、なおかつ森からの脱出方法も分からない遭難に近い状況。

しかし三人は慌てることはせずに月花を探していた。

「本当に大丈夫なのかよ……こんな奥地まで来て迷子になるなんてよ」「大丈夫だよ……千里と佐藤を信じよう」

遭難まがいの事をしてまで恐れることなく月花を探しているのは理由があつた。

それは三時間ほど前にさかのぼる。

町を出て再び歩くと先程通つた森につく。入口付近で鉄は立ち止まり、困つた様子で腕を組んだ。

「どうしたんだ？」

「うーん……森の中、千里も見たから分かると思うけど結構難しい入り組み方してるんだよね。佐藤の道案内があつたから良かったけど今回道を知ってる人はいない。ちよつと心配なつて」

「ちつ、お前は役に立たないな」

「救いようのない方向音痴の君には言われたくないよ。闇雲に森の中を探したとして、仮に月花に出会えたとしても僕達が遭難せずに山を出られるかは怪しい」

一見すると解決法のないように思える問題だったが、千里はすぐに森に踏み込もうとして慌てた鉄に襟をつかまれた。

息が詰まって変な声が出る。

「……何するんだいきなり」

「それはこつちの台詞だよ千里、僕の言つてたこと聞いてなかったの？」

「莫迦にするな聞いてた。だけど大丈夫だろ」

「まさか千里、お前には瞬間記憶能力的なものがあるのか！」

「あるわけないだろ。俺は普通の人間と何も変わらない。だけど佐藤が追ってくるって言った。だから大丈夫だ」

確信して言い切る千里を見て二人は啞然としているようだった。

「化物なんか信用できっかよ」

「でも紙袋、こっちには千里がいるんだよ？佐藤もまさか見捨てるようなことはしない。いや、それ以上だね。何があっても千里を見つけて出して救出する」

渋々納得した紙袋も連れて三人は歩く。

薄暗くなってきた空、それに伴って森の中も闇に閉ざされつつあった。肌寒くもある。

「…あ！」

「ん、どした？」

黙々と歩いていた千里が小さく声をあげて少し離れた山道を指差す。木々の間から見える白い体。四足で立つ凜々しい獣。

「月花かな？」

息を潜めて三人は体勢を低くした。

兎のように長い耳、白い毛皮、獅子のような胴体。赤い眼球は周囲を警戒するように忙しく動いている。

(どこかで見たような)

記憶を辿ってみると確かにモゼルを見たことがあった。しかし実物ではなく、何かに装飾されていた…。

思い出して佐藤から受け取った銃をポケットから取り出した。二つの銃にはそれぞれモゼルの姿が彫られている。

しかし月花は姿をろくに目撃されていないと聞いた。つまり銃などにその姿が彫られているわけもない。

目の前にいるモゼルはどうやら月花ではないようだ。

「やあやあ、逃げるぜ？」

「どうする？ここで紙袋に殺してもらって手もあるけど」

どうやら紙袋は千里に判断を任せてくれているようだ。早めに判断しなくては見失ってしまう。

千里は一瞬で考えを纏め上げた。

「いや、追おう。俺はあいつが月花だとは思えないんだ」

「了解」

「うわ！」

千里の判断を聞くや否や紙袋が茂みを飛び出して、しかし音をまったく立てずにモゼルの後を追いつける。

千里も飛び出そうとするがその前に地面が足から離れて体が勝手に浮き上がる感覚に陥った。

「よいしょつと」

人を持ち上げるほどの力などなさそうな細腕だというのに、鉄は千里を横抱きに脇に抱えていた。

重さなどまったく感じさせない動きで紙袋に続く。

「何を」

突然の鉄の行動に文句を言おうと口を開くが、人差し指を唇の前に持ってきてシーと言われてしまう。黙れということだ。

「佐藤がいなくてさ、僕にも甘えてよ千里。それに、都会っ子の千里に山道はきついんでしょ？」

「そんなこと……」

「僕は佐藤に散々付き合っただけだから、ね？」

「……分か……った」

抱き上げられて運ばれるなど恥ずかしいが過保護すぎる鉄は絶対に引く様子はない。

仕方なく承諾すると笑みを浮かべて鉄は速度を上げる。

一歩踏み出すたびにジャラジャラと鎖の音が聞こえた。

(そういえば……鉄はどうして鎖なんかつけてるんだ?)

モゼルの後を追ってたどり着いた場所は森の中にある崖、その側面に岩をくりぬくようにしてある洞窟の中だった。

薄暗いがまだ夕焼けの光が差し込む洞窟内は、人の目でも状況が理解できるほどには明るい。

ようやく狭から下ろしてもらえた千里はひんやりとした空気に体を震わせた。

「くしゅんっ」

寒気がしてくしゃみが出る。風邪ではないようだが寒さから出てしまったようだ。

あっと思ったときにはもう遅く、二人が心配そうに覗き込んでいた。

「大丈夫千里、風邪？」

「いや…でも少し寒かったからだと思う。心配しなくても…」

「寒いのか！」

「ああ…え？」

何か禁句でも言ってしまったのか…と自らの発言を思い返しても特に不適切な発言はなかったように思われる。

だが目の前の紙袋はいつもの危ない雰囲気を纏っていた。

「んだよ千里！寒いんだったら俺が抱き締めて暖め…おっと！」

言いかけた紙袋の頭部に向かって鉢が蹴りを放つが動きを先読みした紙袋は屈んで避ける。

空を切った足を見て鉢が驚愕に目を見開いた。

「ふひっ何時までも成長しない俺様だと思っなよ！」

「うわ！」

攻撃後の隙を突いて紙袋が千里に飛びつく。自分とさほど変わらない体型とはいえ飛びかかれた千里はふらついた。

がっしりとホールドされて解けない。

「離っ」

助けを求めようと鉢を探すが姿がない。

と思いきや、いつの間にも移動したのか千里の隣にいた鉢は屈んだ姿勢のまま足払いを放ち、千里と紙袋のバランスを崩した。

「うおっと…！ってえええ！」

ゴスつというなんとも不愉快な音がして紙袋が頭から転倒する。
(どうでもいいけどここ洞窟だぞ?…岩壁に頭ぶつけて大丈夫なのか?)

そんな心配を千里ができるのは、倒れこんだ千里を間一髪で鉄が腕で支えていたからだ。

支えていた千里を立たせると呆れたように鉄が溜息をついた。

「油断も隙もないね、本当に。そんなことしててよく佐藤に殺されないよね」

「あ?あー、そついやそうだな。俺どうして化物に殺されてねえんだ?」

「僕に聞かれても…」

後頭部…といっても紙袋で覆われているのだが、を擦りながら紙袋が体を起こした。

物凄い音がしたが特別に支障があるわけではないようだ。

「人間」

「え?」

「人間だ」

「…千里の声じゃないよね、僕も違う…紙袋?」

「ふざけんな、俺はこんな陰気な声ださねえよ」

(人間?…誰の声だ?)

洞窟の中を反響する声、出所が掴めない。

だが気づけば暗闇の中で光る目に囲まれていた。いつの間にか囲まれたのか…まったく気づけなかった。

獣臭い。

「モゼル」

「まさか…知能の高い獣だとは聞いていたが、人語を解せるのか!」
千里の呟いた獣の名、それはどうやら事実のようだった。じりじりと距離を詰めてくる獣、それは先程追いかけた獣に似ている。

間違いないモゼルだった。それも一匹や二匹ではない。
群れに囲われている。

「おいおい、どういうこった？モゼルって奴は人間襲わねって話なんじゃなかったのかよ？」

「怒ってるんだ」

「はぁ？」

「怒ってるんだ…仲間を殺されて。自分達から人間には手を出してないのに一方的な虐殺を受けて」

モゼルの言葉はなくとも伝わった。

殺意を向けられているというのに怒りすら湧かない。むしろ同情心すら湧いてくる自分の心を千里は嫌悪する。

これではまるで同族意識だ。

「人間！」

「人間！」

「ニンゲン」

響き渡る幾多もの怒りの声に気が狂いそうになって目をぎゅっと閉じた。渡された銃のことなど頭にも浮かばない。

「紙袋、どう？」

「どうってお前、多勢に無勢…流石にこの数相手は厳しいぜ」

「だよな」

「つたく、てめえが手伝えば半分は減るのによ」

「冗談、僕は策略、君が実戦。決めたことだろ…文句言わないで欲しいな」

「融通がきかねえ」

「石頭で結構。ほら…突っ切ろう？脱出口さえ開ければ後はどうにでもなる。千里を助ける為だろ？」

「おらっ！」

短いやり取りの間に巨大なフォークを取り出していた紙袋は軽々と片手で持つと駆け出し、一番手短なところにいたモゼルに突き刺した。

真っ赤な血が飛んで悲鳴が上がる。

獣の雄叫びに近い悲鳴だったが、人語が不意に混ざった。

「何故我等が」

「何故我等が滅びなければならぬのだ」

「我等が何をした」

次々と悲鳴を共に声が溢れ出す。千里は首を振って声を追い払おうとしたが消えることはない。

耐えられなくなって目蓋を上げると、丁度重傷を負って倒れたモゼルに向かって紙袋が止めを刺そうとしているところだった。

両手で持ち上げたフォークを振り下ろそうとしている。

「止める！」

「…っうお！」

千里の声に反応して紙袋のフォークが止まった。

その隙についてモゼルは激しく暴れ狂うと紙袋の手に牙を突き立てた。食い込んだ牙が皮膚を肉を貫き通す。

「ぐあー！」

鮮血に塗れた白い毛皮が赤く染まった。

紙袋は瀕死のモゼルを振り落とすと怪我を庇って飛び退く。

「ぐっ…千里？」

「千里、まさか同情なんてしてないよね」

このときばかりは常に浮かべる微笑を消して真剣な顔で鋏が問いかける。その視線が痛くて千里は顔を逸らした。

「頼む…止めてくれ」

「こつちこそお願いだよ、そんなこと言わないでくれ。千里が言ったことに僕達が反抗できると思ってるのか？」

困ったように鋏が苦笑した。

分かっていた…二人が手を出さなければ自分だけではなく二人も死ぬこと、そしてモゼル達は容赦をする気はないこと。

(それでも…俺にはこいつらが悪いとは)

「退け」

「え？」

氷のような声が聞こえて近くにいた数匹のモゼルが跳ね飛ばされ

る。首筋を深く切り裂かれたモゼルは悲鳴をあげることなく息絶えた。

目の前で起きた惨状が理解できずに千里はただ呆然とする。

黒い影のように千里の前に降り立った背中、見覚えのある黒いマントに白い浴衣を着た黒髪の男。

「佐…藤？」

「……何をしているかと思えば、紙袋…無事か？」

「てめえに心配されるなんて俺も墮ちたもんだぜ。上っ面だけの余計な気遣いなんざ不要だ！」

「でかい口を叩くのならまずは千里を完璧に守って見せる。それすらできない屑が」

「…くそっ」

「人間が！」

「我等を脅かす人間だ！」

「殺せ！」

「殺せ」

一気に多数の仲間を佐藤に殺されたモゼル達は怒り狂っているようだった。殺せという言葉が連呼される。

怒声すら気にかげずに佐藤は涼しい顔をしていた。

頬に返り血が散っているのを見て手の甲で拭う。

「あ…佐…と…」

声をかけようとして憚られる。光っている目がどこか人間離れしていて、狂気じみた表情に声をかけてはいけないと意思より深い場所にある何かが警告した。

「殺せ」

「殺せ」

「莫迦が、誰が人間だ…お前達の両目はただの飾りか」

「！…千里、伏せて！」

警告した鉄が千里に覆いかぶさるようにして倒れ掛かってくる。

二人で地面に伏せた次の瞬間、頭上を黒いものが目にも留まらぬ

高速で幾度か往復して血飛沫が周囲で幾つも上がる。

悲鳴が幾つも上がって白色の体が幾つも地面に落ちた。

「はっ…はっ…」

恐怖に似た感情で呼吸が上手くできない。

両手を真つ赤に染めた佐藤が立っているのを見上げた。冷ややかな目で見下ろされると流れる水の音を思い出す。

暗い、怖い、喪失への恐れを抱きながら走った川辺。

(何だ…これ?)

「佐藤？」

今まで見てきた彼であって欲しいと願って名前を呼ぶ。

「…何だ？」

「あんたは…」

「我等の仲間、良くぞここまで殺してくれたものぞ」

今までのモゼルの使っていた低くしゃがれた声ではなく、若者の声、変声期前の性別の判断しにくい声が聞こえた。

千里をじっと見ていた佐藤が目を逸らして声の方向を探る。

「討伐目標は獣共ではなかったのか？」

「違うね佐藤、僕等の倒すべき相手はモゼルの王、月花。そして多分…きつとそいつが月花だよ」

暗がりの中、倒れた同胞の骸を慈しむように抱えた少年のような少女のような人影が見える。

その人影は人ではなく、人の形をしているがモゼルの王だ。

女でも男でもなく、性別すらも持たない人間に対する復讐心だけが生んだモゼルの神、月花。

「人の姿を真似るなんて、嫌いな人間だっていうのに随分皮肉な真似が好きなんだね」

「これは報復ぞ。我等は憎き奴等の姿を以ってして奴等を皆殺しにする。人の世は終わりを迎えるべきなのじゃ」

月花が一步千里へと近付く。

勿論月花と千里の間には佐藤と鋏が立ちはだかっているのだが、

それでも接近されることをよしとしなかった紙袋が立ち上がった。

怪我をした腕ではなく、無事な左手でフォークを握る。

「ひ…ふひひつ、てめえがウサ耳つてのは実に俺好みなんだが、千里に害があるんだつたら容赦できねえな、残念だ」

「我等はそこに居る鬼に話をしたい。そこを退け人間」

「なめんじゃねえぞウサ公が…取っ捕まえて俺のペットにしてやってもいいな。鎖で繋いで一生地べた這わせてやんよ！」

「愚かな」

「お前がな！」

フォークを持ち上げて走り出そうとした紙袋の肩を佐藤が掴んで止める。

強い力が怪我に響いたのか紙袋が小さく呻き声をあげる。

「何のつもりだ」

「そいつは俺が殺る、雑魚は休んでろ」

「なっ、誰が雑魚だ！つて、痛てててて！」

どうやら佐藤に協力するつもりらしい鉄が紙袋の怪我をしたほうの腕を掴んで拘束した。

一歩前に出て佐藤は月花と対峙する。

「退いてはくれぬか？我等はただその鬼と話をしただけじゃ。人は我等の敵であるが、その鬼は我等を庇おうとした上に人ではない。我等は鬼を迎え入れる用意ができておる。お主とて人外の者であるう？…退かれよ」

「…が鬼だ？」

「？」

「誰が鬼だと言った…屑が」

（佐藤が…怒って…）

表情の変化こそ乏しいものの佐藤は確実に激昂していた。

付き合いの短い千里でも分かるほどの怒りだ。

きょとんとして佐藤を見ている月花はどうやらそれに気づいていないようだった。

絶対的で圧倒的な力を持っていた月花は危険という言葉を知らないのだろう。佐藤の変化に対応できない。

だから佐藤が飛び掛ってきたときも少しだけ対応が遅れる。油断ともいい傲慢とも呼べる現象だった。

「佐藤！」

無邪気な月花に何の罪もない。

彼がこのまま殺されるのが嫌で、止めて欲しくて千里は叫ぶが紙袋と違って佐藤に声は届かないようだった。

武器も何も使わずに素手で薙ぎ払われた月花は壁に背中を強打し、てずると地面に落ちる。

壁が真っ赤に汚れていた。

「ぐ…が？」

「お前が生きていることが俺にとっては不快だ、死ね」

「あぐっ…我等が何をした。我等が正義だ。人間ではないお主なら中立に立って判断できるはずじゃ。ぎっ…我等こそ…正義…っ」

「…お前が正義だとか何だとかいうのにまったく興味はない。俺は以来を受けたから殺す、お前が千里を侮辱したから殺す…つまるるところお前が嫌いだから殺すんだ」

「やめっ！」

手を伸ばして佐藤を止めようとするが鉄に拘束されて動けない。

何もすることができない千里の前で、佐藤は振り上げた手を、鋭利に尖った爪を月花に振り下ろした。

真っ赤に染まった。

「あ、目え覚めたのかよ」

何故か残念そうな紙袋の声が上がから降ってくる。しかもかなり近い距離からの声だ。

薄っすらと開いていた目蓋を押し上げると、ぼやけていた視界が徐々に綺麗になっていく。

ようやく今の状況を理解すると共に混乱する。

「…なんであんたが俺の上にいるんだ」

「んー…まあチャンスだと思つて潜り込んだのはよかつたものの、千里が起きちゃつたつてとこだな」

右腕には痛々しく包帯が巻かれている。

その怪我はおぞましい出来事が現実であつたことを教えてくれた。

(俺…いつのまに)

ふかふかな背中感触はおそらく羽毛。ベッドに寝かされていた状況が理解できない。分かることはあの洞窟とは違う場所だといふことぐらいだ。

窓から外を見てもう一つ分かつたことがあつた。

雨の降っている見慣れたビル群の町、おそらくバスで移動して千里のいた世界に戻つてきていた。

「あ、おはよう千里…と、また虫がついてたみたいだね」

「ひっ…ぐへっ！」

「あ…怪我しても容赦ないんだな」

蹴飛ばされた紙袋は伏せたまま動かなくなる。死んでしまったのではないかと心配することもあつたがもう慣れた。

「鉄さん、俺どうして？」

「ん、あの後君倒れちゃつてさ。まあ無理ないよね…あんな現場見せられたら誰だつて最初はね。で、バスを放置しとくわけにもいかなかったから僕等で君を連れ帰つたつてわけ。ここは最初に千里を連れてきたあの館だよ」

あんな現場…とは月花達の殺戮現場のことを示していた。

思い出してももう吐き気に似た感情は湧き上がつてこなかったが、悲しさとしんみりさは消えない。

(あの時俺が止めてれば)

「千里、月花と自分を重ねてない？」

「え？」

「やっぱりね」

様子がおかしいと思つたんだーと一人心地で鉄は呟きながら、千

里の寝ているベッドの隣に置かれた椅子へ、腰を下ろした。

「うん、相変わらず千里は優しいな。佐藤がここまで入れ込むわけだよ…僕もね」

「何のことだ？」

「ネタ晴らしは出来ないんだ、僕が佐藤に殺されちゃう。そんなことよりさ、過ぎたことを気にするのは止めたほうがいいし、千里のせいじゃないことまで背負い込むのは止めたほうがいいと思うな」話をはぐらかされた気がするが、隼はニコニコしたままだ。

千里は話の流れに不自然さを感じながらも首を横に振る。

「佐藤はどうして…月花を殺したんだ？」

「分かんないかなあ、別に分かんなくてもいいと思うけどね。佐藤も報われないけど彼はそれを望んでる。君のせいじゃないよ」

「？」

隼の言葉がまったく理解できずに千里は疑問符を浮かべた。文脈が通っていない気がしたのだが、意図して隼がそうしたのかもしれない。

はぐらかすのが上手い。

隼の印象だ。

「とにかく、あんまり佐藤を責めないでやってよ。彼千里のこと大好きだから、嫌われたらきつと引きこもっちゃおうよ」

「引きこもるって何処にだよ」

バスの中に引きこもる場所などあるわけがない。

「ん？佐藤の部屋だよ。この館たくさん部屋あるから、佐藤の部屋も紙袋の部屋も、僕の部屋だってある」

館は三人の住処になる場所だったのか…と今更気がつく。よくよく考えてみればこんなに大きな館だ。それなりの値段だろう。

訳の分からないバスのためだけにこんなに大きな館を買う必要はないはずだ。

自分の寝ているベッドに敷かれているシーツを撫でて気づいた。

「もしかしてここ、隼さんの部屋なのか？ごめん…邪魔して」

「いきなり何言い出すかと思ったら…ここは君の部屋」

「は？俺の？」

何故千里の部屋がこの家にあるのだろうか？と本気で頭を悩ませる。客の部屋が客間という意味で使っている…と無理に考えることも出来たが、鉄は確かに千里の部屋だと言った。

「はい、これ。もしもの事態のために佐藤が合鍵…というか鍵開けの魔術持つてるから絶対とはいえないけど、紙袋対策に」

促されて千里が手を差し出すと、その上に銀色の鍵が落とされた。鉄が握っていたせいか少し温い。

鍵にはタグがついており、丸みを帯びた字で千里と書かれている。「俺の…」

「それから…多分もう必要ないとは思っただけど遠藤さん、落ちてたから千里の部屋に置いといたからね」

鉄の視線を追うと部屋の端に置かれたチェアの上に緑のぬいぐるみが見えた。

「ちよつと待つてくれ…どうして俺の部屋があるんだ？」

続けざまに喋っていた鉄が黙り込み、ようやく千里は聞きたかったことを質問できる。

異世界を旅したという衝撃的な出来事があったせいか忘れかけていたが、そもそも三人は千里を突然連れ出したただけだ。

「…僕等は千里を拘束するつもりなんかないから嫌なら出て行けばいいよ。ただ、一緒に生活して欲しいって思ってる」

「それは…誰の望みだ？」

「僕等の。うーん、確かにそうだけど一番強く望んでるのは佐藤かもね。彼はずっとそれを望んでたんだ。僕からもお願いするよ千里。一人で生活するより賑やかなほうがいいだろう？」

（一人で生活）

ずっとそうやって生きてきたつもりだった。両親に早々に研究機関への売却という方法で捨てられた千里は、特殊な力もないことが知れるとその施設からすら捨てられた。

少しの金と自分の身。

それだけでずつと生きてきたはずだった。誰にも頼らずに誰とも関わらずに鬼と知られないように。

その生活を突然乱したのは目の前にいる鉄を含めた三人だ。変な人間達ではあったが、今まで千里のであった事のないタイプ。

ずつと思っていたことがあった。

「どうして俺に関わろうとするんだ？」

「？」

「前にも言った、俺に関わったことであんた達は損しかしない。角が生えた化物だぞ？鬼だ。気味が悪いとか……」

「千里」

鉄から目を逸らしてシートを見ながら自傷する千里の言葉が遮られた。鉄が強く名前を呼んだせいだ。

「僕達の望みだつて言ったよね？千里がそんな意味もないことで悩む必要はないんだ。利用するっていう気持ちでも構わない……だから嫌じゃなかったらここにいればいいよ」

「せい！」

「うわっ」

突然目の前が真っ暗になる。

慌てて両目を覆うものを頭に押し上げた。それは佐藤から渡された大きな帽子だ。

そして背後に回っていきなり帽子をかぶせてきたのは紙袋だった。「嫌なら隠せばいいーだろが。ま、俺達はんなこと気にしねえけどな

！……そだろ、鉄？」

「……ちよつと復活が早いな。蹴りが甘かったか」

「俺の名言は無視デスカ」

どうやら紙袋の復活が予想していたより早かったらしく、鉄は一人でぶつぶつと思案している。

「姿を見ないと思ったら……こんな場所に集まっていたのか」

「あ、佐藤」

鉄が入室したつきり開けっ放しになっていた扉から佐藤が顔をのぞかせる。

呆れたように眉根を寄せるその姿に少し違和感を覚えた。違和感の正体はすぐに分かる。

浴衣を着ていないのだ。相変わらず肩からのマントはそのままだったが、室内着なのかシャツにジーンズという身軽な格好だ。

そうしてあるとどこにでもいる少し見栄えの良い青年に見える。月花を殺したときのような鋭利な印象を持った目はなく、暖かい光が宿っていた。

「鉄、少し来い。依頼が入りそうなんだ」

「へえ、今度はどこから？」

「勸善懲悪の世界だ」

「匿名？」

「いや、少し特殊ではあるが女だ。下で待たせているが俺が対応するしかなさそうだ。死者の残留思念など、初めての依頼相手だが」
「分かった。じゃ、何か困ったことがあったらそこら辺の紙袋にでも頼んどいて、紙袋は手え出したら駄目だよ」

「そこら辺って落ちてるみたいと言っな！」

笑いながらヒラヒラを手を振って鉄は部屋を出て行く。佐藤はその後が続こうとするが、一瞬千里に目をやった。

佐藤を見ていた千里と偶然にも目が合う。

冷ややかな印象がないとはいえ、月花を殺した人間に変わりはない。恐怖に似た感覚が背筋を上ってきて思わず目を逸らした。

「……………」

無言で佐藤が部屋を出て行く。

足音が遠ざかっていくのを聞きながら千里はベッドに再び横になった。ゴロンと寝転がると天井が視界を覆う。

「んだよ、また寝るのか？」

「…いや、起きる」

勢いをつけて体を起こすとベッドから降りた。冷えた床の感触が

足の裏に心地いい。

「なあ」

「ん？」

「俺はここにいていいのかな？」

「俺的には目の保養にもなって大歓迎だぜ。化物も鉄も千里が気に入ってるみたいだからいいんじゃないかねえか？」

「そう…か」

呟いたときに目を閉じたのは涙がこぼれそうだったからじゃない。

5・勸善懲惡、魔王と勇者。

「残留思念…ね、僕にはさっぱり見えないんだけど」

「今日の前にいる。だが見えなくても構わない…契約の見届けをし
てくれ」

「うん」

館の一階、応接間。

バスの部屋の一つ前の大きな部屋に佐藤と鉄、それに視覚では捉えきれない何かがいる。

「やっぱり幽霊的なものなのかな、僕そいうのは苦手なんだけど」
佐藤がマントを床に落としてシャツを脱ぎながら答える。

「幽霊とは違う、死者の魂などあってたまるか。残留思念と言った
だろう、死に際に強く願った思いが漂っているんだ。意思も考えも
ない…ただその意思を誰かに伝えるためだけに存在する」

「誰かに伝えるため」

「それを請け負って…果てさせるのも俺の役目だ」

シャツを脱ぎさると佐藤の背中に刻まれた黒い紋様が露になる。
複雑に入り組んだ翼のような紋様を鉄が興味深げに見た。

「…珍しいか？」

「これって佐藤の力の一部だよ。それに何か絡まっている」

「俺の力を軸にして契約式が組んである。不愉快なものではあるが、
仕方のないことだ」

黒い翼を模した紋章に蔦のように絡み付いているのは赤い紋様。
もとある黒い紋様に寄生するように存在していた。

「君だけに負担がかかり過ぎてる」

「俺が望んでやっていることだ。依頼を受けてそれをどんな形であ
れ解決させる…そんな大義がなければ世界の移動手段など与えてく
れない」

「うん、だから僕は君に協力してる」

「…感謝している」

「うん、知ってるよ」

にこつと笑った鉄を見て小さく驚いた佐藤が顔を背ける。

「始めるぞ」

暗く大きな面積を持つ塔。高さは地上千メートルに及ぶ。しかしそこに住む主は塔の頂点に近い部屋だけに住み、他の場所は掃除することもしない。

黒い長髪は手入れされていないようではさばさ。精悍な顔立ちの中に埋もれた黒色の目は眠たそうに半開きだ。

伸ばしっぱなしの前髪が右目を覆っている。

年齢は二十代ぐらいだろう。未だ老いの見られない姿だ。

「目ざわりだ：人間、滅ぼすか？」

退屈そうに欠伸をする男は口に煙草を銜えていた。先端から上へと上る煙をぼんやり見つめる。

「…来訪者なんて珍しいな」

振り向かずに声をかける。

大きな扉が開かれて少女が一人、薄暗い部屋へと踏み入った。

眉根を寄せて警戒したように立ち入る彼女はとても友好的とはいえない。しかし男は対照的に緊張すらしなかった。

女は男とは正反対の真っ白な長髪で、露出度の高い騎士の鎧をモデルにしたような服を身に纏っていた。

「魔王！」

「叫ばなくとも聞こえている。人間がこんな場所に何用だと尋ねている。愚かな人間と会話をする気はないぞ…早く答えろ」

「ふざけるな！貴様の悪行：これ以上許しておくわけにはいかない！」

「珍しいな、大衆の中に俺に正面から齒向かう人間がいるとは。…

ああ、さては女、お前が今年の勇者とやらか？」

「今年の？…まるで毎年勇者が来ていたような言い方だな。何を訊

のわからないことを！」

「その通りだ、何だ：貴様は知らんのか。実におめでたいことだ」
初めて勇者と呼ばれた女が身じろぐ。

聞かされていない事態に戸惑っているようだった。

迷いの過ぎつた表情を見て魔王である男は考えを変えた。

(すぐに始末するより：少しは楽しめそうだな)

「俺の友人が言っていた：この世界は勸善懲悪の世界だと」

「勸善懲悪？」

「言葉どおりだ：善を勧め、悪を懲らしめる。世界に悪があるとして、その一点を憎み続ける単純な世界だよ」

「それこそが私達の望んでいる世界の形だ。魔王、悪の権化であるお前が消え去れば世界は平和に」

「なるわけがないだろう：そもそも、お前等の言う悪って何だよ？」

「お前のことだ！」

迷いを断ち切るように勇者は剣を取り出すと魔王へ向けた。切っ先が僅かな光を浴びて輝く。

「世界に仇をなす存在か？：俺も随分祭り上げられたものだ」

「：何が言いたい」

「はつきり言おう：俺からすればお前達のほうがよっぽど悪者だ。

俺がどうしてお前達を嫌っているか分かるか？」

「魔族だからだろう」

教えられたことを疑いなく信じる純真な心。だからこそそれを利用されて魔王の供物などに仕立て上げられたのだろう。

哀れだな：と魔王は勇者をじっと見つめた。

「魔族？なんだそれは。人間の思い描いた妄想の一つか？俺は人間だよ：お前達と何も変わらない、ただ世界を滅ぼせる程度に力が強

かつただけの人間だ」

「嘘をつ」

「嘘だと思っなら思えばいい。貴様が飛び掛ってくれば例年のように俺が貴様を殺して終わりだ。人間が嫌いな俺は人間なんかに殺さ

れるつもりはない。貴様らが俺を憎み魔王と罵るのなら、俺はお前達の望みどおりに動いてやる」

「望み…だと？」

分からないのか？と魔王は嘲笑した。

冷え切った笑みは決して楽しいから漏れる笑みではなく、何かをいたぶっているのを見ているような、嗜虐的な笑みだ。

「魔王は人間を殺戮するものなんだろ？」

狂ってしまったかのような笑みを浮かべる。

「狂ったか！」

「誰が狂わせた？…一方的な中傷に嫌気がさした。俺はもう負ける側にはならない、力があるのならこの圧倒的力で人を滅ぼす」

魔王は勇者との間を埋めると彼女の掲げる剣を素手で掴む。しかし刃に触れているというのに血は出ない。

冷え切った刃の感覚に狂気するように笑みを深くすると、魔王は挑発するように屈んで身長の高い勇者と視線の高さを合わせる。

「勇者に…何故女が選ばれるか知っているか？」

「それは、女神が女をお選びになられるからだ」と

「また女神…女神女神女神、貴様達人間は狂信的なまでにそれを信じる。言い訳に過ぎんな…人間達はな、勇者という名目で女を俺に貢いでいるんだ。分かるか？…供物のつもりなんだよ」

「貴様！私を愚弄するつもりか！」

激昂した勇者が剣を振りぬこうと両手に力を込めるが、魔王の手から引き抜くことはおろか、傷一つつけることができない。

ここまで歴然とした力の差を見せ付けられ、勇者は悔しそうに歯噛みした。

「頼んでもいないのにな…処理が面倒だ。毎回斬り捨てて塔から落として捨てている。それが供物を供えた人間達の望むところだ。俺を悪者に仕立て上げるのが目的だ」

初めて笑みを消して悲しそうに目を伏せる。

そんな魔王に気づいた勇者は剣に込めた力を抜いた。狂気が顔か

ら消えた魔王が普通の人間に見えてしまったからだ。

剣のもち手から手を離すと、魔王は驚いたように顔を上げる。

「魔王、お前は一体何を知っているんだ？」

「…この世界の真実を」

「お前、何歳だ？」

「は？」

突然の質問に呆けた声をあげる。

「いいから答えろ、お前何歳だ？」

「数えるのも飽いたが…今年で千歳になる」

とても千の齢を重ねているようには見えない容姿、しかし勇者は驚くことはしない。

「そうか、年長者の考えは敬わなくてはいけないと私の故郷ではいわれているんだ。だから私はお前の話を聞いてやる」

「奇特な勇者もいたものだ」

「私はもう勇者じゃない。一人の人間としてお前の話が聞きたいんだ、私の名前はイグレア。魔王、お前の本名は何だ？私はお前と一対一で…人間として話したいんだ」

「…フン、いいだろう。俺の名前は」

「で、ここが新しい厨房。俺はまったく興味ねえけど鉄がしょっちゅう出入りしてんな。飯はあいつが作ってくれる」

「厨房があるのか…大きな館だな」

館の厨房前の廊下、扉の前を二人は歩きながら会話していた。

紙袋が先を歩き、その数歩後を千里が追うという形だ。

千里が館の内部を知りたいと言いだしたのがきっかけで、館内の探索のようになってしまっている。

「広くて迷子になりそうだ」

ぼそっと独り言のつもりで呟いたのだが紙袋には聞こえていたようだ。

「大丈夫だろ、俺も最初のうちは迷いまくったけど、千里が眠って

る間に完璧に地図を覚えたぜ」

「…随分長い間寝てたんだな、俺」

「寝顔が拝めて俺的にはご馳走様だったけどな」

「ヒヒヒッと奇怪な笑い声を上げて紙袋は肩を震わせた。

「二階には何も無いのか？さつきから一階ばかり案内されてる」

「二階はなー俺達の部屋以外にもいくつか空き部屋があるぐれえだな。他に入居予定者でもいんのかね…無駄にでけえ家買うから面倒なことになるんだよな、あの化物」

やはり仲が悪いらしく紙袋は佐藤の愚痴を零す。

苦笑しながら紙袋の話を聞いていると、小さく音が聞こえた気がして千里は耳を澄ました。

「…あつ、ぐ」

「…声？」

苦しむような声が聞こえた気がして千里は立ち止まる。気のせいかと思つたが、紙袋も訝しげに周囲を気にしているのでどうやら幻聴ではないらしい。

「応接間のほうからだぜ」

「行こう」

場所はよく分からなかったが、紙袋が自信を持つて走り出す。廊下に並ぶ扉とは違い、大きめの両開きの扉があった。

見覚えのある扉、おそらく異世界へ向かった際に通ったことのあるあの大きな部屋に通じているだろう。

扉を押し開けると同時に部屋を出ようとしていた鉄に当たつてしまふ。正面から突つ込み、千里より頭ひとつ分背の高い鉄は胸に突然飛び込んできた千里を受け止める。

「おっと」

「鉄さん？」

「千里…に紙袋、困つたな…来ちゃつたのか」

「…っ、誰だ！」

「佐藤？」

部屋の奥から聞こえる苦しげな声は確かに聞き覚えのあるあの声だ。入口を塞ぐようにして立っている鉄の腕の下をくぐりぬけ、千里は声のするほうへと急いだ。

地に伏せている佐藤を見つけて慌てて駆け寄る。

「どうしたんだ！」

「何故、こいつらがここにいる！鉄…ぐっ、誰も入れるなど言っただけだ！」

「無茶言わないで欲しいな、僕だってまさか千里達が自分から向かってくるなんて思わなかったんだ」

未だに入口付近で鉄に行く手を阻まれている紙袋は、ひょいっと鉄を押しつけて室内の様子を窺う。

だが千里とは違い、大した反応は見せない。

「あー、またか」

「そういうこと」

どうやら何度か経験しているらしく、佐藤の異常も見慣れているようだ。紙袋は平然として鉄にもたれかかる。

体重をかけられて鉄は紙袋を放そうとしたが、離れようとしないうちに紙袋を見て諦めた。

「これ…！」

背中 of 紋様を見て驚く。

「触るな、お前に心配されるようなことじゃない」

突き放すように睨み付けると千里の伸ばした手を振り払った。

拒絶するような動きに千里は何もできなくなる。

「化物の半裸見ても何にも感じねえぜ…ったく、おいしくねえ」

「君の評価基準ってそこだよな」

「ひひ、うるせえ」

千里の助けを断った佐藤はおぼつかない足取りながらも立ち上がり、手の甲で口元を拭いた。

荒い息を整えながらシャツを羽織る。

しかしいつもより顔色が悪い。白かった肌は青いと表現できるほ

どだ。

一度振り払われた手…しかし佐藤をそのままにしておくこともできず、千里は了解をえずに手を伸ばして佐藤の背をさすった。

触れられた瞬間だけ体をびくつかせた佐藤だったが、それ以降はされるがままになり文句を言わない。

「心配するな…ただの契約だ」

「契約って何だ？佐藤が苦しむようなことなのか？」

「俺が望んでやっている…バスの運賃のようなものか。契約を受けその内容を果たすのが俺の仕事だ」

ボタンを留め終わった佐藤はそつと千里の手を引き離すとマントを肩からかける。

あれだけ血を浴びておきながら黒いマントには染み一つない。

「また異世界かよ？最近忙しいっつか人使い荒いぜ、お前」

「嫌ならお前は残れ」

「やなことだ、自宅警備はお前のほうがお似合いだろ」

「俺も行っていいか？」

千里の控えめな提案に佐藤と紙袋は争いをやめた。

二人とも困ったように黙りこむ。

「千里…お前が一緒に来てくれることは嬉しいが」

「何か面倒なことでもあるのか？」

「次の世界が安全だとは言い切れない。以前行ったことのある場所だが…前回のよう甘い世界ではないぞ？」

「危険ってことか？」

「そういうことだ」

佐藤はどうやら千里を連れて行くことに乗り気ではない様子だった。しかし仲間は少し悲しい。

どうせ銚子紙袋も佐藤についていくのなら、一人だけ残されるといっつのはどこか疎外感があつて嫌だった。

だが、だからといって我が俣を押し通そうとは思わなかった。

「大丈夫だよ佐藤、君が護ればいい。それにもしもの事があれば僕

が千里を責任もって護るからさ」

「お前が？」

「僕じゃ役不足かな？」

「いや、だがお前が戦うとなれば」

「大丈夫だよ、来るべき時が来たら僕が僕を殺すから。それに千里は世界を見て回りたいんじゃないかな？」

そうなのか？と佐藤の視線を受け、千里は首を縦に振った。

もちろん三人についていきたいという思いもあったが、それ以上に異世界に行ってみたかった。

「俺はこの世界しか知らなかったんだ」

「だろうな」

「だからもつと世界が見てみたい。俺のいた世界は俺にとって最悪な世界で、あんた達がいなかったらきつと俺は一人孤独に死ぬ日を待っただけの毎日だったと思う。俺のいた世界が当たり前じゃないって知ったから…だからもつと見たいって思った」

言葉にすることは難しい。

拙い言葉を重ねながら千里は懸命に訴えかける。どうか自分を連れて行ってくれと。

(それに…)

佐藤の背中を見送るのがなんとなく嫌だった。

記憶でもなく精神でもなく、ずっと奥のところがそう訴えている。千里の言葉に強い意志を感じ取ったのか、佐藤は仕方ない…と諦めてくれたようだった。

「明日発つ。向こうで現在何が起こっているのかは俺にも分からない。しっかりと準備をしておけ」

「了解」

「お前に言われるまでもねえよ」

「む、見かけによらず器用なのね」

「俺が器用なんじゃなくてイグレア、お前が不器用なだけだ。何だ

…勇者に選ばれた女は裁縫もろくにできないのか」

塔の最上階、勇者と魔王は共に生活をするようになっていた。

横長のソファに並んで座っている二人、イグレアは魔王の手元を覗き込み、その手の動きをみて時折感嘆の声をあげた。

魔王はそんなイグレアの視線を鬱陶しそうにしながらも突き放すことはせず、手元を黙々と動かす。

魔王が手に持っているのは編み棒だった。

「マフラーぐらい私だって本気を出せば！」

「できるか？…毛糸を取り出すだけで絡めていたお前が？」

「む、まさか私を侮辱するつもりか！なめるなよ！」

「虚勢を張るのはいいから…ほら」

出来上がったマフラーに仕上げを施して魔王はイグレアの首に掛けた。少し長かったか…と苦笑する。

薄い桃色のマフラーに溺れながらイグレアは驚く。

「これ…私にか？」

「この国は年中寒い…雪解けの時季の今でも肌寒いだろう？だから…な」

「あ、ありがとう」

「風邪でもひかれると面倒だからな」

まあ…と何かを思いついたのか魔王がくつくつ笑い出す。

「莫迦は風邪をひかないと言うが」

「ばっ…本当、台無しだ！この皮肉屋が！」

「うるせえ、本当のことを言っただけだろ」

「あ」

口喧嘩が始まりそうだったが何かに気づいたイグレアが声をあげた。

「どっした？」

「最近な…たまに素が出るようになったな、お前。堅苦しい魔王の仮面が剥げて私も嬉しいぞ」

「…誰がだ、お前の勝手な思い込みだろうぜ」

「ほら、まただ」

「うぜえ」

焦って弁解しようとするだけ素が出てしまい、イグレアにからかわれるの繰り返し。

魔王は困りきって頭をガシガシとかき乱した。

何とか話題を変えようと違うことを持ち出してみる。

「そういえば、一体お前は何時までここにいるつもりなんだ？」

「ん、私がいるのは迷惑か？」

「別に：ただ、お前も人間共の町に帰りたいたらと思うてな」

「迷惑じゃないなら居座るぞ、お前からあんなことを聞かされた後だ：何も知らない顔をして帰れるか」

「迷惑だ」

「少しはオブラートに包め！」

はつきり言われて思わず突っ込んでしまふ。すると魔王はクスクスと笑い立ち上がって怒鳴るイグレアを見上げた。

「嘘だ」

「なっ、お前は本当に私をからかうのが好きなのだな」

「何てつたつて俺は性悪魔族らしいからな」

すました顔でそんな風に自嘲しながら使っていた編み棒と毛糸をまとめると、魔王は片付けを終えた。

木箱の中に納めて大切そうに机の下にそれを置く。

「きつと皆もびっくりだな、魔王ともあるう者が編み物が趣味だなんて、知ったら天地がひっくり返るほど驚くぞ」

「別に趣味ってわけじゃねえよ：それに、俺は別に人間と仲良くしようなんて願ってねえ」

「お前は人間が嫌いなのか？」

「ああ、嫌いだ。生まれてこの方ずっと憎まれ続けてるんだ：これでまだ好きなんて言えるやつがいたらそいつは聖者か何かだ。いるのかね：生まれてからずっと疎まれて、それでも人が好きな奴なんて」

「いないなんて言えないけど、少なくとも私がお前の立場だったら無理だな。だから人を好きになれ…なんて言えないよ」

「…そういうことだ」

不快な話だったらしく魔王はそれっきりで話は終わりだ…と立ち上がると部屋を出て行くこととする。

イグレアもそれに気づいて腰を浮かした。

「どこに」

「少し出るだけだ…そんなに心配そうな顔すんな、人里にはおりねえよ」

「そうか」

そんなに心配そうな顔をしていたのか？と顔を両手で押さえながらイグレアは再び椅子に腰を下ろした。

イグレアの行動を見て微笑んだ魔王は扉を触れることなく開かせると部屋を出て行った。

一人残されたイグレアは魔王の足音が消えたのを確認すると、椅子の下を覗き込んだ。

5・勸善懲悪、魔王と勇者。（後書き）

ここから新章だと思っていただけると分かりやすいと思います。

6・佐藤と魔王

「出るぞ」

バスが大きく揺れて停車した。

それとほぼ同時に佐藤が目覚ましてバスを降りる。何時になく能動的に動く佐藤に鉄も不自然さを感じているようだ。

千里に代わって尋ねる。

「どしたの、佐藤？何時になく乗り気だね」

「旧友のいる世界だ…どうしているのかが気になる」

「お前に友達いたのかよ」

相変わらず憎まれ口を叩く紙袋にいつもなら睨みを飛ばすというのに佐藤は何もせずにバスを降りる。

珍しいこともある…と思いつつ佐藤も飛び降りた。

最初に見えたのは巨大な黒い塔。高く、天を目指して聳え立っている。その塔から少しはなれた場所に市街地が見えた。

塔は近いが町は遠い位置にある。

風が吹いて千里の髪を揺らした。冷たい風に体を震わせる。

「寒っ」

「…ここには季節がない。常に寒冷期のようなものだ」

「困ったね、このままじゃ仲良く凍死つてもあるかもよ？町遠いみたいだし、どうするの？」

「大丈夫だ」

マントを脱ぎながら佐藤が答える。

彼の視線は天を指す塔を捉えていた。

「塔に向かう」

「へっくしっ！大丈夫なのかよ、化物。いかにもモンスター出そうだなダンジョンじゃねえか」

「モンスター？魔物のことか。確かにあいつは使役していたが、そんな場所をわざわざ通るつもりはない」

黒いマントをひよいと千里の肩にかける。

浴衣でない分皮膚に直接当たる風は少ない。それでも寒いことには変わらないはずなのに佐藤はまったく顔色を変えない。

温度など感じていないかのようだ。

バスを手早く隠すと続けて佐藤は千里の肩を抱いて目を閉じた。マントが形を変えて黒い翼になる。

「うわっ」

「俺の翼だ…暫くそのまま動くな」

「何してんだ？」

「相手に俺が来たことを伝えている、迎えが来るはずだ」

黒双翼から幾つか羽が抜けおちて宙を一定の速度で浮遊しはじめた。

ふわふわと動いたかと思えば、一瞬にして地面にそれが落ちる。

「通じたな…少し酔うかもしれないが、我慢しろ」

「あー嫌な予感、まさか佐藤」

「そのまさかだ。 鉄と俺は体験済みだが…千里、俺から離れるな」

佐藤が千里を抱き締めた瞬間、四人の姿が消え去った。

「できた！」

魔王の留守にしている部屋、イグレアはごそごそと何かをやっていたが、出来上がったそれを満足気に掲げた。

彼女の膝上には縫い物道具の入った木箱、彼女が両手で誇らしげに持っているのは暖かい茶色をしたマフラーだ。

初めて作っただけあり不恰好ではあったが精一杯の一品だ。

「あいつも喜ぶだろうな、そうだろうな！」

マフラーを両腕で抱えて部屋を飛び出す。廊下をフラフラと数分歩いてみるが探している人物の姿は見えない。

「おーい」

声をかけながら歩くが返事はない。

(おかしいな…私が呼んだらいつもは普通に来るはずなんだが)

たえ声の届かない場所にいたとしても本名を呼ばればわかるらしい。

イグレアは控えめに魔王の名を呼んだ。
しかし変化はない。

「一体どこに…まさか、町に下りたんじゃ!」
そういえばそうだ。

今日は少し様子がおかしかった…何かを隠しているような、いつもと違うぎこちない態度に気づけていた。

「っ!」

マフラーを投げ出して走り出す。塔を降りることは簡単だ、魔王から移動魔術式の在りかを聞いていた。

「早まるな…!」

間に合ってくれ…願いながらイグレアは力の限り走った。

引力の方向が変化して頭をぐるぐるとかき回される感覚。吐き気すら覚える感覚に耐えると視界が開けた。

心配そうに覗き込む佐藤の顔がある。

「大丈夫か?」

「何が…起こって」

「転移魔術だ…初めては少し辛いか」

周囲の状況を確認すると、慣れた様子で涼しい顔をしている鉄と、床に両手をつけて蒼白な顔をした紙袋が見える。

赤い絨毯の敷かれた部屋だった。

「塔の最上階だ」

千里が場所を問う前に佐藤が教えてくれる。

価値のありそうな骨董品の並ぶ室内はどことなく上品な雰囲気を感じさせている。

マントを佐藤に返すと翼は布へと姿を戻した。

「行くぞ…相手方にお前達のこととも紹介しないとイケない。人嫌いの変わった奴なんだ」

「人嫌い？」

「…俺に似ている、だから気があつたのかもしれない」

「あー佐藤、ゴメン先に行つて。紙袋の回復がまだみたいだから」
マントの加護も得られなかった紙袋の酔いは相当なものらしく、
いつものふざけた色は微塵もなく辛そうにしていた。

立てた膝の上に額をつけたまま動かない。

佐藤の補助を受けたおかげで自分はあるだけで済んだのだと気付いて千里は隣の無感情な顔を見上げた。

「追つて来い…ここを出てすぐ右にある王室で待っている」

「うん」

「おいで、千里」

転移部屋を後にして長い石造りの廊下を歩く。

こつこつという足音だけが響き、大きな扉の前で佐藤が立ち止まった。片手でそつと押すだけで重い扉が音を立てて開く。

軋む音をたてて全てが開ききると、部屋の内部が見える。

最初に見た部屋と似た装飾が多いが、一番の相違点といえば部屋の中央に置かれた黒いソファ、そこにゆつたりと腰を下ろす男の姿だろう。

遠慮なしに佐藤は室内に踏み入り、千里もその後が続いた。

「久しぶりだな、魔王」

「魔王？」

魔王とはあの魔王だろうか…と千里は耳を疑う。

千里と同じぐらい長い、しかし癖のある黒髪。右目を覆う長い前髪。そして眠たそうな目に無精髭。

見た目の年齢は四十歳辺りだろう。

首に茶色いマフラーを巻いているが、荒いつくりで先端がボロボロにほつれてしまっていた。

「…また随分懐かしい顔だな、そして珍しい御仁もいるじゃねえか」
銜え煙草を机の上に置かれた灰皿に落とす。

立ち上る灰色の煙の先に見える魔王は立ち上がるとニヤツと知的

な笑みを浮かべた。

「そつちの人間は誰だ？黒…」

「今の名前は佐藤だ」

何かを言いかけた魔王を遮って佐藤が自分の名前を告げる。

「おつとすまねえ…佐藤、紹介してくれ」

「あ、えと、俺は」

「話したはずだぞ魔王、俺の目的だ」

「ああ、あの話に出てきた子か。初めまして…千里…だったか？」

初対面の男に突然名前を言い当てられて少なからず驚く。

目的とか何とか言っていた…佐藤が話したのだろうが、そのとき

はまだ千里と佐藤は会っていないはずだ。

「俺のこと…知って」

「ああ、嫌になるぐれえ聞かされたからな。まあその過保護な奴

が呼んでるから察しはつくと思うが、俺は魔王…名前はイグレアだ」

「イグレア？」

似合わない名前だと率直に思う。

佐藤も腑に落ちない表情をしていた。

挨拶のついでに差し出された手を握り返すと冷たい何かが脳天か

ら爪先まで通り過ぎる。

(え?)

似ていた…月花を殺した佐藤を見たときの感覚に。

「千里から離れる…怪しい真似をすれば旧友といえども吹き飛ばす

ぞ

佐藤の警告を受けてパツと魔王は手を離れた。

「別に何もしてねえよ…そんなに信用ないかね、おっちゃんは」

素直に千里と距離を置く魔王を見て軽く佐藤は目を見開いた。以

前会ったときとのギャップに驚いたからだ。

「随分大人しくなったものだ…すぐに手をあげると思った」

「ま…お前に会うのも久しいからなあ。何年ぶりだ？お前が以前

ここを訪ねてから」

「百三十六年ぶりだ、まさかこの世界に未だ人間の都市があるとは……俺はそのことに驚いたよ」

「お前は変わんねえな、俺はすっかり老いぼれたよ」

（百三十六年？）

どうやら知り合いらしい二人はすっかり思い出話に花が咲いてしまっている。入り込めない千里は所在無く部屋の端に立ち、二人の会話をぼんやりと聞いていた。

だが佐藤の口から出た言葉に驚く。

それが本当だというなら佐藤は百三十六年前にこの世界を一度訪れているということになる。

（佐藤って……何歳なんだ？そもそも人間ってそんなに生きられるものなのか？）

仮に長生きをしている通常の間人だったとしても、佐藤の見た目はどんなに多く見積もっても二十代後半だ。

最初に出会ったときの佐藤の言葉が思い返される。

「化物か、お互い様だ」

彼はそう言った。

千里が自らを鬼だと蔑んだ際に呟いた言葉ですぐにはぐらかされて詳しく意味を問い詰めることはできなかつたが、今までの人間離れした動きの数々、術の数々を思えば本当に人外の者なのかもしれない。

「老いた？何の冗談だ。俺より上の力を持つものがこの程度の歳月で退化するはずもない。何のつもりだお前……何の狙いがあつてそんな見た目を使っている？」

「長げえぞ百年は、お前がずっと探し続けてる間、俺にも色々あつたつてことだ」

苦笑して魔王は目を伏せる。

やはり腑に落ちない表情を佐藤は崩さなかつた。

「それにしても随分と大所帯なこつた。二人……お前が人間を近くに置くとはねえ……お前も随分変わったよ」

「別に：利用しているだけだ」

「入って来いよ…とって食いやしねえよ」

パチンと魔王が指を鳴らすと閉じたはずの扉が勢いよく開かれる。扉の向こうには錠と紙袋がいる。

突然開いた扉に驚くこともせず錠は微笑みを浮かべたまま、紙袋は警戒するように魔王を見ている。

「流石、佐藤の友人かなーお邪魔してます塔の皆さん」

「イグレアでいい。千里以外の名前は知らねえんだ：名前は？」

「錠、こっちの犬みたいに警戒してるのが紙袋。僕と彼は佐藤の協力者だよ」

「誰が犬だ！…こんな薄気味わりい塔に住んでて尚且つ佐藤の知り合いだあ？んな奴信じられつかよ…うさんくせえ」

露骨に非友好的な紙袋の発言を受けても魔王は気分を害すこともせず、若いなあ…と笑っただけだ。

「嫌われてんなー、まあこのことに関しては紙袋？の対応が正しいと俺は思うね。魔王イグレアってんだ：警戒するのが当然だ」

「魔王！…佐藤の友達らしいね」

「そちらさんこそ、随分器が大きいようで何よりだ」

自己紹介を終えると魔王はソファを軋ませて腰を下ろす。懐から煙草を取り出すと道具を使わずに指先で火をつけた。

立ち上る細い煙を見てふっと目を細める。

「ま、歓迎する。できる限りのもてなしはするつもりだ、好きなだけゆっくりしてってくれ。部屋はどこ使っても構わんぞ」

「助かる…千里、それに錠、暫くここで世話になる」

「うん、それじゃあお世話になりますイグレア」

「おうよ」

「…なんで俺はいねえ前提になつてんだよ」

来客達は指示通り好きなように部屋に帰っていった。

一人になった魔王は石造りの床を歩くと窓辺より外を見下ろす。

遠いが眼下に広がる繁華街、都市、人間の暮らす町。

魔王というものを作り上げておきながら自分達はのこのくと暮らしている。誰かの犠牲によって成り立っている平和だと知らない。

「…どうしてこんな時期にお前は帰ってきたんだ」

今ここにはいない佐藤に問いかける。

できれば帰ってきて欲しくはなく、そして帰ってきてくれて都合が良いともいえた。逃げ道が確保できるからだ。

(あいつがいれば確かに俺は生き残ることができが)

こんな奇跡とも言えるタイミングで佐藤がこの世界を訪れたことが少しだけ気にかかる。

いや、かなり気にかかっていた。

「一体…神様とやらは何を考えているんだか」

女神、彼女はそれを信じていた。

助けてくれることはなかったが。

何故こんなことになってしまったのだろうか？

目の前に迫る息の荒い紙袋を見ながら千里は困りきっていた。

雪が降っているからといってはしゃぎ、塔の屋上を歩き回ったのがそもその原因だった。

雨と違い当たってもすぐには濡れない雪、油断して室内に戻れば溶け出した雪が冷たい水となって体を濡らしてしまった。

それを偶然通りがかった紙袋に発見されたのがいけなかった。

「風邪ひくぜえ？」

「だからってどうして一緒に入る必要があるんだよ！」

「俺の個人的な事情だよ！」

「どんな事情だ」

逃がすつもりはないようで紙袋はじりじりと距離を詰めてくる。

彼が一步進むたびに千里も一步進むのだが、とうとう壁に背中をぶつけてしまった。

これ以上は下がれない。

「千里お一緒に風呂入ろうぜー！」

「…仰る意味が分かりかねます」

「欲望が隠しきれなくてダダ漏れだよ」

「ぐっ…だがしかし、俺は耐えてやるぜ！」

鉄の蹴りを片手で受け止めて紙袋は吹き飛ばない。

糸のように細められていた鉄の目が驚きに開かれた。

「ふっ…いつまでもお前に邪魔をされる俺だと思っただら大間違っくへ！」

佐藤は汚いものでも触るような手つきで紙袋の襟を掴むと、ひよいつとまるで人ではなくもつと軽いボールを投げるような仕草で彼を投げ飛ばした。

綺麗な放物線を描いて数メートル離れた場所にベシヤリと紙袋が落ちる。

「大丈夫か、千里？」

「あ、ああ」

まさか本当に死んでないだろうな…と心配になって千里は佐藤の肩の向こう側に転がる紙袋だったものを見る。

「流石、打たれ強いつていうのか懲りないつていうのか、最近紙袋が粘るようになったんだよね…何か新しい撃退方法が必要かな」

まるで害虫でも追い払うような鉄の発言に紙袋とはいえ不憫な気持ちは沸いてきた。

…ほんの僅かにだが。

佐藤の白い手が伸びて千里の髪を触る。

「濡れたな…」

「大丈夫だ…これぐらい、慣れてる」

傘をなんらかの形で奪われて雨に降られて帰ったり、傘を差す余裕のない状況で走ったことも幾度もある。

全ては鬼という肩書きのせいであり、慣れているという言葉は本心からだ。

しかしその発言が気に食わなかったのか佐藤は眉を顰めた。

「風邪をひく」

「ここに風呂場なんてあるのか？」

「だーからあー、俺が手取り足取り案内してやるぜ！」

「話がややこしくなるから君は黙っててよ」

辛辣な鉄の言葉も紙袋にとっては軽いものらしい。へいへい…と適当な返事をして口を噤む。

「佐藤は知ってる？この塔にお風呂なんてあるのかな？」

「…風呂？何だそれは」

「え？」

「いやいやいやいや、嘘だよな、冗談だよな化物。お前ってそんな天然キヤラじゃねえだろ」

二人に莫迦にされたと感じたのか佐藤は眉を顰めて不機嫌そうに首を横に振る。

「知らない」

「佐藤…なんて説明すればいいんだ？…沐浴は分かるのか？」

そもそも浴衣を着ていた佐藤が風呂を知らないということが驚きだったが、千里は必死に言葉を探した後に発言する。

「莫迦にするな」

どうやら沐浴は分かるらしい。

「それ、そのことだ。具体的には…沐浴の温水バージョンか？」

「成る程、体を温めるといふことか。珍しく莫迦の提案が正しいと思える…それで、千里は風呂とやらはしないのか？沐浴場ならこの塔にも確かあつたはずだ」

「え、いや…」

てっきり佐藤は紙袋と一緒に千里が風呂に入るのを止めてくれると思っていたが、その辺のことに關しては感覚がずれているらしく何故千里が行きたがらないのか分かっていないらしい。

意外な一面に驚くが、今は不都合だ。

「ほらな、ほらな！佐藤からも推薦されたところで行くこうぜ千里！」
「鉄さん！」

最後に残った砦は常識人の鉄だけだ。

しかし困った風な笑顔を浮かべるだけで、彼も佐藤の決定には逆らえないようだった。

（おわった…俺の色々なもの）

「行こうぜ！」

「どうしてお前がついていく？」

「へ？」

これまでにないほど上機嫌で千里の手首を掴んでいた紙袋が予想外の佐藤の発言に固まった。

「お前などと千里を一緒に行かせられるものか、来い、千里」

「あ、ああ」

少なくとも最悪の事態だけは免れるようだ。安堵の息をついて千里は佐藤の背後に隠れるように移動する。

「くそ化物があ！俺の夢をぶっ壊しやがって」

半泣きの紙袋を一瞥し、何も言葉をかけることなく佐藤は千里の手を引いて歩き出した。

7・鉄たちの理由

じつと視線を向けられている状況に耐え切れず、千里は自分から声をかけることにした。

こちらを見ている…というより凝視している目は四つ。言うまでもなく一人は紙袋であるが、もう一人は湯に入らず淵にいる佐藤だった。

「何してるんだ？」

「沐浴だ」

「いや、そんなことは分かってるんだけどさ、入らないのか？」

大浴場と同じくらいの大きさを誇る塔の浴場。薄っすらと湯気に包まれた室内だ。やたらと声が響く。

「…何故熱湯に入っているのか」

「猫かよ、水怖がるとか小動物以下だぜ」

「はいはい、千里とられたからって苛々しないの」

「うるせえ余計なお世話だ…ってか離せよ！」

「離れたら千里に飛びついていつちゃうでしょ？無理」

「ぐっ…生殺し」

湯の中に漬かっている紙袋は二メートルほど離れた場所でちょっと座っている千里に近付こうと足掻いているのだが、首に絡みついた鉄の鎖が邪魔でそれ以上進むことができない。

服を脱ぎ去っただけでも鉄が鎖と鉄を手放すことはなく、同様に紙袋も頭の袋を外すことはしない。

暴れているせいで時折湯が紙袋にかかっているのだが、まったくふやける様子は見られなかった。

「紙袋は外さないのか？…袋」

ずっと疑問に思っていたことを尋ねる。

「何のための防水性だ、いかなるときでも身だしなみを崩さないのが俺様だっの」

「身だしなみねえ…」

「何だよその目、てめえこそ湯の中にまで金属持ち込んでんじゃねえかよ、鉄!」

「ステンレスだから」

ステンレス鋼、耐食性の高い鋼をしようしているため水分による錆を気にする必要がないようだ。

銀色に鈍く光る鎖の正体分かるがまったく役に立たない。

「…楽しそうだな」

「お前も混ざってくればいい」

「俺はあそこに入る勇氣は…というか佐藤は入らないのか?」

随分前から指先を湯につける程度でおわっている。

沐浴というより水遊びになってしまっている佐藤に尋ねると、珍しくも彼は困ったような表情を浮かべた。

「熱い」

「最初だけだぞ」

「…」

「ほらっ」

「なっ!」

もどかしくなつて腕を引くとバランスを崩した佐藤は意外なほどあっけなく湯に落ちた。

水しぶきに目を閉じる。

「お前…千里…」

恨めしげな声を聞いて目蓋をそつとあけると、目の前に頭まですぶぬれになつた佐藤の姿があつた。

前髪が皮膚にぺつとり張り付いていたのをどけながら、軽く咳き込んでいる。水を飲んでしまったらしい。

だが溺れたり暴れたりという反応がない、どうやら食わず嫌いに似たものだつたようだ。

「熱くないだろ?」

呆れた顔をした佐藤が濡れた口元を手の甲で拭う。

「てめえ、離れる佐藤！千里に近付くことは許さん」

紙袋がそう言うのも無理はなく、佐藤は水面に浮いた長い千里の髪を面白そうに眺めばしゃばしゃと水面を跳ねさせる。

髪と一緒に尻尾の先端も水の上を漂っていた。

「とういか：随分のんびりしてるね佐藤、依頼は？」

「抜かりない」

「今回の依頼の内容俺達は聞かされてねえぞ。大丈夫なのかよ…ここに来てもう丸一日になるぜ？」

「ここでもうやって時間を浪費することで待っている…決断を」

「決断？」

「今回の依頼主は決断の補助を望んだ…だからそのときを待っている。こちらから動くことは出来ない」

曖昧に誰の決断なのか、どういう内容なのかをぼかしている。

暫く思案気に尻尾で水面を叩いていた千里だが、そろそろのぼせてきたのかそつと湯から出た。

ぶるぶると顔を振って水気を払う。

「お、出るのか？」

「…先行く。別に気にしないでくれ」

ぺたぺたと濡れたタイルの上を歩いて脱衣所に向かい、角のある頭をゴシゴシと乱暴にタオルで拭う。

誰が用意してくれたのか：おそらくは佐藤だろうが、新しい服が置いてあったので遠慮なくそれに袖を通してもらった。

髪を結ぼうにもまだ乾ききっていない髪を結うのは少し憚られて、結局そのままにして脱衣所を出る。

塔の中には千里のことを理解してくれない人はいない。

日ごろ衣服の中に押し込めている尾を開放することができた。

扉をあけてすぐの廊下を歩いていると、偶然にも目の前に魔王の姿を確認することができた。

「魔王？」

「お、千里か。俺のことはイグレアって呼べよ」

こちらに気がついたのか、壁に飾られている絵から千里へと視線を移す。

「魔王のほうがいやすいんだ、イグレアって…失礼だけどあんたに似合わない」

「そうか？…そうか。…で、どうだ？魔王の住まう塔の居心地は？」

「快適…だけどいいのか？こんな風にだらだらと滞在して」

「構わねえよ、どうせ一人で住むには狭すぎる場所だ」

「そっか…ん、これは？」

魔王の眺めていた絵には二人の人物が描かれている。片方は魔王によく似た…しかし年齢は二十代程の青年。

それに寄り添うようにして青年より若い女性が立っている。

微笑を称えた…しかし気の強そうな目をした女性だ。

「あ、かわいいだろ？俺の嫁さんだ」

「嫁？…妻がいたのか…見てないぞ？」

「そりやお前、実物見たら惚れられちまうだろ？だから隠してんだ。大事な人だからな…認めた奴にしか見せない」

「名前は？」

「んー…勇者様だ」

「勇者？」

魔王に相反する存在の勇者のことだろうか？

だとすれば魔王と勇者が愛し合い添い遂げてしまった…この世界は随分とおかしな世界だということになる。

（流石…佐藤の友達だ）

生半可に常識の通じる相手ではない。

「俺を殺すってな…攻め込んできたんだ。話が妙にあってね…んで一緒にいることになったわけだ」

「独りじゃなくなっただんな」

「おう、お前は共感してくれるみたいだな…世界の全てが敵だった俺がようやく得た理解者だ」

「佐藤は？」

意外な人物の名だったのか魔王は驚いた後に苦笑する。

「確かにあいつは理解者というか共感をしてくれた奴だがな、そもそも人間じゃねえしすぐにここを立ち去った。それに、あいつじゃ俺は止められなかった」

「止める？」

「そ、千里」

魔王は許しを請うように千里に目配せする。伸びた手が角に向かっていることに気づき、千里は了承に頷いた。

伸ばされた手が固い角を撫でる。

「お前なら分かるはずだ…世界規模での村八分。誰も味方になつてくれる人はいない。こちらが何をしなくとも敵とみなされる苦痛。俺だって聖人じゃねえんだ…憎かったよ、何もかもが」

「…ああ」

（俺だって）

堪えていた憎しみや悲しさがなかったわけもない。

自分を見下す人間、自分を差別する人間が大嫌いで仕方なく…それでも心のどこかで人を信じようとする自分がいた。

だからこそ佐藤達が現れたときに素直についていった。

「俺はさ…魔王って祭り上げられるほど強い力を持ってた。それこそ世界を滅ぼせるぐらいのな…全盛期は」

「……」

「この世界の仕組みを知ってるか？」

「…いや」

「この世界はな…何か一つのものに憎悪を向けられることで平和を保っている世界なんだ。いってみれば憎しみの矛先が人間同士にならないように…俺っていう、魔王という象徴を作り出して憎ませる。それで世界を平和に保っている世界だ」

力を持つが故に嫉妬を浴び、強大な力を持つが故に恐れられ、恐怖の対象、憎しみの対象として祭り上げられた。

いつしか魔王と呼ばれるようになった。

「佐藤はな…あいつはお前と似た境遇だったんだよ、千里。俺も奴から話を聞いただけだから詳しいことは知らんが…だから俺が世界を滅ぼそうと考えていたとき、あいつが傍にいたら今頃この世界はなかった。お前達と俺が会うこともなかったわけだ」

「でもこの世界は残ってる」

千里の言葉にその通りだと魔王は笑った。

肖像画に描かれている女性を慈しむように見上げている。

「どうして…」

「ん？」

「どうしてあんたは世界を許せた？どうしてあんたは笑っていられるんだ？」

「んー難しいけど単純な質問だな」

首元を覆うマフラーをそっと掴んだ魔王は言葉を選ぶようにしばらく虚空を見つめて黙り込み、そして照れくさそうに口を開いた。

「陳腐になるけど…愛ってやつだな」

「魔王が…愛？」

似合わないことの筆頭に位置する言葉だ。

「恥ずかしいが勇者が大好きだったぜ、俺は…だから俺は世界を壊すことを思いとどまった。なんつうかな…」

相応しい言葉を探して魔王は髪をかき乱す。

「良かったんだよ、世界に嫌われてようとよ…俺の世界は勇者と自分、それにこの塔だけだった。だからあいつに好かれてるってことは俺は世界から愛されてるってことで、あいつが好きだってことは俺は世界を愛してるってことだったんだ」

それは世界ではなく自分の世界だったのかもしれない。

だが魔王にとってはそれが紛れもなく世界であり、それだけで満足だった。たとえそれが自己満足に過ぎないとしても

。

「まー簡単に言っちゃえば、俺は妥協したわけだ」

「…俺には」

「分からないってか？…ま、俺もその境地に至るまでに千年かかったわけだ。お前は分からなくていいよ」

突き放すような物言いではなく、穏やかに言い切ると魔王はふと笑った。

その笑顔を見て何故か胸が痛む。

（幸せだっていうなら）

どうしてそんなに悲しそうに笑うんだ？

千里を追って浴場を出た佐藤だったが、彼を魔王が話し込んでいるのを知ると壁際に身を寄せて隠れた。

柱の影から二人の会話を窺う。

会話の内容はとても良い話で、最悪な話だった。

（なるほど）

魔王の発言で大体のことを把握する。

自分がこの世界を以前訪れて去ったあと何があったのか…そして今、何が起ころうとしていて依頼人は何を求めているのか。

だとすれば答えは簡単だった。

だがそのことを簡単に果たしてしまえば、それは千里の意思にそぐわない可能性がある。

依頼に千里は関係なかったが、彼の意思を尊重してやりたい。

（だとすれば千里に真実を知らせる必要があるな）

彼を騙すような行為になるのは嫌だが仕方ない。

聞こえてくる言葉に目を伏せた。

勝手なことを魔王が千里に伝えなかったことは喜ぶべきことだが。

「千里」

（お前はまだ独りなのか？）

満たせぬことが齒がゆい。

魔王の塔に滞在して二日目、やることもなく塔の内部を探索して

いた千里の前に、佐藤が現れた。

千里を待つていたらしく壁に背中をつけて立っている。

「佐藤、何か用でもあるのか？」

「少し繁華街に下りて来い」

「繁華街？…人間達の都市のことか？」

塔にある窓から見下ろすことができる町はかなりの規模を誇り、興味がなかったといえば嘘になるがどという風の吹き

回しだろうか？

佐藤が理由もなく危険なことに手を出すはずもない。

「下りて来いってことは佐藤は来ないのか？」

「俺は以前この世界に来た際に魔王と共に色々あった…確実に人間達からは魔王の味方だと思われる」

だから迂闊に歩く事はできないということだろう。

「鉄に話しておいた…少し羽を伸ばして来い。角と尻尾は隠したほうがいいと思うが」

「ん、でも何か用事があるからじゃないのか？」

「…この世界は珍しいだろう？適当に見回って来い…俺からお前に課すことがあるとすれば…そうだな、魔王について学ばいい」

「魔王について？」

知りたいのならば直接魔王に聞くか、本人に聞きにくいことがあるれば近い佐藤に尋ねればいい話だ。

そちらのほうが確実な情報が手に入る。

「俺達からは聞けない…人間の視点からの話も経験になる」
「分かった」

釈然としないものがあつたが、佐藤がいうのなら何か大切な意味があるのかもしれない。

佐藤は頷くと鉄を探して駆け出した。

意外にあっさりと鉄の姿が見つかる。

鉄は魔王の部屋におり、魔王と談笑している様子だった。

会話に割り込むのは悪い…と思いつつ、佐藤は鉄に話をしてあると言っていたのでそつと部屋に入る。

扉の閉まる音で二人がこちらに気づいた。

「あ、おはよう千里」

「鉄さん…それに魔王、何してたんだ？」

「何してたつてお前、お前等が塔の外に出かけたいつて言ったんだろーが。ま、魔術が使える佐藤が同行するなら俺も寛大に許してやるところなんだが、二人とも素質はねえみたいだしな」

「それが何か困るのか？」

悩ましげに腕を組む魔王を見て千里が尋ねる。

「困るも困る…行きは俺が送るとして、帰りはどうするつもりだ？常に遠距離に魔術飛ばせるほど俺は器用じゃないぞ？」

この塔に来るときは佐藤が合図をだした一瞬だけでよかったが」

「そうなんだよね…で、そのことについて今相談してたつてわけ」

塔を物理的に上れば解決するのだろうか、流石に千里にもそれがいかに面倒で無謀なことなのかは分かる。

人から憎まれている魔王、しかし人間が塔に攻め入ってくることはないのは、塔を上つてこられないからだ。

魔王らしくはないとはいえ魔王、おそらく塔の中に人間の上がつてこられないようなトラップや化物を配置しているのだろうか。

「不要な心配だ…帰りは俺が」

「お前は遠くには魔術飛ばせないだろ？」

「俺が下に降りて二人をここに送れば問題ない」

それならば可能だろうが、しかしそれだと問題が残る。

「佐藤はどうするんだ？」

「飛んで戻る」

「なるほど、それで解決だ。じゃ行ってらっしゃいお二人さん！」

飛んで戻るとはどういうことなのか…と千里が問いかける前に魔

王が二人の前に立って肩を軽く押す。

地面がいつの間にか消えていて衝撃でそのまま落下した。

浮遊する感覚…二度目だ。

(移動魔術！)

相変わらずの吐き気を催す感覚が体中を支配し、目の前が真っ暗になった。

意識がはつきりとしてくると町並みが自分達を囲っていることに気づいた。

隣に立って千里の肩に手を回し、倒れないように見守ってくれていた鉄は移動に慣れているのか、まったく変化が見られなかった。

「大丈夫？」

「…あまり大丈夫じゃない」

フラフラする頭を片手で抑えてぶれる視界が定まるまで待つ。

喧騒がだんだんと鮮明に聞こえるようになってきた。

ぼすつと頭から帽子が落ちてくる。

「隠さないよね」

慌てて尻尾をくるくると丸めてズボンの中に突っ込む。鉄はその間に周囲の様子を確認し、千里が一連の動きを終えたと同時に腕を掴んで歩き出した。

千里の歩幅と歩くペースにさりげなくあわせてくれている。

「どうして鉄さんは俺に優しいんだ？」

考えていたことがつい口に出てしまった。

無意識のうちに尋ねてしまう。

鉄は質問に驚いたようだったが、適当に答えることはせず暫く考えてから丁寧に答えてくれる。

「俺だけじゃないよ…佐藤だって、ちょっと…じゃないね、かなり歪んでるけど紙袋だって、君を探す為に旅をしてたんだ。それだけの理由があるに決まってる」

「理由」

「それぞれ…あるんだよ。ほら、辛気臭い話は止めよう？きつとこれからもっと嫌な話、聞かないといけなくなるんだから」

佐藤は人間から見た魔王に対する批評を聞いてこいと言った。内容がどうなのかは正確にはわからないが、聞いている限りの魔王の扱われ方から推測すると、どうせろくな話ではない。

鉄は指示を受けているのかはつきりとした足取りで人ごみの中を進む。

町の様子は中世風ではあったが、人の様子と気配は千里のいた世界に臭いが似ていて少し不愉快だ。

はぐれないように握ってくれている鉄の手を握り返し、できるだけ人と目を合わせないようにして歩いた。

「おはよーさん…ってうわ、最悪な目覚めだな。俺の癒しはどこに行っただよ？」

丁度二人を送り出した直後、魔王の部屋に入ってきた紙袋は佐藤の顔を見て露骨に顔を顰める。

「もう一人のお仲間さんか、紙袋は送らないでいいのか？」

「大人数だと目立つ…それにこいつと千里を二人で行かせるわけにもいかない」

「どういう意味だよ」

「…とにかく、こいつには必要ない。紙袋…しばらく千里と鉄は留守にする。お前は好きにしている」

「おーおー俺だけ仲間はずれ、涙が出ちゃうね」

ふざけたように呟くと肩をすくめて紙袋は回れ右をする。佐藤のほうを振り返ることもせず手を振ると部屋を大人しく出て行った。扉が閉まる音を聞くと佐藤は目をそつと閉じた。

決心をつけると目を開いて魔王を向き合う。

「悪いが…この前お前と千里が話しているところに居合わせた」

「ん？…ああ、あんどきか。聞かれちゃったのかあ…ま、仕方ないわな。で、それがどうかしたのか？千里と俺が仲良くしてたのが気

に食わない…とかっていう苦情なら受け付けないぞ」

(誰がそんなしょうもないことで…)

「単刀直入に言おう…勇者とやらにあわせろ」

「……」

顔から一切の表情を消して魔王は佐藤と正面からにらみ合う。

最初に折れたのは魔王だった。視線を逸らして頭を掻く。

「…測りかねるな」

「何をだ？」

「お前の真意だ…どちらの意味でその言葉を口にしていいのか。ただ俺の勇者に興味があるのか…それとも」

「おそらく後者だ、話せ千里…何故イグレアなどという名前を名乗っている？お前は今何を考えている？」

「止せよ…俺はお前の求める千里じゃない。分かってるんだろ？俺は最早違う人間だってこと」

「分かっているつもりだ…捨てた魂は次へ引き継がれた。俺はお前をあの千里としてみた事はないが、それでも赤の他人と割り切ることは出来ない」

それに…と魔王の姿を見て悲しげに、そして感謝するように佐藤は呟く。

「お前が全てを引き受けたことで千里は普通に生きていけるかもしれない。俺の我が俣につき合わせて悪いと思っている」

「違うな、俺は千里じゃねえが…あの頃の俺だったらお前の我が俣だなんて思わない。感謝すると思う…今の俺がああの頃の俺じゃなくてもどかしいけどな、お前の苦勞を労ってやれない」

「充分だ」

その言葉だけでも充分に救われる。

佐藤は胸に手を当てて俯いた。

「…話すぜ、俺の口から。終わらせる」

8・魔王、終末。

「魔王の仲間が殺された？」

「買い物をするついでにその商人に話しを聞くことにしたのだが、口の軽い商人の話は興味深いものだった。

「貿易品を扱う店で買い物をしながらの会話だが、客足は悪いようで店内には鉄と千里以外に客がいない。

「声を潜める必要もないようで、商人はぺらぺら話してくれた。

「知らないなんて、あんたらもぐりだな。いたらしいぜ…百年ぐれえ前によ、魔王の味方についた非国民が」

「その話、詳しく聞かせてもらえませんか？」

「鉄がカウンターに身を乗り出して尋ねると商人は少し気後れしたように黙り込み、それでもお喋りな性格は押さえつけられないのか話し始めた。

「話す分には構わねえけどよ、ちゃんと品も買ってつてくれよ？」

「ええ、話の内容によつてはそちらに金を払いましょう」

「金には目がないらしい。

「その言葉を聞くと商人の態度ががらつと変わった。

「毎年よ、俺ら人間は若い娘を一人勇者つていう名目で魔王の塔に向かわせるんだ。表向きは魔王討伐に選ばれた戦乙女、本当は魔王への供物だ。魔王のこたあ憎いけどよお…怖いって気持ちもあんだ。だから怒りを静めるためつていうわけだよ」

「勇者のことか」

「魔王の見ていた肖像画、あれに描かれていた女性もおそらくその生贄の一人だったのだろう。

「そして偶然にも魔王と恋に落ちたというわけだ。

「へえ、ご存知なんで？」

「続けて」

「へい、しつかしその中にろくでもねえ女がいますね、あるところとか魔王に寝返りやがったわけでき。んである日その女が塔から降りてきましてね、必死な形相して叫んだらしいです「魔王はどこだ、魔王をどこへやった」ってね」

「…そのとき魔王はこの町へ？」

「いいえ、勘違いもいところですよ。とうとう女が人間に牙をむいたってんで、役所の兵隊さんが彼女を捕らえたんです

。そのとき数名が怪我を負ったっていうらしいですから恐ろしいことです」

なんらかの行き違いがあって…勇者は魔王が人間に囚われたと思いで込んでしまったのだろう。

そして捕まってしまう。

「それで…どうなったんだ？」

「へい…」

案内されたのは大きな扉。魔王の部屋の扉も大した大きさだったが、目の前にある扉もそれに劣らぬ大きさを誇っている。

魔王が懐から取り出した鍵を使って扉を開き、埃っぽい部屋の中へと佐藤を案内した。

「察しの良いお前なら気づいていると思うが、勇者はただの生贄だ。本人達は魔王を殺すって意気込んで、自分を勇者だ

と信じきってる連中だけだな」

「…ここは？」

随分長い事使われていないようで、ある程度掃除はされているが生活感の薄れてしまった部屋。

魔王の部屋ではないようで、装飾や置かれている小物、服などが明らかに女性向けだ。

察した佐藤は質問を変える。

「この部屋の主はどこだ？」

悲しげに室内を眺める魔王はまるで思い出を追っているようだ。

「気づいてるんだろ？…処刑されたんだ、イグレアは」

「イグレア…勇者の名前か」

「イグレアが囚われたのに気づいたとき、彼女は処刑台の上だったよ…俺の力があれば助け出すことは簡単だったが、何しろ相手が悪かった。イグレアは俺の名前を知っていた、何かの拍子に零したんだろう…名前を知られた以上、魔術における制約を受ける。自由が利かなかった…助けてやれなかった」

佐藤も含め紙袋や鉢が本名を明かさない理由にそれがある。異世界を旅する上で名前を知られることは危険なことだ。

魔術の存在する世界の中には、名前を使うことでその人物を束縛する能力を持つ人間がいる場合がある。

そして魔王はその弱点をつかれた。

「利用されたんだよ、騙されて。勇者だなんて捨て駒に使われて、それでその礼が処刑か？…あんまりだろ」

「…お前は甘いな」

「ああそうだ、甘くて…だからイグレアのことを引き摺って世界を壊すことができなかった。報復ができなかった。けど…そろそろ終わりにしようと思ってる」

頃合だ…と佐藤は依頼を果たすことにする。

どちらに転ぼうともこれで依頼は果たされる。

「お前は…どうするんだ？」

世界を続けさせるのか、滅ぼすのか。

選択肢は多いように見えて二つしかない。

「許せると思うか？…人間が」

「いたとしたら…聖者だな。お前も俺も知ってるな、そんな人間を一人。気にせず決断するといい…お前は魔王だ」

魔王の部屋の前、廊下に背中をつけて紙袋は俯いていた。

魔王と佐藤の会話を聞いて大体の事情はつかめた。千里に関する部分では分からないところが大半だったが、魔王の気持ちは痛いほど伝わってくる。

(名前をイグレアって変えたのは…女への弔いと名前変更による制約の回避が目的だったことか。まったく)

溜息をつく。

「どいつもこいつも…面倒くせえな」

「大変だあ！」

商人の話聞いて衝撃を受けた千里は暫く呆然として言葉が出なかったのだが、突然商店に乗り込んできた男の声に現実に引き戻される。

「客がいるんだぞ？何だつてんだ？」

「魔王が攻め込んできやがった！」

「は？お前それ、何の冗談だよ」

「見てみる！魔王の塔から魔物がわんさか溢れてやがる！」

慌てた商人は金を受け取ることもせず店の外に飛び出す。

千里と鉄も素早く外に飛び出した。

空を見上げると魔王の塔からあふれ出した黒い小さなものの集合体が空を覆っている。

遠くに見えるその粒一つ一つが魔物のようだった。

「とうとう…とうとう魔王が本性を出しやがったんだ！」

「ひっ、ひいひい！」

「俺達まだ死にたくねえよ」

恐怖の声は瞬く間に感染して、道に溢れた人々が恐怖のあまり悲鳴をあげてパニックを起こしていた。

きつと空を睨みつけた鉄が小さく舌打ちをする。

「やってくれるよ、僕が千里を無事に連れ帰るって…信じてるってわけか。確かに人間相手じゃないならやりやすいけど、それを予測して佐藤は僕を」

「どつなってるんだ、鉄さん！」

「…帰るよ千里、魔物のだ真ん中を突っ切ることになるけど、僕から絶対に離れないで。ある程度近付けば佐藤と合流できる。銃…あるよね？相手は魔物だ…危険だと思ったら即座に撃って」

確かに佐藤から貰った銃は腰のベルトに固定されている。使ったことは一度もないが、トリガーを引くことぐらいはできるつもりだ。鉄はポケットから金貨を幾つか取り出すと商人に投げつけた。

とても冷たい目をしている…それこそ千里には絶対に向けない。路上に落ちていている金属の長い棒を右手で拾い上げると、数回確かめるように振ってから肩にかけるようにして持った。

前方から雪崩のように迫る魔物の群れを見据え、鉄は棒を構え、と千里を背中に庇うようにして走り出した。

塔の屋上に立ち、冷たい風に当たりながら都市を見下ろす。

何の感慨も湧かない、愛着など欠片もない都市。壊すと決めた今でも心は全く痛まなかった。

すでに放った魔物の手によって多くの命が奪われているだろうし、自分がこれから世界を滅ぼすとなれば全ての命が無に帰る。

人の命を奪うことに何の感情も湧かなくなってしまった時点で、自分は千里とは違う人間なのだと思ひ知らされた。

「人を殺すのをやめて欲しい…か、俺は千里である資格もないな」
思ひ出される言葉。

所詮は残骸に過ぎないそれを頭から追い払い、魔王は雪空を見上げる。

口に銜えた煙草から煙が立ち昇り、魔王の体を覆うとその姿を変化させた。

勇者とであった頃の姿に戻る。もとより姿など簡単に変えることができた。全盛期であれば世界を滅ぼす事もできる。

若返った姿で魔王は冷たい視線を都市へと向けた。

「…まだか？」

「千里が帰るまで実行は許さん…少し待て、罅は必ず千里を連れて戻ってくる」

「分かってる」

「お前は…来るんだよな？」

「ああ、こんな腐った世界と一緒に心中するつもりなんてねえよ」

「ならば俺はバスを移動させておく。最後に残るのはどこだ？」

「発動地点、つまりここ…塔の一番上だな」

それを聞くと佐藤はすぐに塔から身を投げた。

落下しながらマントが姿を変え、翼となって彼の落下を止める。

風の流れに乗りながら、佐藤は冷たい風に目を細めた。

「うっ…ああああ！」

近付いてきた魔物の額をぎりぎりまで引き付けて撃ち抜く。距離があれば初心者らしく外すことが多かったが、近付けばそれだけ命中率が高くなった。

弾けとんだ異形の頭、しかし胴体だけになっても動く。

「っ！」

「千里、伏せて！」

反射的に膝をつくと頭上を棒が凄まじい速度で通り抜けた。薙ぎ払われた胴体は飛んで動かなくなる。

振り切った棒を雪の積もり始めた地面に着きたてて、罅はそれを軸にしてクルリと体を反転させた。

それと同時に近場にいた魔物を蹴り倒す。

手馴れた様子で魔物を殺して道を作る罅、その後に千里は続く。

「おらおらおらああああ！」

聞き覚えのある声が聞こえ、上から紙袋が降ってきた。

フオークで魔物の一匹を地面に縫いとめて振り返る。

「ヒーローは遅れてくるってな！」

「助かるよ紙袋、数が多くて手こずってたとこなんだ」

「ういいうい、俺様が来たからには百人力ってとこだぜ。千里、俺を

盾にしなから進みやがれ」

フォークを振りかざす紙袋と拾った棒で敵を薙ぎ払う鉄、二人のおかげで道はどんどん開かれるが、それでも圧倒的数の不利には変化がみられなかった。

数対を一気に引き裂きながら紙袋が苛立ちを隠せないようで地面を強く蹴る。

「くそつ、きりがねえ！」

「他に策もない」

「…いやアルネ、おい鉄い！」

「おつと…何？」

「ここら一帯は俺が引き受ける。突っ込んで道開くからその隙にお前等は先行け！」

それはつまり、紙袋を置いていくということだった。

いくら紙袋といえどそのようなことができるはずもなく、千里は勿論躊躇して立ち止まるがその手を鉄に引かれる。

強い力で振り払うこともできずに引つ張られた。

「千里」

「でも」

「おいおい、俺って信用ないねえ…大丈夫だ千里、俺は何度ぶっ倒れても必ず起き上がるんだ。タフさにおいては化物にも負けねえぞ」

妙に自信たつぷりに胸を叩く紙袋の背後に魔物が迫っていた。千里は悲鳴をあげかけるが気づいていた紙袋はフォークを後に突き出すことで魔物を貫く。

「俺を視覚で騙しても無駄だっつの」

「じゃ、任せたよ紙袋」

「おう、若干死亡フラグ立ってんのが気になるが、まあ俺には関係ねえな。立って嬉しいのは恋愛フラグだけだっつの」

なおも抵抗しようとする千里を肩にか突き上げると、鉄と紙袋は同時に魔物の軍勢に飛び込む。

先駆けとして紙袋が飛び込み、豪快にフォークを振り回して魔物

の群れに一本の道を作り上げた。

申し訳程度に武器を振りかざしながら罅がその道を駆け抜ける。道はすぐに新たな魔物によって多い尽くされ、その咆哮が周囲にこだました。

通り抜けることができずに魔物の中心に紙袋は残される。

次々と襲い掛かってくる魔物の牙や爪を交わし、一度周囲にいる魔物を薙ぎ倒すと一度休憩の為に立ち止まる。

「ふう…俺って働き者だよな」

袋の中に手を突っ込んで棒つき飴を取り出した。

口に放り込んで自分を囲う魔物の数を数えようとして…やめた。

「参っちゃうね、俺あ両手の指以上の数は苦手なんだよ。あーあー…これじゃあ後で千里に武勇伝聞かせるとき、何体だったのか語れねえじゃねえか。やめだ、やめ」

戦っていても意味がない。伝えるべき相手がいないのだから。

千里に語れないのなら頑張って抗う意味もない。

紙袋はフォークを袋の中に突っ込んで手ぶらになると、両手を広げて脱力した。

へらへらと笑う。

「このまま歩いて塔まで帰るか…ったく、化物はちゃんと俺の到着まで待っててくれんのかね？」

武器を捨てたことで戸惑っていた魔物達だったが、次第に相手が丸腰になったことに気づき始めて唸り声を上げ始める。

知能はあっても理性がない。

見境なく殺す魔物に魔王の客人だと説明したところで襲ってくることに変わりはないだろう。

敵意をむき出しにする魔物達を眺め、紙袋は肩をすくめた。

「好きなようにしろよ」

一斉に地面を蹴って、魔物達は山となって紙袋を覆った。

「佐藤！」

「間に合ったな…先に行け、俺も上る」

塔の麓で待つていた佐藤の下に千里を抱えた鋏が駆け込むと、佐藤は二人の肩を軽く叩いて転移させる。

姿が消えたのを見届けると迫り来る魔物の軍勢を眺めた。

塔から放たれた魔物は塔にすら押し寄せる。

「…理性もない獣が」

見ていると不愉快な気持ちがかみ上げてくる。

自分に似ている気がした。

だが相手にする理由もなく、無意味に殺戮を繰り返すような趣味もない佐藤はすぐに翼を生やすと塔を一気に飛んで上った。

数度翼を羽ばたかせて上昇を止めると塔の上に移動して降り立つ。

先に転移していた千里を鋏の無事を確認して安堵した。

相変わらず魔王は塔の下を睨みつけている。

「佐藤！紙袋が！」

「…姿を見ないと思ったら、お前達を助けに行ったのか」

「うん、でも助かったからお叱りはなしにしてあげなよ」

魔物の軍勢はすでに都市部を飲み込み、戦火が上がり始めているらしく町の所々で火の気が上がっている。

いくら魔王を恐れていようと黙って滅ぼされる種族ではないということだ。

「…魔王」

「始めるぞ…これ以上待てば人間達の中にもこちらに攻め込む者が出ておかしくない。そうなれば面倒だ」

「待てよ！紙袋が」

「心配は無用だ…滅ぼすのは塔の頂点以外、この場所の崩壊には暫く時間があるらしい。ぎりぎりまでバスで待つ」

「それじゃ意味がない！あいつは今町にいるんだ…滅ぼしたりなんかしたら紙袋が巻き添えになるだろ！」

どうして皆平然としているんだ…と疑問に思う。

慌てているのは千里だけのようだった。佐藤は冷酷に告げて鋏は

何も口を挟まない。

(仲間…じゃないのか?)

「千里、僕らは別に紙袋が死んでもいい…なんて言っていないよ。巻き込まれるのは仕方がないってことなんだ」

「一緒だろ！」

「違うな」

言い切られてしまえばそれまでだった。千里は言葉を詰まらせ、それを確認した佐藤はふつと表情を和らげた。

その瞬間轟音が響く。

鼓膜が痛くなるほどの音が轟き、驚いた千里が塔の端に駆け寄って下を見下ろすと地上が割れていた。

巨大な亀裂がまるでクッキーでも砕くように簡単に走り、地上を大きく割ってしまったっている。

谷間からは赤い灼熱の炎が上がった。

「時間だ佐藤…壊すぞ」

「っ！」

「構わん」

振り返った若い魔王は佐藤の許しを得ると口角を吊り上げて笑い、両手を胸の前に掌が下になるように突き出した。

「お前達が散々コケにしてくれた魔王の力だ、味わえよ人間」

火柱が大きくなり、塔にも届きそうな高さへととなった。

火の海となった場所に嬉々として魔王は飛び込む。

「ははっ…はははははははは！」

狂ったように落下する魔王は地面に叩きつけられる前に静止し、両手の前にそれぞれ広がった巨大な黒球を投げ飛ばす。

強制的に突き飛ばされた球体は半径五メートルほどで、幾つも放たれては地上へ落下して建物を破壊した。

しかしはじけることなくその場に留まる。

地上には幾つもの黒い球体が落ちているという状況になった。

「あれは…」

「…面白い魔術を使うな、あいつは。なるほど…魔物は全て手作りというわけか」

「手作り？」

「面白いものが見れるぞ」

幾つも落とされた黒い球体を眼下に見て魔王は笑っていた。

殺戮をしながら笑うことを評価することもできないが、否定することもできない。

彼はそれをするに足りる苦役を引き受けてきた。

それを思うとどうすることもできず、千里はただ魔王の所業を見ていることしかできなかった。

幾つか球体を投げ落とした後魔王は塔に戻った。両足を石畳につけると疲労の色を見せて荒い息をつく。

しかし狂気の色は目から消えない。

「随分無茶をしたな…それだけの魔術を暴発して、お前はどうするつもりだったんだ？」

「言つたら、心中するつもりはねえけど…俺が今まで怠情に生きてきたのは報復が目的だ。これが原因で死んでも構わねえよ」

立つ気力もないのかずると壁に背中を擦りつけながら魔王は崩れ落ちた。

肩膝を立ててそこに頭を乗せる。

「これで…終わりだ、イグレア」

「…終わりではない」

佐藤はポツリと呟くと、千里に向き直った。

「千里、お前は世界を理解したはずだ。魔王の過去も客観的な視点ではあるが知つたんだらう。選べ千里」

「選ぶって…何を」

すでに世界を壊してしまった魔王、これ以上何か選べる物事があるとは思えず千里は問いかけた。

「魔王を止めるか、止めないかではない。魔王を助けるか、助けないか…をお前に選ばせてやる」

「……」
「見る」

佐藤の手を差し伸べられてそれを掴むと、丁寧な仕草で塔の端に案内された。隣に佐藤が立つ。

「あれは！」

黒い球体が弾け、中から巨大な化物が飛び出した。四つの手足を持つ生き物で、翼は持たないが飛ぶ必要がない程巨大だ。

複眼がぎよろぎよろと動いて周囲を見回した。

頬まで裂けた口が大きく開いて悲鳴をあげた。幾人もの赤子が泣くような耳障りな声だ。

「運び主、天災の一つか……よくあんな化物を、いや、それだけ本気だったということか」

大量に産み落とされた巨大な化物、運び主驚のような手先を使って町を踏み潰し、黒色の炎を口から放って台地を焼き始める。

もはや地上には都市の面影はなく、人の生きていけるような土地は失われてしまった。

「世界は魔王によって滅ぼされた……罪がないかは別として大量の人間の命を奪ったわけだ。千里、魔王を助けたいか？」

「……それは」

魔王は人々の命を奪った。あまり関わりもなく仲間意識もない別世界の人間ではあったが、紙袋は別だ。

「お前の意思を優先させたい」

穏やかな目で選択を迫る佐藤はどちらを選んだとしても褒めてくれるだろう。

だが安易に決められる問題ではなかった。

「……」

魔王の姿を視界に入れる。

目を閉じて衰弱しきった姿を見て、自分の過去と重ねた。世界から憎まれて、それでも許して、そして裏切られた。

ボロボロになるまで愛して、裏切られた。

(俺と一緒に)

「…助けて欲しい」

「お前がそう望むのなら」

小さな声だった。が千里の決断を聞くと佐藤はきつと視線を強くして身を翻した。

「バスを出せるようにしておけ！千里を頼む」

「了解！」

素早く鉄に指示を出す。命令を受けるとすぐに鉄は千里を小脇に抱えて塔の上に移動されていたバスに乗り込む。

それを横目で確認しながら佐藤はうなだれる魔王に近付くと、膝をついて彼の呼吸を確認した。

息があることを知ると安堵の息を漏らす。

「いくら別人でも、お前を死なせたくはない」

魔王の額に手を当てると力を込めた。掌が白い光に包まれ、薄っすらと目蓋が持ち上がる。

「ん、何を」

「治癒だ、少しじっとしている」

「ははっ…ありがたいけど無駄だ。命削つての荒行だ…怪我とか病じゃない」

「千里はお前を生かしたいと言った、お前がそれを望まなくても、俺はお前を生かす義務がある。例え呪われた方法でも…お前にはしばらくは生き延びてもらおう」

「…まさか」

「俺の理性が勝つことを祈っている」

佐藤の黄金の目が真っ赤に変色し、荒々しく魔王を床に叩きつけると口を開いて魔王の首へと噛み付いた。

バスの中は外で起こっていることが嘘のように静かだった。

椅子に腰を下ろした千里はぼんやりと鉄の動きを眺める。

彼は運転席の付近でなにやら機器を弄っているようだった。

「…紙袋」

「千里？」

「どうしてあいつが犠牲になる必要があったんだ？」

「犠牲…うん、まあ仕方なかったのかな」

「仕方なかったってなんだよ！…紙袋は仲間じゃないのかよ！」

まったく意に關していないといった缺の態度が気に入らず思わず叫ぶと、とんとんと窓が叩かれた。

「！」

「呼んだ？」

窓の外に見覚えのある顔、しかし鼻から上を窓枠の外に隠していた。

「紙袋！どうして…」

「お帰り、随分ポロボロだね」

「おおう、大変だったんだぜ？魔物にフルボッコされるわ巨大怪獣に踏み潰されてミンチにされるわ…」
「たく、誰か俺と役代われ」

缺が駆け寄ってきて千里の座っていた近くの窓を開けた。そこかららひよいつと紙袋が入ってくるが、何か物足りない。

不自然な動きをする紙袋が両手で目元を隠しているのを見て気づいた。大きな変化すぎて逆に気づかなかったのだ。

（袋がない）

癖のある銀髪、白い肌、いつもは紙袋で隠しているというのに、今は全てが曝されていた。

もっとも手で目元を覆っているのですこは見えないのだが。

隠れていた為よく分からなかったのだが、もしかすると缺より美形なのかもしれない。

「参っちゃうよマジで、俺の服ポロボロ」

「たくさんやられたねー…服、確か用意してたはず。ちょっと待ってて」

切り刻まれた服は血に濡れている。紙袋の血なのか魔物の血なのか判断に悩むところだが、彼は怪我一つしていなかった。

その代わり装飾品はボロボロだ。

「あーっと、バスの部屋鍵どこやったかな…俺のチャージングポイントと一緒に齧られちゃったからな」

片手で顔を覆い、もう片方の手で布切れのようになった服のあちこちを触って鍵を探す。

ポケットの中から見つかったらしく、満足気にそれを口に銜えた。

「紙袋…だよな？」

「ん？俺のこと忘れちゃったのかよ千里、つれねえな」

「いや、忘れてないけど…なんか印象変わったな」

「お？素顔の俺に惚れちゃったか？なーなー、佐藤じゃなくて俺にしとけて」

「…俺がいつ佐藤を選んだんだよ」

相変わらずの言動に呆れと共に安心がこみ上げて、気がつけば涙が流れていた。

慌ててそれを拭う。紙袋が目を閉じていて助かった。

「とりあえず袋、俺に袋をよこせ。ビニールは拒否するぞ！中が蒸れるんだよあれ」

「はいはい」

どこから持ってきたのか茶色の、やはり所々に切れ目の入った紙袋を鉢が頭からかぶせた。

すかさず紙袋は鍵を袋の中突っ込む。

「で、こっちが服。君に露出癖がないこと祈っとくけど…千里のいない場所を着替えてね」

「よく分かったよ、お前の俺に対する評価は」

綺麗にたたまれた服を受け取ると紙袋は欠伸をしながら一番後ろの席へと向かった。

「ね、無事だったでしょう？」

「…凄いな、紙袋は」

「うーん、こういうことは得意だからね、彼。全員そろったことだし…あとは佐藤だけなんだけど」

意識の浮上、首に僅かな痛みはあるがそれだけだ。

目の前には口元を擦る佐藤の姿があった。双眸が黄金色だということ、理性とやらが勝ったのだらう。

あの時とは違った。

「うへ…お前首抉り食ってんな」

「それだけで済んだだけで感謝しろ。成功したのは二度目だ」

溢れる血の量は牙を立てられたというレベルではなく、首の肉をいくらか持つていかれたというほうが正しい。

いくら助かったとはいえこの出血を放置していれば生命維持が危うい。

魔王は傷口に手を当てるとあつという間にそこを治癒させた。

それから血に濡れていないほうの手を伸ばして佐藤の腕を掴み、

口元を拭うのをやめさせた。

すでに血はついていない。

「…成功して喜ぶべきなんだろうが、成功するたびに思う。どうしてあの時は止められなかったのか…」

「長い間のブランクがあつたからな、あの時は。ま、今更後悔しても何も変わらない…今は定期的に補給してんだろ？」

「ああ、千里に知られれば嫌われるだらうが、依頼を果たす上で力は必要になってくる」

口ではそう言っているが迷いはない表情をしていた。

「…」

「行くぞ、いつまでもここにいればバスもろとも消し飛ばす」

差し出された手をとると、佐藤は微笑んで魔王を立ち上げさせた。

佐藤の肩を借りてバスへ向かう途中、魔王はふと思いついたように尋ねる。

「そういえば…お前が世界を移動してるのって依頼のためだよな？今回はどんな依頼だったんだ？」

「ん？…ああ、企業秘密だ」

「はあ？」

「お前は愛されてるといふことだ」

「訳分かんないな」

「そうか」

「そうかってお前、気になって眠れないだろ！」

9・閉断、用法用量をしっかりと守りましょう。(前書き)

閉断といいつつ、本編の一部です。

9・閑斬、用法用量をしつかり守りましょう。

それぞれ疲れていたのだろう。戻ってくると同時に鉄と紙袋、それに千里はそれぞれ自室へ戻って熟睡してしまった。

静まり返った屋敷の中を佐藤は一人歩く。

応接間に入るとソファの上でだらしなく眠っている、再び四十代の姿に戻った魔王の姿があった。

どうして若いままの姿でいないのか疑問だ。

(…こいつの部屋も用意しないのかな)

そんなことを考えながら扉を閉め、起こさないように足音を殺して応接間の中心部に立つ。

そこで周囲を見回した。

「…いるんだろう？」

なるべく声を潜めて呼びかける。

依頼人はここで待っていると言っていた。

佐藤が声をかけると、眠っている魔王に寄り添うようにして座っている女性が浮かび上がった。

佐藤には見えるが通常は見えない残留思念だ。

「お前がイグレアだったというわけか」

イグレアは微笑むと眠っている魔王の頭を撫でる。物理的に触れることの叶わない手はすり抜けてしまおうが、それでも満足そうだった。

「……………」

名残惜しげに魔王を見つめると、イグレアは立ち上がって一礼する。感謝を示しているようだ。

「俺はお前の依頼を果たした…魔王を救って欲しいという依頼だ。だがお前の願いは叶えてやれなかった…こいつが世界を壊すのを止めることは俺には出来なかった。礼を言われる立場じゃない」

イグレアは首を横に振った。

気にしないで欲しい…と。

それからもう一度魔王を見てから微笑み、一礼するとその体はだんだんと薄くなり、周囲と同化を始める。

佐藤の目でも捉えられない…つまり消滅を意味している。

「本当に良かったのか？…こいつは世界を滅ぼして、結局救われてなんていない。これが幸せな結末か？」

消えてしまったイグレア、彼女に問いかけるように佐藤は呟いた。

「つてなわけでえ、おっさんも今日から仲間入りだ。どーぞ仲良くしてやってくれや」

朝起きると食卓を囲う人数が一人増えている。

料理を運んでくる缺が苦笑しながら魔王の自己紹介を聞いていた。

「あ、俺のことは魔王でいいぞ。イグレアは撤回だ」

「んなんだよ、なんで一人また男が増えてんだよ！」

千里の予想通り、まっさきに苦情を叫んだのは紙袋だった。朝餉を口に掻き込みながら喋るので非情に行儀が悪い。

「何だ？女の子が欲しいのか？」

「少なくともてめえみたいなオッサンよりはな」

「というか…どうしてまたその姿に戻ってるんだ？若い姿のほうが

楽だろ…色々と」

「うーん…そだな、魔王だからな。全盛期のまま力出して世界破滅みたいなことになったら困るだろ？」

「洒落になってないね」

「そういうこつた。まー女の子が欲しいって話は覚えとくわ」

最後にいやな発言をして魔王は食事を再開する。並んでいるのは朝食らしく白米、目玉焼きと軽いもののだが、ろくに一日三食を行っていないかった千里には少しきついらしい。

箸がまったく進まない。

それに気づいた佐藤は自分もまったく食事に手をつけていないのにも関わらず、少し心配そうに眉尻を下げた。

「体調でも悪いのか？」

「…ん、大丈夫だ」

大丈夫だと言いつつ顔色が悪い。

流石に違和感があり、佐藤は席を立つと向かいの千里の席へと歩み寄り、手の平を額に当てた。

平常より少し高い温度に眉を顰める。

「風邪でも引いたか」

「寒いところだったもんね、薬用意しようか？」

「風邪か？俺が温めて…ぐへっ」

何かを言い出すと予測していた鉄はすぐさま紙袋の頭部を叩くと、襟首を掴んでずると部屋の外へ引き摺っていく。

悲痛な紙袋の悲鳴を聞きながら、魔王はお茶をすすった。

「依頼がないならゆっくり療養させてやればいいだろ。佐藤、世話ぐらいしてやれ」

「俺が？」

「一緒にいる、お前にはその資格、あるだろ？そもそも俺に看病なんて似合わないしな。術で治してもいいんだが体に負担がかかる。」

こういうのは自然の回復力に任せるのが一番なんだよ」
茶碗を置いて両手を合わせてご馳走様と呟くと、魔王は食器を重ねてから立ち上がる。

こういうところで律儀なのだから、おかしいものだ。

「分かった、その間館のことは任せた」

「おう、こんなときぐらい頼れ。ま、あの二人の世話は俺一人に任せてオッケーだぜ？」

「助かる」

ぐったりとしている千里を覗き込む。

「立てるか？」

「ああ」

気丈に返事をして立ち上がるうとする千里だが足下がふらついていた。見かねた佐藤が彼を抱えあげる。

(…なんか、俺…抱えられてばっかだな)

情けないことを重いながら男一人持ち上げて悠々と歩ける佐藤を羨ましく感じた。

思い返せば佐藤だけというわけではないが、千里はいつも誰かに助けられてばかりなような気がした。

特に佐藤には世話になりっぱなしだ。

何故か自分に甘い佐藤についつい頼ってしまい、結果このような醜態を晒してしまっている。

「恩返し…」

「何だ？」

階段をゆっくり上りながら、千里の咳きを聞き逃さなかった佐藤が問い直した。

「恩返し…しないとな、あんたに」

「…不要だ。俺が好きでやっていること、お前が気に病む必要は」
「でもな、佐藤のために何か…」

寝ぼけ眼で咳くと千里はすぐに目蓋を下ろしてしまう。

途切れた言葉の続きを聞くことができなかつたが大体察することはできる。佐藤は千里の寝顔を見て微笑んだ。

「気持ちだけで充分だ」

そもそも千里から感謝されていいほど綺麗な人間ではないのだ。

随分長い間眠ってしまったようで、目を覚ますと室内は暗く、窓の外には曇天の隙間から月の覗く夜空が見えた。

部屋の壁に駆けられた時計を見る。午後十一時。

就寝時間がそろって早いこの屋敷の住人はおそらくもう眠りについているだろう。

鈍痛を頭に感じつつ体を起こす。

どうやら回復している…というより悪化しているようだ。

頭の痛みは激しくなり、体が重く腕を上げることも億劫だ。数回咳き込むと腹の上に何か乗っている違和感に気づいた。

視線をやると黒いものが見える。

「？」

黒い頭が乗っていた。ベッドの隣に置かれている椅子に座り、こちらにもたれかかるようにして佐藤が眠っている。

寝ている間は日ごろ纏っている剣幕もなく、無防備な姿を晒している。

佐藤のことだから人のいる場所では安心して眠れない！…等というタイプだと思っていたが思い過ごしだったようだ。

「また世話になったな」

起こさないように囁くと、千里はできるだけ慎重にベッドから抜け出す。佐藤の頭の下には遠藤さんを差し込んでおいた。

冷たい床に素足で降り立つ。

ぺたぺたと足音を立てて部屋を出た。

廊下に出ても人の起きている気配はない…と思ったが、奇妙な呻き声のようなものが聞こえて体を震わせた。

「な…なんだ？」

苦しかったが気になったので階段の側ではなく音のするほうへ向かう。部屋の前だった。

見覚えのある部屋…確か紙袋の部屋だ。

千里はそつと扉を押し開けると、僅かに隙間をつくってそこから中の様子を窺った。

呻き声程度にしか聞こえなかった声が扉という壁を失ったことで鮮明に聞き取れるようになる。

「おらあああ！外せて言っただる糞鉄が！」

予想通り、紙袋がいた。

「外してくれよー！熱に浮かされる千里なんてどんな萌えイベントだよおおお！こんな拷問だい！」

紙袋が悲鳴をあげている理由が分かった。その部屋に鉄はいなかったが、紙袋は縄を巻かれて動けなくなって転がっている。

つまり寝ている間に紙袋が何か行動にでる…とよんだ鉄の仕業だ。

「……」

見なかったことにして扉を閉じた。

(頭痛が酷くなった気がする)

どうしようもない紙袋に溜息をつき、しかしいつも通りの彼のテンションに安心する。

彼は生きて、ここに帰ってきているのだから。

(水：薬)

脳を殴られているような頭痛、これを早くなんとかしたかった。千里は階段を下りるとダイニングへと向かった。厨房のある館だが、そこを利用することは少ない。

大抵の場合はダイニングに備え付けられている簡易な、といったも普通の家庭にあるのと同じようなキッチンで鉢が済ましていた。そこへ行けば水も、薬もあるかもしれない。

「はあ……」

荒い息を整える。

壁に手をつきながらキッチンへ向かうと、綺麗に磨かれたグラスをとって水を注いだ。

薬はないか？…と棚を適当に探す。

「あつた」

(どう見ても薬だよな?)

取り出したのは茶色い袋に包まれた黒い粒。大きさは親指の爪ほどだろうか。きちんと包装されているものならば疑問を抱き警戒しただろうが、漢方のような見た目をしていたことが警戒心をなくさせた。

たとえ風邪薬でなくとも死ぬ事はないだろう。

安易な気持ちで口に放り込むと、水で流し込んだ。

冷たい水が異物を喉の奥へと押しやった。水が体温を下げてくれたような気がして、少しだが気分がよくなる。

後にして思えば熱のせいで判断能力が鈍っていたのかもしれない。得体の知れない薬を飲んだことが悪夢の始まりだった。

千里は意識が自分の手から離れるのを感じながら、ゆっくりと崩れ落ちた。

睡眠は昔からあまり好きなほうではない。

いくら人並みはずれた力を持つていようととも生物だ。当然のように睡眠が必要になり、その無意味な時間が佐藤は嫌いだった。

睡眠に快楽を見出すことなどでできず、意識の途切れる迷惑な時間にしかなじられない。

そのせいもあるのか佐藤の寝覚めは悪い。機嫌が悪い。

「…ん」

寝すぎたとき特有の鈍痛。千里は風邪で苦しんでいるというのにこの程度で自分がへばってはいけない…と無理に体を起こして意識を覚醒させることにした。

体を動かそうと決意してようやく、自分が常に使っている自室のベッドではなく千里のベッドを枕代わりに眠っていたことに気づく。昨夜そのまま寝てしまったということだ。

もう一つ気づいたことがあった。こちらのほうは重大だ。

「千里！」

ベッドの上で寝ているべき千里の姿が忽然と消えていた。

慌てて部屋を飛び出し、階段を使うのも面倒で柵を乗り越えて飛び降りる。翼を羽ばたかせて勢いを殺して着地すると、すぐに千里の気配を探って走り出した。

キッチンに向かってそこで倒れている千里の姿を確認する。

「千里！」

ただ寝ているわけではなさそうだ。

「どうしたの、佐藤！」

騒ぎを聞きつけた鉄も駆けつける。

倒れている千里を抱えあげた瞬間、違和感に気づく。

「……………」

（いや、まさか…）

「怪我とかはないみたいだけど…どうしたの佐藤？妙な顔して」

「俺の気のせいだと良いんだが… 缺、千里を頼む」

肩に担ぎ上げた千里を放して缺に押し付けるようにすると、佐藤は凄まじいスピードでダイニングを出て行った。

残された缺はきょとんとして任された千里を眺める。

「えええ！」

そして違和感の招待に気づいた。

暫くして缺が千里を背負って二階と一階を繋ぐ吹き抜けの広間に出ると、丁度良いタイミングで上から佐藤が降ってきた。

足の下にあるものを地面に強く叩きつける。

「ぐへえ！」

「腐れ魔王、お前何をした」

「…ひつでえな、おっちゃん傷つくぜ… 大した証拠もなく俺を犯人扱いか？」

「違うのか？」

「いや、俺でした」

「死ね！」

「アディオス！」

世界に別れでも告げたのか、佐藤に踏まれている魔王がより強く蹴られて悲鳴に近い言葉を叫ぶ。

ギシギシと骨が軋むほどの力で佐藤に踏まれ、流石の魔王も余裕がなくなってきたのか必死に弁解を始めた。

「ちょ、ちょい待て！確かにその薬を置いたのは俺だが、俺は別にまだ千里に毒を盛ったりは」

「まだ？」

「白状しよう、今後やるうとは考えていた」

「消し飛べ」

佐藤が片手を挙げて掌を下に向けると、そこに白銀の炎が集結しだして光球を作り出す。

流石に佐藤の魔術を受ければ魔王もただではすまないだろう。そろそろかな…と止める頃合を見計らっていた鉄が、佐藤の前に出た。「はい、そこまで。佐藤も大人気ないよ…魔王が死んじゃったら千里が元に戻らないでしょ？」

「…ちっ」

聞こえるように舌打ちをすると佐藤は名残惜しそうに足をどけた。ようやく上からの強烈な圧力がなくなり、魔王は軽く咳き込みながら体を起こした。

「老体に無茶させるなあ…」

埃を払って肩の骨を鳴らす。

「それで、どうして千里はこんなに小さくなってるのかな？」

鉄の背中に背負われている千里は身長が常の半分ほどになっている。気持ちよさそうに眠っているため熱は引いているようだった。

改めてその姿を目の当たりにし、佐藤は懐かしむように、そして辛そうな視線を千里に向けた。

目を伏せてほとんど無意識に口元を手で擦る。

「紙袋と親交を深めようと思ってだな、あいつは俺が参加することになり気じゃなかっただろ？だから俺はあいつのために女を用意してやるうと思っただけだ」

「また随分とくだらないことを思いついたね、魔王なのに」

「その発言は魔王差別だ。んで、どんなタイプが好きなのかって聞いたらあいつ、突然「幼女一択だろ！」とか叫んだから」

「お前お得意の調合で若返りの薬でも作ったのか」

「…」名答

呆れて言葉を失う佐藤。鉄は背中に乗っている千里を体の前に回すと、小さくなった体を掲げてみせた。

確かに幼くなっているが間違っても女ではない。

「性別転換の薬を作る趣味は俺にはねえからな」

鉄の意図を読み取ったのか魔王が注げる。

困ったように鉄が苦笑した。

「でも、紙袋に見せるわけにはいかないね」

「その言葉はどういう意味だあ？」

危惧していた人物の登場に鉄は硬直した。

魔王の背後に眠たげな表情を浮かべて立っている紙袋の姿がある。
(縛っておいたはずなのに)

「甘い鉄、あの程度の拘束で俺を止めようなんざ、甘すぎる！」
最初に動いたのは佐藤だった。

目にも留まらぬ速さで紙袋を蹴り飛ばすと、鉄の腕中にいた千里を受け取ってマントの内側に覆うように抱き締める。

突然加減した力だったとはいえ蹴り飛ばされた紙袋は地面に頬をぶつけ、痛そうにさすりながら立ち上がった。

「…随分な目覚まし時計だな、化物！てめえ何隠してやがる！」

「お前には関係ない、失せる」

「お前にそう言われると反抗したくなるのが俺、ってことでそこ退け化物！」

佐藤の前に立って紙袋を押さえつけようとしていた鉄の横を抜け、近付くと彼のマントを掴んで両脇に退ける。

抵抗する間も隠す暇もなく千里の姿が晒された。

突然の明かり、それに騒音で目が覚めたらしい千里が目蓋を上げる。

「…ん？」

「ち、ち、…千里！？」

「おはよう紙袋、朝っぱらからテンション高いな。って、どうして俺は佐藤の腕の中にいるんだ？」

「幼い…幼い千里、クリーンヒットだぜ！」

「はいクリーンヒット」

「そっちの意味じゃ…ぐへえ！」

魔王が手を前に突き出すと、触れてもいないのに紙袋が跳ね飛ばされる。床に強く叩きつけられれば流石に意識が飛んだらしい。

動かなくなつた紙袋を指先でつつき、鉄は彼を背負った。

「離せ！」

目が覚めた千里はすぐさま自分の体の異変に気付いて佐藤の腕から逃れようと暴れる。

そのまま手放して落下すればただではすまないの、佐藤はそつと屈んでから千里を解放した。

「これは夢だ…どうして俺の身長が縮んで」

「悪い千里、それは俺のせいだわ」

笑顔で謝罪しても全く誠意が伝わってこず、千里はとりあえず怒りのままに魔王を殴ることにした。

だが身長が足りないため脛を殴ることになる。

「いつてえ！お前そこ弱点」

「理解したくはないけどなんとなく状況がのみこめた。俺が飲んだあれはあんたの薬だったのか…」

「そついうこつた」

小さい千里は頭を抱える。

「解除…できるんだよな？」

「ん？…あー、はははっ」

「…なんだその笑い。ないのか？」

「ご名答、俺は魔王だ、シスターでも回復役でもねえよ。呪いをかけることは出来ても解く方法は知らないんだ」

かけた本人に解く方法が分からない。

ならば他に魔術に精通している者、佐藤に助けを求めるために見ると、彼は珍しく突き放すような視線で千里を見下ろした。

「自業自得…と言いたいところだが、その姿はその莫迦でなくとも俺にとっては目に毒だ」

莫迦というところで紙袋を指差す。

「ん、佐藤にも危ない趣味が」

「殺されたいのか」

「冗談だ」

一瞥された魔王は両手を肩の高さにあげてぶらぶらと振る。

「あてがないわけじゃないみたいだね、佐藤」

「魔王を上回る魔術文化を持つ世界を訪ねればいい。ただ…俺の知る限りそこまで発展した文明を持つ世界は一つしか…」

言いにくそうに口を閉ざした佐藤を見て、どうやら鉄も察しがついたらしくああ…と両手を打つ。

背負っている紙袋を見て少し困ったように笑みを引っ込めた。

「紙袋の故郷…だね」

「紙袋の？」

紙袋の人柄を散々見せ付けられているため、彼のもといた世界と聞いて警戒せざるをえない。

千里は少々訝しげな声をあげた。

「大丈夫だよ、彼みたいなのが変わらわらいる世界じゃないから。でもね…もつとたちが悪い支配者がいるかな」

「行くとしたらそいつは駄目だ。あの世界には戻らないほうがいい…そのほうがそいつのためになる」

「つたく、人が眠ってる間に勝手に話進めんじゃねえよ、化物」

あれだけの攻撃を受けたというのに紙袋はもう目を覚ましたように、もぞもぞと動くと鉄の背中から飛び降りた。

体中が痛むらしく呻き声をあげる。

「つたく、容赦ねえな」

「…お前は残れ、兄のことがあるだろう？」

「だからこそだよ」

ふざけたような印象が拭い去られる。

彼の真面目な声音を聞いたのは初めてで、その声が覚悟に満ちて少し恐怖すら覚える声だったことに千里は驚く。

「いつまで逃げてりゃいいんだ？俺は」

「……」

「俺だけ逃げ続けてるわけにはいかねえんだ。俺が殺したあいつに申し訳が立たねえ」

「佐藤」

なおも難色を滲ませる佐藤を見て、缺が珍しく紙袋の後に立って彼を後押しするような行動を見せた。

紙袋の世界で何かがあったことは明白で、缺と佐藤はそれを知っているらしかった。

自分だけ取り残された気分になって千里は少々面白くない。

だからといって会話に割り入って問い詰めることもしない。

(そういうのはルール違反だろ)

自分の中に境界線があり、他人の境界線に入ってはいけない気がした。

三人は千里よりずっと長い間旅を続けている。

新参加者が置いていかれるのは当然のことだと割り切るしかない。

たとえ紙袋が心配だとしても、自分には彼を心配する権利すらもないのかもしれない。

「ま、俺の軽率な発言のせいで馬鹿魔王が薬を作っちまったわけだしな。千里をそのままってわけにもいかねえだろ…いや、俺的には大歓迎なわけだが」

「本当一言多いなあいつ、俺のせいにするなよ」

「結局…全員行くのか？」

呆れたように佐藤が問いかける。

千里のほうに視線が向けられ、来るのか？と問いかけている気がした。慌てて頷く。

「仕方ない…足を引っ張るなよ」

9・閉断、用法用量をしっかりと守りましょう。(後書き)

紙袋⇨変態、千里ストーカー

10・確執、不穩。

銀髪の青年は王座より立ち上がる。

彼の名はシン。王の謁見の間には数名の家臣が控えている。

「教皇、次の手はどうなさるので？」

「結局逃げられちゃったんだよね」

その場にいる家臣の中でも特に異彩を放つ者が二人いた。

シンの左右に控えている女で、どちらも真つ白な頭髪をしている。

右側に控える女はショートカットの強気そうな顔をした者。

左側に控える女はおかつぱ頭の、目の下で前髪を切りそろえた者。

教皇と呼びかけた女も、暗い印象を受ける女も、双方とも頭の上

に黒色のリングを浮かべていた。

まるで天使のようにも見えるが、メタリックな黒をしているそれは時折ヴウン…と機械音を上げている。

「デウス、時空移動に必要な魔力は？」

「は、ただいま集めてはありますが…やはり膨大な力が必要である

が故、国民を総動員しても不足しているというのが現状かと」

デウスと呼ばれたつり目の女はシンの問いに恭しく答える。

その答えには満足できなかったようで、シンは僅かに不快感を滲

ませた視線を巡らせた。

「術式による移動は不可能、だとすればアレはどうやって」

「シン様―多分そいつはバス使ってるんだよ。対価払ってさ」

悩ましげな主を助けようと思ったのか、もう一人の女が声をあげ

た。とても敬語とは呼べない口調だ。

しかしシンの気分を害すことはなかったようだ。

「マキナ、お前はバスの対価を支払えるか？」

「やだなー、あれって生き物だけが使えるやつですよ。私達には大

切なものなんてないんですから、無理に決まっています」

「僭越ながら教皇、教皇自らが対価を支払うことはできぬので？」

「僭越ながら教皇、教皇自らが対価を支払うことはできぬので？」

デウスの提案に少し考え込んだシンだったが、すぐに首を横に振る。否定の意だった。

「私の大切なものを知っているだろう？手元のないものをどうやって支払う？」

「軽率な発言でした、申し訳ございません」

素直に自らの非を認めてデウスが頭を垂れる。

「構わん、お前達のおかげで時空を超えて魔術を飛ばすことには成功しているのだ。それでじわりじわりと追い詰めることも可能だ」

「気の遠くなる作業だ。シン様は我慢できるのかな？」

「…その分の怒りをぶつけるだけだ。私のウエドネを奪った罪…忘れたとは言わせんぞ、吸血鬼」

小さくなった体に見合うサイズの服をどこからか佐藤が調達してきて、千里はそれを着て彼の膝の上にいる。

背中に感じる佐藤の体温は驚くほど低い。

振り返ると彼が俯いて静かに寝息を立てていた。

「なあ…佐藤ってバス酔いでもするのか？」

「は？」

千里の近くに行きたい…という願いが珍しく受け入れられ、最後に尾の座席より一つ前の椅子に座った紙袋が驚く。

突然の質問に意味を量りかねたようだ。

「しねえだろ、化物は。そんなに繊細な生き物にも見えねえぜ」

「うぶっ…分からないぞ。俺みたいに…っ…」

「あー、大丈夫？魔王」

青い顔をして辛そうに座席に横たわっているのは魔王だ。その傍で心配そうな言葉をかけつつ、鉄が笑っていた。

明らかに面白がっている。

「うー…覚えてやがれ腹黒ロメオ、車酔いの苦痛がお前には分かるのか、というか老体は労われ」

「魔王が車酔いっていうのも面白いけど、吐かないでね。それに老

体が弱いつていうなら何度もいうけど若い姿でいればいいのに」

「こつちこそ何度も言わせるな、力が有り余るつてのも危ない」

会話で気分が紛れたのか、魔王は少し回復したようで体を起こすと、胸ポケットから煙草を取り出して火をともした。

車内で煙を出されるのは迷惑だが煙が出ていない。

厳密に言えば煙は先端から確かに出ているのだが、すべて魔王の左手の上に集まって球体になっている。

煙を広げないようという魔王の配慮だ。

「車酔いが煙草」

「楽しみ奪うなよ、それにこれ煙草じゃないんだな」

どこからどう見ても煙草の形をしている。

「お前達にも分かりやすく説明すつと調整剤だ。俺が直接魔力をぶつ放しちまえば敵味方関係なくお陀仏になる。だから煙を通して発動するようにしてんだ…ま、大半は俺の趣味で吸ってるんだけどな」

「結局私欲なんじゃねえか、我慢は駄目だと思っぜ！」

「君は少し自重しようね」

拳を突き上げて紙袋が叫ぶが、彼がこれ以上欲に忠実になられても千里は困る。千里以外の面々も困る。

こんな近くに幼い千里がいるというのに襲い掛かってこないのも、単に千里が佐藤の膝上にいるからだろう。

怖いものなしの莫迦に見える紙袋だが、憎まれ口を吐いている佐藤に対しては少し恐怖を感じているらしい。

それほど佐藤の力が強い証拠でもある。

紙袋が近付いてこないのは千里にとつて喜ばしいこと…なのだが。

「…この状態、何故か凄く恥ずかしいんだが」

「そうか？和むぞ、いつも近付くもの食つちまう…みたいな雰囲気
の佐藤が子供を抱えてる姿は。親子みたいだ」

「認めねえ…佐藤が俺の義父さんになるなど認めねえ」

ブツブツと物騒なことを紙袋が呟いているが聞かなかつたことにする。

「親子、やっぱり俺が子ども扱いなのか」

「子ども扱いは嫌か？難しい年頃だな」

不満そうな表情を浮かべる千里を見て、魔王は豪快に笑う。
笑われたことよって更に千里の機嫌は悪くなった。

「うるさい」

「魔王はもうちょっとデリカシーを身に着けよう。でも佐藤の上から降りちゃだめだよ千里。怖いおじさんがいるからね」

「誰がおじさんだ、まだ二十一歳だ」

不審者扱いされた紙袋が缺に噛み付く。

それに飄々とした態度で缺が言い返し、再び紙袋が噛み付く…が繰り返され始めた。

目の前で繰り返り広げられるコントのような光景に若干の呆れを抱きつつ、心の中でどこか面白い、楽しいと思っっているのも確かだ。

目を細めて穏やかな表情をした千里は、頬の筋肉が痛んで小さな手で軟らかい頬を包んだ。

（変顔？）

それが笑顔だと今はまだ気づけない。

立ち並ぶ家々は似たような形をしていた。

真っ白に統一された色、街、道路。

地平線まで続く家々の中央にどっかりとドーム状の建物が存在する。それこそがこの世界における王の城だ。

一つに統一されている世界は珍しく、しかしそれが幸せなことだとは限らないようだった。

確かに人々は魔術文明の発達により豊かな生活を営んでいる。しかし絶対的力を持つ教皇の下、飼われているにすぎない。

緑の極端に少ない町々、青空には薄い雲が浮かんでいる。道路を歩きかう車の中に、突如バスが出現した。

走行を続けたバスは人の少ないほうへと進み、白い町並みに埋もれるようにしてあった裏道に入ると停車した。

他と同じく白い建物の前だが人気がない。

バスの扉が開くと、真っ黒な佐藤が飛び降りた。小さな千里の手を引いている。

風が吹いて佐藤の羽織っている黒いマントが靡いた。

白の光景の中で黒い彼はかなり目立つ。

「うわ、真っ白だな」

率直な感想を千里が口にした。

目が痛くなりそうなほど白一色の世界。常に雨の降っている自分
の世界との違いが大きく、驚くほどだった。

「反射光で目をやられないようにしろ…ここの住人はこの世界に適
応しているが、お前は別だ」

「うわ、久しぶりだけど全然変わってないね」

鉄もバスから降りて千里と似たように眩しそうに目を細めた。

「ほら、早く降りんぞ！」

魔王がバスからなかなか降りようとしない紙袋の腕を引く。

珍しく無言の紙袋は半ば引き摺られるような形で足を地につける
と、数歩フラフラと歩いて周囲を見回す。

目は見えていないはずなのに、他の感覚で自分の世界だと分かっ
てしまうようだ。

「相変わらず、胸糞悪い世界だな」

「僕は好きだけどね、綺麗で。真っ暗な世界よりはマシだと思うよ」
「…どうして真っ白なんだ？」

あまりの眩しさに片手を眉の位置に掲げながら千里は上に位置す
る佐藤の顔を見上げた。

逆光で表情が見えにくい。

「全てが魔術によって作り出された世界だ。この道も、家も、使わ
れている素材は石でも岩でも木材でもなく魔力の結晶…と言えば分
かるか？」

「とんでもねえな、確かにこの世界なら俺の魔術を解けるかもな」
建物の壁に手を添えて魔王が呟く。

千里が小さくなったことに関して責任は忘れているようだ。

「とりあえず、以前世話になった宿の前に移動した。この辺りのはずだが…」

語尾が濁ったのは場所を正確には覚えていないからだ。

佐藤はらしくなく周囲をフラフラ見回すと、困ったように眉根を寄せた。

幾つもの世界を旅して、すべての世界の地理を覚えているわけではない。

そんな佐藤に助け舟を出したのは缺だった。

「この建物だよ、でも今は潰れちゃったのかな？」

「そのようだな、無人だ」

缺が指差したのはバスの後方十メートルほど行った場所であり、白い建物には立て看板の跡が見られる。

「都合良いじゃねえか、廃屋なら使わせてもらおう」

「良いのか？」

「正式な宿を探すためにあてもなく移動するのは危険だ。この世界にはあいつがいる」

「あいつ？」

「紙袋のお兄さんのことだよ」

「兄？」

（兄弟がいたのか）

初耳だ。

しかしよく考えてみれば魔王以外の身辺のことなどほとんど聞いたことがない。

勝手に思い込んでいただけで、佐藤にも家族や恋人があるのかもしれない。缺も同様だ。

そう考えると少し安心するとともに寂しさを感じる。

千里には何も無い。

「兄貴に千里を会わせるつもりはねえぞ。化物、不本意ながらために千里を任せる、絶対に離れるんじゃないぞ」

本当に珍しい行動に缺も任された佐藤も驚いた。

犬猿の仲である佐藤に紙袋が頼みごとをするというだけでも珍しいことなのに、大好きな千里のことを預ける…まさに天地がひっくり返っても起こらないと思われていた出来事だ。

「…言われなくともそのつもりだ」

「上等、この腐った世界に何も千里の体を治すためだけに立ち寄りたわけじゃねえ。話つけてやる」

「お兄さんと喧嘩でもしてるのか？」

「ひひっ、喧嘩なあ。ま、簡単に言えばそんなもんだ。こっちから動かなくても目立てばあっちが寄ってきてくれるはずだ」

「……」

憎しみを露にして遠くに見える白いドームを睨みつける紙袋、その姿を見て佐藤が俯いた。

僅かに歯を噛み締める。

「…勝手な行動はとるなよ」

何かを言いたそうに紙袋を見ていた佐藤だったが、結局一言忠告するだけで終えて廃屋の中へと入った。

「どうして俺を同行させるかね？」

宿に残りたがっていた魔王は半ば強制的に佐藤に連れ出され、げっそりと疲れきった様子で溜息と共に呟いた。

魔王、佐藤、それに千里という珍しい組み合わせで三人は歩いている。

白い街の中、人通りはそれなりにあり、珍しい格好をした三人が歩いていても人目をひかない程度に込み合っていた。

大通りの両サイドには店が立ち並ぶ。

魔術で発達した国家ということもあり、並んでいる店を少し覗くだけで千里には見慣れないものが見つかる。

「どうして魔王と佐藤なんだ？」

同行するなら缺や紙袋でも良かったはずだ。何も面倒くさがって

いた魔王を無理矢理連れ出す必要などなかったはずだ。

「責任は魔王にある…というのと、鉄と紙袋に魔術の才はない。解呪の役には立たないだろう」

「鉄はともかく紙袋はこの世界出身なんだろう？ だったら」

「道案内は俺で充分だ…奴のほうが詳しいだろうが、あまりで歩かせたくはない」

兄との再会を望む紙袋とは違い、どうやら佐藤は彼が兄に会うことに関してはあまり賛成はできていないようだ。

歯切れの悪い佐藤に魔王も同じことを考えたようで、珍しい彼の様子に笑みを浮かべた。

「あーな、お前は紙袋と兄貴を会わせることは反対ってことか」

「…だから鉄に見張らせてるのか」

「深読みしすぎだ」

吐き捨てた佐藤が立ち止まる。

必然的に彼に手を引かれていた千里も止まり、彼が何かを見ていることに気づいて視線を追った。

佐藤の視線の先には白い髪をした女がいた。

「客人か？」

「目的は俺だろう…魔王、千里を連れて適当に薬系の店を回れ。その程度の魔術なら解けるはずだ」

冷たい手が離される。

魔王は佐藤に言われたとおり千里を背負いあげると、白い髪をした女を一瞥してから逃げるように駆け去った。

残った佐藤は女から目を離さずに千里が去ったことを気配で知る。

「お久しぶりです、吸血鬼殿」

「初対面だ…だが、俺のことをそう呼ぶということは、お前はシンの使いか」

「ご推察の通りです。私はデウス、教皇の命を受けて貴方様をお迎えにあがりました」

丁寧な物腰だが視線は少しも柔らかくない。

むしろ敵意すら感じさせる隙のない動作、デウスの態度を一笑する。

「お迎え…か。死後の世界へのか？」

「…どうやら全てお見通しのようですね、流石…教皇が目にとめたお方。しかし貴方を逃がすわけにはいかない」

「大きな口を叩くな、人形如きが。俺を力づくで連れてでも行くつもりか？」

デウスは唇を弧の形に歪めると、整った顔に好戦的な笑みを浮かべつつ腰に固定してある短剣に手を伸ばした。

「いつまでも見誤っていられては困る。我等は最早親に当たる貴方を超えた。油断していると死ぬぞ」

二人の距離は三メートルほど、しかし周囲に人は大勢いる。

こんな場所で戦闘を行えば巻き添えで死傷者が出ることは必至だ。佐藤としてはまったく関係のないことだが、相手は仮にもこの国の王に当たる人物の使いだ。

犠牲を出すことに躊躇いはないのか…と不審に思うが、彼女の態度を見る限り国民の事など考えてはいないようだ。

「犠牲はやむなし。教皇の理想の為だ…」

「悪い王を持ってこの世界の住人も気の毒だ」

デウスが短剣を構えたのを見て佐藤も体勢低く身構える。

「ふっ！」

短い掛け声と共にデウスが突進する。

短剣を振りかざし、行く手を塞ぐ民を数人切り捨てての強行突進。佐藤は避けるために近くにいた人間を前方に放り出し、相手の視界を塞ぐと上方へと逃げた。

「ぎゃあああ！」

悲鳴が聞こえて佐藤の囿になった男が息絶える。

デウスは舌打ちすると胸に突き刺さった短剣を引き抜き、佐藤の姿を目で追うと、刃についた血を払った。

人が数人血を噴き出して倒れる。

そのことによつてようやく危機を感じた人々が悲鳴を上げ、次々と佐藤とデウスから距離をとるために走り出す。

逃げ出す人々を尻目に佐藤は身を翻して着地した。

「気の毒とは：貴方は随分適当なことを仰る。人の命を尊んでいないのはそちらではないか」

「誰が死のうと興味はない。別に正義を語りたいわけでもないからな」

「流石、噂に違わぬ」

佐藤は横目で建物の壁際に寄せられている廃材を確認すると、蹴り飛ばして山を崩した。

その中から鉄パイプを見つけると足で救い上げて手に取る。

「その場にあるものを使うのは鉄の得意分野だが…」

「私と戦う気になったようだな」

「勘違いするな：叩き潰して帰るだけだ！」

マントが瞬時に翼に変貌をとげる。

舞い上がった佐藤は急降下の末にパイプを振り下ろすが、硬い手ごたえに眉を顰めた。

上空からの攻撃をしっかりと受け止めたデウスは笑う。

「私を普通の人間と同じだと思わないことだ。貴方が人形と蔑む私達、その力に足下をすくわれる」

「所詮は『我等』の残滓に過ぎない出来損ないが創った玩具。この程度で俺に勝った気になるなよ」

靴底を刃の上に乗せると、佐藤はそれを足場にして再び上空に舞い上がる。

持っていた鉄パイプを邪魔だといわんばかりにごみにのように投げ捨て、素早く白い光で宙に術式を描き出すと光の槍を飛ばした。

当たれば負傷の雨。

白い槍が数えることもできないほどに降り注ぎ、そのうちの幾つかがデウスの体を貫いて地面に縫い付けた。

「くっ！」

「人外のものを食らう趣味はない。決める…ここで退くのか殺されるのか」

「なめるな！どちらもお断りだ」

「ならば消し飛ばす」

青空の下、それを画用紙にして複雑な式が白い文字で描かれる。

素早く膨大な量が広がり、圧縮されたエネルギー体が可視化する。佐藤が天に向けていた左腕を下ろすと、光球はその動きに連動するように動き、遠心力で飛ばされるようにデウスへと向かった。

避けようにも動くことのできないデウスはしかしうるたえることも悔しがることもせず、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「時間です…私の勝ちだ」

「あはははは！吸血鬼さんって思った以上にお馬鹿さんなんだねえ！私達が正攻法で戦うと本気で思ってたのかなあ？」

「！」

放った光球が四方に弾けて消えた。

原因を探ろうと佐藤が視線を巡らせると、デウスによく似た女がケラケラ笑いながら宙を泳いでいる。

「マキナ、言葉を慎め。仮にも教皇の客人であるぞ」

「シン様にお届けしよ！きつと褒めてもらえるよ！」

「妨害系に特化した人形…あいつ、随分手の込んだクグツを作れるようになったものだ」

ケラケラ笑いながらマキナは佐藤の前まで移動した。

デウスもマキナの隣に飛び上がる。

「対等に戦えるようになっただけだ」

「分かっている、私達は人間にあらす、所詮は真似事をしただけの人形に過ぎない。貴方に勝てるわけなどない」

「二対一でもキツツイよねー、でも私達、君と戦うつもりなんてないんだよな」

怪訝そうな色を浮かべた佐藤だったが、すぐに二人の言葉の意味に気づいたのかはっとしたように振り返る。

もう少し早ければ、対応できたのかもしれない。

二人に気を取られている隙に後にもう一人が回りこんでいた。懐かしいその人物、しかもつとも会いたくなかった人物。

「久しぶりだな、私の恩師：薄汚い誘拐犯が」

「シン！」

鼻先が触れそうな距離で魔術を放たれては流石に佐藤も無事では
いられない。

慌てて距離をとろうとするが時間が足りなかった。

「あぐっ！」

腹部を貫かれる激痛に呻き、見下ろす。

佐藤の腹を幾つかの光の槍が貫いていた。発展の世界で佐藤が受けた罠によく似ている、いや同じものだ。

行動不能に陥った佐藤を見下すと、シンは容赦なく彼を地面に叩き落とした。

石床に背中を強かにぶつけ息がつかまる。

「ごほっ…はっ…！…じきじきに教皇が出てくるとはな」

「お前に用があった。分かっているだろ？」

「……」

「一つはお前の命、もう一つはウェドネの場所だ。答える…ウェドネをどこへやった？」

口の端に滲んだ血を擦り拭くと佐藤は気丈な笑みを浮かべた。

「さてな…莫迦な兄に愛想をつかして逃げ出しただけじゃないのか？」

挑発の言葉を吐くと同時にシンの表情が一変し、能面のように無表情だった顔に激しい怒りが過ぎる。

動くことのできない佐藤の腹を強く蹴り飛ばした。

抵抗することのできない佐藤は転がり、数回激しく咳き込む。

荒い息をつきながらそれでも相手の激情を誘うように不吉な笑みを浮かべ続ける。

「ごほっ…俺を痛めつけようと、お前に教えることはない」

「だろうな、お前の体のことは知っているつもりだ。以前の私なら殺すことすらままならなかっただろう」

「俺の命が目的だと言ったな？まさか、俺自身も取り込んで我等を超えるつもりか？愚かなことを」

「複数の世界でお前を見つけては捕らえようと試みた。だがやはり、魔術だけを飛ばすという方法では限界があつたようだ…わざわざ私の世界を訪れるとは、賢者と名高い吸血鬼殿にも油断と傲慢は存在したわけか？」

「あはは、飛んで火にいる夏の虫、でしたっけ！？」

「マキナ、笑っていないでこの男を運ぶのを手伝え。私一人の力ではどうにもならない」

貫かれたままの体では動くこともままならない。

しかしこのまま拉致されるといいうのも癪で、佐藤は抵抗の意思を宿した目でデウスを睨みつけた。

激痛と魔力制限で靄がかかったようになっていく視界にシンの姿が映りこんだ。

自分の生んだ歪みに狂った男は勝ち誇った目でこちらを見下していた。

11・蒔いた種、執着の檻。

「ちよつ、止まらな！…止まれよ！」

佐藤と別れた直後から何度も魔王に訴えかけているのだが一向に止まる気配を見せない魔王に痺れを切らし、千里は強く彼の背中を叩く

と腕に噛み付いた。

「いてて！」

小さな体で出来る精一杯の抵抗に驚き、魔王の腕から力が抜けたのを見のがさずに体を捻り、着地する。

駆け出そうと最初の一步を踏み出したところを魔王に掴まれた。

襟首を掴まれて呼吸が詰まる。

「離せ！」

「ちよつと待つてくれよ坊、お前を行かせたら俺が佐藤に説教くらうんだ！それにお前が行ったところでどうにもならねえ」

「坊って呼ぶな、佐藤だけ残して行けるかよ！」

尚も暴れて手を振り払おうとするが、魔術だけでなく腕力も千里をはるかに上回る魔王の力、振り払うことは到底叶わない。

「ちよつと待つて千里！お前も佐藤馬鹿力は知ってるはずだ。それに…お前が助けに戻っても何の助けにもならねえよ」

「それはっ！」

そうなのかもしれない。

ただでさえ戦闘能力の低い千里だ。幼児化してしまった今では敵がたとえ女であろうとも太刀打ちできないだろう。

腰に巻いたガンベルト、そこに固定された銃に手を滑らせる。

銃も上手く使いこなせない。

自分の無力さに歯噛みした。

「おら、とつとつそのちよつせえ体を元に戻そうや。佐藤のことはそ

れからだ…いいな？」

胸元から煙草を取り出して火をともしながら魔王が確認すると、千里は渋々頷いた。

返事に満足した魔王は微笑んだ。

「ほおほお、これは珍しい…パンドラの呪ですか」

怪しげな店に立ち入ると眼鏡をかけた老いた店主がおり、幼い千里の姿と魔王を見るや否や近付いて凝視した。

体のあちらこちらを探られた末、店主は耳に覚えのない言葉を口にする。

「おー、名前が分かるってことは、この店は当たりみたいだな」

「パンドラ？」

「太古より女性とは災いを招くとされているものです。男は女がある故に惑わされ、女は嫉妬深い生き物でございましょう？」

ひひひつと下卑た笑い声を上げると、店主は店にところ狭しと並べられた幾つかの薬を吟味するように見つめる。

「…俺にはこの爺さんの言ってる意味が分からないんだが」

「伝説だよ、パンドラの箱ってお前の世界では聞かなかったか？」

「あ…聞いたことぐらいは」

記憶の端に僅かに引っかけたワード。

曖昧に言葉を濁すと魔王はそれだ…と笑った。

「ま、箱の中身が何なのかは議論が分かれるところだから置いとくとして、神が初めて作り出した女がパンドラだといわれている。つまり女自体を災いだと表現しているわけだ」

「災いをもたらす薬ってことかよ」

「そういうわけだ、魔王の呪いらしいだろ？」

何故か得意げに煙を吐き出す魔王を軽く殴っておく。

丁度店主がお目当ての薬を見つけたらしく、声をあげると小さな小瓶に入った数枚の葉を取り出して魔王に手渡した。

「へえ、珍しいもん持ってんな、爺さん」

「ひひひ、とあるルートで入手した絶滅した樹木の葉でございます。お高くつきますよ?」

「解呪の樹：未だにこんなもんが残ってる世界があるとはね。で、幾ら望むんだ?それなりには出せるぞ?」

「老いぼれに金など不要でございますよ。望むのは…そうですね、長いこと生きてきましたが貴方のようなお方は初めて見ます。ぜひとも調べさせて欲しいのですが」

魔王を魔王だと見抜くことが出来たのか店主は怪しい笑みを浮かべる。

凶星をつかれているというのに魔王は少しも慌てることをしない。「ホント、油断ならない爺さんだ。俺の体を差し出すわけにはいかねえが、これで満足してくれや」

勧善懲悪の世界で最後に彼が見せたように、魔王はあの時と同じように片手の上に黒い球体を出現させる。

サイズはいくらか小さく、掌の上に乗る程度だ。

「運び主の卵：何故このような危険なものを!」

「そのサイズしか出せねえんだ、勘弁な。だがまあ、その程度の大きさなら孵化したとしても世界崩壊ってことにはならねえはずだ…多分」

多分という最後の言葉に、千里は一抹の不安を抱かずにはいられない。

店主は予想外に価値のあるものをもらえて感激したようで、相変わらずの気味の悪い声で笑っている。

「運び主って何なんだ?」

ずっと気になっていたことを千里は魔王に尋ねた。

「ん?あー、簡単に言えば終焉の運び主。終世魔術の一つ、魔王専用の世界滅亡呪文って言えば分かりやすいか」

「へえ…って、そんなもの軽々しく渡していいのかよ」

「よくねえな」

ちっとも困っていない表情で軽く魔王は答えた。

その答えに千里は啞然としてしまう。

「良くないって」

「正直、この世界がどうなるかと俺の知ったところじゃねえしな、それにお前を治すためだ」

「だけど！」

「大丈夫だつて、よつぼどのことがない限りは巨大化したりなんてしねえ。それこそ膨大な魔力が注ぎ込まれるなんてことねえとな」

心配そうに黒い卵を見る千里の頭をぼんぼん叩き、魔王は受け取った葉を握り締める。

拳を開いたとき、そこには燃え上がって黒い粉末と成り果てた姿があった。

「ほら、元に戻ったとき大衆の前で全裸ってのは嫌だろ？一回宿に戻るぞ…薬も手に入ったことだしな」

促すように魔王の背中を押され、千里は幾度か黒い卵を心配そうに振り返りながら、薄暗い店を後にした。

荒い息が薄暗い室内で蔓延する。

鉄は床に座り込み、殴られた側頭部を労わるように撫でた。

触れるだけで鈍痛が走って呻く。

宿の中に残っているのは鉄だけだ。

もう一人は先程抜け出した。鉄が油断している隙について突然背後から強襲。

元々仲良し…と呼べる関係ではなかったが、それでも喧嘩するほど仲の良い関係ではあった。

だからこそ背後から本気で殴られたとき、まったく反応ができずに意識を短い間だが飛ばしてしまった。

「参っちゃうな…僕が佐藤に叱られるだろ、紙袋」

壁に手をつけて立ち上がる。

風に髪を揺らされて気づいた。部屋の窓が開け放たれている。

そこから脱出したのだらう。

「追跡：すべきかな」

「帰ったぞ」

扉が乱暴に開け放たれる。

危うくドアにぶつかりそうになり、鉄は身を引いた。

戻ってきたのは望みの人物ではない。逃げ出した人間がわざわざ戻ってくるはずもないのだが。

「魔王：千里は？」

「ロビーで服薬中。俺は千里の為に一人にしてやったわけだが…つて、どうしたんだ？」

ようやく鉄の様子が尋常ではない事に気づく。

頭に血が滲んでいた。そこを手で押さえている。

鉄が答えを返す前にある程度察しがついたらしい魔王は眉を顰めて開け放たれた窓を見た。

「紙袋か」

「話が早くて助かるよ。まさか本気で僕を昏倒させるだなんて思っても見なかったから…油断してた」

「あの莫迦、どこに」

「多分：お兄さんのところだよ」

「兄？」

きょとんとした様子の魔王を見て、この人は新参だったのだと思いが当たる。

「僕と佐藤は一度この世界を訪れたことがあるんだ。そのときに紙袋と合流した…彼を佐藤が助けたんだ」

「へえ…あの佐藤がね、随分仲が悪いから想像つかねえな」

「仲が悪いのは佐藤が距離をとろうとするからだよ。紙袋の口の悪さは元々だしね。さて…と」

フラフラとした足取りで窓枠に手をかける鉄を慌てて魔王が引きとめた。

「何してんだ！」

「佐藤から言われてるんだ…紙袋を軽々しく教皇に会わせれば大変

なことになるよ」

「教皇？…あいつの兄はこの世界の王だったことか。面倒だな」

「どういうことだ？」

凜とした声がした。

二人が声のしたほうを見ると姿の戻った千里がいる。険しい目をして二人の会話を聞いていたらしく、誤魔化しようがない。

「あまり気持ちのいい話じゃないよ」

千里が引かないと悟ったのか鉄はそう前置きすると、追いかけてうとしていた足を室内に向け、ベッドに腰を下ろした。

「お、昔話か？」

「昔でいっても…そうだね、四年ぐらい前かな。僕達はこの世界を訪れた。目的のものは見つからなくて、すぐにこの世界を離れるつもりだったんだ。最初は」

「最初は…？」

「佐藤が妙に入れ込んだ人がいてね、僕をこの宿にお留守番させてほとんど毎日通いつめてたんだ」

「…なんだ、てめえか。また来たのかよ」

誰かが来たことを察した男が気だるそうに顔を上げるが、そこに立っていた黒髪の男を見て再びうなだれた。

両手首を頭上で括られている。所謂拘束状態にある男だ。

上には何も来ていない。曝された素肌には幾つか傷痕があった。

拘束された男は黒髪を見上げた。

瞳孔が十字に割れた瞳、それを見て黒髪、佐藤は眉を顰めた。

面白そうに、そして辛そうに男は呟く。

「大概、てめえも奇人だな。俺に飽きもせず会いに来て、俺の目を見て無事だ。本当に…うぜえぐらい大嫌いだ」

「…俺もお前に好かれようなどとは思っていない」

「だろーな。ふ…ひひっ、もう一人はどうしたよ？お仲間がいるんだろ？」

「お前と直接あわせるわけにはいかないだろう。…何かに拍子にお前と目を合わせてしまえばそれまでだ」

「…辛いぜ、死神に好かれるってのもよ」

「何が死神だ。…お前のことを好いている相手は神などという大層なものではない。聞くが、何故兄の言いなりになっている？」

「……」

何も答えない男に代わって佐藤は彼の閉じ込められた部屋、そして佐藤が入ってきたことによって密室ではなくなった岩壁の部屋を見回した。

「薄暗い場所に半ば監禁され、兄の狂った寵愛を受けて尚お前は兄に従う。俺には理解できない」

「…だとしても、兄だ」

搾り出すように口にした言葉は苦しみの垣間見えるもので、しかし男は心からそう思っているらしかった。

衰弱した体、長い拘束で狂い出した精神。

最早最初から持っていた彼の個性は失われ、狂った人格すら形成されはじめているというのに、それでも家族を主張した。

「何故そこまで執着する？」

「兄貴には俺しかないだろ」

「お前だけ？」

「…そうか、お前この国の住人じゃねえな。俺の兄を知ってるか？ …俺を拘束している兄だが、世間一般じゃ教皇って呼ばれてる」

「…また随分と大層な名前だな。それで、何故教皇と？」

「俺達は双子の兄弟だ、兄は膨大な魔力を持って生まれ、まるで兄一人に全てを奪われたように俺には凡才すら残らなかつた」

なるほど、と佐藤は一人納得する。

これで彼の兄から感じた魔力も、それに対して弟からまったく感じられない魔力も説明がつく。

「この世界は魔術を素として発展した世界のはずだ。魔術も使えないお前は、まさにイレギュラーであり失敗作だったというわけか」

「結構辛辣なこと言ってくれね。事実だけだよ…兄貴は教皇って呼ばれるほどに強くて、地位も権力も手に入れた。けどな…本当の兄貴を知らない奴は多い。兄貴を見ている大勢の連中も所詮眼中にあるのは兄貴の地位と力、それだけなんだ」

「…お前は違つと？」

「俺だけが兄貴を理解できる。俺にしか出来ない。俺しかいない。だから俺は逃げることもなんて出来ないんだよ…俺が逃げることは許されないんだ。俺がいなくなることは罪だ、兄貴の心を殺すことになる」

「大儀なことだ、お前はそうやって何時まで縛られ続ける？兄の為に…俺はそんな善事を聞きにきたんじゃない。お前がどうしたいのか聞きたい…永遠に兄の物として過ごして、お前はそれを望んでいるのか？」

一気に言葉を吐き出すと佐藤は一度息を吐き出し、声を荒げることなく尋ねた。一番聞きたかったことだ。

「お前に希望はないのか？」

「…希望、…希望ね。ふっ…ひひひ！はははは！てめえ本当に似てるよ、千里にそっくりだ」

「千里…だと？」

まさかこんなところで彼に名前を聞くとは思っていなかった佐藤は思わぬ収穫に目を細めた。

「まったく正反対なんだが…あいつが俺にしてくれたことと同じことを違う手段でやってやがる。俺に何かを説いて、俺を救おうとしてくれて…な。俺はあいつが大好きだったがてめえは嫌いだ。ただどな、俺はもうその救いに乗っかる権利はねえんだよ」

「お前…千里の何を知っている？」

「んだ？てめえ、千里の知り合いか？」

「質問に答えろ、お前は千里の何を知っている！」

初めて声を荒げて問い詰めるように佐藤が叫んだ。暗い部屋の中に声は予想外に響き、空気を震わせる声にもまったく動じず男は

俯いた。

細められた異形の目は佐藤を見ようとしもない。

「話は終わりだ…これ以上でめえに話すことも話すつもりもねえ。

さっさとここから立ち去れよ」

「隠すようなことなのか」

「お前には関係ねえな、俺はお前の誘いを受けるつもりもねえ、これ以上でめえのわけの分からない話に付き合う気もねえ。早く消えろ」

「……」

心を閉ざしてそれ以上話そうとしない男を見ると、佐藤は諦めたのかふつと姿を暗闇に眩ませた。

瞬間移動のような光景を目にした男は苦笑する。

「とんだ化物だ…俺は変な奴に好かれるのが得意なのかね」

変な奴。

変だけど嫌いじゃなかった奴。

千里。

角の生えた人間の子、檻の端にある小さな窓から身を乗り出し、

鉄格子越しに会話をしたこともあった。

なつかしく、綺麗な思い出。回想していると足音が聞こえた。

近付いてくる音は千里のものではなく、あるはずもない。

檻が開かれた。佐藤のように移動能力を使わず檻の中に入れる人物は一人しかいない。

男は憂鬱そうに顔を上げた。

「ウエドネ、利口にしてたみたいだな」

「…兄貴」

男はウエドネ、そう呼ばれた。

ウエドネの兄は名をシンと言った。世界の中に知らぬ者はおらず、彼の上に立てる魔術師もいない。

実質的に彼が国の頂点に君臨していた。

フードを頭から被っているため顔が見えない。

「立て」

立てといわれても両腕を頭上で固定されているため動きづらい。やっとの思いでバランスをとりつつ体を起こすと、両腕を拘束していた鎖が弾けとんだ。シンの能力だろう。

「……」

抵抗することは出来ないししようとも思わない。シンの歩く後を従順にウエドネはついて歩き、彼の生活をしている部屋へと向かった。

部屋といっても広く、数部屋が彼の生活空間となっているようだ。流石にここまででは使用人も入ってこないらしい。

私室の中でも鍵が厳重にかかっている奥の部屋へと連れて行かれる。

その部屋に入ると冷たい空気と過去の記憶が蘇り、震えが走った。黒い壁、黒い天井、黒い床。全てが重く体に乗りにかかってくるようだ。

シンはこの部屋に来て初めてフードを下ろした。隠れていた素顔はウエドネとそっくりで、しかし双眸には凄惨さを見慣れたような冷たい目がある。

十字に割れた瞳孔はウエドネだけのもので、シンは綺麗な円だ。ウエドネより少し短い銀髪、しかし身長は彼のほうが高い。

シンは自分より小柄なウエドネを突き飛ばすと地面に伏せさせた。

「！」

突然の事態に受身が取れず、部屋の真ん中にウエドネは転がる。痛みを響めてシンを見上げると、彼は暑苦しいのかフードを脱ぎ去っているところだった。

首元の開いたインナーを着ている。

シンの首筋には二つの赤黒い痕があり、そこから広がるようにして右胸の辺りまで赤黒い模様が広がっていた。

魔術式に近いものなのだろうが、少しおぞましさを感じさせる。

「隣国を滅ぼした、アルビス王国だ。平和ボケした雑魚だったが、秘術の一つや二つは隠し持っていた」

「っ！…また」

「不満か？」

優しい声音でシンは尋ねた。責めるような響きは一切ない。

「どうして、もう何国目だよ…これ以上領土を広げる意味も、戦争を続ける意味もあるのか？」

「どうして？…何を惚けたことを、お前のために決まっているだろう？」

「俺…？」

「優しいお前を神にする、それが私の望みだ。そのために何度も殺戮と奪取を繰り返した。全てはお前のためだ…ウエドネ、お前も分かってくれているだろう？」

「…！」

微笑む。

会話の凄惨な内容が嘘のように、彼は本当に柔らかく優しく微笑む。まるで心からウエドネを慈しんでいるような、そしてそれはきつと本心だ。

だから今まではそこで言葉を呑んでしまっていた。

しかし、佐藤の言葉が脳裏を過ぎる。

（希望…このままの状態が悪いつてことぐらい、本当は俺にも分かっているんだ）

「もう」

「ん？」

栄養失調で震える足、それを無理矢理立たせて祈るように、ぐしゃぐしゃな微笑みを浮かべてウエドネは兄を覗き込んだ。

「もう…止めよう、兄貴」

「……」

初めて兄に意見をした瞬間だった。

今までにない事態に緊張し、シンは驚いたように黙り込んでしま

う。

「何故」

「え？」

「何故そんなことを言う？」

「…こんなことをしても無意味だって」

「私はいままでお前のためだけに生きてきた！お前のためだと割り切って望まぬ戦争にも出された！お前のためだと思って国の頂点に立たされ、権力に振り回されることにも耐えてきた！」

「あ、兄…」

突然の激昂、まるで張り詰めていた水が決壊してしまったかのようで、崩れたものは元には決して戻らない。

向けられる狂愛を感じてこそいたが、まさかここまでのものだとは知らなかった。ウエドネは驚いて何も反論できない。

シンはウエドネを再び床に叩きつけると右手を振り上げて爪先から彼の心臓に突き立てた。

手で突く…などという生温いものではなく、爪で貫くというほうが正しい。

「ぐっあああああああ！」

心臓を貫かれるが命の心配など要らない。

唯一の肉親は自分を殺すつもりなど毛頭ないのだから。

「全部、全部お前のためだ。私はお前に尽くした…お前もそうだろうか？」

返り血を浴びながら貫いた血肉に直接魔術式を組み込む。

兄の行為を見たウエドネは痛みを耐えつつもこれ以上妙なものを体に組み込まれてはたまるか…と反抗しようとする。

シンの手首を掴んで引き離そうとするが、彼の力は思っていたよりずっと強くて引き剥がすことができない。

「兄…つき…シン！」

「お前が別の者を見ないようにその目を与えた。お前が私の前から消えないようにその心臓を与えた。ウエドネが狂ってしまえばいい」

「…ひっ…痛い、痛い！シン！」

「お前が…悪い。お前が悪いお前が悪いお前が悪いお前が…お前がお前がお前が、お前がお前がっお前があ！」

「浮かない顔してるね、君がそんな顔するなんて…千里の件ぐらいだ」

民宿の一室、ベランダに出て魔術によって発展した町を見下ろしながら佐藤は風に吹かれていた。

その隣に缺が並ぶ。

「この世界に確かに千里はいた…だが気配を感じることはできない。つまり千里はすでにこの世界には存在していない」

「…ああ、それで気分が沈んでたの？」

「それは一部だ、確かに残念ではあるが今までがその積み重ねだった。別に今更とやかく言うような事柄ではない」

「じゃ、どしたの？なんでもないっていうのは嘘だって分かるからね。君が用もないのに一つの世界に留まるのは珍しいから」

「…少し気になることがあった」

思い浮かぶのは失望に満ちた銀髪の青年。

拘束されつつも兄を慕っている、しかしそれが心の底では間違いだと気づいている様子だった。

違う世界の関係のない人物。

だから放っておいても問題ないだろうし、放っておくべきなのかもしれない。異世界の自分達が異世界の事柄に手を出すというのも、なんとも無粋な話なのかもしれない。

しかし…。

「僕も手伝おうか？そろそろ観光も飽きてきたところだし」

「それは…いや、頼む。缺とあいつはほんの少し境遇が似ている気がする。あいつを支えてやる事が出来るかもしれない」

「ふーん、君が他人の心配とは、珍しいこともあるんだね」

居心地悪そうに佐藤は顔を背け、辛そうに眉を顰めた。

「そもそも…俺が撒いた種だ」

「え？」

「なんでもない、急ごう」

いつも通りの裏道を抜け、ウエドネの閉じ込められている建物の裏にたどり着く。壁に背中を張り付かせるようにしてその場に駆け寄り、佐藤は中の様子を窺うために左掌を壁につけた。

目を閉じて意識を内部へと集中させる。

「こんな場所に…」

コンクリートで固められた小さな窓があるだけの建物。入口は厳重に鍵がされており、渡り廊下の続く場所はこの世界の頂点に立つ人物の住む場所、教皇の住む城ともいえる場所だ。

「箱入りってレベルじゃないみたいだね、これじゃ鳥籠だ」

「行き過ぎた愛情は狂気になりかねんということだ。中に移動する…だが、鉄、絶対に目を閉じておけ。俺の術でお前をあいつの目から護るが、こちらから見ていない場合のみその加護は働く。定めを破れば俺でも助けることはできない」

「肝に銘じとく」

答えに満足した佐藤は鉄の肩を軽く押した。

それだけで鉄の体は消え去って室内へと移動される。続けて自らも瞬時に牢の中へと移動すると、言いつけを守って鉄は手で目を覆っていた。

前方を見据えると鎖に繋がれることなくうなだれている男の姿があった。

「おい」

声をかける。だがいつもなら反論するように口を開くウエドネが何も言っていない。

状態がおかしいの是一目瞭然だった。

顔が下がっているせいで表情が見えない。

彼の体に目を走らせた佐藤は、新しく傷ができていることに気づ

いた。

左胸から左肩にかけて、大きな傷痕ができています。まだ新しい。

「佐藤、様子がおかしい」

視界を閉ざされている鉄にもそれが分かったらしい。佐藤は頷くと歩み寄って膝をつく。

そつと彼の体にできた傷に触れるが抵抗してこない。

(…これは、術式を体内に組み込まれた？莫迦な、こいつの兄は改造でもしたいのか？)

「おい、何があった？…何をされた？」

「……」

反応のないウエドネの両肩を掴んで揺さぶると、その衝撃で彼の顔が上がった。佐藤の方を虚ろな目で見てくる。

十字の瞳が見ることを許されたのは自分と彼の兄だけなのだと、彼の瞳を見るたびに思っただけが締め付けられるようだった。

「これは誰がやった？」

「…千里はさ、きっと天国にいけたよな」

「？」

突然何の話が始めるのかと疑問に感じたが何も言わずに先を促す。「俺は千里だけが支えで、死んだらあいつに会えると思っただけを希望に生きてきたんだ」

(やはり、この世界でも千里は)

死んでいるということなのだろう。

そしてなんらかの形でウエドネは千里に関わっていた。

「それも…消えた。俺はずっと、解放されることもない。永遠に兄貴の玩具で、もう…どうしたらいいのかわかんねえよ」

「…まさかお前」

ウエドネの言葉から最悪の事態を予測した佐藤は彼の傷にもう一度指を這わせて確認し、自分の予測が当たっていたことに唇を噛んだ。

「不死…よくこんなものを人間に埋め込もうなどと…」

「俺の声は兄貴には届いてないんだよ！…兄貴は俺のこと思ってるんじゃない、俺のためって言い訳して自分から逃げてるだけなんだよ！」

胸の奥がどす黒い、絶望と後悔に塗りつぶされたのを自覚した。

佐藤は眉を顰めてポロポロになった青年を見た。

これが自分のやったことの結果だ。

（俺のせい…か？）

自問自答するまでもなく、佐藤自身の責任だ。

唇を切れるほど噛み締めて自分を責める。

自己嫌悪に陥りすぎて、自分のことが憎くてしかなかった。

「…依存されてるのか」

目を隠したまま鉢は慎重に数歩前に出て、そこで膝をつく。

視界は制限されているため言葉でしか状況を把握することは出来ない。

手を伸ばして鉢はウエドネの頭に触れる。

「成る程ね、佐藤。君が僕とその子に共通点を見出したことに納得がいったよ。立場が逆って…そう言いたかったんだ」

「すまない」

「謝るようなことじゃない、事実なんだから」

手探りで鉢は手を突き出し、ウエドネの頭に手を乗せた。

髪感触を確かめるように、そこに人が存在することを確かめるように数回軽く叩くと、微笑む。

「佐藤、彼…僕達の旅に同行させたらどうかな？」

「旅に？」

考えていない選択肢だったらしく、佐藤はきよとんとして目を見開く。

何よりそれをする事による佐藤の意図がつかめなかった。

「君、この子のこと気にかかるんでしょ？」

「…別に…」

素直には認めたくないのか照れたように佐藤はそっぽを向く。

「人は簡単には変わらないよ。ましてや長い年月をかけて培われた価値観が君の介入なんかで変わるわけがない。彼のお兄さんを変えることがどれだけ難しいのか…僕には分かっているつもりだ。でも彼をこれ以上お兄さんと一緒にいさせることは得策じゃない。そして彼のお兄さんはこの世界を統べる者といっても過言じゃないだろうし…この世界に逃げ場はない」

「つまり、異世界に連れ出せと？」

「うん、勿論彼の意見を尊重すべきだから一概にもいえないけどね。それに…千里にも会えるかもしれない」

「千里？」

興味薄そうに鉄の提案を聞いていたウエドネが、そのワードが出た瞬間に顔を跳ね上げて期待の目で二人を見る。

「千里に…会えんのか？だってあいつは…死んで」

「異世界の存在は知っていても鬼のことは知らない…というわけか。異世界のほうはどうせ兄にでも聞いたのだろう？あの化物が世界移動の手段を知らないとは思えない。完全に逃げ切れるわけではないぞ？」

それでもいいのか？と佐藤は視線をウエドネに投げかけた。

「俺は、俺は！千里に会えるならどうなってもいい！」

「…それが兄を裏切ることになったとしてもか？」

「それは」

佐藤の誘いを断るほどにウエドネにとってシンの存在は大きかった。

どれだけの苦痛を受けようとも、どれだけ手ひどく扱われようとも彼にとって兄は唯一の肉親であり、家族だ。

頼られていることが苦痛ではなかった…といえば嘘になるが、長い間誰との接触も許されなかったウエドネにとっては兄との繋がりが全てだ。

「兄貴のことは忘れることなんてできない。けど今のままじゃいけないってことぐれえ俺にも分かっている」

「だから俺達についてくると?」

「俺は千里に会いてえんだよ!」

「…それから?」

「は?」

「お前はそれから何をやる?千里と会って、それで満足か?俺はそんな勝手な理屈のためにお荷物を背負うつもりは…むっ」

次々ときつい言葉をかける佐藤の口を鉄が背後から抑える。

「君も似たようなもんでしょ、人のこと言えないよ。僕は良いと思うよ…そんな単純で些細な願い事でも叶わない人がいるから」

「…」

険しい表情のまま佐藤は静かに鉄の手をとって外すと、ふうつと溜息をついてから髪をガシガシとかき乱した。

「不死身のお荷物なら盾に使えるかもな」

「素直じゃないなあ…ま、要約するのついてきていいってこと。よろしくね…えーと」

「ウエドネだ…よろしくな」

12・盲目の説得

(探してる？上等だ…こつちから向かってやんよ！)

白い街の中を駆け抜けながら紙袋は腹の底で渦巻く怒りを噛み締めていた。

照りつける日の光は石畳や壁に反射して眩しい。目のふさがれている紙袋だが、それでも暑さに呻いた。

体力があまりあるほうではないと自負しているが、それでも足を止めない。

前方におそらく存在しているはずの白いドーム、王城へ向かう。ふと何者かの視線を感じて紙袋は足を止めた。

「お迎えかよ、わざわざご苦労なこつた」

「姿を隠しても貴方には無意味だということですね。流石、教皇の弟君…しかし分かっていらっしやるのならご同行願いたい」

「余計な世話だ、ためえなんぞに言われなくとも自分で向かうつもりだ…失せろよ女！」

「私を女扱いするとは…貴方が初めてだ。だがいくらウエドネ様であるうとも教皇の命に逆らうことは許されない。教皇より、手向かうようであれば殺してでも連れて来いとこの命令だ」

「ひひっ、言ってくれるな嬢ちゃん。兄貴は俺が死なねえってことを分かって言ってるんだ。ためえに勝ち目はねえぞ？」

紙袋の中に手を突っ込んで巨大なフォークを引き抜く。

戦闘の意思を見せた紙袋を見て、デウスは溜息をついてから腰の剣を抜き出した。

「魔術の才なき凡骨に私が負けるとでも？勝ち目はないかも知れぬが負けるつもりもないと知れ！」

白銀が閃いた。

踏み出すと同時に放たれた斬撃を紙袋は音、それに空気の微弱な

振動で予測し、フォークで受け止めた。

甲高い音が鳴り響いて二人は静止する。

力の均衡、どちらも引くつもりはないようだ。

「可愛い子と遊ぶのは大好きなだけだな！」

右手だけで圧されるフォークを支え、手持ち無沙汰な左手を握り締めると紙袋はデウスを殴りつけた。

「がっ」

腹に何の抵抗もできずに拳を受け、デウスは地面に転がる。

無様に這いながらも戦意喪失はしていないようで、ぎらぎらとした目で紙袋を睨みつけた。

「熱い視線も大歓迎なんだが、俺には千里という嫁さんがいるんだ。浮気はできねえ…許してくれよな」

「千里…やはり貴方の心は教皇にない」

「莫迦か？…あんだけ痛めつけといて俺を縛り付けたい…なんて甘い考えがそもそも間違ってたんだよ兄貴は」

「黙れ！教皇を侮辱するな！」

激昂したデウスは素早く体を起こすと、左足を軸にして体を捻り、戻る力を刃に乗せて切りつけた。

紙袋はそれを避けようとせず、脇腹に深く鋭利な刃が切り込み、肉を抉るのを傍観する。

真っ赤な血が噴き出した。

自分の血を自分自身で浴び、しかし焦った様子もない紙袋は攻撃をしたことで動けなくなっている僅かな隙をつき、フォークを思いっきりデウスに突き刺した。

「はっ…ぐ！」

胸に突き刺さったそれは勢いを殺さず、彼女を地面に叩きのめす。貫かれた彼女からは真っ黒な血が噴き出す。

「人間以外も守備範囲だぜ？俺は」

脇腹を貫かれているというのに顔色一つ変えず軽口を言う紙袋、信じられないという目でデウスは見上げる。

「貴様！…痛みを感じていないのか」

「ああ？…んなわけねえだろ。めっちゃめっちゃ痛い、ま、死ぬこたあねえけどな」

深く突き刺さった刃を素手で握り締め、紙袋は引き抜くと遠くへ放り投げた。

「痛みは愛なり」

「…何を…？」

「痛みは愛なり、苦しみは美德なり…お前を痛めつけるのは愛からだ。お前を愛しているからお前を閉じ込める。苦しめる」

突然詩でも朗読するかの如く無感情に語りだした紙袋を、不審な目でデウスは見る。

「お前等の大好きな教皇様の台詞だよ。この程度の痛みで俺が喚くとも思ったのかよ？」

「なるほど、すでに貴方は狂っていられる。教皇と同じだということか」

「いいだろ？似たもの同士の双子だ。仲がよさそうで微笑ましいよな。笑え…笑え、笑えよ！」

哀れむような視線を向けられ紙袋は激昂した。

フォークをより深くに突き刺されてもデウスは表情を変えず、悲しそうな視線をただただ紙袋に向ける。

「何なんだよ！分かってもらえなくせにんな目で俺を見るな！」

自分の顔を覆う袋に手をかけ、紙袋は絶叫するとそれを脱ぎ去った。

外観は真っ白なドームだが、内部は灰色の壁や柱のある陰鬱ないメージのある場所だった。

教皇の城と呼ばれる場所、その王間の中心に血塗れた衣を身に纏い、ポロポロになった吸血鬼が伏していた。

体中が傷だらけ、所々の服が破けている。

腹部を貫く光の槍は相変わらず佐藤を苦しめ続けているようだ。

「無様、無様！伝説の吸血鬼様ってこんなに弱いんだね！」

「マキナ、お前達と比べるな。そいつには血が巡っている…生き物だ。遊ぶのはいいが壊すなよ？」

「うん！マキナ約束する！」

無邪気な笑顔を浮かべたマキナはナイフを持ち、再び佐藤に向き直る。

「…下種が…作り手に似て…随分と悪趣味な」

途切れ途切れの言葉を血に濡れた唇で呟いた。

「シン様の悪口ー！」

明るい口調で叫びながらナイフを肩口に突き刺す。

佐藤は僅かに顔を歪めただけで悲鳴を押し殺した。

「…っ、いたぶる為だけに俺を捕まえたのか？」

「それも一興だが、それだけのためにお前を捕まえるなどというリスクの高いことはせぬよ」

「やはり我等の血肉が目的か」

「もっと力を得なければ、私からウエドネは離れていってしまうだろう？絶対的な力が必要なのだよ。それに…忌々しいことにウエドネは随分とお前に懐いているようだ」

「？」

「そんな化物に俺が懐いてるわけねえだろ！」

待ちわびていた声が聞こえ、シンは歓喜の表情を浮かべた。

王間の入口、その扉が乱暴に開け放たれて紙袋が駆け込んできた。

袋はかぶっている。

兄の気配を感じたのか表情を固くした。

「何故…来た！」

心から絶望しきったように佐藤は紙袋を見て呟いた。

弱りきった声は珍しく、紙袋はこういった状況であるにもかかわらずからかうような笑みを浮かべた。

「らしくねえな化物、不死身のお荷物なら盾に使えるんだろ？存分に活用しやがれ」

「逃げる！…シンに再び捕まれば、次はどうなるか」

「逃げるんならてめえも一緒だ化物！俺としてはてめえが生存するのは残念で残念でたまらんが、千里が悲しむのは見たくねえ」

弱りきった佐藤を見てそれだけ言い切ると、紙袋は自分の兄の前に歩み出て対峙した。

紙袋を確認したマキナが表情を曇らせる。

「あれ？…デウスが捕まえにいったはずなんだけどなー」

「所詮は人間の模造品だ。あんなもので捕まえられるとは思っていなかった…だが、自分から来てくれるとは想定外だったぞ、ウエドネ」

「兄貴」

目は見えないが声紋、気配、空気の震動で分かる。確実にそこには変わっていない彼の兄がいた。

「お前の人形は動けない人形に戻しておいた。それがお似合いだ…魔術で歪められた命なんて存在しなくてもいい」

「実の兄をお前呼びわりか？…変わらんウエドネ。人形のことなら気にするな石像になっただけだろう？」

「よくご存知だろ、兄貴が俺に埋め込んだ力だ」

忌々しそうに紙袋は袋の上から両目のある位置に手を押し当てる。何かを隠すような、痛みを堪えるような動きだ。

「シン様！こいつまさか…デウスを！」

デウスがどうなったのか悟ったマキナは表情をクルリと変え、佐藤をいたぶっていたときのような余裕のある表情から怒りの表情へと変えた。

牙をむいて飛び掛ろうと身構えるデウスをシンが片手で制す。

「そう急くな、新しい姉妹なら私がまた作ってやる」

簡単に言っただけのシン、その言葉に反応して佐藤が呻いた。

顔を上げてシンを下から睨みあげる。

「膨大な魔力はやはり人間には過ぎた力か…命の重みすらも分からなくなっただようだな」

「…その言葉、貴殿にお返ししよう。人を食らって生きる吸血鬼が何を戯けたことを」

蔑んだ目で佐藤を見下ろすと、シンはひょいっと指先を揺らした。その動きに呼応して佐藤が見えない力に跳ね飛ばされる。

抵抗することもできずに十メートルほど跳ね飛ばされ、岩壁にぶつかって息を詰まらせた。

「う…」

「マキナ、そいつを牢へ入れておけ。私は愚弟を連れて行く」
「はい！」

最早動くことすらままならなくなった佐藤をマキナは小柄な体だというのに軽々しく担ぎ上げ、スキップをしながら王間を去った。

部屋に残された二人は相変わらず対峙したままだ。
最初に動いたのはシンだった。

紙袋に向かって一歩踏み出すと、警戒した紙袋は一步下がる。

「吸血鬼のためではないと言ったな？ならば弟よ、何故私の元にわざわざ舞い戻った？出て行ったのはお前ではないか」

「…終わらせに来たんだ」

そつと告げると紙袋は乱暴に自分の顔を覆う袋に手をかけた。

そのまま上へ抜き去ると放り投げる。

晒された顔は兄であるシンによく似ていた。癖のある銀髪、長さはシンのほうがあったが、顔立ちまで似ている。

違うところといえば幼さ、そして纏う雰囲気、そして目だ。

紙袋の瞳孔は十字に割れていた。

「二度目だ」

今度は自分からシンへと歩み寄る。

少し手を伸ばせば触れられるほどの位置まで近付き、立ち止まった。自分より少し背の高い兄を見上げる。

「もう、止めよう…兄貴」

込められた弾薬は六つ。

佐藤から受け取った拳銃を二つ、ガラガラを音を立てて回転させる。バレットが音を立てて回転する。

撃てる状態になっていた。

千里はそれをガンベルトに固定しなおすと建物の影から顔だけを覗かせ、先にある目的地、王の城を網膜に焼き付ける。

帽子を深くかぶっているため鬼だとばれることはないだろうが、

一般人が王城に近付いているというだけでも大問題だ。

「おいおい、本気か？千里」

「佐藤が帰ってこない…それに紙袋も行方不明だ。あの白い女…騎士服を着てた。王に仕えてる人間だ」

「だから王城に乗り込むの？…ホント、そういう無茶なところは佐藤に似ちゃったね」

呆れたように肩をすくめるのは鉄だ。

魔王は千里と同じく建物の壁にもたれかかり、煙草を口に銜えて暢気に一服中である。

「無謀って言うんだ、そーいうのは。内部の構造は分かっているのか？まさか城を片っ端から探すなんて馬鹿なことと言わないでくれよ。それに警備、嚴重だ…一人の力じゃどうにもならねえほどにな。魔術も使えないお前が渡り合える相手じゃない。それにそもそも…お前は人を殺せるのか？」

穏やかな雑談をするように気軽な言葉だったのだが、魔王の言っていることはもつともだ。

千里は表情を沈ませる。

「だからって、このまま佐藤達を見殺しにするわけにはいかない」

「立つ瀬ねえな…あいつも、護るのは佐藤の役割のはずだろーに。逆に助けられてどうすんだっての」

「僕はそーいうの好きだけどね、千里が佐藤に恩返ししたいって思っているのは分かるし…僕だけじゃ辛いから魔王も力を貸してくれると嬉しいな」

どうやら鉄は千里に協力してくれるらしく、千里の後に立って肩

に手を置いて魔王に頼み込む。

二人分の期待の眼差しに耐え切れなくなったのか、魔王は顔を逸らして苛立ったように頭をかき乱した。

「あー、結局俺に断るって選択はねえんだよ。それ分かってやってるだろ？腹黒いな」

「よかったね千里、僕が案内する…で、魔王が戦ってくれるってさ」
「…いいのか？」

ついさっきまでは明らかに嫌そうな顔をしていたというのに協力してくれる魔王、流石に千里も急激な態度の変化に戸惑いを感じ、確認した。

何度も聞くな…と魔王は払うように手を振る。

「雑兵共はおっちゃんに任せて、お二人は先に行けや。俺が派手に暴れて注意をひきつけてやるからよ」

「助かる…行こう、千里」

「あ、ああ…魔王、気をつけてくれ」

「俺は魔王だぜ？」

ニヤリと笑った魔王の顔には確かな自信が見て取れる。

鉄に腕を引かれるまま、千里は魔王とは逆の道へと走っていった。残された魔王は広いほうの入口、正門入って中庭に出る道を堂々と歩き始める。

勿論警備のために配置されている兵士が数人おり、突如道のど真ん中を歩いてくる男に不審そうな目を向ける。

当然そのまま通してくれるはずもなく、すぐさま魔王の前方に行く手を阻むために数人の兵士が並んだ。

「貴様何者だ？本日の謁見は予定されていないはずだ」

「ま、お前達の王様とやらに用事はねえからな」

軽く笑って言うと兵士達は余計に警戒心を強くしてしまう。

敵意のこもった視線を受けて魔王は肩をすくめた。

「物騒物騒、誰か一人ぐらい話の分かる奴はいないのかね…ま、いいか。悪いが少し怪我してもらおうぞ」

言葉の意味を理解して兵士達が攻撃を仕掛ける直前、魔王は強く地面を蹴って一斉に射出された魔弾を避けた。

彼の素早く動いた後を追うように、煙草の先端から零れだした煙が尾を引く。

「久々に変身といきますか」

「こいつっ、魔術を使うぞ！」

「危険だ、城内へと入れるな！」

叫び声を聞きながら煙に体を包ませる。

灰色の煙に体がすべて覆いつくされ、次に霧散したときにはそこに巨大なとぐろを撒いた黒い蛇がいた。

シューシューと不気味な呼吸音を立てている。

口が笑みを浮かべるようにぱっくりと開き、口を動かしていないというのに喉の奥から声があふれ出した。

「異世界の王の力、思い知っときな若造」

13・誰がなんと言おうとも、嫁！

遠くで轟音が鳴り響く。

魔王が暴れ始めたようだ。警備についていた兵士達が一箇所に集まり、なにやら相談すると音のしたほうに走っていく。

それを見届けると千里は柱の影から飛び出した。

鉄が先に廊下を進み、曲がり角の向こう側を確認すると手招きする。

「監獄：というか紙袋が閉じ込められてた場所なんだけど、そこには入口つてものが存在しないんだ。繋がっているのはシン、紙袋の兄が使っている自室、王間にある魔術式だけ」

「そこからしか入れないってことか」

無言で頷くと鉄は次の角から飛び出して走り出す。

置いていかれないように千里も必死で走った。

息も乱れていない鉄は、枷をされているというのにまったく疲れた様子も動きにくそうな様子もない。

元々運動神経は良いようだ。

廊下は突き当たりになっていた。

その先にあるのは壁ではなく、両開きの大きな扉。鉄が蹴りあけるが誰の姿もない。

人のいない部屋。だが床の所々に血の跡が点々とついていることから、つい先ほど何かがここであったことが分かる。

「佐藤！」

呼びかけるが返事はない。

「まさかとは思ったけど…彼が負けるなんてね。こっちだ」

鉄に案内されるまま玉座へ向かう。

その後は紅いカーテンで仕切られてこそいたが、何かの空間があるようだった。

鉄に続いてカーテンの向こう側へ進むと、一段高くなった床に奇

妙な模様が描かれていた。ぼんやりと光を放っている。

「移動酔いは克服したよね、千里？」

「多分」

「じゃ、先に行つてて…ちょっと派手に暴れすぎたせいかな、この部屋の主人に見つかつちやつたみたいなんだ。僕が相手をしとくから…千里は早く！」

叫ぶと同時に鉄は千里の背中を強く押す。

バランスを崩した千里は倒れまいと数歩進み、それによって術式を踏みつけてしまった。

足が幾何学模様に触れると同時に、千里の体が消える。

移動が終わつたことを確認すると鉄はカーテンの内側から飛び出した。そこで部屋に駆けつけた主を目が合う。

「泥棒か？…吸血鬼も妙な仲間を持つたものだ」

「あなたの弟と佐藤を取り戻しに。ここであなたを通すわけにはいかないな」

「見たところ魔術の才はないようだが？…それでどうやって私を止めるつもりだ？」

「僕は弱いよ？戦闘要員は佐藤と紙袋で充分だと思つからね。でも…主が命令してくれたから、佐藤から命令されてるんだ。絶対に千里を護りぬけてね。だからここを退くわけにはいかないな」

ジャラリ…と鉄が腕を上げると鎖が音を立てる。

首から垂れ下がっている鉄に手をかけると、有刺鉄線が首に食い込むことも厭わずに引きちぎつた。

首周りに転々と紅い傷が浮き、血が鎖骨を流れる。

引きちぎつた鉄を左手…鎖のついているほうの左手で持ち、くくつと低く笑つた。

好青年のような明るい雰囲気はどこかへ消えうせ、明らかに纏う空気の変つた鉄にシンは戸惑いを浮かべる。

「相手したげるからおいでよ…愚かなドンキホーテ。自己愛の夢から覚めるといいね」

「ふひひっ、こうやっててめえと牢屋の中で話すなんて久方ぶりだぜ。あの時と似てるな」

「……」

痛めつけられた姿の佐藤は目を薄っすらと開けた。

両手は鎖で縛られ、足枷の重さで歩くこともままならない。

彼の胸の前には魔法陣のようなものが浮き、それが佐藤の魔術を妨害している為逃げることもままならない。

そんなものがなくとも弱った体では動けないというのに。

「今回は化物が弱りきってやがるけどな」

「……黙れ」

ようやく出せた言葉は相変わらずの憎まれ口。

いつもの佐藤のような発言に紙袋は微笑んだ。

向かい合う牢、二つの鉄格子越しに見える相手の姿。

冷え切った壁に背中を預けて紙袋は長く息を吐いた。両足両手首に枷をされているのは何も佐藤だけではない。

「ったく、あの兄貴は本当に人の話きかねえな……俺の言葉なんて届かないってことだ」

「……」

「実の弟を踏みつけて牢屋にぶち込んで……それが愛だとかのたまう。本当に……どうしようもねえ、だけど俺の兄なんだよな」

「……それを振り切れなかったのはお前だ」

佐藤の言葉に閉じていた目をそっと開いた。

十字に割れた瞳孔を持つ双眸が佐藤を捉える。

「久しぶりだな、お前の姿を見るのは」

「……」

「変わったな、老いてはいねえが随分変わった。これも単に千里のおかげっか」

暗い牢の中では声がよく反響する。

聞こえてはいるのだろうが、返事をする余力のない佐藤はうなだ

れながら彼の言葉を聞いていた。

佐藤の体調を察した紙袋は、彼が何の反応も示さないというのに気にもかけずに言葉を続ける。

「感謝する…それにすまねえ。ムカつくぐらい頭の回るお前はもう気づいてんのかもしれないけどよ、俺は千里を殺した」

「…っ」

僅かに佐藤が震えて顔を持ち上げる。

黄金色の瞳とぶつかって思わず視線を逸らした。

「俺はずっと兄貴の人形だった。俺にとってどんなに酷い奴でも兄貴は兄だけど、兄貴にとって俺は玩具に過ぎないわけだ。お気に入り…だから物心ついたときからずっとこんな風に監禁されてきた。兄貴以外との接触を封じられ、兄貴に痛めつけられる日が続いていた」

「…続ける」

「そんな俺に初めて友達ができた…千里だ。兄貴にずたずたにされた体を見ても嘲ることも哀れむこともしなかった。一緒に怒ってくれた…俺にとっての世界が広がった」

「どうして君はここにいるの？」

通気用と証明用の小さな窓、声で推測するに、そこから身を乗り出したのは少年のようだ。

突然の来訪者にウエドネは驚いて、返事をするのも忘れてじっと見つめてしまう。

照れたように少年、千里ははにかむと、くるりと一回転して高い位置にある窓枠から飛び降りた。

「誰だ…兄貴の指示か？」

「お兄さんって教皇様のことだよな？違う違う、僕は千里…自分の意志でここに来ただよ」

言うなれば不法侵入かな…と千里は呟く。

檻の中に初めて自分と兄以外の人物が入ってきた瞬間。生まれたのは危機感だった。

「駄目だ…ここにすることがばれたらお前、殺される！」
その頃には理解していた。
兄、シンのウエドネに対する愛情が度を越していること、狂気とも呼べる域に至っているということ。

だから分かった。

自分に近付いた人間がいると知れば彼は怒り狂うだろう。

両目を両手で隠しながら必死で説得する。帰れと。

「大丈夫だって、要は教皇様にばれなきゃいいんだもん」

「だけど」

「君、耳良いよね？さつきから僕のこと見てないくせに色々分かってる。足音がしたら教えてよ…僕すぐに逃げるからさ」

「…ああ」

不安で仕方なかったが、初めて出会った他人に対する興味が勝つてしまう。

千里の滞在を許すと、ウエドネは両目を覆ったまま腰を下ろした。「どうしてこっち見ないの？」

「俺は呪われてるんだ…兄貴に。だから俺の見た奴は石になる。俺は兄貴以外の人を見ちゃいけないんだ」

「ふーん…ずるいね、教皇様だけは大丈夫なんだ」

「兄貴は強いから、石にはならない」

慣れてきたウエドネは両手を目から離した。目蓋は下ろしたまま、音だけで千里のいる方向を判断する。

暫く特に会話もなく沈黙が続いた。

帰ってしまったのか？と思うことがあったが、そのたびに人の身じろぐ音が聞こえる。

どうやら千里は無言でもそこにいらしかった。

「…お前も暇だな、どうして俺のところにいる？」

「だって一人になったら君、寂しいでしょ？」

「寂しい？」

「僕もね…角があるから怖がられるんだ。君もきつと僕を見たら驚

くと思うな…角がある人間なんて気味悪いよ」

クスクスと自嘲するように千里は笑った。

「そんなこと」

「あるよ」

告げた千里の声は妙にはつきりしていて、彼が今までどんな生を歩んできたのかは想像に難くない。

妙に大人びた声でそう告げる。

「いろんな世界を見た、いろんな人に会った。僕、俺、私。僕達はいろんな世界を見て辛い目にあつた。でも誰よりも世界を知ってるから世界が嫌いにはなれない」

「…？」

千里の言っている言葉の意味が分からず紙袋は首を傾げる。

「いろんな記憶、いろんな思い出、大好きな人。僕はまだ幼いけど、俺達はいろんなことを知ってる。君の狭い世界を広げてあげることができるかもしれない」

「難しいな…つまり千里は物知りってことか？」

「うん、そういうこと」

クスクスと千里が笑う声が出た。

シンの笑い声とは違う、心から楽しそうな笑み。そんな笑い声を聞いたのは初めてで新鮮だ。

「俺の知らないことを教えてくれるのか？」

「今の僕は非力なんだ。昔の俺なら君を逃がすことが出来たのかもしれないけど…僕に君をここから出す力はない。だからこうやって、君の世界を広げてあげることしかできないんだ」

立ち上がる音がして、歩み寄る音がして…千里がウエドネの隣に腰を下ろした。

隣に人の体温を感じることは初めてだ。

そつと手を伸ばして触れてみると彼が予想以上に幼いことを知る。ウエドネより随分年下だ。まだ十歳にもなっていないのではないだろうか。

頭をそつと撫でるとくすぐったそうに笑つ。

「ね、またこうやって来るからさ…僕の思い出話を聞いて欲しいな」

「また…来てくれるのか？」

「うん、毎日つてわけにはいかないけど…できるだけ来るようにする。だから楽しみに待っててね」

毎日が絶望の日々だった。

それから二、三日に一度のペースで千里は牢を訪れるようになってた。その日が楽しみになった。

ただ消費するだけの日々に色がついた。

「また来たのか、お前も大概暇人だな」

随分慣れた口調でウエドネが憎まれ口を叩く。

口では荒い言葉を放つが嬉しそうに千里のいると思われる方向に顔を向けた。

体が少し大きくなり、窓を抜けることに時間を要すようになっていた千里はトンッと音を立てて牢内に入り込んだ。

「暇人で悪いのか」

「いや、俺よりは絶対に暇じゃねえからな」

「いてて…俺も随分成長したな」

「…窓、そろそろ通れなくなるんじゃないか？」

「そんなに心配そつな顔するな、俺が痩せればいい」

千里は年をとる。成長期真っ盛りの年齢となり、ウエドネの成長が止まっているのに対して彼はどんどん大きくなる。

この頃になると音だけでほとんどが判断できるようになっており、ウエドネは千里の細い腰を掴むと両手で持ち上げた。

身長はウエドネより少し低いだけだというのに、簡単に持ち上げられてしまうほどの軽さ。

「ちゃんと食べてんのかよ、縦ばっか伸びて重さはそのままだぜ？」

「失礼だ」

持ち上げられたことに対してそう告げると、千里は体を離してウ

エドネに隣に腰掛けた。

「ウエドネは変わらないな…歳をとらないのか？」

「不老の魔術を埋め込まれてる」

胸の辺りをトントンと叩いてウエドネは告げた。

シンの狂愛の結果であり、石化の両目と同じ方法で埋め込まれた。

「あまり驚かねえな、もしや不老って珍しくねえのかよ？」

「いや、珍しいよ。ただ、俺は他にも見たことがあるだけだ」

懐かしむような千里の口調には悲しさには似た感情が込められている。

聞いてはいけないことを聞いたのかもしれない。

「大切な人だ」

「大切…好きってことか？」

「意味を取り違えられると困るが、まあ似たようなものか」

見たことも、会ったこともないその人物に何故か腹が立つ。

仮に会うことができたとしても絶対に仲良くはやっていけない。

「じゃ、俺は千里が大好きだぜ！」

「突然だな…どうし…うわっ！」

いきなり飛びついてきたウエドネを避けることも出来ず、悲鳴をあげた千里は紙袋の腕の中に納まる。

背中に回された手は本気で締め付けていた。

「苦しい」

「おう、俺の愛の形ってやつだ」

「あー俺はそんな危ないことを教えた覚えはない。離せ！」

本当に呼吸が苦しいほどの力に千里は手足を動かして逃れようとするが、体格差がある為なかなか抜け出さない。

諦めたように脱力した千里を見てケラケラ笑っていたウエドネだったが、ふと笑みを消すと真剣な表情をする。

「ホント、ありがとな、千里」

「…どうしたんだ？」

「お前には感謝してる…何しても返しきれないくれえの恩がある。」

長く幽閉されて、それでも俺がおかしくならなかったのはお前のおかげだ」

そつと呟くと腕を解いて千里を解放する。

「俺はウエドネの恩師ってわけか」

「んで嫁な」

「…俺は嫁の意味を間違えてあんたに教えたかもしれない」

真面目な話を始めたかと思えばケロツといつものふざけた調子に戻る。

そんなウエドネに呆れた。勿論心底呆れているわけではない。

「いつか…ここを出よう、ウエドネ」

「兄貴から離れるってことか？」

いくらシンの愛情が辛かったからとはいえ、常に彼の庇護下に置かれていたことは確かだ。

兄から逃げるといふ選択肢は常にあり、そして常に選ぶことのない選択肢でもあった。

少し迷う。

(あんな兄貴でも俺の家族)

だが千里と一緒になら…できる気がした。

「…そだな、俺も千里と一緒に外が見てみてえ。白い街なんて何十年ぶりに見る光景だぜ？」

「期待しないほうがいい、変わっていない…面白みのない世界だ」

「それが面白いんだって、俺にとっては」

千里と歩く世界。

外。

想像するだけで明るい気持ちになれる。楽しそうだ、楽しいのだろつ。

薄暗い部屋からの脱却はきつと簡単なことではない。

「楽しみにしてる、早めにな…俺も外じゃ一人なんだ」

「うい、俺様が脱出するのを待ってな」

「ああ、約束だ」

不意に近くに千里の気配を感じる。

何事かと顔を上げると手をとられた。鎖がジャラリと音を立てる。千里の右手とウエドネの左手が絡まり、くすつと笑った千里は自分の小指をウエドネと合わせた。

指きり、この世界にはない風習だ。

「…っ、何やって」

「約束、守れよ絶対に。俺はもう破られるのは御免だ」

「おう」

悲しげに呟いた千里の顔が見たくなかった。

彼は一体どんな表情をしているのか：声だけで判断するには限界があり、長い間一緒にいた千里の顔を一目みたいという気持ちもあつた。

それはきつと許されないことだ。

「なるほど、禁忌を犯したか」

話を無言で聞いていた佐藤が理解したように呟いた。

辛そうに表情を歪めて紙袋が頷く。

「…俺の責任だ。兄貴に囚われた千里を…誘惑に負けて見た、俺の心の弱さだ」

石になつた千里を見た瞬間の絶望、忘れられない。

ただ一時の感情に負けて彼を見てしまい、その結果永遠に失うことになつてしまった。

「だから千里は俺が殺した」

「…それをお前が謝罪するのは間違っている」

突然佐藤は激しく咳き込むと、口から血を零した。

魔術を抑えられているというのは想像以上に辛いものらしい。

「ふっ…、皮肉なものだ、結局俺のせい…か」

「調子にのんなよ、てめえの責任じゃねえ」

「違わないな、お前をそこまで苦しめた男も、元を正せば俺によつて狂わされた一人だ。気づいているはずだ…お前の兄が俺を求める

理由、気づいているんだろう？俺が吸血鬼だということ」

「…兄貴の首にある傷口は、やっぱりてめえなのか？」

怒りを買うことを覚悟して佐藤は告げたのだが、彼の予想に反して紙袋は静かに尋ねた。

肯定の意味で首を縦に振る。

否定して欲しかった紙袋は額に手をやって低く呻いた。

「俺達の中には醜い獣としての本能がある。人の血は俺達にとって麻薬…一度噛み付いてしまえば食い殺すまでやめられない」

「…例外がてめえか」

「過大評価だ。俺だって他の愚族と何も変わらない…ただ、大きな過ちを犯して、それを死ぬほど後悔して努力した結果だ。絶対にはいえないが…途中で止めることができるようになった」

自嘲の笑みを浮かべて佐藤は自分の膝に視線を下ろした。

「『我等』は捕食したものに力を与える。本来はその力を得る生物はいないはずだ…我等は殺すまで食すことを止められないから」

「…兄貴は生き残った」

「…どれだけ謝罪しても許されることではない。俺の行動のせいでシンを狂わせ、お前の人生を狂わせた」

佐藤から与えられた力だが、それでも通常の人間にとっては到底抱えきれない力の量。

大きすぎる力はやがてシンを狂わせた。

その結果、すべてを兄に捧げる結果となってしまった紙袋がいる。同情、後ろめたさ。

そんな汚い気持ちで紙袋を助け、旅に同行させている自分が許せなく、そして正直なことを話す勇氣もなかった。旅が楽しい。

そう感じる資格も自分にはないのだと感じ、常に仲間から一定の距離を置いて過ごしていた。

(贖罪になっていないな)

すべては自己満足に過ぎないのだと気づいていた。

「化物、少し調子に乗りすぎだぜ」

「……」

(何を言われても仕方のないことだ)

すべての非は、そもその発端は自分の弱さにある。

紙袋は無理に体を起こした。

拘束に使われている鎖がジャラリと音を立てる。音に反応して苦しそうに、弱々しく佐藤が顔を上げた。

できるだけ佐藤に近付こうと紙袋は鉄格子のすぐ傍に体を寄せ

「…分かっている」

「違え…いいか、聞け！」

自分も痛めつけられ、体中がボロボロで意識を保っているだけでも辛いはずなのに、紙袋は佐藤の気を引くために声を荒げた。

「調子に乗るなよ化物、俺の生はてめえのせいでこんな風になっただんじゃねえ！」

「…！」

思わぬ言葉にさっと紙袋の目を見つめた。

犬猿の仲と認められ、絶対に性格の合わないはずの紙袋が慈しむような目をして佐藤を見ていた。

柔らかな視線に居心地の悪さすら感じる。

違う。

(俺はそんな風に言ってもらえる資格なんて)

「たえ力を手に入れなくても兄貴は魔力を持って…俺は違った。変わんねえんだよ…たった一人の力じゃ定めなんて結局変わんねえ。

たとえお前が兄貴に出会わなかったとしても、俺はこうなった」

「…それは」

「ああっ！もう面倒くせえな！」

ガシヤンツと強く鉄格子を叩いて紙袋は背中をそこに預けた。

当然佐藤に背中を向ける格好になる。

顔を見て直接言えるほど素直ではないと自負していた。

「お前のせいじゃねえ…お前が全部しよいこむ必要なんてどこにも

ねえんだよ」

呆然とするほかなかった。

自分の価値観を揺るがすほどの言葉、今までの考えをすべて破壊されるのと同じ発言。

薄汚れてしまったシャツ、紙袋の背中をじっと見つめる。

「…言わせんなよ、恥ずかしい」

照れ隠しのつもりなのか紙袋はガサガサと頭をかき乱す。

初めて感じる感情の奔流に戸惑いを隠せず、佐藤は唇を軽く噛むと俯いた。

「…俺は、お前から沢山奪った。お前から許しを貰った。どうやって報いればいい？」

「本当、てめえは素直じゃねーな」

「お前に言われたくはない」

「違いねえ、そういう時は素直に礼言つとけ！俺は別に見返りなんか求めてえねよ」

「…ありがとう」

使うことの少ない言葉。

ましてや使う相手が千里以外に紙袋になろうとは、少し前の佐藤ならば想像しなかつただろう。

「ありがとう、紙袋」

声が僅かに掠れたのはきつと疲労と怪我のせいだ。

「はっ、てめえが俺のことを名前で呼んだのは初めてだな」

分かり合えなかつたのではない。

分かるうとしなかつたのは自分だった。

14・静かな幕を

「本当、女の子に戦わせるなんて酷すぎると思うな」

「…はっ、はっ」

荒い息を吐いているのはマキナ、地べたに伏せつている。

その背後には同じように少し疲れた様子のシンがいた。鋏を見て余裕を浮かべることはない。

「酷か？…だがそれを容赦なく切り伏せるお前はどっなのだろうな？」

余裕なく喘いでいるマキナ、その腹は横一線に切り裂かれ、そこから肉が、血が止め処なくあふれ出していた。

床を真つ黒に染めるマキナを今思い出したように見下ろし、鋏は優しげな笑みを浮かべて膝をつく。

「ごめんね、痛いよね」

「ひっ…もー止めてよ！シン様に手を出すな！」

「うん、約束する、だから安心して」

「ホントか？」

「うん」

「…良か…った」

出血は人形にとっても致命傷になるらしかった。

鋏の約束を聞き遂げると安心したようにマキナは目を閉ざす。二人のやり取りを無表情で聞いていたシンは、予測していた通り飛んできた鋏を体を逸らして避けた。

黒い血に濡れた鋏は切っ先を地面に突き立てる。

「……」

「…気づかれてたんだ」

「外道が」

「なんとでも…僕は弱いから手段なんて選ばないよ。今更綺麗事なんて言えないしね」

息絶えたマキナに手を伸ばすと、彼女の腰に固定していたデウスと同じタイプの剣を抜き去った。

元々動かすにくい左手だ。剣を扱うのに向いているとは言えない。しかし、剣は利き腕なのか左手を使う。

「君と僕ってよく似てるよ、佐藤の言ったとおりだ。誰かに依存してないと生きられない……依存される側の紙袋とは正反対だ。一人が怖いんだ、君は縊ることで生きて、僕は命令を受けることで生きる。」

小さな剣をクルリと一周回す。

「さ、時間稼ぎさせてもらうね。どうせ僕は君に勝てないんだから、せめて佐藤達が駆けつけてくれるまで時間を稼がないと」

「一緒にするな雑魚が……私はウエドネを手放すつもりはない」

「鏡見てるみたいで気持ち悪いはずだよ。君が嫌悪感を抱く僕が君自分をよく見てご覧よ」

優しげに微笑むを、剣は剣を硬く握りなおし、強く地面を蹴ってシンの距離を詰めた。

「佐藤！」

移動した先にはまっすぐ続く廊下。千里は意識が覚醒するとすぐに駆け出し、両側に連なる牢屋の中を一つ一つ探して回った。

数個目の牢屋、その中に人の姿を見つけて千里は立ち止まる。鎖に両腕を縛られた状態でポロポロになった佐藤がいた。

「おい！助けにきたぞ……俺だ！千里だ！」

「……と？」

「え？」

「……すまない……千里、俺が……お前を」

（魔されてるのか？）

薄っすらを目を開けた佐藤だが、その目に生气はなかった。

千里は檻の戸をあけようと試みたが、鍵穴すら見当たらない。

「退いとけ、千里」

「！…紙袋！無事だったのか」
佐藤とは対照的に紙袋はあまり怪我をしていないようでぴんぴん
いしている。

ただ頭につけているはずの紙袋がなく、両目を布で隠しているだ
けだった。

「ついさつき脱出したとこだ。誰か近付いてくる気配すつから隠れ
てたが…マイハニーかよ」

「誰がマイハニーだ…どうやって脱出したんだ？」

「実戦してやつから…ちょっと向こう行ってる。危ねえぞ」

言われたとおり千里は紙袋の指差す先、彼の背後にある壊れた牢
に入る。

紙袋はそつと後の結び目をとき、十字の瞳孔を鉄格子に向けた。
黒い金属光がくすみ、灰色の石へと変化する。

「つたく…嫌な慣れだぜ。少し前までは生物しかできなかつたつて
のによ」

呟くとポケットの中からくしゃくしゃに折りたたまれた紙袋を取
り出し、それを頭から被った。

フォークを手を突っ込んでフォークを取り出すと鉄格子に向かっ
て振り下ろす。

石造りになつた格子は脆く崩れ去った。

「もう大丈夫だぜ千里、あとは化物に突き刺さってる戒めを何とか
すりゃあ枷は自力で引きちぎるだろ」

紙袋から許しが出るとすぐに千里は檻の中へと入り、飛びつくよ
うな勢いで佐藤にすがりつく。

冷たい体温が不安にさせた。

何度か名前を呼びながら揺さぶると、佐藤が呻いて一度目を閉じ、
はつきりとした視線を千里に向ける。

「…千里？どうしてここに」

「良かった…生きてる、生きてるんだな」

「…ふつ、俺が死ぬわけないだろう。それにしても…護るべきお前

に助けられるとは…駄目だな、俺は」

「バーカ、化物！てめえが駄目な奴ってのは周知の事実だつつの。どうだ？…その呪いは解けんのか？」

ゴホゴホと数回咳き込んでから佐藤は自分の胸を見下ろす。

光り輝く槍はいまだに彼の体を貫いたままだ。

暫く黙って戒めを見ていた佐藤だが、首をゆったりと横に振った。

「…力が足りない。肉体の修復に力を回しすぎた」

佐藤の言ったとおり、体がボロボロだったことに変わりはないが大きな傷は目立たなくなっていた。

出血も止まっている。

「力が足りない…ねえ、血が足りないの間違いじゃねえのか？」

「っ！」

紙袋の発言に佐藤は焦ったように顔を上げる。

千里を不安そうに見つめるが、幸いな事に千里は発言の意味を取り違えたようで首を捻った。

「佐藤…出血が酷くて貧血でも起こしてるのか？」

「…似たようなものだ」

言いつつフラフラとした足取りで立ち上がる。

胸に戒めが突き刺さったまま、壁を補助に使いながらやっこのこ
とで立つと、手首を引っ張って口元に持ってきて鎖を噛み千切った。
鋼鉄でできているはずの鎖が紙でも破くかの如くいとも簡単に切
り裂かれる。

「流石化物、で…どうするよ？」

これから…と付け加えて気だるそうに紙袋は頭を搔く。

「千里、鉄と魔王はどうした？」

「そうだ！魔王は敵の注意をひきつけるって飛び出して、鉄は一人
でシンの足止めをするって！」

「兄貴を一人で止めるつもりかよ！無謀すぎるぜ」

「ちっ、ひとまず俺は魔王を援護しに行く。紙袋は千里をつれて鉄
と合流しろ」

それはつまり佐藤が大勢の相手をするということであり、戒めの為たいして動けもしない。

だというのに戦いをするというのは無茶な話だった。

「無茶だ！その体でどうやって」

「行け！シンと戦おうと思うな…逃げる…いいな？」

抵抗する千里を紙袋はひよいと持ち上げると、佐藤に目配せしてから千里の使った魔術式へと駆け出す。

一人になった佐藤は背中を壁から離すと、魔力の残滓をかき集めて魔術式を組み上げた。

大蛇が尾を一薙ぎすると数人が吹き飛ばされ、壁に激突して動かなくなる。

しかし次々と湧き上がってくるかのように増える兵士に、魔王も疲労の色を見せていた。

その隙をつかれることで時折傷を負い、怪我が更に動きを鈍くさせてまた怪我が増える…という悪循環に陥っている。

「くそっ…どいつもこいつも、命が惜しくねえのか…よっ！」

再び尾を振るって周囲の敵をなぎ払うと、魔王は一息ついて体を大蛇の姿から人型へと戻した。

男の姿に戻って着地すると、再び包囲されたことを知って溜息をつく。

「世界を気遣う戦い方…なんて慣れないことはするもんじゃないな。そろそろピンチだぞ…千里」

「助太刀だ、喜べ」

聞き覚えのある声に魔王は振り返る。

荒い息について佐藤が立っていた。

戒めが胸に突き刺さったままだったが、何とか自力で立つ事はできるようだ。

だがとても戦いの補助になるとは思えない。

「鉄はどしたよ？」

「無事だ、千里に見られると困る…俺だけできた」

「血が足りてないってことか…ま、その辺に転がってるのから好きに頂いとけ。気絶してるだけで死んではいねえと思うぞ」

魔王が指差した先には大蛇の状態で薙ぎ払った兵士達の姿がある。

「助かる」

魔王が宙に作り出した太刀を手にして構える。兵士達が警戒する中、佐藤は倒れている一人の近くにしゃがみこんだ。

目の色が黄金色から真紅へ変化する。

断末魔の短い叫びが聞こえ、続けて何かを引き裂くようなおぞましい音が響いた。

「こえーな。さて…お食事を邪魔させるわけにはいかないから俺が相手をしてやるよ。佐藤！終わったら援護頼むぞ」

「ああ」

口元を真っ赤に染めた佐藤が一度肉片から顔を上げて返事をした。

「往生際の悪い、お前が私に勝つことはない。早く退け…それともまだ痛みが足りないか？」

蔑むような視線でシンは膝をつく鋏を見下ろした。

額を伝って目に入った血を拭くと、鋏は不敵な笑みを浮かべてシンを見返す。

「何度も言わせないでほしいな」

「…本当に理解できない」

心の底から不思議そうな顔をしてシンが首を傾げた。

「私の目から見てもお前達は歪んで見える。お前達は一体何だ？ 教皇の独裁から国を解放する義もない。仲間を思いやるという義もない。命を尊ぶという義もない…何のために動いている？」

「…あなたにそれを言われるとはね。でも流石…カリスマ性に見合った実力はあるってことかな。あなたの言うとおり、僕たちは世間一般では正義とは呼べない存在かな」

そこで血に塗れた顔で鋏は柔らかに微笑んでみせた。

「だから？つてかんじですけど」

「ふっ…くくくっ、なるほど、気に入った。お前達のことを私は気に入った。良いじゃないか…同じ穴の貉といわけだ」

「分かっていただけで良かった。ただ…敵の敵が味方とは限りませんよ」

「それも理解している。お前達がウエドネを私から奪おうというのならお前達は私の敵だ」

シンは怪我をして動きの鈍くなっている鋏に向かい、手加減などする気はないようで魔力によって槍を作り出すと、それを突き出す。悲鳴をかみ殺す鋏だが顔が痛みに歪んだ。

足の甲を貫かれて地面に縫い付けられることになる。

「敵の敵が味方ではないとすれば…同族嫌悪か。私はお前を無性に殺したい」

「奇遇ですね…僕もだよ！」

片足を動かささないままもう片方の足で地面を蹴り、鋏は手に持った鋏の切っ先をまつすぐシンに突き出した。

「本来…これは人を刺す道具でも切る道具でもない。それに向いてもない。こんなもので何故戦う？私をこんな玩具で殺せると思っただのか？」

胸に浅く突き刺さった刃は、しかし距離的に彼の肉を抉ることなく留まった。

内臓に達するわけもなくシンの服が僅かに紅く染まるだけだ。

「…君には関係ない」

「そうだな関係ない、死ね」

もう一本作り出した槍を振り上げ、今度は鋏の脳天目掛けて振り下ろす。

しかし横から直線を描いて飛んできた銀色のフォークによって槍は弾き飛ばされ、カランつと軽い音をたてて地面に転がった。

敵意のこもった目でシンはそのフォークを投げた人物を見る。

「ウエドネ、逃げ出したか」

「あいにく薄暗いところで暮らすのには飽き飽きしてんだ。それに…俺はもう、てめえの玩具でも愛玩動物でもねえ」

千里をできるだけだけシンの視線に曝さないよう、紙袋は彼を背中に庇うようにして立っていた。

投げてしまった巨大フォークの代わりとして、もう一本を紙袋の中から取り出して右手に持つ。

「千里、俺が正攻法で突っ込んでも兄貴には敵わねえ…悔しいけどな。俺なら…兄貴の隙を作り出せる。俺が注意を引いてる間に鉄と一緒に逃げる、俺もすぐ後を追う」

「分かった」

数回の囁きを交わすと、千里と紙袋は同時に動き出した。

千里はシンを避けるように迂回して走り出し、鉄を指す。

紙袋はまっすぐ突進し、シンを指す。

先に目的に到達したのは紙袋だった。シンの懐に入り込むと、今度は会話をするつもりも説得をするつもりもないようで、容赦なくフォークを上へ突き上げた。

体をそらしてそれを避けるとシンは微笑んだ。

「ウエドネが本気で私を殺しにきたのはこれが初めてだ」

「よくご存知だ…じゃ、これも知ってるよな。てめえが俺に施した改造の一つだ…俺は死ねない」

「よく知っている、だが全く問題などない。仮にお前が不死でなかったとしても、私は愛する弟を自ら壊すつもりなどないのだから」

「たいした余裕だな！」

数回突きを繰り返すがひよいひよいと…まるでどこに攻撃が来るのか分かっているかのように、シンはウエドネの攻撃をかわす。

「だが、過ぎた行為は叱らなければな」

服をはためかせてシンは紙袋から距離をとると、倒れて動かなくなってしまうマキナのそばに着地した。

黒い血が流れる床を見て愉悦の笑みを浮かべる。

靴先で血を引き摺り、円を描くとステップを踏むようにして不可

思議な模様を描き出した。

「私こそがこの世界の覇者、皇帝であり教祖、そして神である」

「自己陶醉か？…てめえの独白なんて反吐が出るんだよ！」

「愛しいウエドネ、反抗する気が起きぬ程苦痛を与えよう」

円からあふれ出した黒色の液体のような気体のようなものはシンの体にまとわりつき、彼を覆うよう黒色の楕円となった。

卵の殻に輝が入るよう亀裂が走り、黒い球体が割れる。

中から液体に塗れて誕生したのはおぞましい姿をした何か。

二桁に及ぶ数の手を持ち、黒い鱗のある化物。

まるで女神の像に悪魔が取り付いたかのように、顔の部分だけは女の美しい顔をしていた。閉じていた目が開く。

眼球は収まっておらず、虚ろな穴の中は真っ赤な光が灯るだけ。

幾つもの手を使って胴体を浮かせると、ライオンのような後ろ足で数度地面を蹴った。背中から数十対にも及ぶ翼が溢れ出す。

歪な生物だった。

「ウエドネ、ウエドネ、私のウエドネ」

濁った声がシンだったものから漏れる。口は動いていない…どこから放たれているのかも分からない音が反響している。

女神の真っ赤な瞳に見据えられ、得体のしれない恐怖が背中を這うのを感じながら尚も紙袋は感情を押し殺し、恐怖を表には出さなかった。

恐怖の代わりに笑ってやる。

「はっ…マジに化物になりやがった。てめえの歪んだ性癖が姿ににじみ出てやがるぜ！」

「私はウエドネの兄だ。ウエドネの家族、ウエドネの全て。ウエドネは私のものだ。ウエドネ、ウエドネ、ウエドネ、ウエドネ、ウエドネ！」

狂ったように名前を繰り返す。

最早人だったころの冷静な面影は見られない。感情の爆発。感情の赴くままに動く獣に等しい存在。

複数ある手の内一番長く太い手が振り上げられ、紙袋を叩き潰そ

うと振り下ろされる。

巨体に似合わず素早い動きに紙袋は避けることができず、フォークを突き出すことで受け止めた。

切っ先が掌に突き刺さり真っ黒な血が流れ出た。

黒い肌に黒い血が伝う。

真っ黒な中、モノクロの女神の中に一つだけ色が灯った。

紅い瞳から流れ出す血のように濃い赤をした液体。止め処なく流れ出すそれは床に水溜りを作った。

「あ、が。ギガガガがが。…た、ウエドネ！ヒヒヒヒて！」

最早意味を成さない言葉の連続。

無機質な言葉の羅列に無意識に嫌悪感を覚える。

ウエドネは嫌悪感に耐え切れずにフォークを引き抜くと、その勢いそのまま背後に飛び退き踏みつけから逃れた。

「…もう、人間じゃねえ」

呟くともう一本フォークを抜き出し、両手にそれぞれ一本ずつ握る。

「これがお前の望んだ未来かよ…兄貴」

悲痛に呟いて二本のフォークをシンの体を支えている腕に突き立てる。深く二本が突き刺さった腕は不安定に揺れ、引き抜くとその衝撃で千切れた。

「違うな、俺が狂わせた結果がこれだ」

飛んで駆けつけたらしい佐藤が自責の念に苛まれるように呟き、シンの背中に着地すると自分の体から引き抜いておいた光の槍を背中に、複数ある羽の付け根に突き刺した。

「あ？…あああああああああああああ！」

悲鳴をあげるシンは体を振って背中に乗っている異物を振り落とそうとし、佐藤は大人しくそれにしたがって背中から飛び立つと、紙袋の隣に降り立った。

続けて魔王も紙袋の隣に転移してくる。

目の前に突然現れた化物の姿となったシンを見上げ、驚いた様子

で目の上に手を掲げた。

「こりやすげえな。ここまで無茶な魔力暴走は初めて見たぞ」

「運び主になりかけている…早く片付けないと、本当にお前の兄は化物に成り下がるぞ」

「ああ」

三人は同時に散開し、三方向から攻撃を始めた。

佐藤は背後に回りシンが使ったような光の槍を次々と生み出しては突き刺していく。

魔王は側部に向かい佐藤と同じく魔術で攻撃を加えた。

前方にたった紙袋は痛みで絶叫する兄を見上げ、そつとフォークを構えると額に狙いを定めた。

「ウエドネ、ウエドネ、うえ、ウエウエウエウエ！があああああああああああああああああああああ、アアあ、ぐべえアアアアアアアアアアアアアア！あ…げっ、ブベエエアアアアアアアアアアア！」

「こんなことになるなら」

(どんな形でも良かったから)

「兄貴の傍にいればよかったな」

ごめん。

小さく呟いてから額に切っ先を突き刺す。

途端ピタリと動きを止め、シンは硬直の後その体をゆったりと横たえた。

重い音がして体が倒れる。

轟音と共に倒れた巨体は溶け出し、黒い気体となって霧散した。

その中に残されていた人影がゆっくり紙袋に手を伸ばす。

対峙した紙袋は最早何も言わない。

二度：言いたかったことは言った。

「ウエ…ドネ！お前は…私の！」

パンッ！

硬直して動けなかった紙袋、だがシンの手が届く前に乾いた音となり響く。

一度大きく体を痙攣させたシンは膝から崩れ落ち、両目を見開いたまま動かなくなった。

側頭部からどす黒い血が溢れる。

硝煙の立ち上る銃口、震える手でグリップを握っていたのは千里だった。

荒い呼吸を繰り返して倒れたシンを見る。

「…紙袋が、自分を責める必要なんてない。俺があんたの兄を殺したんだ…俺を責めてくれ」

銃口を下ろした千里は告げる。

倒れた兄を、動かなくなったシンを呆然と見下ろし、紙袋は暫く動こうとしなかった。

15・殺してくれてありがとう

先にバスに戻り紙袋の帰りを待つ。

怪我をしていた鉢は前方の席に座り、運転席の近くにある救急箱で応急処置をしているようだった。

鉢に付き合っつて魔王もその手伝いをしている。

二人の組み合わせは珍しく、魔王が甲斐甲斐しく人の世話を焼く光景というのはなかなか見られたものではない。

千里と佐藤はそれを見ながら後部に座る。

「千里、お前が責任を負う必要なんてない。あれは元はといえば俺の不幸が招いた不幸だ」

「佐藤は悪くない…佐藤が何をしたのかは知らないけど、きつとあの兄はそういう人間だったんだ。それでも紙袋は彼のことが大事だったのか」

「…どんなに手酷く扱われてもあいつにとってシンはただ一人の兄で、生まれてから暫くの間ずっと二人だった相手だ。歪んだ愛情だと分かつてはいても、結局紙袋はあいつと共に生きたかった」

佐藤の告白を聞いて信じられない…と千里は俯いていた顔をあげた。

「じゃあ…どうして紙袋は旅をしてるんだ？」

その質問をすることがおかしかったのか、千里がすることがおかしかったのか、佐藤はキョトンとした後苦笑した。

「些細な願いだ…千里、俺達は些細な願いのために自己を犠牲にする。当たり前を望んでいるだけだ」

「些細な願い？」

「紙袋の願いはお前だ…自分の目で千里を見たかっただけだ、そして続けてお前と共にいることを望んだ」

「俺？…どうして見ず知らずの俺に会うためだけに自分の望みを捨てたんだ？」

「…見ず知らずのお前に会うことが、俺にとっても紙袋にとっても願いだっただけだ。千里は全てを知る必要なんてない…最後の願いぐらい叶えてやらなきゃ魔王が報われない」

「魔王？…どうしてそこであのオッサンが出てくるんだよ」

「余計な発言だった。気にしないでくれ」

明らかに無理をして佐藤が微笑む。

その痛々しさすら感じる笑顔を見つつ、千里は自分だけが何かを知らないような疎外感に苛まれ、同時にもやもやした感覚を頭に覚えて

髪をかき乱した。

たいていの場合紙袋は夜になると千里の部屋に忍び込もうとし誰かに捕まり、その人の部屋で監視されて一晩を明かすことになる。

それ故に紙袋の部屋は存在しているがなかなか使われることはない。

珍しく紙袋は自室に籠り、窓を開けて弱い雨音をぼんやりと聞いていた。夜風が吹くと湿気を帯びた空気が室内に入り込む。

「……」

トントンと扉が叩かれる。

返事をする前に扉は開かれ、煙草を銜えたまま魔王が入ってきた。

「よ、今夜は静かだと思ったらこんな場所にいたのか」

「…んだよ？俺に何か用か？」

「傷心のとこ申し訳ねえけどな、少しお前と話がしたくなかった。付き合ってくれや」

何か言いたそうに口を開いた紙袋を無視して魔王は部屋に上がりこみ、扉を閉めると壁際に置かれた椅子に腰掛けた。

「てめえが俺に何の用だよ」

今すぐにも出て行ってほしい。そんな雰囲気を感じてもせずに無愛想に言い放つと、話すことはないともいう風に紙袋は魔王に背

中を向け窓の外に視線を向けた。

「少しお前に教えてやるうと思つてな、千里はお前のことを恨んで死んだわけじゃない」

「…知つたような口きくなよ。俺の何がお前に分かるんだよ」

「約束を破つたのはお前だ。千里はお前を恨まなかつたが…深く悲しんだ。だから次で捨てた…俺を」

「何のことだ…てめえ！一体何を知つて」

振り返つた紙袋はそこで言葉を失う。

悲しそうな眼差しをした魔王が一瞬、千里のように見えたからだ。背丈、格好、見た目、性格、何もかもが不一致だというのに、似通つたところなど何も無いはずなのにそこに千里がいるような気がした。

それが幻覚だと気づくのに時間はかからず、すぐに魔王の姿に戻る。

「開き直れとは言わないが、いつまでも自分を責めるな。少なくとも千里はお前を恨んじやいねえよ。知つてるからな、俺は」

「お前は誰だ？」

「野暮な質問だな、みんな大好き魔王様だよ。じゃ、あまりここにいっても迷惑だろうし、失礼するぞ」

「待て！」

ひきとめようと紙袋が手を伸ばすが、魔王の首に巻いているマフラーに触れた瞬間、それは煙のように飛散してしまふ。

さらさらと体が崩れ、最後に笑みを浮かべた魔王は消えた。

指の間をすり抜ける煙の感覚に紙袋は齒噛みし、部屋を飛び出すと魔王の自室へ駆けた。

鍵のされていない扉を押し開けるが誰もいない。

「…一体何者なんだよ…お前は」

呟きは薄暗い部屋に響き渡つた。

雨が降っていて、傘をさしていない魔王の長髪を容赦なく濡らし

ていった。小雨とはいえ長く外にいればびしょぬれになる。

髪の手先から雫が滴り落ちるのを見て魔王は溜息をついた。

口に含んだ煙が宙に舞い、雨粒と混ざり合って消える。

「厄介だな…感情移入のしすぎで誰が誰だか分からなくなる」

（だからって俺があいつって実感は出来ないんだが）

雨粒が火種に当たって煙が止まった。魔王は火の消えてしまった煙草を放り投げる。

宙に舞った煙草は長い間落下して、地面に落ちると同時に激しい炎を上げて消し飛んだ。

彼は鉄塔の頂点に立っていた。

雨の多いこの世界、もう一つ特徴を挙げるとするのなら、鉄塔が多いということだった。

ライフラインがしっかりとしているという証明なのだが、規則正しく並ぶ塔は芸術的ですからある。

「なあイグレア、俺はどうしたらいいんだろうな？」

自分で、いや、過去の自分が選んだこととはいえ随分酷な選択をしたものだ…と魔王は嘲笑した。

自分で問いかけているが、本当はその答えなどとうに出ているはずだった。

最初からそのつもりだった。自分の存在がどれだけ儚いものなのか理解し、それを覚悟して今回の旅にも同行した。

自らの世界を滅ぼすという、おそらく千里のもっとも嫌い行為で「ただで消えるつもりはねえよ、イグレア。俺とお前は無理だったが、せめてあいつらだけでも幸せにさせてやろう」

「客人の多い日だな…って千里！夜這いか！」

「違う」

また魔王のような厄介な客人だろうか…とうんざりしながら紙袋が部屋の戸を開けると、そこには待ち望んでいた本物の千里がいた。いつもの反抗的な態度がなく、どこか申し訳なさそうに表情が沈

んでいる。

急いで部屋に招き入れると千里はベッドに腰掛け、紙袋は窓枠に飛び乗ると腰を下ろした。

「んで？千里が来るのは大歓迎なんだが何の用だ？」

「…その、謝りたかった」

「謝る？」

謝られるようなことをされた覚えがなく、紙袋は思わず妙な声を上げて尋ね返してしまう。

すると千里は神妙に頷いた。

手が僅かに震えているのに気づき、しかしそれを指摘することはせずに紙袋は袋の中で僅かに目を細めた。

「どした？」

「あんたの…兄を殺した」

「……」

そのことか、と紙袋は気まずさを誤魔化すために天井を見上げてみる。目が機能していないため意味はないのだが。

「気にするなって言うのもおかしいと思うんだが、むしろこっちが礼を言いたいぐれえだ」

「家族を殺されて…礼？」

「…「家族を殺されて礼を言うのか？」

いつか、どこかで聞いたような言葉が脳裏を過ぎり不思議な感覚に陥るが、ここで意識を飛ばしてなるものか…と千里は首を振った。

「俺は兄貴に依存されつつ…心のどこかでこっちからも依存してた。だからきつと俺は兄貴を殺さないといけなかった。けど、できねえし…家族殺しなんてしたくねえよ」

「だけど」

「だけど」

「だけどもクソもねえよ、俺は千里が思うよりずっと弱虫だ。だからな…お前は優しいぜ千里。俺に代わって兄貴を殺してくれた。俺に家族殺しを背負わせないようしてくれた。人を殺すことに慣れてねえお前が、俺のために自分の手を汚した」

紙袋は軽く窓枠から飛び降りると、ベッドに座る千里の前に立ち、屈むと彼の膝の上に置かれ、震えている手に手を重ねた。

体温が伝わってくる。

「流石、俺の嫁」

「…台無しだ」

いつもの口調でそう呟く千里の手の震えはいつのまにかなくなっており、口では紙袋の悪口を言いながら微笑んでいた。

「家族か」

「俺も嫁の親御さんに挨拶してえな。千里に家族は…あースマネ」
途中で自分の質問の愚かさに気づき、紙袋は口を閉ざした。

しかし千里は苦笑すると気にしないでくれ…と前置きしてから離し始める。

「俺にも生みの親はいた。俺の角を気味悪がつて捨てたけどな。だけど…俺にはあの人たちが家族だとは思えなかった。変な言い方かもしれないけど、血は繋がってるはずなのに魂は繋がってないような…赤の他人つてかんじだ。だからな、今一緒に旅してる佐藤や、紙袋、鋏…それに魔王が家族に一番違い感覚なのかもしれない」

「どうして化物が筆頭にあがるんだよ。ま、擬似家族つてやつかもな…そこは認めるぜ。千里が俺の嫁で鋏は千里の母親、魔王はただのオッサンで、化物が千里の父親だな。うちの娘は嫁にやれん…的な立ち位置で、俺と千里の恋路を邪魔するわけだ」

「賑やかな頭の中で何よりだ」

「酷え！」

ケラケラ笑いながら紙袋が指摘すると千里もつられて笑う。

「ま、あくまでも擬似…だ。本当の家族つてのは…俺みてえにあんな残酷な兄貴でも繋がってるっ…か、もっと違うもんがあるぜ」

お前にも分かる日がくるといいな。そう呟いて紙袋は千里の頭を撫でた。

「客人とは珍しい…というか、あなたが来ること自体珍しいわね」

女は予期せぬ客人に驚き、そして歓迎の意を表して両手を広げた。女の歓迎を受けても客人、髪で目を覆い隠した男は何の感情も見せない。まるで心をどこかに置き忘れてきたかのようなようだ。

真っ黒な髪に衣服を身に着けていない上半身。腰の辺りから翼が生え、それは手首へ繋がって蝙蝠のように翼を構成していた。

その姿で彼が人間ではないことが分かる。

「動く」

「…これ以上見て見ぬふりはできないってことね。彼が怒るなんて珍しいこともあるのね…長く生きてきたけど、彼が本気を出したところなんて見たことないわ」

「鴉に処罰を…貴殿はどちら側に？」

「私はいつも通り、どちらにもつかないわ。中立の立場かしらね…
こういう立場もないと困るでしょう」

「器用だ」

女の返答を受けて男は呟く。

女は苦笑した。

「確かにそうね、だけど最後まで中立の立場を護り続けるとは言っていないわ。状況を見て…変わるかもしれない」

妖しく笑った女を見て、男は僅かに俯いた。

しかし感情を表に出す事はなく、相変わらずの無感情な声で短く言葉を放った。

「願う、貴殿が我等の敵にあらぬことを」

「そうね、私もあの子を敵に回したくはないわ」

異世界でどんな出来事があったとしても、館に戻ればすべては異世界の出来事、揺るがぬ場所だと信じていた。

だがそんな館で異変が起こり千里は困惑していた。

「魔王がいらない？」

朝起きると珍しく千里より先に紙袋が起床しており、魔王を探していた。

彼が魔王を探している…というだけでも充分異常なことではあるのだが、更に魔王の姿がないというのは重ねて異常であった。

出かけるときにも一言告げる。

そうでなかったとしても紙袋の話では一晩姿を見ていないという不安が胸を過ぎつて縋るように佐藤を見ると、彼は難しい顔をして紙袋の話聞いていた。

「…昨晚、何かなかったのか？」

至極まっとうな質問を佐藤がする。

昨晚からいなくなっているのだから、その直前に何かがあったと考えるのは至って普通のことだ。

思い当たる節があるようで紙袋は言い辛そうに黙る。

「…昨日の夜、あいつと話した。俺の過去のこと知ったような口きくから苛々して、だけどあいつは意味分かんねえことぬかして」

「どんな話だ？」

千里が問いかけるがそれ以上紙袋は話したくないらしい。

肝心の内容が分からなければ意味がない…と思ったが、佐藤は何があったのか大体の察しがついているらしい。

「なるほど、大体理解した。少し頭を冷やせば戻ってくるだろうが…探しにいくか？」

乗り気ではない様子でとりあえずといった感じで佐藤が千里に問う。千里の意思を尊重してくれるらしい。

(勿論探しに…)

千里がその意思を口にしようとしたとき、激しく扉の叩きつけられる音がして錠が部屋から出てきた。

怪我をしている額にガーゼが当てられている。

「佐藤！」

「どうした？休んでいると」

「違う！…あいつが！あいつが」

「まさか…」

錠からいつもの穏やかでのんびりとした雰囲気が消えている。焦

燥感にさいなまれているように額に冷や汗を浮かべ、その尋常ではない事態に佐藤も気づいたようで鋭い目をしていた。

話についていけているのは二人だけらしく、紙袋もポカンとして
いる。

「事情が変わった…今すぐ魔王を連れ戻す。まさかこの世界にいるとは…迂闊だった。まさか千里のいる場所と同じ場所に」

不幸を嘆いて悔しそうに佐藤はひとりごち、すぐにマントを翻して外に飛び出そうとする。

「待てよ！」

何の説明もなく置いていかれそうになり、慌てて千里は佐藤の腕を掴んだ。

千里のほうが力は弱い、佐藤は絶対に千里の手を無理矢理振り払ったりはしない。

「俺も行く、なんだか分からないけど緊急を要するってことだけは分かった。事情は後で説明してくれ」

「俺から離れるな、それと…全部を説明できるとは限らない」

それでもいいんだな？と佐藤が視線で訴えかける。

千里は深く頷き、握り返された腕が引かれるままに佐藤を追いかけた。

鉄の顔色は悪い。

まるで体中の血液を奪われてしまったかのような。青白い肌はシンの戦いで負った怪我のせいだけではなく、何かに怯えているようにも見え、千里を追おうとした紙袋は引き返す。

しゃがみこんで手すりに寄りかかる紙袋に視線を合わせる。

「おい、大丈夫か！」

「あんまり…大丈夫じゃないかな」

弱々しく笑った鉄は紙袋の肩を借りて立ち上がる。

「ここまで弱つてると張り合いもねえな。どっか痛むのか？」

「大丈夫…体は全然問題ないよ。ただ…きつと怖いんだ」

「怖いだ？何が？」

「自分かな」

「…俺は哲学的なこととかは分かんねえぞ。そういうばかげた話なら佐藤にでも」

「違うよ、本当に自分が怖いんだ。そのままの意味…別に何を示してるわけでもない」

彼の首には一度千切りとった鋏が再び有刺鉄線によって繋がれている。

シンとの戦いで一度首に食い込んだ鉄線の傷痕は簡単に癒えることなく、今尚痛々しく紅い傷痕として残っている。

自分の体を傷つけるような格好をする鋏、紙袋すらも理解できず、その行動に戸惑いを感じていた。

「大丈夫：大丈夫だよ。僕は自分で止めることができる。僕が選んだのは黒い鳥だ」

「だからさつきから何を！」

「紙袋」

紙袋の問いを遮って名前を呼ぶ。

呼ばれた紙袋は言葉を遮り、いくらか平常心を取り戻した様子の鋏に視線を向けた。

肩から離れ、一人で鋏は立つ。

もう大丈夫なのか、と紙袋が手を伸ばしかけるが、その手は挟みによって遮られた。

「バスへ…急ごう、もうここは安全じゃないんだ。戻って来られないかもしれない」

「佐藤達がまだだ」

「勿論置いていくつもりなんてないよ。先に行つていつでも出せるようにしておくんだ。行き先は多分、佐藤が知ってる」

16・鷲の鴉狩り

佐藤の表情に余裕がない。

電信柱の多い道路を水溜りの水が跳ね返ることも気にせず駆け走る。足がもつれるのではないかと心配になるほどの早さで千里は佐藤に引かれるまま走った。

帽子が風に飛ばされそうになり、千里は佐藤と繋いでいないほうの手で頭を押さえて風の音に負けないように叫ぶ。

「魔王の居場所は分かっているのか？」

「大体の方向しか分からない……上がるぞ、手を離すな！」

「上がるって……うわっ！」

一歩が大きくなり、地面を強く蹴ると佐藤は背中に翼を生やし、瞬時に空へと翔け上がった。

手を引かれた千里は佐藤に引き上げられ、抱きかかえられた。

反射的に暴れて腕中から逃れようとしたが、眼下に広がる景色に背筋が凍り、反対に佐藤にしがみ付いてしまった。

くすくすと笑った佐藤は雨粒が千里の頬を濡らしたのに気づき、すっと上空を睨みつけた。

灰色の雲に覆われる空、雨粒が動きを止める。

時間を止めるなどという芸当ができるはずもなく、雨粒が停止しているのは佐藤の周辺だけのようだ。

不可思議な現象にはもう慣れてしまった。

上空に留まり、佐藤は地上へ視線をめぐらせる。人は見えるが豆粒程度にしか見えない。

こんな状況で、しかも悪天候の中人を見分けるということは出来ないように思えたが、佐藤の黄金の目はしっかり人を判別できているようだった。

見つけたようで、一定の部分で目を留めて急降下を始めようとした瞬間、目を両手で覆われて動きを止める。

突然視界が真っ暗になったことに佐藤は動じず、犯人が分かっているようで僅かに不機嫌なオーラを出した。

目を覆われていない千里は正面に突然現れた人物の名を呼ぶ。

「魔王！」

「よう千里、どうして佐藤なんか抱えられてんだ？」

ひょいっと佐藤の目から手を退けると魔王は千里を奪い取って抱えあげた。

空中でひょいひょいと移動させられては堪らない。千里が非難の目で魔王を見ると彼は悪戯をした子供のようにならう。

「俺のことを遠くから探してる奴がいたもんでな、ちょっと驚かせたやろうと思って」

「突然視界を奪うような真似をするな。危うく殺すところだった」

「で、どうして俺を探しに？プチ家出って禁止だったか？」

「どうやら魔王は本当に家出をしていたらしい。」

プチとつくところに、彼がそのうち帰ってくるつもりであったことが窺える。

「状況が変わった、この世界は危険だ…逃げる」

「ん？珍しいな、お前の言っていることが理解できない。彼の知らない隠し事がまだあったのか…佐藤」

「…俺はすべてを話したわけじゃない。それに知っていることもあるはずだ。この世界には鉄の関係者がいる」

「鉄の？」

少し思い悩む風に魔王は顎に手をあて、やがて思い当たる人物がいたのかはっとして目つきを鋭くした。

「事情は分かった。大のおっさんが家出なんてしてる場合じゃねえってことか」

「いや、俺には全く分からないんだが」

完全に話に置いてけぼりになっている千里が非難するつもりで呟くと、佐藤は申し訳なさそうに千里に視線を合わせる。

「この世界は最早安全ではないということだ…千里、元いた世界か

「からお前を引き離すことを許してほしい」

「この世界を出るってことかよ」

「戻れないかもしれない…ただ、頼るあてはある。力を貸してくれるかは分からない気まぐれな奴だが聡明だ」

「佐藤の知り合いが聡明ねえ…なんかまた変人が出てきそうだが、今はそいつを頼るっきゃねえってことか」

頷くと早速佐藤は千里と魔王を連れて館に戻るうとする。

だがすぐに体を跳ねさせ、鋭い眼光で振り返った。

「……」

いつの間にこんなに近くにいたのだろうか？と千里は恐怖を覚える。すぐ後、数メートル離れた位置に前髪の長い男が立っていた。腰と手首の間に布が垂れており、それは良くみると翼に見える。

無言で立っているだけだというのに何故か恐ろしく、シンなど比べ物にならないほどの違和感を放つ存在だった。

何故そこにいるのか？

何故存在しているのか？

そのことすら不自然な男。

「エリカ…お前もか」

「分かっていたはず鴉、僕は鷲の味方」

鴉というのはおそらく佐藤のことだろう。偽名を使っていると聞いていた。佐藤も偽名の一つだと。

だとすれば鴉も偽名の一つなのだろう。

黒い鴉に対を成す鷲が誰なのかは知りえることが出来ない。

「なんだか知らないが不気味な奴だな、佐藤、こいつぶった切っていいんだよな！」

「駄目だ！」

好戦的な態度をとる魔王を珍しく佐藤が咎めた。

怒鳴り声に驚いた魔王の視線に気づき、平静さを作ると今度は静かにゆっくりと繰り返す。

「駄目だ…逃げる」

「佐藤？」

「エリカの格は俺や千里、それに魔王と同レベルだ。シンを相手にするのはわけが違う…本当に一人や二人、犠牲を覚悟して倒すことになる。それにこいつを倒せたとしても」

「僕はただの時間稼ぎ…鷲が来る」

(また鷲)

誰なのか千里には分からなかったが、それでも佐藤がその人物を恐れているのか、嫌っているのか…とにかく会いたくないと思っているということは察することができた。

佐藤が突然回れ右をして宙を駆け出す。魔王の手を引いての全力飛行だったが、気がつけば前に追い抜いたはずのエリカの姿があった。

「時間稼ぎ」

「俺達の足止めが目的…か、魔王、先に館へ戻れ」

「あー、お前は？」

「すぐに追いつく。俺がいなければバスが出せないだろう？」

「オーケー、んじゃ千里、ちゃんと掴まってるよ！」

「ちよっ」

佐藤一人をおいていくのが不安で千里が何かを言いかけるが、急激な魔王の動きに舌を噛みそうになって黙り込む。

魔王の肩口から首を捻って後を振り返った。

佐藤の背中がどんどん遠くなっていく。

黒いマント、黒い髪、その後姿と宙に浮かんでいる姿が近視感を呼び覚ました。

千里の中で以前フラッシュバックするように頭に浮かんだ光景、空に飛び立つ黒い鳥の光景が被さる。

飛んでいったのは鳥だったのだろうか？

「再会を祝って戦ってやりたいところだが、俺は鷲に会いたくない。だからお前と戦うつもりはない」

千里が去つたのを確認すると佐藤はエリカにそう告げた。

エリカは魔王と千里を追うことはしない。彼の目的はあくまで鷲と佐藤を合わせることで、つまりは佐藤の足止めだった。

彼の仲間などに興味はないのだろう。

「無理」

「…口数が少ないのはお互い様だと思っていたが、どうやら俺は変わったらしい。なるほど、確かに取っ付きにくいな」

「鴉は変わった」

「俺の望んだ変化だ」

「僕らは望まない」

佐藤が身を翻して急降下を始めると、その隣に追いついたエリカが並んだ。体が白色の炎に包まれ、その姿を人から巨大な蝙蝠へと変貌させる。

佐藤は隣を滑空するエリカを蹴り飛ばすと、距離をとって両手を合わせ、離してできた空間に光の槍を生み出した。

分裂した小さな槍が次々とエリカに襲い掛かるが、エリカは素早く体を震わせて槍を紙一重で避けた。

彼が回避行動に専念している間に佐藤は術式を組み上げ、胸の前に浮いた文字の上に、指を少し噛んで溢れた血を落とした。

紅い血が術式に触れると同時に灰色の液体へと染まり、瞬時に気化して何倍にもその面積を増した。

煙幕だとエリカが気づいたときには周囲は煙に包まれ、相手の姿を目視することが不可能になっている。

「しくじった」

ポツリと粒いて蝙蝠が巨大な翼を大きく羽ばたかせると、風が起こって煙が散った。

良好になった視界、しかしすでに佐藤の姿はない。

蝙蝠は人の姿に変貌し、無言で先ほどまで佐藤のいた場所を睨む。その顔は相変わらず無表情であったが、ほんの少し悔しさがにじみ出ている。

「ごめん、逃げられた」

「構わないよ」

凜とした、佐藤より少し高い声が響く。

エリカの少し後の宙に足場がないというのに立っている男は白い髪、白い目をした青年だった。

浮遊する為に使っている翼は白い色をしている。佐藤とも、エリカとも違う色、それが彼が形容し難い違和感を放っている理由なのかもしれない。

ストレートの髪は長く、背中の中ほどに先端が揺れている。後で一つに束ねており、白い衣装もあいまって彼は全身白いように見えた。

「鷺、どうするの？」

「我等を敵に回した鴉の頼れる人なんて分かりきってる。行き先の検討は大体つく。問題はそこの主がどう動くかだ」

「主？…ああ、鳳仙」

「少し様子見といこう、エリカ」

鷺：佐藤の恐れていた人物とはおそらくこの白い青年のことなのだろう。

エリカがどこか慕うような、従うような素振りをとる。

「逃げられると思ったら大間違いだよ、鴉」

17・気遣い〓隠し事

女は深く椅子に腰掛けて召使いのような立場にあるのだろう…彼女に寄り添う少女と談笑を楽しんでいた。

黒い服に身を包んだ白髪の女性、威厳のある…しかし気難しそうな印象は全く受けない女はどうやら仕える側が主人だというのに気軽に会話ができるほど、人望の厚い人物のようだった。

燭光だけが頼りの広い部屋、そこに楽しそうな声が響く。

「あら、それは大変ね」

「そうなんです…だから私はやめといたほうがいいって言ったんですけど、ローザったら好奇心は人一倍だから」

「それで？憧れの王子様はどうだったのかしら？」

面白そうに女性が尋ねると、召使いは肩をすくめた。

「全然駄目、ハズレみたいです」

「あら？…理想には至らなかったのかしら？」

「いえいえ！とんでもないです。凄く綺麗な人でした…ローザも一目ぼれしちゃうぐらい。でもですね…ちょっと冷たくて」

「それは大変、今回は苦戦しそうですね」

会話を楽しんでいた女だったが、ふとその顔から笑顔を消した。

突然表情が消えたことに驚いた召使いがどうしたのかと尋ねる。

声をかけられたことで女性は思考の海から帰ってきたようで、はつとすると微笑んだ。

「大丈夫よ、ただお客様みたいね」

「大変！来客があるのでしたら先に教えていただければ！」

「予定外のお客様よ、フェリン、少し下がっていて」

「はい」

召使いはフェリンという名前のようだった。女に言われて彼女の椅子の後に控えるように立つ。

すると女の数メートル前の空間が擦れ、突如バスが出現した。砂埃が舞い、エンジン音が暫く続いて途切れる。

「！…な、何これ！」

「フェリン！…下がって」

「は、はい」

バスの扉が開いて最初に黒い男が歩み出る。

俯きながら女の前に立った男、佐藤はそつと顔を上げて女の視線を真正面から受け止めた。

「久しぶりだな、鳳仙」

「こつやつて面と向かってまともな会話するのは初めてね、鴉」

鳳仙と呼ばれた女性は妖艶に笑った。

突然異常な方法で出現した佐藤にもまったく驚いていないようだ。それどころか僅かだが面識があるようだった。

「お嬢様、お知り合いですか？」

「フェリン、お客様と話がしたいわ。簡単でいいから晚餐の用意、できるかしら？」

「は、はい！…えっと、お客様の人数は？」

「俺に食事は要らない」

「では4人ね」

バスの中にいるはずの人数も把握しているようで、鳳仙がそう告げるとフェリンはバタバタと騒がしく部屋を飛び出した。

フェリンがいなくなったのを見計らって鳳仙が椅子から立つ。

「とりあえず歓迎しておくわ…ようこそ私の世界へ、鴉の友人さん達も」

気づかれていたことに気づくと佐藤はバスに向かって手招きをした。最初に顔を出したのは千里で、次に魔王、鋏、紙袋と続いた。

「佐藤の…知り合いか？」

「佐藤、鴉のことね。知り合いと呼べるほど面識があるかは妖しいけれど、そうね。あなた達は？」

「僕は鋏…それにこつちの威嚇してるのが紙袋で」

「俺が魔王だ、よろしく頼む」

続けて千里が名乗り出ようとしますが、それより先に鳳仙が口を開いた。

「あなたは千里君ね、会えて光栄だわ」

「どこかで会ったか？」

「いいえ、ただ…よく知っているわ」

個性的な面々を見ても、千里の角を尻尾を見ても鳳仙は少しも動じることはせず全て受け入れて微笑む。

おかしい…と佐藤は鳳仙の笑みを疑うように見つめた。

それから隣に立つ魔王の耳元に近付き、千里達に聞こえないように注意して囁き声で尋ねる。

「記憶は？」

「いや、ないぞ。千里とあの女は会ったことがない…はずだ」

魔王も少々混乱しているようだった。

「私は鳳仙、詳しい話は後で…とりあえずこちらで待っていて」
黒いコートを翻して鳳仙は部屋の奥にある扉へと消えた。自分がいればしにくい話もあるだろう…との配慮だった。

鳳仙がいなくなると同時に紙袋が詰めていた息を吐き出した。珍しくずっと緊張でもしていたのかもしれない。

そう思って千里が驚いた表情で紙袋を見る。

「あの女、俺は苦手だぜ」

「紙袋の勘もたまには当たる」

紙袋の漏らした感想を佐藤が肯定した。つまり紙袋が鳳仙に対してなんらかの嫌悪を感じたことは正しいこと…ということだった。

「あの人は…異世界のことを知ってるのか？」

「僕らのことみても驚いてなかったよね、もしかして鷲と同じだったりする？」

「その通りだ…彼女も我等、つまり俺と同じ種族に当たる」

余程気に入らないのか紙袋は魔王の背中を舌打ちしながら殴る。

「いってえな、俺に八つ当たりするなよな」

「俺にとってお前はサンドバック程度の認識でしかねえ」

「酷いな、どうしてそこまで嫌われてるのか覚えがないんだが」

「千里に近づく奴は俺のライバルなんだよ！」

「……千里も大変な奴に好かれたな」

心から同情する、という目で魔王から見られ、千里は返す言葉なく脱力した。

「一体何を勝手に競ってるのか知らないけど、本人の前でそんな失礼な態度はとらないようにね、紙袋」

「どーだかな、保証はできねえ」

フツと紙袋の言葉を聞いていた佐藤が笑う。

まるで嘲るような、莫迦にするような笑みに紙袋が反応しないわけもなく、噛み付くように佐藤に詰め寄った。

「んだよ？」

「彼女の機嫌は損ねないほうがいい。ああ見えて実力は上の上……俺すら叶わないかもしれない」

「へえ、あんなに美人なのに強いのか」

とてもそうは見えないと魔王が感心したように呟く。

鳳仙の体は細く、とても華奢だった。威厳はあったがそれは別の話だ。女性らしく細い体つきで強いというのは驚くべきことだった。

「怒らせると怖えってか、化物そっくりだな」

「お前は俺を怒らせたいのか」

相変わらず佐藤を挑発するような発言しかない紙袋を見て、千里は大きく溜息をついた。

前回の世界で少しは仲の進展があったかと思っただが、結局二人のやり取りはあまり変わっていない。

変わったところといえば佐藤が紙袋のことを名前で呼ぶようになったことと、紙袋も名前で佐藤を呼ぶことがたまにある程度だろう。大概化物という呼び方を使っているためあまり変化は顕著でない。

喧嘩をするほど……という言葉もあるのだが。

「とりあえず紙袋は人を怒らせる天才だからね、駄目だよ？いくら

綺麗だからって初対面の人にセクハラは」

「ふざけんな！俺の眼中にあるのは千里だけっ！」

走りこんできた魔王からドロップキックを受けて紙袋は言葉半ばで吹っ飛ばされる。

久々の攻撃に油断していたようで、受身をすっかりとると口元を拭いて悔しそうな表情を浮かべた。

「くっ不覚！」

「愛の鞭ってやつだよ、紙袋が鳳仙さんに消し飛ばされちゃったら極少だけ悲しいからね」

さらっと酷い発言を鉢は涼しい顔をしてやってのける。

「千里お…やつぱお前だけだ俺の癒しは。腹黒鉢も極悪魔王も冷徹佐藤も駄目だ、こいつら」

「あー」

しがみ付かれた千里は抵抗するが紙袋の力が予想以上に強いため抜け出せず、仕方なく頭を撫でた。

といつても袋に覆われているため紙の感触しかない。

ガサガサと無機質な音が物寂しく響くだけだ。

「いい加減千里から離れる、変態が」

怒気をはらんだ佐藤の声が千里の上から降ってきた。佐藤は千里の背中に回りこみ、そこから手を伸ばして紙袋を引き剥がす。

剥がすときベリベリと音がしそうな程強いしがみ付きだった。

「んで？佐藤：説明しろ。襲ってきた連中は誰だ？」

千里達がずつと気になっていったことを魔王が質問する。
すると佐藤は顔を曇らせた。

「あいつらの狙いは俺だ…巻き込んでしまつて悪いと思つている」

「どうして佐藤が？…鉢は何か知ってるのか？」

鷲という言葉を最初に口にしたのは鉢だった。

千里、魔王、紙袋の知らないことを鉢が知っていることは明白であり、問い詰められても鉢は笑みを崩さず黙り込んでいる。

その笑顔が偽りのものであることぐらい千里にも分かった。

どうやら鉄は無言を貫き通すようだった。

「ケツ、だんまりかよ！」

「俺と同じ種族だ…鷲も、エリカも」

「そういえば鳳仙さんのこともそう呼んでたな、佐藤：我等って何だ？」

「っ！」

千里が「我等」のことについて佐藤に質問する。首を僅かに傾げる千里の姿を見て佐藤は息を呑んだ。

（また：同じ）

「…佐藤？」

「いや、大丈夫だ」

「大丈夫って何がだよ？お前、本当に大丈夫か？」

紙袋ですら佐藤の異常な様子を感じ取って僅かに心配そうに覗き込んでくる。

今顔を凝視されれば何かが曝け出されてしまいそうで、佐藤は顔を背けて表情を隠した。

「我等について…話すつもりはない。知る必要もない」

「知る必要がないって、お前。俺はともかく千里には関係ある話なんじゃないのか？」

「俺の問題だ」

佐藤の返答に憤りを感じたのは紙袋だけではないようで、千里すら少々眉根を寄せて何かを言いたそうに口を開いた。

最初は心を閉ざして自分のことを滅多に語るうとはしない佐藤だったが、最近は自分のことも少しずつだが話すようになってきた。

それを心を開いてきた…という風に思っていた千里にとって、抱え込むような佐藤の言動は気に入らないものだった。

千里が反論する前に扉の開く音がした。

それにより口を閉ざすことになるが、入ってきた人物：鳳仙は部屋の空気が重いことに気づき、少し申し訳なさそうな顔をする。

「ごめんなさい、お邪魔だったかしら？」

「いや…構わない」

真つ先に口を開いたのは佐藤、これ以上千里に問い詰められることをよしとしない彼は、第三者の介入によって話をうやむやにした。「食事の用意が出来たから、そこで詳しい話は聞いわ。短時間で作ったものだけど…うちのメイドは料理が上手なのよ」

「へえ、そりや楽しみだ。な、紙袋」

「なんで俺に振るんだよ…知るかよ」

自信があるのか鳳仙はまるで自分のことのように誇らしげに告げ、それから部屋を出て行った。

沈黙が嫌なのか佐藤はそれに続いて出て行ってしまふ。呆れたように肩をすくめた魔王は千里に目配せすると、佐藤を追った。

「申し訳ないけど千里、今回の件について僕から話すことはないよ。佐藤の問題っていうのは事実だし…僕にも関わりはあるけど全てを知ってるわけじゃない」

「何も全部説明しろって言ってんじゃねえだろ。てめえの知ってることを教えるってだけじゃねえか」

「あまり思い出さしたくないし、それに我が俣になるけど好き好んで話したいことでもないんだ。ごめんね」

「缺が謝る必要なんてないだろ」

(誰も悪くない)

語りたくない過去があるというのは当然のことだ。それを旅に参加したばかりの千里が無理に聞き出す…というのはいけない気がした。

だが、それでも隠し事をされて気分が良いはずもない。

千里にとってはそれが佐藤であるということは、なおさら胸が締め付けられるように感じた。

18・さわやかな笑顔の裏に嘘を

「良いのかしら？あなたのお気に入りのあの子…何か言いたそうだった」

「…聞きたくないんだ」

佐藤と鳳仙は二人で並んで長い廊下を歩いていた。突き当たりにある大きな扉を開くと、大きなテーブルの上に料理が並べられている光景が目に入る。

まだ他のメンバーは来ていないので、部屋には佐藤と鳳仙だけ…ということになる。

「あら、鴉ともあるう者が…怖いものなんてあるのね」

「エリカに言われた…変わったと。俺は変わった、勿論自分の望んだ方向へ、後悔しない方向へ。だがその分弱くなった」

「弱い…確かに、噂で聞いていた鴉とは随分違うわね。人を人と思わない残虐さが有名だったわ」

だった、と彼女は過去形を強調した。

その通りだな…と佐藤は自虐するように薄く笑った。

「だが、見えるだけだ…実際には最悪だよ俺は。我等の力を継続させるために人を食ってる…旅を始めてからも、千里に会ってからも…千里には絶対に言えない」

(軽蔑される)

閉めた扉が開き、広間に魔王が遅れて入ってきた。

二人が話し込んでいたのを確認し、おっと声を上げる。

「お邪魔だったか？」

「いいえ、少し昔話をしていただけよ。どうぞ座って…他の三人はどこかしら？」

「ん？そういや付いてきてないな、またコントで盛り上がってんじゃないのか？すぐに来ると思うぞ」

どかっと思子に腰を下ろすと魔王は腕組みして告げる。

佐藤は食事の置かれていない席へと座り、部屋の入口から一番遠い席に鳳仙が座った。

魔王は退屈そうに欠伸をし、俯くがそつと佐藤の様子を窺う。

二人の会話が聞こえていないわけがなかった。

（人を食う…か。我等の定めってやつか）

知っていることだった。

（ホント、面倒だ）

もう一度大きく欠伸をすると、魔王は目元に浮かんだ涙を拭った。

それから数分して千里達も広間に集まり、白いテーブルクロスのかけられた大きなテーブルには6人が集うこととなった。

フェリンが静かに紅茶をついで回る。佐藤の席には何の料理も置かれておらず、フェリンが戸惑うと佐藤は手を振って彼女を追い払った。

「ああ！お前俺のだろそれ、盗るなよ！」

魔王が声を上げた。

隣に座っている紙袋が身を乗り出し、彼の皿の上に置かれていた肉をとると口へ放り込んだ。

「育ち盛りの俺に食われてお肉も幸せだぜ、きつと！オツサンなんかに食われても皮下脂肪になるだけだろ」

「失礼な、俺だって好きでこんな姿をとってるわけじゃ」

「粗相ないようにつて言っただよね、紙袋？」

ヒュツと音を立てて机の向かい側からナイフが飛んでくる。

間一髪で紙袋はそれを避けると、小さくだが投げた本人、鋏が悔しそうに舌打ちをした。

「走馬灯が見えました、殺す気か！」

「鋏、少しは手加減してやらないと可哀想だ、せめてフォークで」とえげつないサポートを入れているのは千里だ。

佐藤の隣、鋏とは一つ分席が離れた場所に座っている。

「フォークも危ねえよ！突き刺さるだろーが」

「刺さつてしまえ」

「おい、聞こえたぞ…鉄」

「なんのことやら…と鉄は胡散臭い笑みを浮かべた。

「不憫だな、紙袋」

「お前にだけは同情されたくねえよ、クソオヤジ」

騒ぎの下手こずりながらも一通り仕事を終わると、フェリンは鳳仙の後に控える。

「さて…と、そろそろ話してもらえるかしら？大体察しはついてるけど確証はないの。どうして鴉はここに？」

「あ、お嬢様、私は」

「ああ、ごめんなさい。じゃあお願いできるかしら？」

「はい、御用があればお呼びつけ下さい」

話が始めると気を利かせたフェリンは一礼し自ら退室する。

小さな背中を見送った佐藤は目を閉じた。

「分かりきっていることだろう？鴉だ」

鴉…という名前が出ると鳳仙は目を細めた。

「そう、エリカの言っていたことは事実だったことね、あなたが鴉を敵に回すなんて信じられなかったけれど」

「エリカつてのはこの前襲ってきた少年のことだろう？なあ佐藤、鴉つて誰だ？」

「我等の王、鴉と相対する我等つてところかしらね」

佐藤が押し黙り、代わりに鳳仙が答えた。

「よく分かんねえな、どうして化物はそいつに追われてんだよ」

「とにかく…鴉は敵だ。世界を移動した程度で逃げ切れる相手ではない。千里のいた世界も見つかった」

「なるほど、大体用件は分かったわ。それで中立の立場である私に助けを求めにきた…というわけね」

「ああ」

「私の答え、予想がついているわね？」

「…ああ」

最初から望みの薄い賭けだとは分かっていた。

中立の立場とはどちらに加担することもないからこそ成立する。それを望む鳳仙がどちらかに力を貸そうものなら中立は崩壊してしまふ。

「断言しておくわ、私はあなたに加担することはしない。私はあなた達とは違って平穩を望むの…この世界を手に入れた。この世界を継続させていくことが私の望み」

「鳳仙さんは…手助けしてくれないのか」

「ごめんなさいね、千里君」

予想通りの返答に佐藤は閉じていた目を開き、思いつめるように一点を睨みつけた後椅子を立った。

何かを決心した様子で頷く。

「ここからは俺の個人的な頼みだ、こいつらを…頼む」

「佐藤？」

突然の佐藤の言葉に隣に座っていた鉄が不安げな声を上げる。

鳳仙はまるで最初からそう言われることが分かっていたようで、ふつと真剣な面持ちになると確認するように佐藤に尋ねた。

「あなたはそれで…本当に構わないの？」

「それ以外に道がない」

「分かったわ、友として…この子達の安全は約束する」

「助かる」

手短に礼を述べると佐藤はマントを翻して部屋を出ようとする。

千里は慌てて席を立ち、佐藤の腕を掴んで引き止めた。

「どこに行くんだよ！」

「…これは俺の問題だと言ったはずだ。お前達を巻き込むわけにはいかない、だから一人で旅を続ける。お前達の旅はここで終わりだ」
「それは、一人で行くってことなのかな？」

佐藤は何も答えないが無言は肯定を示している。

思わず佐藤の腕を握る力が強くなるのを自覚し、千里はさすがのうな目で佐藤を見た。

「どうして」

「お前はどくなる！」

叫んだのは座ったまま腕を組んだ魔王だった。

「ずっと願ってたことじゃないのか？お前の苦勞は知ってる…だから」

「ありがとう、千里」

「？」

「っ…！」

その感謝はどちらに向けられたものだったのか。突然礼を言われた千里は首を意図がつかめず首をかしげ、魔王は驚いて顔を歪める。魔王が怒りを表したことが嬉しかったのか佐藤は優しげな笑みを浮かべ、千里を強く突き飛ばす。

佐藤が千里を乱暴に扱うのはこれが初めてで、まったく予想していなかった衝撃に受身を取ることもできず千里は倒れこむ。

背中に来る衝撃を予測して目をきつく瞑ると誰かが支えてくれた。「大丈夫？千里」

「鉢…さん、佐藤は！」

腕から逃れた佐藤は広間の開け放たれた扉をくぐろうとしているところで、そこで振り返ると四人を見る。

「じゃあな」

ふっと、まるでそこに元から誰もいなかったかのように姿が消えた。

消えた場所に桃色の花弁が散る。

鉢から離れた千里はその花弁の場所に近付き、宙を舞うそれを両手で作った器に受け止めた。

花弁ではないことに気づく。

桜の花弁をイメージして作られたガラス細工。それはバスを出現させる際に佐藤が破壊したあの髪飾り、その破片だった。

一人バスに乗って次の世界へと急ぐ。

いつもは騒がしバス内だが、今はエンジンの僅かな音しかしない。いやに沈黙が気になってしまい佐藤は苛立つと目を閉じた。

(最初からこうだったはずだ)

自分に言い聞かせる。

旅を始めると決意したとき、我等と敵に回すと分かったとき、最初は一人だった。それが余計な手出しをしたせいでいるんな人間が増え、どんどん面倒になっていった。

面倒なだけだと思っていた。

バスに鈍い振動が訪れる。到着したようだ。

この世界にこの格好は似合わない…と佐藤はシャツを脱ぎ捨てる。と、千里と最初会ったときに来ていた白い着物、それに上からピンク色の羽織をかけた。黒いマントは羽織によって隠された。

降りると長く旅に使ってきたバスを見る。

「すまないな」

小さく呟くと右手を目の前に翳し、バスに向かって魔力を放った。空気が震動し、震えがバスに伝わると一瞬にして砕け散った。金属で出来ている部分も、タイヤですら軽々と吹き飛ばすと破片になって地面に降り積もる。

空を見上げた、月が出ている。

バスの停まった場所はとうやら人里から離れた山中のようだった。佐藤は手近にあった高い木にひよいと登り、そこから山の下に広がる世界を見下ろす。

山の一部が桃色に染まっている、桜の季節だ。

人が自然を畏れて生きている世界、木造の長屋の立ち並ぶ町、住民全てが佐藤と同じく着物を身に着けている世界。

懐かしい場所、故郷。

(ここで終わる)

与えられた部屋は一人一部屋、鳳仙の住んでいる館は部屋が幾つもあり、来客に一部屋ずつ貸しても尚余っているらしい。

鉄は皆が寝静まった夜中になるのを待ち、暗くなつたの見計らうと部屋をそつと出た。

音を立てないように廊下を歩く。

そして王間、最初バスが到達した場所へ向かった。

扉を開けると予想通り、そして会いたかつた人物の姿がある。

「こんな夜分遅くにどうしたのかしら？」

鳳仙は鉄に背中を向けていたが、それでも誰かが来たことは分かっているようだった。

彼女のことだ、おそらくその人物が鉄であるということも分かっているのだろう。

「あなたは全てをご存知なのですよね？ 鳳仙さん」

「…ええ、あなたのことも知っているわ、鷺の狗」

鉄のことをそう呼ぶと鳳仙はゆったり振り返つた。

我等、それに佐藤に一目置かれる強さを持つ鳳仙、彼女と一対一で向き合っているというのに鉄は笑みを絶やさない。

「やはりご存知でしたか」

「あの鷺が珍しくただの人間を飼いならしたというじゃない、それは知っていないほうがおかしいわ」

「佐藤にも、鴉にもすぐに気づかれましたよ。流石は…我等の一人だ。僕の嘘も演技も彼の前には無意味だったみたいですよ」

「にも関わらず鴉はあなたを近くに置いていたわ。どうということなのかしら？ …私はそれが一番分からなかった」

佐藤は変わった。

それは鳳仙ですら気づくことであり、その中でも一番謎だったのは自分の存在を危ぶませる鉄を近くに置いていたことだった。

「生まれたときから僕は見放されていました、世界から。何も知らない僕を拾って育て上げてくれたのは鷺です。僕にとっては何が正しい、何が間違っているという前に、鷺が全てだという考えがあります。主人である鷺に従うことだけが僕の取り柄であり、存在価値であり、僕の自由ですから」

そう言つて鉄は自分の首に回された有刺鉄線を指で引つ張つた。

「大層な首輪ね、あなたは鴉の敵かしら？」

「そうですね…確かに僕は鷲の狗ですが、同時に一人の人間でも、鉄でもあります。僕はきつと長い間主人から離れすぎたんだ、佐藤から千里の話を聞かされたとき、興味が湧いた。そして千里に会いたいと願うようになった。僕には主人が二人いる」

「鴉と鷲、というわけね。それで、今のあなたはどちらなのかしら？」

鴉に友として寄り添う鉄なのか。

鷲に従う狗なのか。

どちらとも言わずに彼は微笑んだ。

「僕の心は決まつてる…佐藤の友達で、千里や紙袋、魔王の仲間。だけど僕の本質も決まつてる…鷲の命令には逆らえない」

面倒な言い回しに鳳仙は苦笑して腕を広げた。

「あなたは鴉を助きたい…そういうことね」

無言で鉄は頷いた。

「鷲に会つたらどうなつてしまつか分かりませんが、そのときは僕が僕を殺します。そのために制限してるんですから」

左半身の動きを束縛する鎖を示して鉄は呟いた。

それから鳳仙を見ると笑顔が消して細くなつていた目をしっかりと開いた。

「オレは佐藤を助けに行く」

「…そう、そうですね。なるほど…こうしてみると鴉のつた行為も悪かではないように思えてくるから不思議だわ」

クスリと笑うと鳳仙は佐藤の胸を指先で軽く押した。

「行きなさい、私はあなた達に興味は湧いたわ」

「助かりますが…本当にそれだけですか？」

「何のことかしら？」

「…僕は全てを知っているわけではありません。人ですから命は短いですし、見た目どおりの年齢です。ですが…鷲が何か隠している

ことぐらいは分かっています」

暫く無言が続き、負けを認めたように緊張を崩したのは缺ではなく、鳳仙だった。

「頭のいい子ね、大方推測できているんでしょう？」

「申し訳ないです」

「いいわ、あなたの推論通り、私は千里君に重ねている。だからこそ苦勞をして手に入れた中立の立場、それを脅かすような危険な橋を渡るの…軽蔑したかしら？」

「いいえ、それでも充分です。僕のこの行動が千里を助けるおとになるなら、それで満足ですから。ありがとうございます」

缺の姿がぼんやりと薄れ、やがて激しく発光するとその光は巨大な術式を部屋中に展開させて収束し、缺の姿を消し去った。

消え去る寸前に缺は口を動かし、小さな声で何を告げる。

それは風の音にかき消されてしまったが鳳仙に吐聞こえたようであり、彼女はその言葉にあきれて肩をすくめた。

「随分厄介なお願い事ね。別れ際に言えば断られないと思ったんでしょう…本当に頭の良い子だわ」

消滅と同時に激しい風が吹き荒れる。

やれやれと風に煽られて乱れた髪を整えながら鳳仙は椅子に座った。

「私も甘くなつたものね」

中立の立場が崩れる日もそう遠くないのかもしれない。

「離してくれ、佐藤を追うんだ！」

「落ち着けよ千里！どうやって世界を超えるつもりだ！お前も見ただろうが！時空バスは佐藤が持つていった。俺らに世界を超える手段なんてねえんだよ！」

暴れる千里を押さえ込んでいるのは紙袋だった。羽交い絞めにしても尚暴れることを止めない千里に痺れを切らし、紙袋は一度千里を解放すると腕を掴んで投げ飛ばした。

世界がぐるんと回って千里は急降下する。

投げ出された場所が硬い床ではなくベッドの上であったところに紙袋の千里に対する甘さが見え隠れする。

立ち上がるうとする千里の上に飛び乗ると紙袋は千里の両手を押さえつけた。

「落ち着けっ！」

激しい動きにより帽子が脱げ、角が露になっていた。佐藤は表情を歪めて紙袋を見上げる。

「俺の言えたことじゃねえって分かるけどよ、無鉄砲に突っ走っても化物のところには行けねえぞ」

「失礼」

軽く声をかけて魔王が部屋に入ってくる。

なにやらもみ合っている二人を見て目を細めた。

「何じゃれ合ってたんだ、平和だな」

「違っ！」

「平和なのはてめえの頭の中だ腐れ魔王。で、何か良い案でも浮かんだのかよ？」

大人しくなった千里の上から体をどけると紙袋は乱れた着衣を正しながら尋ねる。

不思議なものだった、佐藤と鉢がないかだろうか？紙袋はいつ

もより冷静に見える。

「ああ、悪い案なら浮かんだぞ」

「悪い案？」

「良かったな、佐藤を追えるぞ」

魔王はどこか切なそうな表情を浮かべて告げると微笑む。

何がどうだと説明できるわけではないが、嫌な予感がして千里は眉を顰めた。

「んだよ、勿体ぶらずにさっさと」

「急かすなよ、俺にだって決断の猶予くれてもいいだろ？」

「決断？何言ってるんだ？…とうとう頭やられたのか」

相変わらぬ紙袋の毒舌に魔王は苦笑し、その口の悪さすらも心地よい…という風に穏やかな目で二人を見つめた。

「鉄は…いねえな、まあいいか、あいつと俺にあまり関係はないわけだ。大事な俺と千里、それに千里の意思だけだ」

「魔王？」

「あー」

魔王は天井を見上げると声を出す。それから頭をガシガシ掻いた。

「やっぱ怖えわ」

「怖いって何がだよ？」

「千里、情けない俺を後押しするため…ちよっくら質問に答えてくれ」

突然の質問、断る理由もなく千里が頷く。

「千里は…辛いことがあったとして、それを忘れたと思うか？例えば…例えばの話だが紙袋が兄を失ったように、俺がイグレアを失ったように大切な人を失ったり…自分が何か取り返しのつかない過ちを犯してしまったり、抱えたくない辛い過去を持っていたとして抱えたくない辛い過去。」

例えば…という前置きはあったがそれは間違いなく千里に向けての言葉だった。

長い間人々から異形として恐れられ、差別され、佐藤と会うまで

は一人っきりの人生だった。

辛くて悲しかった日々を忘れたいか？と彼は聞いていた。

「知らないほうがいいって、忘れたほうがマシって出来事もあるんだよ…それでもお前は取り戻したいって思うか？過去の嫌な出来事を忘れてしまいたいって思わないのか？」

その問いはあまりにも重く感じられた。

しかし逃げることは出来ない。魔王の目はとても真剣で、千里の返事を待っているようだ。

千里は暫く考え込み、それからゆっくりと言葉を選ぶ。

「嫌な思い出も、失敗も、俺が歩んできた人生の一つだ。良かったこと、楽しかったことだけが何も大切なことじゃない。過ちを繰り返さないために過去の記憶を持つことも…大事なんじゃないのか？」

「…なるほど、流石千里。俺には及ばない考え方だ」
どうやら答えに満足したようで、笑顔でそう言うと魔王は少し寂しそうに笑った。

まるで楽しかった何かとお別れするような、大好きだった玩具を捨ててしまうような、見ているほうが辛くなる表情だ。

「魔王？」

千里が尋ねると魔王はなんでもないと首を振った。

それから大きく伸びをする。

「あ…良い人生だった！」

「？」

「辛いことのほうが多かったけどな…愛する人ができた俺は幸せな人生を送れたと思ってな」

「突然どうしたんだ？」

決心したらしい魔王は今度は迷いのない目で千里を紙袋の視線を受け止める。

「種明かしだ千里、それに紙袋…魔王様の本名を教えてやる」

「イグレアじゃねえのかよ」

「イグレアは俺の想い人の名前だ、俺の本当の名前は別にある。ま

あ…俺にとつちや馴染みのない名前なんだがな」

一拍間を置いてから魔王は明かすことのなかった、しかしすでに紙袋も千里も知っている名前を口にする。

「俺は千里だ」

「は？」

千里を紙袋の声が重なる。

「正確にはお前の前の千里の残滓だ、鬼の力と何万回にも上る人生の悲痛な記録、それだけを引き継いだ別人だよ」

（意味が分からない）

それが率直な感想だ。

前の千里とは何のことだろう？今ここに千里はいて、そして千里が二人いるはずもない。

鬼の力、何万回の人生の記録。

聞き覚えのない単語ばかりで魔王が何を言っているのか理解できない。

二人が啞然とするのも無理はなく、魔王はそんな二人を見てクスクスと笑い説明を続けた。

「俺が持つてるのは千里が生きてきた悠久の記憶。俺は千里じゃねえよ…千里の記憶を情報として知ってるだけの他人だ。魂を持つてる千里じゃねえと記憶は経験にならねえ…つまり俺がどれだけ感情移入して記憶を読み解こうが、結局実体験には程遠いってことだ。小説で他人の生涯を読むのに近いな」

「ちよつと待て電波野郎！どういうこつた…どうして千里が出てくるんだ！千里がまるで何回も人生を送ってるような…」

「そう言ってるんだ、お前の解釈は間違ってるな」

突然告げられた事実が上手く飲み込めない。

「俺の力はな千里、本来はお前のものだ。お前の前の千里が力と記憶を捨てて転生した。残されたのが俺だ」

「っ！じゃあ千里が他の世界で生きてるってのも、千里が俺のことを覚えてねえってのも！」

「紙袋との記憶も俺が所持している…といつても感情移入は出来ないけどな。言つたよな？千里…どんな記憶でもお前は取り戻したいといった。だから俺はお前に全てを返す。力が本来の持ち主に戻れば我等より上の存在である鬼だ…世界を超えることも可能だろ」

魔王は胸ポケットから煙草の入っている箱を取り出すと、中に入っていた最後の一本を口に銜えた。

火が自然に灯り、煙が立ち上り始める。

「それで化物を追えつてことかよ！」

「そういうこつた」

「魔王…一つ聞きたいことがある」

「ん、何だ？」

少し震える声で千里は魔王を正面から見据え、尋ねる。

「あんたの言うことを信じるとして…あんたは俺の前回の記憶を持つてるつてことだろ？」

「…そうだな」

千里が何を尋ねるのか薄々感じたらしく、魔王は苦々しげに答えると口から一度煙草を引き抜いた。

「どうして俺は記憶を捨てた？」

「…俺の口から言わせるな、それはお前が自分自身で知るべきことだ。だけど千里は言つたよな？どんな記憶でもつて」

「そうだな」

案外簡単に引き下がった千里に魔王は目を丸くするが、同時に内心安堵の気持ちもあつた。

（もう、大丈夫だな）

記憶を捨てたのは自分の代だ。どうして記憶を捨てたのかはよく分かつているつもりだった。

子を見る親のような心境で胸が温かい。

「んじゃ、持ち主に力と記憶をお返ししようかね」

先程から少しずつ部屋を満たしていた煙が意思のある動きへと変わり、千里を中心にぐるぐると円を描き始めた。

「おい、ちよつと待てクソ魔王！」

怒りを抑えた声で紙袋が噛み付く。

「何か不満でもあるのか？」

「言つたよな、お前。千里の記憶と力が魔王だって。だとしたらためえ…まさか」

(…ばれたか)

心の中で呟いて魔王は俯き、苦笑した。残り少ない煙草はもうすぐで火種が口元に達しそうだ。

(こつというときだけ鋭いな、紙袋は)

知っていて後悔はなかった。

「お前のこと、嫌いじゃなかったぞ」

「おい！」

「魔王っ？」

引き止める声が聞こえた。

残った煙草が薄くなった体を通過し、マフラーと一緒に床に落ちる。イグレアが「魔王」にくれたマフラーだ。

煙草の火はマフラーに燃え移り、激しく煙がうねると千里を包み込んでその姿をかき消した。

景色が透けてみえる自分の体を見下ろし、魔王はそれでも微笑む。走馬灯だろうか？

目を閉じて思い出される光景は幸せなものばかりだ。

佐藤と桜の下で笑いあった。

狩りの仕方を教えてもらった。

ウエドネと初めて会った監獄内での出来事。

毎日訪れるたびに明るくなっていった少年の表情。

浮かんでは本当の千里へと流れ出し、消えていく断片。

(妙な話だ…これは「千里」の記憶だろうか？)

薄れ行く記憶、視界の中で嘲笑する。何が記録だ。何が情報だ。

(感情移入…しすぎたのかもな)

消えていく記憶の中、残ったのは本当に僅かなものだけだった。

再会した佐藤、紙袋。それに鉄…千里。

喪失の中重い目蓋をそつと持ち上げると、そこには自分に残された最後のものが見えた気がした。

天国というものがあつたとして、自分は魂すらない存在なのだからそこに行く事すらできずに完全な消滅を向かえるだろう、と魔王は直感する。

本当のところは誰も分からない。

「イグレア…」

手を伸ばした。

20・殺してくれてありがとう

木造建築の立ち並ぶ町、人の手で作られた蛍光灯などの設備がないため、夜になれば町の中心であろうとも漆黒に塗りつぶされる。

頼りになるものといえば灯籠の火、しかし赤い炎の僅かな明かりは頼りなく遠くを照らすには及ばない。

月明かりが一番の頼みになるのだろうが、雲の浮きし空は常に月光を地上へは届けてくれない。

時折月明かりによって照らされる町、美しく咲き誇る桜を見下ろして闇間を縫うように駆ける人影が二つあった。

一人は町中を必死に走り、息も絶え絶えな状態でありながら立ち止まる気配もない。もう一つの人影より前を走っている。

もう一人は瓦の上を器用に渡り、まるで空でも飛ぶかのように走り回っている。黒い爪をもった素足が音も立てずに屋根から屋根へと渡り走る。

地上を這う者が息を切らしているのに対して、空中を翔ける者は息一つ乱すことはない。淡々と前方の人間を追っているようだった。前方を走っていた人間：質素な着物に身を包んだ女はとうとう恐怖に耐え切れなくなり、叫び声をあげた。

甲高い声が嫌だったのか彼女を追う男は目を細める。

月光の下に曝された彼の姿は一言で言えば異常だった。

月明かりに照らされて青白い肌、夜闇の中でも光る黄金色の目。

和風な周囲とは明らかに異質な夜闇に溶ける真つ黒なマント。

一步を踏み出すことに伸ばしっぱなしで腰に達するほどの長さとなった黒髪が揺れて顔を隠した。

「ひっ……いやああああ……！」

「ちっ、騒ぐな、面倒だ」

悲鳴をあげられてしまえば人が起きるかもしれない。そうすれば沢山の人間が集まるだろう。大勢の加勢が来てもまったく不都合は

なかったが、多くの人間に自分の行為が目撃されてしまうのは困る。警戒した人間が臆病になれば次の「狩り」に差し障るからだ。

男が狩りを行っていることは噂としては知れ渡っているが、知識と経験は違う。実際に狩りを目撃すれば住民の態度も変わってくる。男は残忍な笑みを浮かべると一層強く屋根を蹴った。地表から数えれば十メートル近く飛び上がり、上空より女を確認すると急降下を始めた。

たなびく黒いコートが形を変化させ翼のようになる。

冷たい夜風を切り裂きながら地表近くまで…ぶつかりそうな勢いで降下するとそのままの勢いを殺さずに方向転換、女を背中から突き飛ばした。

「きゃあ！」

土壁に叩きつけられ動かなくなった女を抱えるとすぐにその場を後にした。このままでもよかったのだが、それだと見つかる可能性が高くなる。

気を失った女を抱えて町外れの小山に入った。背の高い木々で深く覆われている山に夜立ち入ろうとする愚か者はいない。

そしてそれを知っている男はそれを最大限に利用していた。

山の一角にある木々の上に降り立つと女を放り投げる。

地面に落下した女が鈍い声をあげて薄っすらと目を開ける。そして恐怖に支配された視線を男に向けるが、男は顔色一つ変えずに女に近付いた。

「な、何！どうして私なの！嫌よ…来ないで！人間なら他にも」

「…手荒な扱いをしたせいで骨が折れて動けないか？まあいい」

逃げようと悲鳴を上げる女だが、手足を弱々しく交互に動かすだけで立ち上がるうともしない。腰が抜けているのか、本当に骨が折れているのが原因なのか。

どちらにしても構わない。

男は女の髪を掴んで顔を上げさせると冷淡だった表情を狂気にゆがめる。

目の色が増したのを確認して女は余計に怯えた。直視することが辛いほどの眼光は恐ろしい何か憑かれているかのようだ。

「や…やめ…っ、いやああああ、離せ化物！」

「！」

女の制止を無視して男はいきなり女の喉に噛み付いた。血が噴き出して肉が抉れる。血を吸うなどという生易しいものではなく、首ごと食べているという表現が相応しい。

声帯を食いちぎられた女は断末魔の叫びを上げることができず、ヒューヒューと呼吸音を響かせた。血が泡立つ音が混じる。

息絶えた女を口から離して男は笑った。唇は柘榴を食べ終えたときのよう真つ赤に染まっている。

（化物、化物か…笑える）

人間とはかけ離れた容姿をした男は声を立てずに笑い続ける。

血で真つ赤に染まった口元を拭うこともせず笑い、月を見上げた。

人とは違う身の上を嘆くことはとうの昔に卒業した。

男は歩いていった。堂々と昼間に、町の大通りのど真ん中を。

着物を着ている人間の中、一人だけ異質な着衣をしている。誰も彼を気になけながら、しかし関わりたくないのか目を逸らす。

石を投げられなくなっただけマシになったものだ…と男は自虐すると微笑んだ。

人は恐怖に弱い。

この町の人間を殺しておきながらどうとどうと街中を歩く。勿論この世界で殺人は罪であり、その掟があるからこそ正常な世界が営まれている。

殺人犯ならば報復か逮捕を恐れて逃げ回らなければならないのだろうが、残念なこと…もしくは幸運なことに、彼はそのどちらも恐る必要はない。

「邪魔だ、道を塞ぐと通れない」

目の前を塞いだ数名の男を眺め、男は目を伏せて尋ねた。

明らかに殺人犯を捕縛してきたような格好の相手だ。しかし男は一步も引くことなく彼等の視線を受け止める。

「このっ、よくも平然としてられるもんだ！とぼけるのも大概にしる、貴様が昨夜女を殺したことは分かっているんだ」

「とぼけてなどいない、隠すつもりもない…認めよう。私は昨夜人を殺した。恐らく貴様の言っている女だろうな」

「化物が！これ以上の犠牲を許すわけにはいかん！化物、お前を捕らえるように御触れが出ている。抵抗するのならば殺しても構わんとこの…ぎゃああああ！」

言葉が途中で途切れ、その仲間達が慌てふためく声が聞こえた。

捕縛者の一人を蹴り上げ、男は自分も宙に跳ねると体を捻って踵から蹴り落とし捕縛者を地面に叩きつけたのだった。

昏倒し動かなくなった捕縛者を冷たい瞳で見下ろす。

「身の程を知れ莫迦が…貴様程度の実力で私を殺せると本気で思っていたのか？だとすればおめでたいにも程がある…見せてやる、力の差、種族の差を」

「ひっ！このっ、化物がああああ！！」

倒れた人間の仲間達が威勢良く声をあげ、刀を振り上げる。

「怯むな！所詮相手は狂った殺人者だ！」

「殺せ！」

捕縛者達が一斉に襲い掛かり、男はそれを避けるために低くしゃがみ込んだ。がら空きの足下を潜り抜ける。

抜けた後そのままの体制で背後に足払いをした。無様に大半が転がり、その胸の上を強く蹴りつける。

残された捕縛者は一人になっていた。

「ゆ、許さぬ…！我等をここまで侮辱するとは！」

「殺さないだけでも感謝が欲しいところだが…それで？貴様はどうする？」

構えた刀が恐怖でカチャカチャと震えている。

男はそれを見て笑った。冷たい笑みだった。

(楽しいか?)

自分に問いかける声が聞こえる。

「ああ、楽しいな。私を見下す者達を細切れにするのは楽しい。私を害虫のように扱う連中が恐れるのは楽しい」

「な、何を言ってる」

「貴様を」

おびえる男の構えた刀、その刃を握り締めて力を込めるといとも簡単に折ることができた。

甲高い金属音がなつて二つに折れる刃。

愕然としてその光景を見つめる観衆。

「どう殺そうかと思案していた」

「ひい！」

小さく悲鳴をあげると捕縛者は刀を投げ出して走り出す。

男の注目していた人間がいなくなると、次の暇つぶしにされてはたまらない…と観衆達は目を逸らして慌てて去っていく。

(居心地が悪いか?)

「とんでもないな…ずっとマシになった。今で満足だ」

誰もが道を空ける。

誰もが彼を恐れる。

誰もが彼を憎んでいるのは変わらないことだった。

「死肉に興味はない」

死体には目もくれず、不快な死体の臭いから逃れるように佐藤は駆け出した。

久しぶりに日中行動したからかもしれない。

太陽光があまり得意ではない体がへばり、男は山の中…奥にある鍾乳洞であり男の住まいである場所で寝そべっていた。

岩壁に上半身を預けて目を閉じてはいるが完全に寝ているわけではない。ちよつとした休憩のつもりだった。

日光ではなく乾いた風だけが吹き込んでくる。

心地よさにうつらうつらとしていた。

(平和だな)

自分にはもっとも似合わない言葉だとは知りつつ、思わずそう思ってしまう。

「睡眠か…面倒なものだ」

行動ができなくなる時間は不条理にもやってくる。

睡眠に価値を見出せない男は不満げに、しかし睡魔には流石に勝つ事ができないのか目蓋をゆっくりと下ろした。

目が覚めたのは雨の音のせいだろう。

地面を雨粒が打つ音で目覚め、睡眠の影響でしびれる脳髄に顔を擡めつつ体を起こす。

木の上で寝なくてよかった。

自分を雨から守ってくれた鍾乳洞に感謝する。

「！」

驚いた。

雨に氣をとられた…というのもあるが、それでも驚く。

自分のすぐ近く、目の前に少年がいた。

寝ている男を見ていたのか、興味深そうな目をして覗き込んでいる。

あまりの事態、そして今まで経験したことのない状況に目を丸くして、男は不覚にも動きを停止してしまった。

人間の動きには敏感なほうだ。人が近付けば特有の臭いで分かる。眠りが深いほうではないので近付けば目を覚ます自信があった。

黒い髪は男と同じ、髪が長いという点でも一緒だろう。しかし少年は髪を二つ結びにしている。この世界では特に珍しいことでもない。

しかし彼の額より映えている二本の角は、流石に珍妙であった。

(私を殺しに?)

それ以外の目的で山に立ち入る物好きはいない。もちろん討伐目

的できた輩が生きて帰ったこともないわけだが。

「誰だ」

できるだけ平静を装って尋ねた。

「僕？…名前は千里。あなたは吸血鬼様だよな？」

見た目は十歳にも満たない少年だった。声も声変わり前で高い。

「誰がそんなことを…空想上の生き物と一緒にするな。私は「我等」の一人だ。それ以外の何でもない」

「我等？」

「物語の中のように甘くはない…血を飲むだけでは満足できない、人喰の種族のことだ。私達は我等を我等と表現する…それで、貴様は何故ここにいる？」

話がそれている事に気づいて思わず尋ねなおしてしまう。どうもこの少年の、男を全く恐れていない態度は男を狂わせてしまうようだった。

本来ならば理由も聞かずに殺すところなのだが、ついつい理由を尋ねてしまった。

千里は思い出したように微笑んだ。

「僕は吸血鬼様にお礼が言いたかったんだ」

「礼？」

（私に礼？）

罵られる覚えはあれども礼を言われる覚えなどない。

生まれてから一度でも礼を言われたことがあっただろうか？

経験のない出来事に男が戸惑っているが、千里は構わず続けた。

「昨日女の人、殺した？」

「ああ…あの不味い女のことか。それがどうかしたのか？」

「あの人、僕の母親なんだ」

訳が分らず沈黙する。

千里はニコニコ笑ったまま何も言わない。暫くは雨音だけが続き、状況を理解できない男はやっとのこと言葉で言葉を搾り出した。

「家族を殺されて礼を言うのか？」

「吸血鬼様は優しいのかな？僕のこれ見ても何も聞かないよね」
質問を無視される。

千里が指差したのは自分の角だった。

「奇妙なそれを嘲れと？…とんだ自傷行為だな。貴様のそれが異常なら、私は一体なんだというんだ？」

「うん、優しいね。でもね、僕の母親はそうは思わなかったみたいだよ。自分の腹から生まれてきた僕をね、害虫みたいに扱った」
それで彼が何故礼を言ったのか分かった気がした。

（愛されない子供というわけか）

よく見れば千里の着ているぼろぼろの布切れのような着物の隙間から、青くなつてしまつていく肌が見えた。

殴られたのか…蹴られたのか。

「僕、母親大嫌いだったよ。だからお礼」

クスクスと男が笑い出す。

千里は驚いたようにいきなり笑い出した男を見つめた。

「ふっ…ははは…！礼を言われたのは初めてだ。面白い人間…いや、鬼か？やはり私に合うのは異形の者というわけだ」

「吸血鬼様？」

「その名前は違つと言っている。私の名は鴉…いや、くろなり。「黒」と「也」で黒也だ」

鍾乳洞の岩を爪先で削つて字を書いてやる。

どうして本名を教えてしまったのか…と自分で名前を告げてから疑問に思う。

得体の知れない人物にひよいひよいと教えるべきではないことだ。

「黒也様？」

「敬称など面倒なだけだ、捨て置け。異形の仲間…私は貴様を気に入ったんだ千里。親が死んだと言つたな、行くあてはあるのか？」

「黒也…うん、僕の父さんならいないよ。母親が僕を生んだときに気味悪がつて逃げたみたい」

あまりシヨックを受けていないようにさらつと千里は言つてのけ

る。そのことが不思議で黒也は目を瞬いた。

「親だぞ？」

「だってどうせ、この世界のこの体だけの親だ」

千里はそう言うのと、まるで子供ではないかのような表情を一瞬過ぎらせる。長く生きてきたような…昔を思うような顔だ。

「良い…千里、暫く私の傍に留まれ。出会えたことが奇跡のような珍しい出来事だ。千里の話聞いてみたい」

「僕を？」

「傍に置くと言っている…異論があるのか？」

何故か釈然としない表情を浮かべる千里を見て、黒也は首を傾げた。強要をするつもりはないのだが、まさか断られるとは思っておらず少し戸惑う。

千里はしばらく気まずそうに黙っていたが、暫くして自分の角を小さな手で撫でた。

「黒也は僕が鬼だから傍に置くの？…僕、多分黒也が思うような鬼じゃない。そんな鬼にはなれないよ…黒也と違って特別な力なんて何も無いんだ。見た目は鬼でも、中身は黒也の嫌いな人間と一緒にだよ？」

捨てられるのを恐れているような顔と声をしているくせに、言葉だけは気丈だ。

そんな姿をみて黒也は唇をゆがめた。

「瑣末な事だ、私は千里から話を聞きたいといったただけだ。貴様が嫌なら強要するつもりもない。人里に戻りたいのなら私が送り届ける」

「嫌だ！」

突然千里が声を張り上げた。

「戻りたくない、もう一人ぼっちは嫌だ！！」

今にも泣き出しそうな表情が酷く心をくすぐった。何かと重なる気がした。

（なんだというんだ…私が自分と重ねているとでも？）

一瞬浮かんだ考えを忌々しげに振り払う。

独りが嫌だなど思ったことはないはずだ。

「私が引き取るといわなければ自害でもするつもりだったか。戻りたくないのならばここにいていい」

それだけ告げると黒也は雨天の空を見上げる。

黒也の言葉に驚いた千里が彼を見たとき、すでに彼は千里を見てはいなかった。

しかしそれでも黒也の厚意が分かって胸が熱くなる。

千里は満面の笑みを浮かべると黒也に飛びついた。

21・無茶苦茶な願い

千里と黒也が共に行動するようになって一年近くが経過した。

千里は黒也に教わったとおり、木々の間を走り、見つけた鹿に矢を放った。

直線にとんだ矢は鹿の腿を貫き、驚いた鹿は暴れるが出血により倒れる。

「よし、食糧確保！」

一年たつても千里の容姿はそこまで変化していない。

しかし服装は別だった。ボロ布のような着物ではなく、黒也がどこかからか手配してきた上布の使われている着物に着替えている。

動きやすいようにたすきをかけていた。

「黒也、喜んでくれるかな」

鹿を重そうに肩に抱えると千里は帰路を急いだ。

鍾乳洞の中、黒也は一人目を閉じていた。

閉じてはいるが眠ってはいない。風を感じながらすることもなくじっとしていると、聞きなれた足音が近付いてくる。

そっと目をあけると遠くから走ってくる千里の姿が見えた。

鬼、しかし人間でもある少年。

(人間、人間人間人間人間人間人間人間人間人間人間)

人だ。

(！…私は今、何を)

「何を考えて」

右手で顔を覆う。ぎらぎらと光る瞳を隠すためでもあった。

「黒也！」

「…早かったな、千里」

動悸がおさまったのを確認して顔から手を退ける。

千里は嬉しそうに鹿を差し出していた。なかなか大きな獲物だ。

「僕、すごい？」

「ああ、よくやった」

頭を撫でてやると千里は喜ぶ。

目を閉じて気持ちよさそうに黒也にもたれかかる千里を見て、もたれかかられている彼も微笑をたたえた。

まだまだ子供だ。

どんなに現実の辛さを知っていようと千里はまだ子供であるはずだった。

「だがこの種はそのままでは食べんぞ…癖が強いんだ」

「食べられないのか？」

悲しげに笑みを崩す千里を見て黒也が小さくふきだす。

「いや、香辛料があれば…私が手配してこよう」

「町に下りるのか？」

「千里を行かせるわけにもいかないだろう」

「だけど」

「私の力を疑っているのか？…大丈夫だ、今日中には戻る。それまでに鹿を一人でさばいておけ」

千里に言いつけると黒也は重い体を上げた。

どうして体がこんなに動かないのか…理解していた。

今の黒也の体は限りなく人間に近い状態になっている。

(生命力は化物のまま…か。気にかけるほどのことでもないな)

理由を理解していながら、しかしそれに気づかないフリを続けていた。

町に下りるのは一年ぶりだ。

「黒也！」

飛び上がるうと重い翼を広げたとき、背後から黒也を呼び止める声が出た。

「私…じゃないよ！」

「…そうだったな、千里、俺の帰りを待っていてくれ」

どうでもいいような些細なこと、しかし千里との約束だった。

「あ、そうだ」

「?…何かあるのか?」

「うん…よいしょっと。これ、黒也持って行つて!」

千里が取り出したのは桜の枝だった。だがよくよく見れば枝は漆で加工され、花弁は薄いガラスでできている。

「これは…千里が?」

「うん、僕あんまり黒也の役に立てないからせめてって。黒也は桜、好きだよな?この前一緒に見に行つたとき凄く幸せそうな顔してた。本当は本物の桜が一番なんだろうけど、すぐ枯れちゃうから…ちよつと屈んで?」

言われた通りに黒也が膝をつく、背後に回つた千里は黒也の長い髪をどこから持ってきたのか紐で器用に結び、小さな団子を作つてそこに簪のようにして桜の枝を差し入れた。

「本当は女の人とかがよくやるみたいだけど、役者さんとかなら男の人もやつてるし…絶対黒也にも似合うと思つてたんだ!黒也カツコイイから!」

自分の姿を見ることは出来ないが千里のやつてくれたことだ、似合うに違いないだろう。

「その…なんだ」

自分はお礼を言うような人格ではない…と意識しているからだろうか、なかなか礼を言うことが気恥ずかしくてできない。

するとそんな黒也の内心を見透かした千里が笑つた。

「いいから、ほら、早く行つて早く帰つてきてね」

「…ああ」

今度こそ翼を広げて飛び立つ。

だんだん小さくなっていく千里は、黒也が見えなくなるまで手を振っていた。

時はさかのぼつて千里と黒也が出会つて半年が過ぎたころになる。狩りの方法、体の動かし方、それらを黒也から学んでいた千里だ

つたが、ある日突然妙な質問をした。

その日に教えることは全て教え、休憩をしようとして桜の木の下で涼んでいたときのことだった。

「黒也は人間を食ってるのか？」

「何を突然…当然だ」

「我等ってというのは人を食って生きていく種族なのか？」

「いや」

それに対する黒也の答えは千里の予想していたものと違ったらしく、千里は興味深そうに続きを待っている。

あまり好んで話したいことではないのだが…と前置きをしてから黒也は仕方なく話しはじめた。

「我等は千里、貴様と同じく人と対して変わらない。僅かな違いが逆に人の嫌悪をかうことになるのかもしれないが…。とにかく、人と同じものを食べて同じように生活することができる。人よりはるかに頑丈で長寿ではあるが」

「でも黒也は人を食べるって」

「そうだ、私…我等にとって人の血肉は麻薬にも似たものだ。生まれたときからその味を知っていて抜け出すことは難しく、本能がそれを求めるようにできている。血肉を得ることで超人的な身体能力や翼を得ることが出来る。鬼はどうやら違うようだがな」

じつと黒也の話を聞いていた千里が何かを考え込み、すぐに次の質問を投げかけてきた。

「じゃあ黒也、人は好きか？」

「…冗談か」

「僕は好きだけどな、人」

この一言には流石に驚き、黒也は珍しくも驚いて目を見開いた。千里は人里に戻りたがらなかつた。だが確かに人間が嫌だといったのではなく、一人が嫌だと言っていた。

しかし鬼として嫌悪されていた…という話を聞く限り、人間のことを憎んでいるものだと勝手に思っていた。

「…何故だ？」

「何故って」

「…貴様はどうして人間を愛し続けることができる？」

「僕だって…黒也だって人間でしょ？」

「一緒にするな！」

（あんな種族と私が同じだと？）

否定したくて、しかし事実だということを知っているだけに大きな声をあげて千里を引き離れた。

一人。

（私がどれだけ人間を愛そうと、その逆はありえない）

「私には…理解できない」

「嘘だね」

「…？」

「黒也、本当は人間大好きなんだろ？」

「…莫迦なことを」

（そんなことがあるわけがない）

何度も否定する。

しかし逃げようと視線を逸らすと、千里は黒也を押さえつけるようにして飛びかかってきた。

背中を木の幹にぶつけて桜に上体を預ける状況になった。

上に千里がいるため逃げられなく、視線を逸らすこともできない。

「頼みがあるんだ」

「…こんな仕打ちをしておいて頼み？…頼む態度ではないな」

その次の言葉を言ってほしくなくて、必死に話題を逸らそうとする。

大好きな千里に本当の黒也の望みを頼まれてしまえば、それを拒否することはもう自分には出来ないだろう…と心の底で気づいていたからかもしれない。

しかしそんな黒也の考えとは裏腹に千里は口を開いた。

「これ以上、人を殺さないでくれ」

「！」

「お願いだ…僕は人間も好きだし黒也が大好きなんだ。これ以上黒也が人間を殺して悲しんでるの、見たくないよ！」

「誰がつ…いつ悲しんだ！」

体格差もかなりある、人間と化物の違いもある。

すぐに黒也は千里を押しつけた。

突き飛ばされた千里は腰を地面に打ち付けたようで痛みを顔に顰めていた。

「いつも悲しそうにしてる！…わかんないとも思ってたの？」

「ふん、心無い化物がどうして人の死を悲しむ必要がある？」

「黒也は優しいからだよ」

「…私が？」

優しいなどと他人から言われたことなど一度もなかった。その逆なら数え切れないほどではあるが。

「黒也…」

(私は)

「私は…貴様が来てからもそんな顔をしていたのか？」

無言で千里が頷いた。

「……」

千里はそれ以上何を言うこともなく、黒也の次の言葉を待っているようだった。

何度も言葉を紡ごうとしては失敗し、それを繰り返しているうちによろやく出来上がった言葉を黒也はかるうじて口にする。

「…少し考えさせる」

「うん、待ってる」

その言葉は黒也らしくなく掠れていて弱々しい響きだったが、千里はそれで充分だ…というふうには笑みを浮かべた。

22・「私」「俺」

皆と一緒にいたいと願う少年がいた。

黒い髪に金色の目、みすばらしい身なりをしているのは親からたいていして世話もされていないからだった。

彼は歩いていった。町を毎日毎日、食べるものがなく体力がないときでも、雨が降っているときでも、流行り病があるときも、何があっても毎日歩いていた。

探していた、同年代の子供を。同年代でなくとも共に過ごしてくれる人間を。

黄金の目が人を探すたび、それを向けられた人達は気味悪がった。

「なあにあの子、目が黄色いわ」

「化物らしいわよ、母親の乳を噛み切ったんですって」

「それで血を飲んで喜んでたらしいから、もう本当に鬼の子なんじゃないの？」

「わざわざ大人達は噂する。」

その声が聞こえていながら聞こえないフリをしていた。

「すみません、少しでいいので食べるものをいただけませんか？」

「何この子、ずうずうしいにも程があるわ！出て行って化物！」

家々を渡り歩いた。

「すみません、食べ物をお願いできませんか？」

「気持ち悪い目！呪われるって噂は本当なのかしら」

「あの」

「はやくあっち行ってよ！近所にあなたなんかと話してるところ見られたら…なんて噂たてられるか！」

晴れた日には外で子供達が駆け回っていることもあった。

「あ、あの…僕も一緒に」

「うわっ、見るよ！化物だ！」

「本当だ！俺知ってるぜ！こいつ母ちゃんが言ってた奴だよ！」

「近付いたら呪われるってやつか？」

「人様を食べるらしいぜ！」

「気持ち悪い！」

「こいつ汚ねえ格好してるぞ！きつと盗みなんかもやってんだろ！
そうだ！捕まえて差し出そうぜ！」

避けられる側から追われる側が変わった。

鬼、鬼、鬼、時には妖怪、時には化物、ときには人殺し。

身に覚えのない呼び名ばかりが増えていき、とうとう少年はどう
どうと町を歩くことすらできなくなった。

ざわざわ…噂から始まったそれは狂気へと変わった。

「化物だ！」

「殺せ！」

子供達が石を投げる。

中には拳大の石もあり、硬いそれに頭をぶつけて血が溢れた。
流血が目に入って痛い。

「きゃあああ！鬼よ！」

「てめえ！なんのつもりだ！そんなに俺達が憎いのか！」

「近付くな！化物！」

大人が農具を振りかざす。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

（きつとみんなが僕の事を嫌うのは、僕が悪い子だからだ。もっと
いい子にならなくちゃ）

「將軍から特例が出た！化物を捕まえたら褒美があるらしい！」

「殺してもいいってよ！」

「遅いぐらいよ、あの化物ったら人食べるらしいじゃない？」

石が鎌やクワに変わった。刀を持った人間にも追われるようにな
った。血走った目は彼を殺そうとする目だった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

恐ろしかった。殺されることは怖かった。

だから少年は自分から捕まってしまった。

逃げれば叱られる、ならば捕まれば褒められると思つての行動だ。縄で縛られ、町中を馬で引き摺られた。

さらし者にされ町の真ん中で処刑が行われる。

(でも大丈夫だ、みんな僕が生きてると怒るから、きつと死んだら褒めてくれるよね)

体中が痛かった。

少年の体には擦り傷も切り傷も打撲痕も沢山できていた。しかしつるし上げられて刃を向けられても尚、笑顔でいた。

笑顔でいることできつと笑顔を向けられるはずだ。

処刑台の上、冷え切つた空気に彼はようやく気づいた。

集まつた観衆が向ける視線に。

(どうして?)

褒められるはずだったのに。

彼等の憎しみは全て少年に向けられていた。本来向けられるべきでない憎しみすらも少年のせいにされていた。

病。飢餓。理不尽な税。

(愛してもらつたために...?)

少年は笑つのをやめた。微笑んでも微笑みは返つてこない。

愛してもらつたために動いた少年は、いつのまにか憎しみの対象になつていた。そのことによつやく気づく。

「...あ」

涙を流しても誰も慰めてくれない。それどころか振り上げられた刃が首に向かつて振り下ろされた。

「...あ... ああああああああああああああああ！」

ひんやりとした刃が喉に達するより速く翼が生まれる。

黒い翼は素早く刀を持った人間を切り裂くと、続けて少年を拘束していた縄を切り裂いた。

少年はずつと気づかないふりをしていた感覚に気づく。

腹の底が焦げるような、痛むような、もやもやして何かにぶつきたいような感覚だ。

(何がお前を躊躇わせる?)

ずっと押し込めていた自分の本質が語りかけてくる。

「だって…、だって、僕はみんなと一緒に」

(それを誰が望んでいる? 周囲を見る…誰もがお前を憎んでいる)

「一緒に…一緒に」

「きゃあああああああ!」

執行人が殺害され、更に少年の背から黒い不吉な翼が現れたことにより会場はパニックに陥っていた。

悲鳴が響き渡り、我先にと逃げ惑う人々が他の人を蹴落とし、押しつけ、自分だけ先に逃げようともがく。

無様だった。

悲鳴の中少年は笑った。理由は分からなかったが何故か喉が笑みを零して止まらない。

しかし何故か涙が頬を伝った。嬉しいときにも涙が出るというのは本当なのだ…と心の中で思う。

「ああ、遊ぼうよ!」

黄金色の目が輝き、本能のままに少年は手当たり次第に人を襲っては食い、襲っては食らうことを繰り返した。

気づいたときには血の海の中、一人きり。

詰られる立場が恐れられる立場になった瞬間だった。

目を開ける。

汗をかいていた。冷や汗だ。

黒也は溜息をついた。夢を見ていたらしい…残念なことに内容は全て覚えている。

忘れようにも忘れられない過去の再現だった。

「睡眠が無駄なものだとは感じていたが、まさかここまでとは…夢は厄介だな」

膝を丸めて汗で張り付いた前髪を右手で押しのけた。

しばらくその体勢のまま、悪夢の余韻が過ぎ去るのを待つことに

し、溜息をついた。

隣では静かな寝息を立てて千里が眠っている。

人を食べないでくれ、殺さないでくれと彼は言った。

思い返せば…あの日から人のことを家畜と同じような目線で見ていたのかもしれない。

人が牛や豚をそう扱うように、黒也にとっては人間も食料の一つにすぎない。そうおもっていた。

（だが…あいつは…千里は別だ）

そう、千里は黒也の中で確実に特別な存在だった。

（あいつは人間だ）

それと同時に自分とは違うまっとうな人間だった。

迫害を受けてなお、人を人として愛することのできるまっとうな人間だ。自分とは大違いであり、殺人鬼の自分が一緒にいていいのかすら悩ましい人間。

笑ってしまった。

顔を両手で覆うと指の隙間から月が見える。

「そうだな…千里、人と違っても人になれるのか」

眠っている千里に問いかける。勿論答えはない。

「私も…人間になれるのだろうか？」

その日から人を口にしてはいない。

もともと生命維持に血肉を必要とはしていない。しかし特殊な力を使うとなれば別で、更に麻薬のような役割も果たしていたためにその依存性は高く、自分との戦いだった。

拷問のような毎日、本能に負けることなく半年人間を食わなかった。

翼が明らかに弱々しい動きになっている。

（そろそろ飛翔は限界か…）

香辛料を買うために人里におりるのだがそこまでの道のりは険しい。

山を飛んでおりると、そこからは歩くことに決めて黒也は地上に降りた。

地上に足をつけることは珍しい。山中ではない乾いた砂に限る話だが。

尖った小石と足とで悪戦苦闘しながら暫く歩くと、懐かしい…半年振りの町についた。以前来た際は狩りの用事だった為、正常な理由で町に立ち寄るのは本当に久しぶりのように思える。

町の中に入る際、長い黒髪を一つに結び着物に着替え、傘を目深にかぶることを忘れない。

自分はこの町ではお尋ね者なのだ…そう簡単に顔を出すわけにはいかない。

幼い頃食べ物分けてもらっような尋ねて回った記憶がある。それを頼りに町を歩いた。すでにあの頃より数世紀経っているため店主は変わっているだろうが、店は受け継がれているかもしれない。

「お、いらつしゃい」

見つけた店を覗き込むと客が来たことに気を良くした店主が愛想いい笑みを浮かべて声をあげる。

その笑顔を見て背中を何か冷たい衝撃が走った。

(?)

理解できない自分の感情に疑問を抱く。

黙りこんでいる黒也に困ってしまったようで、店主はこちらをおどどと見ていた。

「ああ…すまない、肉料理に使える調味料を幾つか見積もって欲しい」

「へい」

こうやって丁寧に対応をする…この町も良い方向に変わったのかもしれない。

そんなことを考え込んでいると店の奥から店主が戻ってきた。口に団子を銜えている。

団子は高価だ。どうやら店はそれなりに繁盛しているようだ。

茶色い麻袋の中に入っているようで、それを受け取ると金粒を差し出した。

かなりの量：それに大きめのものだ。

掌の上に金を落とされた店主は目を丸くしている。

「すまないな：今現金の持ち合わせがない。それで勘弁してくれ」

「ちよつといいんですかい？こんなに」

「不満か？」

「とんでもねえ！」

店を後にする際背後から最来店を求める声が聞こえたが無視する。振り向くつもりはなかった黒也だったが、子供の悲鳴で振り返った。

見るとぼろぼろの身なりをした少年が：あの頃の自分と同じくらしい年代であるう少年がしりもちをついていた。

どうやら店主に店から締め出されたらしい。

やせ細っている。

興味のない光景だ。

そう思っているのに、考えようとしているのに目が離せない。

子供は諦めずに正座して頭を下げる。

「お、お願いします！母ちゃんが死んじゃうよ！」

「お情けで恵んで欲しいってか？金持ってきて言いな！ここは店だ

！ためえみたいに汚いガキにやるもんはねえんだよ」

「でも！」

「今の時代飢餓なんて珍しくもなんともねえよ！お情けで恵んで生活してけるほどこつちも余裕あるわけねえんだ！」

下げた頭を思いつきり蹴り飛ばされて子供は倒れこむ。

脳震盪でも起こしたのか起き上がらない子供に目もくれず、店主は鼻息荒く店内へと戻っていった。

「……」

じっと一連の出来事を傍観していた黒也だったがはっと気がついて少年に駆け寄った。

倒れた少年を抱き起こす。

頭部からどろりと血が伝った。黒也の白い手を真っ赤に汚す。

呼吸はない…死んでいた。

果たして蹴られたことで死んだのか…純粹に栄養失調で死んだのか。

どちらなのかは黒也には判断がつかない。ただ流れ出る血が両手を汚すのを、着物を汚すのを呆然と見つめ…その香りに危険性を感じて手を離す。

(血…?)

投げ出された少年の亡骸がどうなるのか気にする余裕はなかった。慌てて立ち上がると赤いそれから逃げ出すように走り出す。

(千里!)

戻る。

(助けてくれ…)

舞ってくれている人のいる場所へ戻ろうとして走った。早くしないと自分を追ってくる血の臭い…そして戻れない何かに飲み込まれてしまいそうで、足を痛めつける小石のことなど気にもせず走った。視界に広がる山々。

端のほうから黄色に、橙色に、赤色に変化していく。

正常な世界の崩壊に危機感と恐怖を覚えながら同時に吐き気を覚えて膝をついた。吐こうにも腹には何も入っていない。

「かはっ！」

乾いた声だけが口から漏れた。

霧散しそうになる意識を必死で繋ぎとめながらほとんど無意識で黒也は歩いていった。

おかしい。

そう思ったのは日が暮れて数刻経ってからだった。

約束を破ったことのない黒也が帰ってこない。遅すぎる。

嫌な予感がして千里は立ち上がった。食べやすい形になった肉を

見張るといふ役割があつたが、そんなものより黒也のほうが大事だ。夜の山は危険だ。出歩かないように黒也にも言われていたがそれを破ることにする。

「黒也……」

暗闇の中、持ち出してきたトーチの灯りを頼りに歩く。

「ぜえ……ぜえ……っ！」

荒い息遣いが聞こえて耳を澄ました。

「いるの、黒也？」

近くに川を見つけた。よく黒也と遊んだ川だ。

下流のほうへと降りていくと、水辺に倒れる黒い塊を見つけた。

「黒也！」

「……来るな」

「どうしたの？」

「来るな」

「っ！人間に何かされたのっ？」

来るなどいわれてもあの息遣いは尋常ではない。心配にならないはずはなく、そつと歩を進めると静かだった黒也の声が荒くなった。

「くろな……」

「来るなああああああああ！」

懇願のような悲鳴のような叫び、それが途切れた瞬間、黄金色の目が闇の中で尾を引いて素早く動き……真っ赤に染まった。

「あ……あああああ！」

目が覚めると同時に自分のやったことがはつきりと思い出される。雨に打たれながら激しい流れの川に両手を突っ込む。

両手の血は川に、口元にこべりついた血が雨に、見た目だけは洗い流される。鉄臭い味も消え去るが事実は消えてはくれなかった。

顔を水からあげて空を見上げる。

両手を泥の中について暫く何も考えることが出来ずに泣いた。

振り向くことは絶対にしないが、もし振り向けばそこには動かな

くなつた…そして原型も留めていない肉片が転がっているのだろう。
「俺は…私はなんてことを…っ」

激しい雨は頬を伝い、涙なのか雨水なのか分からなくなった液体が頬をつたつて顎から絶え間なく落ちる。

私。

俺。

雨に打たれている桜の枝が視界に入った。

「黒也はさ、もうちょっとみんなと仲良くなりたいたいんなら話し方変えよう！」

「は、話し方…か？」

「そう」

千里の提案に一度は興味を示した黒也だったが、すぐにくだらなさと吐き捨てた。

「何故そんなことを私がしなくてはならない」

「それ、それなおそう！」

「私の性格に文句をつけるのか…別に構わないが、こんなものは意識してそうそう変えられるものではない」

自分の性格が割と高圧的なほうだということは知っていた。

知っていて一度も直そうとおもったことはないのだが。

「違つって…別に僕は黒也の性格に文句言ってるんじゃないよ。そ

の「私」とか「貴様」ってやつ」

「…代名詞のことか」

「うん、私つていうとどこか冷めてるようなかんじがあつてさ…貴様つて黒也が言つと少し怖いんだよ」

「怖い…か」

「だからさ…いきなり「君」…とかなんて言わなくていいからせめて「お前」…僕のこととは出来るだけ名前で、自分のことは「俺」でいいんじゃないかな？」

「お前、千里…俺」

何度か小さく呟いた。

お前：は自然に口にすることができそうだった。俺：もなんとなく違和感はあるが使えないほどではない。

「千里は：俺のほうが好きか？」

「うん」

千里。

名前を呼ぶたびに唇がむずがゆくなるような、胸のうちがふわふわするような妙な感覚がした。

水溜りの中に落ちている桜の枝を拾い上げた。

地面にできた水溜りには自分しか映っていない。

雨粒が水面を乱して顔が途切れ途切れにしか見えなかった。

歪む自分の顔が酷く滑稽で哀れに見えて、一度手を突っ込んでぐしゃぐしゃにかき乱した。

茶色く濁った水がしばらくすると元に戻る。

そこに映った自分の顔は紛れもなくあの頃の殺人鬼の顔で、口元にはもう血は残っていないはずなのに残っている気がして、気がつけば口元を腕で何度も何度も擦っていた。

濡れているため滑る。摩擦で痛みはなかったが痛かった。

普段はきにならない雨音が耳障りに感じる。

空が泣いているようだ。

（何が人を超越する力だ）

雨を止ませることもできなければ我慢もろくにできない犬以下の存在。

「千里：千里！」

謝罪で許されるはずもない。

それに本当に自分が彼に伝えたかった言葉はこんなものではないはずだ。

（俺は：千里に謝りたかつたんじゃない。ただ：一緒にいてくれて：独りだった俺に仲間ができて、本当に嬉しかったんだ）

「礼も…言えてないだろう」

言えなくしたのは誰だろう…自分だった。

感謝するべき千里を殺したのは間違いなく自分だった。

「うあああああああ！！」

千里はもういない。

千里を殺したのは化物だった。

23・マゾじゃないから鎖はいらない

数々の死の瞬間、十字の瞳を見て絶えてしまった生。

その全てが一瞬にして脳裏を過ぎり、まるで一瞬で何万という生を経験したかのような衝撃に千里はよろめいた。

煙の消えた室内に倒れる。

膝をついてかろうじて耐えると、心配そうに紙袋が手を伸ばしてきた。手を差し出す青年を不思議そうに見つめる。

「千里？」

「……」

（あなたは、紙袋なのか？ ウェドネが？）

失っていた記憶の数はあまりに膨大で、思い出した割にそこまで急激な変化があつたわけでもなく千里は戸惑う。

「紙袋…魔王は？」

「…消えた」

手をとって立ち上がると魔王の姿はない。燃え尽きたマフラーの成れの果てが落ちていただけだった。

無言でそれを見る。

紙袋の表情は隠れていてほとんど窺うことは出来ないが、それでも決して無感情なわけではないようだった。

時折俯いては唇を浅く噛む。

「勝手に消えやがって、張り合いがねえだろうが」

拾い上げると端から粉末に変わってしまうマフラー。軽く握り締めるだけで消え去って、姿をなくしてしまう不安定な存在。

悔しかった、悲しかった。魔王を助ける事はできなかったの自分に分いかける。

（あなたは一体、どんな気持ちで消えたんだ？）

結局、魔王とはなんだっただろう？

千里の記憶と力だけを受け取った存在。しかし彼にも個人として

の人格があり、確かに千里とは別の存在だった。

そんな彼がなかったことにされるのは悲しすぎた。少なくとも彼は確かに存在し、千里の仲間だった。

「身勝手だな」

どうして力と記憶を捨てたのか？魔王にした問いの答えはとっくに思い出していた。

そのときはそれが余程重いことだったのだろうが、今こうして佐藤や紙袋、鉄：それに魔王という仲間に囲まれて思えることがある。（勝手な理由であんたなんていう悲しい存在を生み出して、果てはその存在まで奪うのか？俺は）

あまりの自分勝手さに呆れ果てて自重気味に笑う。

「本当に、疫病神だな…俺は」

ポツリ、呟いて魔王の残した灰をじっと見つめた。その背中にしばらくすると掠れた声がかかった。

「千里？」

「……」

声が掠れているのは紙袋が多かれ少なかれ緊張している証拠だった。

「お前、全部、思い出したってことなのか？」

「…ああ」

全部思い出した、千里は頷いた。

紙袋は暫く言葉を探すように俯き、泣き出しそうな顔を見ると突然地面に両手をつけて頭を垂れた。

まったく予期できなかった紙袋の行動に千里は驚く。

「本当に…ごめん！俺の勝手な行動のせいで千里は…死んで！」

「止めてくれ、俺は紙袋を恨んでなんかいない！俺を探してくれてただけで…本当に嬉しいんだ」

今度は紙袋が驚くばんだった。

命を奪った罪を簡単に許され、呆然として千里を見上げる。彼は弱々しく、しかし確かに笑った。

「！…千里お！」

「うわ！」

千里の笑顔を見た瞬間紙袋は飛び跳ね、自分より少し小さい千里の体を抱き締めた。

バランスを崩しそうになって千里がよろめくが、気にせず強い力で締め付ける。

息が苦しい。

「ちょ…っと、紙袋、苦しい！」

「ぜってえ離さないからな！俺の嫁が戻ってきたんだ」

「だから嫁じゃないと何度言えば」

「つれねえぞ千里、牢の中で二人つきりで夜を明かした仲だろ！」

「やめろ、誤解の生まれそうな発言自重してくれ」

「ひっハハハハハハ！」

本当に嬉しそうに笑いながら紙袋は千里をいつそう強く抱き締め、それからようやく解放した。

咳き込む千里を見ても嬉しそうに口元の笑みは絶やさない。

あまりの喜びようにこちらまで暖かい気持ちになり、千里は苦笑した。

「変わってない…っていうのも少し変な気がするな。ずっと一緒に旅をしてたわけだから」

「……」

突然紙袋が浮かない表情へ変わった。

紙袋らしくもない、黙り込んで俯く。

「どうしたんだ？」

「いや、ちょっと聞きたいこと…あつてよ」

どうにも歯切れが悪い。

約束を破ったのはお前だ。千里はお前を恨まなかったが…深く悲しんだ。だから次で捨てた…俺を。

魔王の言葉が思い起こされる。

夜、紙袋の元に珍しく魔王が訪れた際、彼は千里が紙袋を恨んで

いないと告げ、それに付け足すように告げた。

魔王の言葉は真実だった。彼自身が千里の記憶を持っている為それは確かなことで、本人もそう言っている。

だが千里が力を捨てた理由についてはまだ疑問が残る。

「どうして、千里は記憶と力を捨てたんだ？ 約束：俺が約束を破ったからなのか」

「嫌気がさしたんだ、鬼として生きること」

「？」

「長いときを生きて、幾度も生の記憶を持って、世界を回って：俺が学んだことがあるとしたら、異形は：淘汰されるべき存在だっ
てことだった」

分かる気がして紙袋は黙り込んでしまった。

自分も人と違って、そして人と同じ人生を歩むことなく世界を捨ててしまった。

だから千里が普通を望んだ気持ちが分かるような気がした。

「約束したよ、紙袋にも、佐藤にも：平穩を望んでな。俺の願いはきつと：普通。でも鬼の力を持つてる自分じゃ普通になれないって思った。だから捨てた：鬼の生はこの代で終わりだ」

「転生は」

「しない、いや：できない。そもそも自分を二つに引き裂くってこと自体無理なことだったんだ。見た目は健常でも中身はつきはぎだらけでボロボロだ。きつと長くもたない」

自分のことだというのにさほど気にした風でもなく千里は言っ
のける。その口調に啞然とした紙袋は千里の顔を覗き込む。

「なんでそんな平然として」

「ようやく楽になれるからだ」

「？」

「あんたなら分かるだろ？ 長く生きるっていうのも辛いもんだ」

「……俺にはまだ、分かんねえよ、分かりたくねえ」

「嫌でも分かる日が来る」

自分の将来に不安を抱いたのか紙袋が黙り込む。嫌な話をしてしまったな…と千里は自分の軽率な発言を責め、その場の雰囲気を取り替えるように手を叩いた。

「陰気な話はこの辺にしておかないか？佐藤を追う」

「それは遠慮してもらいたいわね」

女の声が聞こえて千里は驚いて振り返る。

いつの間に部屋に入ってきたのか、そこには鳳仙の姿があった。客人として千里達を招き入れたときのような温和な笑みではなく、冷たい、警戒するような妖艶な笑みを浮かべている。

「鳳仙さん、どうしてだ？」

「あなた達に鴉を追わせるわけにはいかないのよ」

「女っ、てめえどっか胡散臭えとは思ってたがそういうことかよ！ 鉄をどこにやりやがった！」

「…失礼ね、彼に危害は加えていないわ。彼の望みを叶えてあげただけ。そしてお仲間が一人減っているところを見ると、なるほど、記憶は戻ったのね。道理で変な存在だと思っていたわ千里君」

紙袋の威嚇にまったく動じずに鳳仙は余裕のある表情で千里達を見て笑みを絶やさない。

今にも飛び掛りそうな紙袋を片手で制すと千里は彼の前に建ち、彼女と正面から向かいあった。

鋭い視線が交錯する。

「我等ともなると俺の正体も分かってるはずだ。どいてくれ…今の俺には力も戻ってる」

千里のその言葉はつまるところ脅しにもなっていた。

どかないのなら力ずくでも通る。そういうことなのだろう。そしてその裏の意味にも鳳仙は気づいているらしく、それでも余裕の態度は崩さない。

千里の手が静かに銃に伸びているのに気づいていながら止めない。

「鴉の言葉、忘れたのかしら？私と戦うの？」

「化物並みに強いんだってな、だったら大歓迎じゃねえかよ！一回

あいつとは決着つけたかったんだ」

「血気盛んね、あなたは？」

「…今回ばかりは紙袋に同意だ」

ひくつもりのない千里と紙袋に対峙して鳳仙は溜息を一つつき、それから腰の辺りに浮遊する翼を出現させた。

佐藤のものに似て黒い、しかし硬質な印象のある翼だった。

「仕方ないわね」

腰周りに浮いた翼の上に鳳仙は手を翳す。まるで翼がキーボードのように、指の下に位置する場所が光った。

攻撃の予備動作だと判断して紙袋がフォークを取り出しながら飛び出し、千里は銃の安全装置を解除した。

銃口を鳳仙に向けるが引き金を引く指は動かない。

「人を殺すのは初めてなの？」

なかなか撃とうとしない千里に紙袋は戸惑って立ち止まり、鳳仙は自分から攻撃をしようともせず唇を吊り上げる。

「いや、この生では二回目だ」

「この生では…ね。随分慣れてきているようだけど、どうして撃たないのかしら？」

「あんたが俺を殺そうとしてないからだ」

千里は手首を捻って銃口を僅かに下に向けると、そのまま人差し指を引き金付近のリングに引っ掛け、他の指を離す。

まるで玩具でも扱うようになるくと銃を回すと戸惑った目で鳳仙を武器越しではなく見た。

「千里？どういこうした？」

「紙袋、この人は俺達に怪我をさせようなんて思ってない。おそらく…時間稼ぎ」

時間稼ぎというのは適当に思いついた言葉なのだがどうやら凶星だったようで、冷静さを保っていた鳳仙の顔に初めて戸惑いが生まれた。

目を逸らすと苦笑する。

「鋭い子ね」

「誰に頼まれてこんなことを」

「鉄君よ」

「鉄さん？」

「どうやら諦めたようで、隠し立てする様子もなく鳳仙の口が動く。私に悪者を演じさせて、あなた達が追えないようになってね。頼まれたの。引き受けるかどうかの返事をする前にどこかに行っちゃって、そうになったらもう頼まれた事を無碍にすることもできないでしょう？」

「鉄の野郎が？なんでまた俺達の邪魔をするようなこと」

鳳仙の態度に彼女が戦意を持っていないことに気づき、紙袋もフオークを袋の中に押し込んで武装解除する。

二人の臨戦態勢が解かれたのを機に鳳仙も翼の上から手をどけた。

「鉄さんは何か知ってる…ってことか？」

「…さて、どうかしらね？」

笑みを浮かべて言葉を濁す。しかしそれは肯定に等しい態度だ。

「水臭えな、何でそんな大事なことを俺達に黙ってたんだよ？つーか千里は何も知らねえのか？」

「俺は…俺の佐藤との記憶は俺が死んだところで途切れてる。それからあんた達が向かえに来てくれるまでの空白を俺は知らない。鉄さんと佐藤の付き合いは長いんだろ？…だったら何かあるのかもしれない。二人だけしか知らないこと…が」

「私から教えるのは筋違いよね、いいわ…知りたいなら追いかけてさい」

「…いいのか？引きとめは」

「元々引き受けるとも言っていないわ。それに私はあくまで中立…鉄君の味方をするっていうのも変な話よね」

鳳仙はそう言って穏やかな笑みを浮かべると、その姿を風景に溶け込ませて消える。

「…あなたは本当に全てを思い出したの？」

消える直前に小さく、鳳仙が囁いた気がした。

「ここに戻ってくると思ってた、鴉」

「…鷺」

佐藤はできれば二度と再会したくなかった、そして懐かしい自分の片割れとも呼べるほどかつては信頼した仲間を見た。

白い髪、白い翼、まさに鴉と呼ばれる佐藤とは正反対であり、鷺のように真っ白な姿をしている。

自分に向けられる佐藤の鋭い視線に気づいていながら、それに気づかないような素振りで無邪気に笑った。

「僕が何を望むのか、分かってるよね？」

「断罪か？」

「うん、正解。流石鴉：堕ちても変わらないね」

「変わらないのはお前達だ、悪い意味でな。古くからのしきたりに従い続けるのは矜持の高い種族の欠点だ」

「いいよ、屁理屈は」

聞きたくない、と鷺は首を振って白い翼を数度羽ばたかせ、地面に両足をつけた。

「それが我等だ」

「進歩のない奴らだ」

「退化もない僕らだよ」

にっこりと笑った鷺は右の手を掲げ、佐藤へと掌を向けた。自らの手の甲を見つめ、指の隙間から黄金色の瞳を覗かせた。

手が一瞬眩い光に包まれ、そこに巨大な鎌が出現した。

「相変わらず、お前は装飾美にこだわるな。どうして鎌などという扱いにくいもので俺に挑む？」

「命を刈り取る処刑人、奪うのは死神だろ？」

まるで遊戯を楽しむかのように鷺は笑い、鎌をびゅんびゅんと振り回すと刃を鈍く光らせた。

真っ白な刃が振り上げられた瞬間、甲高い音がして鎌は弾かれ、

鷲の手から離れて落下すると粉々に砕けた。

「残念、そのお役目と名前は僕のものですから」

シユタツと膝を使って勢いを殺し、地面に降り立ったのは首に鉄をつけた男。佐藤は予想外の乱入に目を丸くして驚いた。

「鉄？…どうしてここに」

「何って…当たり前でしょ？僕の主人は君なんだから、君の命を護って君を僕の大好きな千里の場所に帰るのが役目だ」

かつて主人だった鷲を目の前にして、それでも鉄は動じることなくじつと彼の視線を受け止める。

「お久しぶりです、鷲様」

「…久しぶりだね、僕の狗は卒業したのかい？」

「主人が二人というわけにもいかないですし…それに、誰かに判断を委ねるだけの人生が楽なわけではないって気づけたから」

鉄は胸の前に吊り下げられた鉄を引きちぎり、有刺鉄線を投げ捨てた。血に染まる胸元が痛々しい。

切っ先を鷲に向けると微笑んで鉄を投げ出した。

銀色の光を反射させながら鉄は落下し、切っ先を下にして地面に突き刺さる。

「僕のあげた玩具はもういらないの？」

「思い出の品なんて反逆者には似合いませんよ？意外なことにあなたの前に立つても大丈夫みたいだ。これなら自分で自分を縛り付ける必要もない」

「僕を主人と認めないってことか、随分変わったね、鴉に似た」

鉄は笑っていたのだが顔から表情をふっと消し、鋭いまっすぐな眼光を主人だった者、縛り付けていた鷲へと向ける。

そして左手を縛っていた鎖を断ち切った。

「俺はあんたじゃない」

「僕の真似をして生まれた人格が、何を偉そうに」

鷲の瞳に冷徹な光が一瞬生まれ消える。

鉄が反応するより佐藤が動くほうが早かった。

瞬き一つの間、鷺は鉄の前に移動し、その鋭い爪先を彼の喉笛に突きつけていた。しかしその手が皮膚を切り裂くことはない。

白い鷺の手首を移動した佐藤が掴み、全力で引き止めていた。その手をさつと振り払い、鷺は後に飛び跳ねた。

「そうか、皆僕の邪魔をする。鴉、ようやく分かった。君はもう僕の仲間じゃない、敵だ」

「今更か？ 案外理解力がないな」

「化物が、人を演じて滑稽だよ、鴉」

ふつと硬い表情を崩し、鷺は何かに気づいたように遠くに見える人里の明かりを見下ろした。

電力のないこの世界で里の明かりはとても仄かではかなく頼りない。月明かりだけが頼りだ。

「いいや、鴉を殺すのはもう少し後。僕もこの世界は久しぶりなんだ…懐かしいから見て回りたい。我等を殺すには手間がかかるしね…もつとも」

「……」

「最低限しか血を摂取してない鴉なら簡単かもしれないけど」

「手合わせは30勝29敗だったはずだ」

「昔の君はね、強かったよ。」

まるで今は違う…というような鷺の言葉に佐藤は軽く眉を顰めた。
「そういえば」

思い出したように鷺が声を上げる。

「世界移動の目的は果たせたのかい？ 僕にも会わせて欲しいな」

「お前には関係ない」

「関係ない…ね」

確かにそうだ、と鷺は笑う。

（…？）

その笑顔の中に悲しさのようなものを見てとる。

気のせいだと思えるほど僅かなものだったのだが、鷺の顔には決して浮かぶことのない感情だと思っていたため印象に残った。

「一度で直すことにするよ、そのときまで最後の生を満喫するとい
い」

白い翼が彼の体を包み込み、瞬時にその姿をかき消す。抜け落ちた羽が地面に落ちるころには跡形もなくなっていた。

ようやく張り詰めていた緊張を解き、佐藤はふつと息を吐くと振り返って追ってきた鉄を咎めるような目で見た。

「どうして追ってきた。お前は鷲に会うべきではない」

「勝手だな、佐藤。俺は君についていくって決めたんだ…鷲の模造品はもう、止そうと思う」

「鉄」

参ったな…と佐藤は頭を掻き、言い辛そうに俯くと鉄から視線を逸らし、呟いた。

「俺がどうしてお前達から離れたのか…鉄は分かっていると思って
いた。お前は賢いからな…あの莫迦と純粹と違って」

「うん、分かっている。けどあんまりだよ…君は充分頑張った、その
最後が孤独なんてあんまりだ」

「それで、俺に同情でもしたのか」

「違うね」

鉄はくすつと悪戯を企む子供のような笑みを浮かべると考え込むように夜空を見上げ、浮かぶ星を暫く眺めて口を開く。

「俺は君の友達だからさ」

24・むげん

「嘘が上手」

隣と飛翔していたエリカが呟き、そのあまりに的を射た言葉に笑みがこぼれた。

鷺は口元に手を当てて笑う。

「流石、長く僕と一緒にいただけはあるね。分かるのかい？」

「何、隠してる？」

「些細なことさ、僕が一方的に気にしてるだけの…そう、僕の中だけの問題。良心の呵責に似てるね」

「良心？」

そんなものがあつたのか…とエリカが意外そうに反芻した。

「なんでもないさ、速く戻ろう」

だんだんと日が昇り始めているのを見て、鷺は速度を上げた。

町の外れに風が吹き、砂埃が舞い上がる。

その中央に千里と紙袋が降り立ち、ごほごほと咳を繰り返した。

曙光が照らす町外れに二人咳き込む光景というのはかなり浮いている。

「ごほっ、千里、バスより下手だぞ」

「当たり前だろ…バスですらあれだけ上手に着地できる佐藤がおかしいんだ…げほげほっ」

砂埃が落ち着いてくると千里は一度帽子を脱いで埃を落とし、もう一度ひょいっと頭に乘せた。

紙袋は目を閉じたまま袋を取ると、ひっくり返して中にはいった砂をざーっと落とす。

袋を被ろうとしたところで千里に手を握られた。

「…積極的だな、どうしたんだ？」

「目、開けて」

「は？」

「俺を見ることが夢で、それで俺を見たんだよな？」

「……」

相変わらず硬く目蓋を閉じたまま紙袋は俯いた。

紙袋の目じりに指を這わせた。

「大丈夫だ、あの頃の俺は幼かったから佐藤みたいにいかなかったけど今は違う…魔王から力を受け継いで、あんたの視界にも入れるようになった」

「確証は？」

「ないけど…そこは俺を信用してくれよ」

随分迷いがあるようで、なかなか紙袋は顔を上げようとしなかった。目は開けているのだが自分の爪先から目を逸らさない。

それも当然だろう。

彼はきつと充分すぎるほど自分を責めて後悔した。かつて自分の勝手な行動により最愛の人を失ったことを、そう簡単に忘れられるわけもないのだ。

理解していて、それでも千里は目を開けると要求する。

「……」

（千里を…信じる）

大丈夫だ、大丈夫だ。と何度も心に言い聞かせてそっと顔を上げた。久しぶりに見た黒い髪、鎖骨、そして顔にたどり着く。

「っ！」

懐かしい顔。

かつて自分が殺してしまったときには怯えたような表情でこちらを見ていた。だからその表情しか知らない。

しかし今度の千里は違った。

少し恥ずかしそうにはにかんでいる。

「ウエドネ」

「……」

言葉が見つからず、紙袋は柄にもなく黙り込むとあふれ出そうな

感情を表面に出さないように唇を噛んだ。

情けないことに目の奥が熱い。

嬉しくて嬉しくて、泣きたいくらい嬉しかったがそれを表面に出すのも癪だったので、ぐつと涙を堪えて笑みを浮かべた。

いつものように、大胆不敵、傍若無人な笑みを。

「どーだ俺様の素顔、カツコイイだろ？」

「自分で言うなよ」

ケラケラ千里が笑い、千里の笑顔を見た紙袋の頬が緩む。懐かしむように目を細めるとすつと俯いた。

十字の瞳は相手を威圧するような見た目ではあるが、目を伏せると紙袋本来の人柄が見える気がして千里は息を呑む。

「ありがとな、千里」

「満足か？」

「そだな、千里を嫁に迎えるまでは俺の夢は叶わないけどな」

「じゃ、永遠に無理だ」

「お前、魔王から性悪まで一緒に引き継いだのか？俺に対する態度が若干冷やかで寂しいぜ」

「若干じゃない。でも…魔王か。そだな、消えないで僅かでも俺の中にいるとか…そんなことがあったらいいな」

自分の胸に手を当てて握りこぶしを作り千里は呟く。するとそれを見ていた紙袋がプルプル震え、突然千里に抱きついた。

突然の出来事にひつと短い悲鳴をあげて千里が尻餅をつく。

「お前本当にかわいいなあ！」

「あんたは相変わらずスキンシップが過剰だ！手離せ！」

「あのオッサンとお前が同じ記憶持つてるってのは今でも信じられねえよ！」

「だ、だから…手っ！」

本気で抵抗して胸を押すと、意外にもあっさりと紙袋は千里を解放しふざけたような面持ちを消した。

十字の瞳が物憂げに見え、真剣な表情をすると本当にかっこよく

見えるので困る。

今のように突然抱きつかれるようなことも困るが、突然沈黙するのも紙袋に似合わず違和感がある。

「紙袋？」

「…なあ千里」

「ん？」

「例えば…例えばだぞ？俺が消えたとしたら、魔王のときと同じように悲しんでくれるか？」

（突然…なんだ？）

質問の意図がつかめず千里が押し黙ると、紙袋は促すように膝を立てて尻餅をついたままの千里に視線を合わせた。

どうやら真剣な質問らしい。

正面から十字の瞳で見据えられるというのは少し威圧感があり、その威圧感に言葉が出ず千里はコクコクと頷いた。

「そっか」

ふっと表情を緩めると紙袋はくしゃくしゃと千里の頭を撫で回し、膝の砂を払って立ち上がるとすっかり明るくなった空を見た。

日の出は過ぎ去り朝を迎えた空だ。

日光を背にして紙袋は千里に手を差し出した。

「行くぜ、千里。自分の尻拭いもできねえ情けない佐藤を…俺達で助けてやるんだ」

「…ああ！」

手を借りて千里が立ち上がると、強い風が吹いた。

その風に髪を煽られる。千里が慌てて帽子を押さえると、鼻先をピンク色の何かが通り過ぎた。

見覚えのある光景に目を丸くする。

次々と流れてくる桃色の雪。忘れるわけもない桜の花弁。

「おー、綺麗だな。千里のおかげで良いもの目に焼き付けられたぜ」
「桜…」

思い出されるのは桜の木の下でしたあの約束。人を殺さないでと

いう身勝手な願い。

その願いの結果、佐藤は暴走して千里を殺すことになった。

複雑な心境で桜の花弁を掌に落として見ていると、紙袋はいそいそと脱ぎ捨てた袋を被り始めた。

「何して」

「あ？…ああ、だつてよお前。千里はいいかもしんねえけど他の生物片っ端から殺すわけにもいかねえよ。それに…だ！」

深くまで袋を下ろすと口元に笑みを浮かべた。

「こつから先、きつと汚え物ばっかり見ることになるぜ。俺は最後に千里と桜、綺麗なものだけ見ておきたいんだ」

最後…という言葉に何故か不思議な恐怖を感じるが、その正体が分からずに千里は首を捻った。

自問自答で答えが出ない。

「行くぜ」

「鷲は夜に力を増す、夜に行動を起こす、だからそれまでに考える。お前をどうやって逃がすか」

佐藤は呟くと、良い案が浮かばないらしく親指の爪を軽く噛んだ。「どうして俺を逃がすことが前提なのかわかんないんだけど。佐藤は逃げないつもりだったの？」

「ここで俺が朽ちればそれで鷲は満足する。お前達は鳳仙の加護の下で生きることが出来る。もっとも崩された計画だが」

佐藤と鉄の隠れている場所はかつて黒也がねぐらとした場所。

山の奥にある鍾乳洞の中だった。

「俺は佐藤の自殺を止めに来たんだよ。帰ろう…千里が待ってる」

「…鉄は卑怯だな」

「どうして？」

「俺が千里のことになると戸惑うのを知ってて言うだろ。だがそれはおそらく不可能だ。我等は不死身に近い…どうやって殺す？」

佐藤の力を長く傍で見てきた鉄にはその言葉の意味が判る。人を

最低限しか食わない佐藤でさえ人並みはずれた力を持つ。

我等として本能に従順に生きている鷲とエリカを殺す手立てなど思いつきもしなかった。

「お前を巻き添えにするつもりはない、安心しろ」

「俺が佐藤だけ行かせると思う？」

「思わん…が、我等のくだらない矜持のために鋏が犠牲になっていはいはずもない。だからついてくるな」

頑固な佐藤の意見に鋏は肩をすくめる。

「願いたい事はないのかな？」

「…知らない」

「千里を見つけて、千里に償って、千里と一緒に普通の生活を送ることが君の願いだらう？」

「…違う」

「些細な願いだ。千里に平凡を贈りたい、それは確かに佐藤の願いだらうけど、その未来に君がいるはずだ」

「違う」

「共に生きることが望みだろ」

「違う！」

ヒュツと空を佐藤の掌が横に薙いだ。

鋏は予測していたらしく、体をそらして避ける。

「違う！…もうどうなってもいいんだ、俺は。都合が良すぎるんだ…自分で食い殺しておいてもう一度なんて考えが甘い」

「それを紙袋に言えるかな？」

「…！」

佐藤もだが、紙袋もまた佐藤と同じように千里を殺してしまい、もう一度共に生きたいと願っている一人だ。

同じ立場にいる紙袋にその台詞が言えるのか？と鋏は尋ねた。

答えられない佐藤を責める事はせず鋏は微笑んだ。

「君には感謝しているよ、主人。だからほんの少しだけ…恩返しをさせてほしい」

突然佐藤の体を突き飛ばすと、鉄は走って鍾乳洞の外へ飛び出した。不意打ちをくらう形となった佐藤は受身が取れずに背中から倒れ、それからすぐに体を起こす。

何が起こったのか分からなかったが鉄を追って穴を出た。

「鉄！」

「ぐっ！」

外の明るさに目が眩み、一瞬何が起こっているのか分からなかった。だが目が慣れてくるにしたがってだんだん分かってきた。

エリカがいた。

どうやら昼間動かない鷺に代わって佐藤を殺しに来たようだが、それを鉄に見抜かれて押さえつけられている。

（無茶だ）

ただの人間である鉄が我等の一人であるエリカを長い間押さええていることなど不可能だ。

だが鉄の顔に難色はなく、吹っ切れたように笑顔を浮かべると叫ぶ。

「お願いします、鳳仙さん」

「本当にいいのね？」

「鳳仙？どうしてここに」

佐藤の右側、少し離れた場所についての間にやら鳳仙が立っていた。腕を組んで鉄とエリカの様子を見ている。

「頼まれごとを果たすためによ…鴉の味方ではなく、鉄君の覚悟を評価して…少しだけ力を貸すの」

「鳳仙、お前…中立を裏切る！？」

「人聞きの悪いことは言わないで欲しいわ。私はあくまでビジネスとして鉄君の協力をするだけ。鴉の仲間じゃない」

「助かります、鳳仙さん」

「準備はできてるわ…最後にもう一度聞くわよ、本当にいいの？あなたのやるうとしていることは私達だって正気ではいられないこと、きつと後悔するわ」

「構いません、今の俺にとってはこれが最良の選択だから」
「そう」

(何を)

呆然と佐藤が見ている目の前で鉄はエリカを押さえつけ、鳳仙は言葉を発することすらせずに一瞬で術式を展開させた。

中に浮かんだ巨大な円状の言葉。

それが光を放ってエリカと鉄を囲う。

「待て…まさか」

「空間隔離魔術構築完了、いつでも…あなたのタイミングで
空間隔離。」

そこまで聞ければ鉄の目的は明らかだった。おそらく殺すことのできないエリカを道連れに、隔離された世界へと逃げ込む。

「やめる…鉄！」

「安心してよ、この人がこっちに帰ってこないようにあつちの世界で俺が戦い続ける。俺は不老不死じゃないからずっとっていうのは無理だけど…寿命分は頑張るから」

「確認するわ。あなたの差し出すものは自分の人生。隔離空間の隔離条件はあなたの生存。鉄君が死ねばエリカは解放される」

「鳳仙止める！」

「できないわ」

「…！どうして…！お前が犠牲になる必要があるんだ！止めてくれ！」

懇願するように叫ぶ佐藤を見て鉄は穏やかな笑みを浮かべた。

「俺に心を教えてくれたのは君だ。俺に世界を見せてくれたのは君だ。千里も、紙袋も佐藤も大好きだから…お別れ、ね？」

「止める、止める！うあああああ！」

「鳳仙さん、お願いします」

「武運を祈るわ」

「ありがとうございます」

光が収束しエリカと鉄を覆うと弾けて消えた。

25・もう一人の鬼

初めて会ったとき、まるで野良犬のような眼光に興味を抱いたのを鷲は覚えていた。

近づくもの全てを傷つけるような、酷く敏感そうな青年は鷲とは対照的に真っ黒な髪をしている。

黄金色の瞳だけが共通点であり、我等である証拠だ。

「新入りかな？」

そつと手を伸ばして…しかし届かず、鷲は立ち上がって青年のもとへ歩み寄った。

青年の横に立っているエリカが顔を陰しくする。

「鷲」

「心配性だな、エリカは」

「……」

「それにしても随分ぎらぎらとした目をした仲間だね、君は？」

「私は…いや、俺は」

「ああ、やっぱりいいよ」

自分から名前を聞いておいたくせに鷲は手を前に出してそれを制止し、黒い翼と黒い髪を持つ彼をじつと吟味する。

「正式な名前は自分の中にだけ秘めておくといい。君の名前は鴉…どうかかな？ 僕の対となる名前だ」

「鴉？」

「君の望みは聞いたよ…世界を移動する術を知りたいらしいね。でも残念ながら君にそこまでの力はないようだ。だから僕は君に移動方法を教える…世界を移動するバスの使い方だ」

「それがあれば…違う世界にいけるんだな？」

他の話題に比べて鴉の反応が違った。

どうやら何が何でも世界を移動する手段が必要なようで、一見冷めているように見える彼をそこまで必死にさせる理由が知りたくな

った。

しかし初対面でそれを尋ねるのは失礼にあたるだろう……と鷲は好奇心を押し殺した。

「人には扱えない方法だ。対価が必要になる」

「構わない、命だつて差し出す……それで救えるなら」

「救う……ね。面白い。暫くここに留まるといい。今の君にはバスを移動させるほどの力すらない。我等が教えよう……力の使い方というやつを」

「鷲！」

「エリカ、彼は望みを果たしたい同志だ。だつたらそれを応援するのも僕らの役目なのではないかな？」

「危険」

「鳳仙が離脱した今、新しく仲間が必要な頃合だろ？ 鴉、我等を志を共にする者として護らなくてはいけない掟があるんだ」

「掟？」

突然条件を提示されて、鴉は怪しむように鷲を睨んだ。大したものではない……と苦笑して鷲は手を振った。

「簡単なことだよ、我等にとって人間は食べ物に過ぎない。だから家畜として扱ふことは許されても、人間を助けるようなことはしてはならない。簡単に言えば……人とお友達になろうなどとするな。人と我等は違う存在、違う世界に別れて秩序の生まれるものだ」

静かに掟を聴いていた鴉だったが、鷲の言葉を聞き終えると首を僅かに捻った。

「何故……そんな決め事が？」

「不都合かい？ 高潔な我等の教えだ。意義は……人との交わりを断つため。教訓だよ……かつていたんだ。愚かにも人と交わり、人の子を成した我等の裏切り者が。我等と人が交われればそこには鬼が生まれる。人でもなければ我等でもない、中途半端な紛い物だ」

「……分かった」

鴉はそう呟いたが、鷲と目を合わせようとはしなかった。

「思えば、あの時からすでに鴉は僕を裏切るつもりだったのか」
ぼんやり呟いて鷺は嘲るように笑った。

見抜けなかった自分の愚かさを、そして鴉の心中を思つて。

寝台から身を起こさずに手を天井に向けた。窓は布切れで覆われているが風が入ってきて、一瞬だが日光が射し込む。

日が彼の伸ばした手に当たった瞬間、鷺の手から肉が消えうせ、骨だけの姿へと変わった。

しかしそれは現実ではなく、日陰に戻れば元の白い肌へ戻る。

「長い僕の生もあと一世紀ぐらいで終わりつてとこかな」

老いとは怖いものだ。

と老いとは無関係な我等であるはずの鷺が呟く。見かけは老いることもなく、身体機能が衰えることもない。

しかし不死ではない限りいつか死ぬときがやってくる。

太陽の下に出ることが辛くなってきたとき、自分の死が近いことを悟った。残った寿命だけでも人は長い生だと言つのだろうが。

「エリカがやられるなんて、やるな…僕の狗も」

目を閉じて呟いた。

「あーやってられっかつての！」

木造の街中を二人が歩いていった。

言つまでもなく千里と紙袋のだが、二人ともこの世界からみれば特殊な格好をしていたので、服を調達して着物に着替えていた。

その一人、紙袋は疲れたように立ち止まる。

「今まではどこでもナビの化物がいやがったから世界移動も楽しめたけどよ、一つの世界って馬鹿でかいんだぜ？んな中から佐藤だけ探し出せつたつて無茶だろ。化物みたいに人の気配を感知する能力も俺にはねえしな」

「それは…確かに。でも手探り以外に方法があるわけでもない」

「けっ、頼りてえときにだけいねえんだな、あの化物は」

千里の言い分ももつともであり、また紙袋の意見も正しいものだ。世界を移動したのはいいものの、完全に佐藤の足取りを見失ってしまった。

「そうだ、千里は魔王から力戻ったんだろ？こつ…なんつーか探知機能的なもんねえのか？」

「探知…ああ、魔術のことか。佐藤が使ってたのも多分それだと思うが…佐藤の真似事が俺にできると思うか？」

「あー」

バスでの世界移動と千里の乱暴な世界移動とを比較してみる。力は自力で世界を移動できる千里のほうが優れているのだろうが、如何せん扱いに慣れてはいないようだった。

「無理か」

「無理だ」

はあ…と二人が同時に溜息をつくとき、向かい合った二人の真ん中にいつの間にか人が立っていた。

突然の出来事に千里は悲鳴を呑み込み、紙袋は警戒してフォークを取り出して構えた。

「……」

無言で二人の間に立つその青年は短い灰色の髪をしており、顔の前面を大きな狐のような猫のような仮面で覆っている。

無言であるのとは対照的に、彼の仮面に描かれている顔が笑っているため不気味に見える。

一目でこの世界の存在ではないとわかる洋服を着ており、シャツの裾からはひよる長い尻尾が飛び出している。

「新手かよ！」

「紙袋！…ちよつと待ってくれ」

「はあ？」

「いいから」

紙袋を止めた千里は仮面の青年の尾を凝視した。見慣れた形だ…なぜなら自分の腰にも同じものがついているのだから。

「誰だ？」

「…柎だ、ついて来い」

言葉少なくそれだけ告げると柎と名乗った青年はひよいひよいと跳ねて屋根の上を移動し始める。

「千里の知り合いか？面白くねえな」

「そういう感想は心の底に止めとけよ…だけど知らない。ただ、俺と同じ臭いがした」

「千里と同じだあ？んなわけあるかよ、千里の香りは俺の大好きな「いーから行くぞ！」

長々と語りだしそんな紙袋の腕を掴み引つ張る。

見失わないように柎の背中を目で追いながら走る。

千里から手を繋がれたことが嬉しいので、勿論紙袋は抵抗せずに駆け出した。

暫く後を追いかけると柎は町を外れて町からそんなに離れていない山道へと走った。

時折立ち止まって千里達がついてきているか確認する。

「つたく、どこまで連れてくつもりだよ」

「分からないけど、敵じゃなさそうだ」

気づかないうちにあれだけ二人に接近できたのだ。殺そうと思っていたのならその瞬間に首を刎ねることだってできただろう。

それをしなかったばかりか、どこかに千里達を案内しようとしている。

暫く進むと水の流れる音がして、森の中を流れる清流に突き当たった。そこで柎は立ち止まり動こうとしない。

「休め」

「どこまでも上から目線だなこいつ。可愛げねえ」

紙袋は吐き捨てると不愉快そうに川の水を飲み、大きな木の根元に腰を下ろして一息ついた。

千里はフラフラと川に近付くと、その透き通った水に手を浸す。

冷たい。

しかしそれだけではなく、思い当たるところがあって表情を険しくすると、柊の前に立った。

「どういづつもりだ？」

「……」

「千里？」

（ここは俺が黒也に殺された場所）

どうしてこんな場所に連れてきたのか？

何故知っているのか？

柊は仮面の内側で一体何を考えているのか、全く表情が読めない。

千里はそれに珍しく苛ついていようだった。

「どうしてこの場所を知ってるんだよ」

「知っている、母上より聞かされた」

「母上？」

「この場に連れてきたことに意味はない。目的は場所ではなく、お前達の探しているものにある」

「佐藤の居場所を知っているのか」

「道案内」

囁くように告げるとそれっきり柊は口を利かなくなってしまう。

元々無口なのかもしれないが、それよりも柊の生気のなさに磨きをかけているのは彼のその仮面にあった。

表情が見えない。目を開いているのかも分からない。

動かなくなつて口も利かなくなってしまうと、本当にそれが生きているのかすら分からなくなる。

「答えになつてない、お前は誰だ！」

「……」

「答えるよ！」

パンッ！

千里が叫んで仮面を払うと、あっけなく仮面は柊の顔から離れ、物悲しい音を立てて地面に転がった。

避けることもできたはずなのに柊は動こうとしなかった。

仮面を剥げば感情が分かるというのは甘い考えだったようで、柊は仮面をつけていなくとも表情一つ浮かべていない。

両目はしっかり開かれており、黒色の瞳が千里を見ていた。

そして仮面の下からはもう一つ出てきたものがある。

「！」

「どういうこつたよ…これ！」

額の位置に千里よりは小さいが角が二本生えていた。仮面で上手く隠していたようだが、それがなくなった今となっては隠すすべもない。

「見てのとおり、私は鬼だ」

「千里と同じってことかよ、分かんねえな…鬼って何だ？どうして千里以外にも鬼がいるんだ？」

「何故、教えない千里？認めたくないのか、知らないのか」

「何を言って」

「自分が何者かも知らずに彷徨っていたのか？哀れだな。私達は鬼、人と我等の間に生まれた悪魔の子だ」

—呼吸置いてから柊は目を閉ざして呟いた。

「存在してはならないモノだ」

「見果てなさい、千里君。あなたの存在意義を、あなたの意思を私に教えてちょうだい。それが私の答えになるわ」

鳳仙は呟くと、空に立って千里達を見下ろした。

見守るような穏やかな目だ。

「頼んだわ、柊」

「我等と人の子？」

初めて知った事実に驚き、千里は柊の顔を正面から見たまま、目を逸らせなくなってしまう。

今まで鬼というのは自分だけかと思っていた。

だが目の前に鬼と名乗る青年がいて、角は紛れもなく彼の言葉が真実であることを示していた。

だがそんなことより驚くべきは彼の口から出た言葉。

「千里が…人と化物共から生まれ たってことかよ」

「なるほど、どうやら本当に知らないようだ。随分古くに生を受けた方のような。忘れているのか…それとも産み落とされた者から何も聞かされていないのか、もしくは出会ってすらいらないのか」

「忘れた？自分の生まれを？…俺が？」

（そんなわけ）

一時期魔王に記憶を預けていたときには特殊な例として忘れていたわけだが、それ以外のことを忘れたことはないつもりだった。

膨大な記憶を記録できる魂は膨大な生を持つ自分に与えられたものだと思っていた。

だが言われて、改めて記憶を探るとどの記憶が最初だったのか分からない。最初の記憶がなく、気づけば自分が鬼であるということに自覚して生きてた日々だ。

思い出せないことがあるというのは初めての経験で、千里は額に冷たい掌を当てるとフラフラ数歩下がる。

「数奇な運命もあるんだな、我等の子であるお前が、数多の世界でも数少ない我等と出会い、その心を捉えた」

「ちよつと待て！はったりかましてんじゃねえぞ！千里は確かに少し変わってるかもしれないよ。けど化物みてえに特別な力を使ったこともねえし、そもそもお前等みたいに人を食ったりは」

「私は鬼で、人を食らったことはない。千里のように転生を繰り返したこともない。老いるのが遅いのでな、二百年ほど生き続けている。だから分かる…自分の存在している訳も」

「……」

暫く額に掌を押し当てたまま俯いていた千里だったが、落ち着いたようですつと顔を上げるとできるだけ無表情を装い、冷やかな目をしている柊を睨み返した。

「それを伝えにわざわざ来たのか？」

「違う、母上の命でお前達を鴉のもとへ案内する」

「化物の居場所を知ってるってことかよ。だったらさっさとしようぜ！…これ以上無駄口叩いて千里を苦しめるのは許さねーぞ」

「私も話は得意ではない…ついて来い」

休憩は終わりだ、と柊は叩き落された仮面を捨てると再び顔につけ、表情を再び隠すを無言で歩き出した。

体尽くしたままの千里は悔しそうに唇を噛んでいる。

「千里」

「…行こう、少なくとも敵じゃない」

「お前がそう言っんなら」

案内された先は予想はついていたがああ鍾乳洞だった。

黒也と過ごした日々を回想して千里が目を細めると、これで自分の役目は終わりだ…とばかりに柊は立ち去ろうとする。

慌てて紙袋がその袖を掴んだ。

「おい！」

「何だ？私の役割は終わった」

「ここに化物がいんのかよ？」

「自分の目で確かめてみればいい」

細い腕からは想像ができないが、予想以上に強い力で柊は紙袋の腕を振り払うと砂を舞い上げて跳びあがった。

相変わらず人間離れた動きで山を駆け下りていく。

それを目で追うこともせず、千里は鍾乳洞へと歩を進めた。気づいた紙袋が続こうとするが、千里は無言のままそれを手で制し、首をゆっくり横に振った。

「…」

察した紙袋は不満そうではあったが立ち止まり、洞窟の穴が空いている壁に背中をつけて顔を伏せた。

ここで待っているということだろう。

千里は一人で薄暗い空間に足を踏み入れ、入口からそう遠くない場所に体を丸めている青年を見つけた。

膝の上に腕を組み、顔を埋めているため表情は窺えない。

しかし黒い髪、その姿から誰なのかは分かる。

「黒也」

あえて佐藤ではない名前を呼ぶ。

すると佐藤は驚いたように顔を跳ね上げ、信じられないという風に目を丸くして千里を凝視した。

幻覚でも見ているのではないかと疑っている。

「ど…して、お前までここに」

「俺だけじゃない、紙袋もいる。魔王も…一緒だ。隼さんは見当たらなかったけどな。みんな佐藤のために来た、あんたを一人にはさせない」

「魔王？」

魔王の気配を感じられずに佐藤は弱々しく彼の名前を呼んだ。酷く傷ついている様子で、そんな佐藤を千里は初めて見る。

「感じられない…いや、それよりも千里…お前今、俺のことを」

「黒也だ、覚えてる…もう忘れない」

辛い過去だったとしても捨てるのはもうやめた。

決意を胸に秘め、堂々と千里は宣言した。

それは佐藤にとって大きく二つの意味を持っていた。

一つは千里の記憶が戻ることにより、自分の犯した罪と向かい合わなくてはならないということ。

もう一つは魔王の消滅だ。

どちらも今の佐藤には重過ぎる出来事だった。どうすればいいのかも分からずに戸惑いの視線を彷徨わせる。

「どうして？」

辛うじて口から出た言葉は酷く掠れ、そして内容もたいした意味を持たないものだった。

そんな佐藤を気遣ってか千里は柔らかな笑みを佐藤に向ける。

「魔王は俺に記憶を返したんだ。だから俺はもう…黒也のことを忘れてたりしない。佐藤のことも忘れないし理解してるつもりだ」

驚いていた佐藤だが千里と目が合うと目を伏せて顔を逸らした。自分に責任を感じているのかもしれない。

千里はそれを少し寂しく感じた。

折角記憶が戻ったというのに佐藤は自分の姿を見てくれない。なんとかしてそんな黄金色の瞳が見たくて名前を呼んだ。

しかし佐藤は振り返らない。

「黒也？」

「全部…俺のせいだ」

「？」

小さく呻くような声が聞こえた。

佐藤は再び膝に顔を埋める。

「俺のせいで…千里も、紙袋も、鉄も」

「佐藤」

「俺が、化物のくせに普通になりたいなんて願うから、罰が当たったんだ。俺が…人を殺す俺が報われるなんて、そんなことが」

「やめる…やめるよ！どうしてそんなこと」

自分を責め続ける彼の姿を直視できずに千里は叫んだ。

優しくしてくれた千里を殺した。

紙袋の人生を潰した。

悲しい存在の魔王は自分のために千里に還った。

共に旅をしてくれた鉄は自分のために死ぬまで戦い続ける。

全てがもとを正せば…自分のせいだと佐藤は感じて、千里に合わせる顔もないと嗚咽を漏らした。

情けなかった。

我等といえども、力があっても、結局はこの程度の存在で、千里のように他人を幸福にすることもできずに災厄だけを振りまいてい

るではないか。
「俺は…あなたに助けられた。佐藤は俺を助けてくれたんだ」

「その恩を仇で返した」

「…俺はそんな風には思っていない」

優しげで、佐藤を慈しむような声が降ってきて、佐藤は俯いていた顔を上げると千里を見上げた。

「すまない…俺は！俺は！」

長い間ずっと自分を責め続けてきた彼の心からの謝罪だった。

泣き崩れた佐藤の頭を抱き締めながら千里は静かにその謝罪を聞く。自分に向けられた贖罪だ。

黒い髪をそつと撫でた。

「大丈夫だ、俺は黒也を嫌いになつたりしない。絶対に…お前は二度と一人にはならない。世界中が黒也を見捨てても俺だけは黒也の、佐藤の味方だから」

きつと高潔な意思を持つ我等でさえも、本質は脆いものなのだ。

佐藤を構成しているもの、きつとその根源には一人に対する恐怖がある。

詳しい話を聞いたことはなかったが、佐藤は、黒也は千里と出会うまでずっと一人だったはずだ。

そして過去、きつと何かがあった。

人を大好きな佐藤が人を殺すという行動自体に矛盾があった。それが心から生まれる苦しみだと、気づいてやれたのは随分後になってからだ。

「俺のほうこそ…ごめん。黒也のこと忘れてたりして。俺とようやく再会できたっていうのに忘れられてたら…俺だったら泣き叫んで愛想つかすところだ」

「…ありえない、俺が千里を見捨てることは」

「そりゃ嬉しいな、じゃあ俺もあんたを見捨てるようなことはしない。戻ろう？…みんなでまた一緒に」

不可能なことだというのは分かっている、それでも千里は告げた。佐藤もそれが絵空事だということを知りながら、否定しない。

魔王は消えた。

鉄は戻らない。

変えようのない過去の事実だ。

「いちゃついてんじゃねーぞ」

棒読み、明らかに退屈そうな響きを持った声が聞こえる。

振り返れば外から差し込む光を背に、痺れを切らした紙袋が立っていた。

紙袋の存在に気づくと佐藤は慌てて手の甲で顔を拭い、弱々しい表情を一変させた。

別に紙袋だから…というわけではないのだろう。佐藤は気高い。

だからこそ千里以外に自分の弱い面を見せたくないという意地のよ
うな、プライドのようなものがあるのだろう。

「ごめん」

「鉄は、やっぱいねえのか」

「…ああ」

ようやく落ち着いたのか佐藤が短く答えた。しかしその声は沈んでおり、鉄に何かがあったのだとすぐに分かる。

「話してくれ佐藤、鉄に何かあったのか」

26・盲目の献身

「あら、お迎えなんて優しいわね」

「…いえ」

次元が捻じ曲がりそこに鳳仙の姿が現れる。

佐藤達が近くにいる場所を…と望み、山の中腹に降り立ったようだった。見覚えの無い景色に探す苦勞がありそうだと覚悟してきたのだが、幸い案内人がいるようだ。

空間移動を終え、地面から数十センチ浮いたところに出現した鳳仙に手を差し出した人物がいた。

仮面を被った青年、柊だ。

まるで執事か何かのように手をとるとそつと地面に足がつくまでサポートする。

降り立った鳳仙は礼を言うのと木に囲まれた開けた場所に立っていることを確認し、深呼吸する。

「綺麗な場所ね。私の世界にはこんなに自然が残っている場所はないかもしれない」

「今度、一緒に探す」

「あら、嬉しいわ。そうね…広い世界ですもの。たまには城から出て散策するのも楽しいかもしれないわ。一人はともかく、二人ならね」

魔術を使った影響だろう。

鳳仙の腰周りには翼が浮いていた。軽く小突くことでそれを消し去り、鳳仙は自分より僅かに背の高い柊と同じ立場になる。

飛んでいけば早いのだろうが、それよりも無駄を楽しみたい。

「それで、鴉の居場所は？」

「こちら」

柊は丁寧な身振りで鳳仙を森の奥へと誘った。

鳳仙の現れた開けた場所から少し進むと獣道があり、先導する柊

に鳳仙がついていくと再び開けた、さながら森の奥の広場とも形容できそうな場所に出る。

岩壁が剃り立っており、そこに穴が開いていた。

どうやら中はそれなりの広さを持つ洞窟らしい。

丁度黒い頭が出てきたところで、ひょいっと顔を出した千里は予想外の人物がそこにいたことで驚いたようだった。

「鳳仙さん？」

「こんにちは千里君、鴉と再会できたようで何よりよ」

「あの女がどうかしたのか？…って、なんでこんな場所に」

「こんにちは紙袋君、それに鴉もいるのよね？」

「……」

続けて無言で佐藤が姿を現し、洞窟の外の明るさに目を細めた。

鳳仙を見つけると不愉快そうな顔になる。

失礼な態度だろうが、鳳仙はまったく気にしていないようだ。

「つーかよ、隣にいるのはあの仮面だよな？どうしてお前等と一緒にいるんだよ？グルか？」

「あら、何も悪巧みなんてしてないわ。それよりも鴉、柎に感謝しなさいな…千里君達をここまで導いたのは彼なんだから」

「…どうして中立であるはずのお前がこの世界にいる？」

佐藤の口から飛び出したのは感謝の言葉でもなく、拒絶の無言でもなく理解できないことに対する疑問だった。

中立を保つと宣言し、それゆえにどちらにも力を貸さないといっていたはずだ。

確かに直接的に助けてもらった覚えはないが、それでもこれではまるで…鳳仙が千里や佐藤に力を貸しているようにも見える。

見える…だけではなく実際そうなのだろう。

「道を変えたのね佐藤、命を捨てる方法でなくなったことを、私は素直に喜びたいと思うわ」

佐藤の問いには答えずに鳳仙は他の話題をふる。

「許してもらったわけではない、俺はこれからの命を千里に捧げた。

尽くすことで贖罪とするだけだ」

「ものは言い様ね」

「お前も…話を逸らすのが上手いな」

言い切ると同時に佐藤の姿が消える。

正確には消えたように感じただけで、実際には強い力で地面を蹴り、素早く上へと飛び跳ねただけだ。

紛い物ではない殺意を身に纏い、振り上げた鋭い爪を鳳仙へ振り下ろした。

「佐藤！」

突然の行動とこれから起こる流血事態に怯えて千里は目を閉ざすが、聞こえてきたのは爪が肉を裂く音ではなかった。

「無礼者が」

「ふん、やはり止めたか」

佐藤と鳳仙の間に身を滑らせ、その攻撃を佐藤の腕を掴むことで寸前で止めていたのは柊だ。

体重も乗せられた、更に佐藤の腕力も加わった突きを片手で止める。それだけで彼が鬼なのだと思いきらされる。

千里に肉体面で優れている場所は特にないが、もしかすると鬼のも個体差があるのかもしれない。

佐藤はすんなり腕を引き、ひゅっと宙で一回転すると千里の前へと舞い戻る。

「随分必死だなお前、鳳仙がそんなに大事か？」

「……」

無言を貫き通す柊に呆れ、佐藤はすつと左手の指先を鳳仙に向けた。

柊が対応する暇もなく、指先から小さな衝撃波のようなものが飛ぶ。小さな魔術は一瞬で鳳仙の喉もとへ迫った。

慌てた柊が届かないと分かりつつ手を伸ばす。

「母上！」

柊の呼び方が決定的な証拠となった。

白く細い喉に触れる直前で魔術は動きを停止し、空気に溶け込むように消えてしまう。

柎の隣に立つ鳳仙は降参の意味を込めて両手を挙げた。

「鬼の母親はお前か」

「その通りよ…話は聞いたことがあるんじゃないの？かつて人と交わった愚かな我等がいた。それは私…生まれたのは柎」

「つまりお前が鬼を生んだってことかよ？」

「柎に関しては私の子だと認めただけよ。だからこそ私は我等のハズレモノ。追放されて、それでも生きているだけマシかしら」

命までは奪われなかったということだろう。

話を聞いていた佐藤が顎に手をあてて首を傾げる。

「あの鷺が…よく中立なんて立場を認めたな」

「強く言えるはずがないのよ、あなたがどう聞いたのかは分からないけれど、あの掟が作られる原因になったのは私じゃないわ。私が罪に問われたという事は…逆にいえば私が子を生んだときにすでに掟はあったということになる」

「そう言われれば…何故鷺は嘘を？」

「さて、どうしてかしらね？」

何かを言葉に含めるように疑問を投げかけると、鳳仙は佐藤の隣にいる千里に目をやった。

佐藤や紙袋を見る目とは違い、鳳仙は千里を見るとき優しくな、親のような視線を向ける。

今回もその例外ではなく、慣れない視線に千里はたじろいだ。

「なるほど、俺達に協力してくれてたのも全部、鬼の千里とてめえの息子を重ねてたってわけかよ」

「半分正解で半分ハズレよ、紙袋君」

「ああ？」

「柎と重ねていたというのはあるけれど、私はそこまで親ばかりじゃないつもりよ？」

それは柎を見てみれば分かった。

柀を息子と認めつつ、鬼の力を生かして行動させている。隣に柀がいるというのにほとんどそちらを見ようともしない。

仲は良いのだろうが、そこまで甘やかされている印象はなかった。「私は純粹にあなたたちの味方をしたくなつたの。幾つもの世界を見てきて、迫害にあつてきて、それでも綺麗な千里君の本質に惚れこんだだけよ」

「え…と」

遠まわしな告白と意外に優しげな鳳仙の笑顔を向けられ、千里はどう対応していいのか分からずに頬を僅かに赤らめた。

「残念だがその告白は成功しないぞ、千里の婿は先約済みだ」

「…誰がだ」

ぼそつと佐藤が呟くが、その冷たい言葉を無視する強靱な精神力を紙袋は持っているようだった。

「な、千里！」

「え？…うわ！」

いきなり背中から腕を回され抱き締められ千里は悲鳴をあげた。

すかさず佐藤が紙袋を引き剥がし、放り投げる。

ベシヤっという音がして紙袋が墜落した。

やり取りを見ていた鳳仙は苦笑する。

「残念ながら私にも夫があるわ、千里君みたいな年下も可愛くて隙だけど、諦めることにするわ」

「柀の父親か」

「人だから結構前に先立つちゃったけどね、月並みな表現だけれど、私は今でもあの人を愛しているわ。あの人と一緒になれたことを後悔した日なんて一度もない」

どうやら死してもなお、鳳仙は自分の愛した男を思い続けているようだった。

我等の命は長い。これから何千年もの間、鳳仙はいつか死ぬ日まですつと会えない人物を思い続けるのだろう。

「難儀な話だ」

「あら？あなたには理解してもらえなかったのだけれど」

「俺はいつか会える日を待つなんて悠長なことはいらない。自分から……探しに行く」

「……そうね、千里君は転生の鬼だものね」

普通の人は死んだらもう戻らないけれども、と鳳仙はひとりこち、白い雲の流れる空を意味もなく見上げた。

きっと彼女の内面で羨ましさという感情が渦巻いているに違いない。千里と同じように愛しい人も蘇ったら。

誰だつて願うことだろう、永遠とはそういうもので、そしてそれを得た者たちにとって厄介なお荷物ではない。

「私があなたたちに協力していることがばれないように柀を使っていたのだけれど、無駄だったようね。鷺はお見通しのようだよ」

「……良いのか？鷺を敵に回して」

「良くはないでしょうね」

後悔は全くしていないという態度で鳳仙は言い切った。

実際、彼女の立場はかなり危ういものである。掟を堂々と破り、本来なら佐藤と同じように命を狙われてもおかしくない。

それを持ち前の容量の良さで回避し、やっとのことで手に入れた中立という名の立場。

自らそれを捨ててしまったわけだ。

「だからこそ、私のためにもあなたには鷺に勝利してもらおう必要があるの、鴉。自殺で全てを終わらせようなんて考えは最早通用しないことを知りなさい」

鷺が生き残ってしまったえば、中立という盾を失った鳳仙が次に狙われることになる。

その責任をとり、それを回避させると鳳仙は言っているのだ。

「……随分高い期待だが、お前も知っているはずだ、鷺を」

鷺は我等の中でも一番長生きであり、おそらくは佐藤の何倍も生きている我等だ。

力もあるのだろう。同じ我等であるエリ力を従えるほどに。

強大な力を持つ鳳仙が恐れなくてはならないほどに。

勿論佐藤より鷺との付き合いが長い鳳仙とてそれを理解しており、無謀な賭けだと知りながらも佐藤にかけたのだ。

千里という存在に奇跡を夢見て。

「あら？手合わせでは一進一退だと聞いたわ」

「あいつが本気を出していると思うか？」

「まあ…きつとあなたを甘やかしていたのでしょうけど」

新しくできた我等を子のように、玩具のように扱う節が彼にはあった。だからこそ鴉という自分とついになる我等が面白く、同時に

佐藤は寵愛を受けていたのだろう。

「化物より強え化物だかなんだか知らねえが、んなやつは俺らがぶつつぶしてやんよ！」

「辛いなことに…こちらには鬼が二人もいることだしな」

自虐の意味も込めて千里が紙袋をフオローする。

その言葉に柎がぴくっと体を震わせた。まさか自分も含まれているとは思わなかったのだろう。

「化物も二人いることだしね」

紙袋から我等が化物と呼ばれていたことを思った以上に鳳仙は気に留めていたようで、自らを化物と呼んだ。

笑顔、しかしどこか恐怖を引き立てる鳳仙の笑顔に紙袋はうっと言葉を詰まらせる。

「悪かったよ…女」

「女って呼び方は気に入らないわね」

「じゃなんだ？オバサ…ぐえー！」

皆まで言わせずに紙袋の頬に鳳仙の鉄槌がくだる。

笑顔のまま放たれた彼女の小さな拳は、その大きさに不釣り合いな威力と速さをもって紙袋を吹き飛ばした。

崩れ落ちた紙袋が珍しくなかなか起きてこない。

「せめてお姉様ね」

「佐藤の言ったとおりだな」
怒らせると怖い、それを望まない形で目の前で証明されてしまう。
鳳仙と話するときには口調に気をつけなくては、と千里は心に誓った。

戦いは夜になるだろうから休んでいろ…との指示を鳳仙と佐藤から受け、千里と紙袋は洞窟の奥に身を横たえていた。
硬い岩作りのベッドの上で寝る気にもなれず、だからといって我等を相手に戦ったこともない二人が対策を練れるはずもなく。

簡単に言えば暇を持て余していたわけだった。
退屈さから紙袋が欠伸をすると千里にも伝染する。

「かーわいいいな」

千里の欠伸をみて紙袋が感想を呟いた。

目尻に涙を薄っすら浮かべたまま千里は反抗の意を込めて、紙袋を軽く叱るように睨みつけた。

「紙袋」

「んあ？」

「さつき不吉なこと呟いたよな？俺がいなくなっても悲しんでくれるか？とか何とか」

「あー、言ったな」

「あれ、死亡フラグか？」

直球の質問に紙袋は顔を引きつらせて沈黙する。

「質問が直球すぎるだろ」

「なんでだ？あんたは死ぬつもりだったのかって聞いている」

「そーいうことね」

ふうつと安心したように息を吐き、紙袋は肘を使って上半身を起こした。岩壁に背中をもたれて袋をガサガサと掻く。

それから自分があの発言をしたときのことを思い出し、その心境を言葉にまとめようと努力した。

缺と同じだ。

「俺は千里が大好きだ」

「知ってる」

「それからな…認めたくはねえが佐藤にも感謝してる。あいつは永遠の俺と千里の恋路の邪魔者なんだが、それでも俺を解放してくれたのはあいつだ、ま…原因作つたのもあいつなんだけどな」

軽い調子で紙袋は言った。

本当は佐藤のことを責める気持ちなど欠片もなかった。しかし千里にそのことを告げるのは何故だか気恥ずかしく、妙な言い方になつてしまつ。

本当に佐藤に対してある気持ちは感謝だけなのかもしれない。

絶対に認めたくはないが。

「つてなわけで健気な俺は化物と千里の幸せを願つて、鷲つて化物を引き受けてやろうと思つた。鉄のヤローと同じ手法だな」

心臓の辺りとトントンと親指の先で叩いて紙袋は笑う。

「幸い、俺は鉄みてえに寿命が尽きるまで…なんてケチ臭いことは言わないからな。永遠に鷲を閉じ込めておいてやれる」

「そんなこと俺が望むと」

「だーかあらー、お前に一存してやんよ」

「は？」

「予想外なこととはいえー？化物女が仲間に加わり？鬼さんまで仲間に加わりやがった。こんだけの戦力がありや、いくら佐藤が警戒してるような化物でもぶつ殺せるかもしれないねえ」

だがな…と難しい表情をして紙袋は親指の爪を噛んだ。

「予想外つてのは常につきもんだ。もしかしたら殺せるかもしれないねえ…もしかしたら」

「倒せないかもしれないって言いたいのか」

「流石千里、頭が良いな」

ぐつと親指を立てて軽いテンションで紙袋が歯を見せて笑うが、そんなに軽いことではない。

つまるところ、倒せないと判断したら自分と共に世界を隔絶しろ

とっているのだ。

鉄と同じように。

鉄と同じように消える。

「そんなこと俺が出来るとでも」

「出来るさ、いんや…しねえといけねえんだよ、千里」

「……」

「ま、簡単に決めらねえってことは俺がそんなに大切に思われてるってことだと受け取っとくぜ。でもな、千里」

「何だよ」

「記憶取り戻したんだつたらよく考えるよ…佐藤がどんだけ苦労したのか、どんだけの犠牲を払ってお前を求めたのか」

長い旅路だったはずだ。

佐藤と分かれてから幾つか人生を送った。合計すれば三桁の年数になる。

それだけの間、佐藤はずっと自分を犠牲にして探し続けたということになる。ずっと自分を激しく責めながら。

「あの女に頼むまでもねえ…お前にも出来るはずだ、空間隔絶。ま、とにかく俺が言いたいのは…だ、覚悟は常に出来てるってことだ」

何も千里が言えずにいると紙袋は立ち上がり、千里の頭を数回撫でてから洞窟を出て行った。

一人にして、考える時間をくれたというところだろう。

心は叫んでいる。そんなことは絶対にしたくない。

しかし…。

「くそ！」

分からなかった。

千里は悪態をつき、激しく拳を地面に叩きつけた。

日が暮れると同時に空が真っ赤に染まった。

佐藤が洞窟の中で眠っていた千里を起こしに来て、洞窟の外、山の開けた場所には現在佐藤、千里、紙袋、鳳仙、柊がそろっている。

じやりつと地面を踏みしめて佐藤が真っ赤な空を見上げ、険しい表情で両手を握り締める。

「鴉」

「分かってる」

今にも飛び掛っていきそうな勢いの佐藤を見て、鳳仙が宥めるように名前を呼んだ。

風にあおられた髪を手で払いのけると鳳仙は翼を出現させ、同時に佐藤の背からも黒い鴉色の翼が出現する。

二人はやはり違う種族なのだと実感する瞬間だ。

並んで前に出ていた二人が振り返り、佐藤は千里を、鳳仙は柊を見て優しく微笑んだ。

笑ってくれたら安心するはずなのに、何故か心がざわつく。

「さと…」

「じゃあな」

「え？」

異変を察した千里が手を伸ばすより早く、二人は翼を羽ばたかせると赤い空へと舞い上がった。

一瞬で上昇した後、振り返ることもせず滑空する。

状況が一瞬呑み込めず呆然とした千里だったが、紙袋の悪態で全てが理解できてしまった。

「大した自己犠牲だなあ…化物が！」

「…憚ったというわけか」

「どういうことだよ…佐藤と鳳仙さんは二人だけで」

「母上は私を巻き込むことを好ましく思っていなかったようだ。同じく…鴉もおそらく」

淡々と相変わらず感情のこもらぬ声で柊が教えてくれるのだが、その内容はとても無感情では聞けないものだった。

つまり二人は自分達を置いて、自分達だけで犠牲になろうとしているということだ。

「俺より一枚上手だったってことだぜ…千里お！」

強く声を呼ばれて呆然としていた千里は驚き、顔を跳ね上げた。
紙袋は悔しそうに両手を握り締めていたが、口元には笑みを浮かべて空を見上げていた。

そこに佐藤と鳳仙の姿はすでにない。

「追いかけるぜ！」

「どう…やって」

「忘れたか同族よ、私達は鬼だ。我等ですら恐れた力の持ち主だ」

「一人で抱え込んでる化物のケツ、叩いてやんねえとな！」

終・「おかえり」

「自分から来てくれるなんて予想外、いいや、推測通りかな」

鷲は下ろしていた目蓋をそつと押し上げた。

彼は今、人の生活する町の一角、一番高い塔のような建物の頂点に立っていた。

ふわつと微笑み懐かしむように佐藤を見る。

穏やかで、とてもこれから人を殺すとは思えない笑顔だ。

対峙しているのは二人の我等。

「そして予想外、君がまさか中立を破るとは思わなかったよ…もう少し賢いかと思っていた、鳳仙」

「あら、この選択が愚かだとも？」

「愚か…いや」

肩をすくめて尋ねられた鳳仙の問いに鷲は首をかしげ、その答えを途中で区切ると答えを探すように虚空を見た。

結論が出たのか暫くすると笑う。

「そんなことはないね、君達にとつては最高の結末ということか」

「勝つつもりで来た。だが仮に負けたとしても俺が死ねばそれで終わる。千里に手が及ぶことはない」

「おや、本当にそう思っているのかな？」

想定外の鷲の返事に佐藤は眉を顰めた。

興味のない対象に鷲は自ら関わることはしない。

確かに鬼は珍しいものなのかもしれないが、鳳仙の息子である柊にはいつでも手が出せる状況にあった。

だというのに手を出さない…つまり鬼には感心がないということだ。

だからいくら佐藤の仲間だとはいえ、千里達にも手を出さないだろうと想っての行動だった。

「鳳仙、君は話してないのかな？」

「…放したところで余計な混乱を生むだけよ。何しろ私はあなたがあの子に会うとは思っていなかったわ」

鳳仙の額に僅かに冷や汗が浮かぶ。

予想外の事態に彼女も戸惑っているようだった。

「あわす顔がないかと思っていたもので」

「エリカが消えて、僕も少し寂しいんだ。それに、あの鴉がそこまです夢中になる、あの鴉にここまで無謀な行動を起こさせるあの子に

少し興味が湧いてね」

「最悪な父親ね、可哀想だわ」

「…どうということだ！」

鷺と鳳仙が誰かの話をしていることは明白で、その誰かを知らないのはどうやら佐藤だけのようだった。

痺れを切らした佐藤が叫ぶと、平静を乱した彼を見るのがそんなに楽しいのか鷺が再び微笑みを深くする。

「千里は僕の子だよ、鴉」

柊が母親の気配を追い、転移させた先は街中だった。

突如何もない場所から出現した為、嫌でも視線を集めてしまう。

だが観衆の目などを気にしている余裕はなかった。

「こちらだ」

転移するとすぐに柊が走り出し、千里と紙袋がその後を追う。

真っ赤な空は不吉に見えて、千里は軽く身震いした。

「なるほど、鳳仙の中立に意を挟めなかったのは自分自身がその咎を背負っているから…」というわけか」

「そう、でももう気にしないことにしたよ。生まれてしまったものは仕方がない…僕は千里を我等として育てる」

「あら、人との関わりと認めるってことかしら？だとしたら私も鴉

も、裁かれる理由はないんじゃないかしら？」

鳳仙の言い分に多少耳を傾けたようで、鷺は考えるように空へと視線を彷徨させた。

顎に手を当てて思想に耽っていたが、やがて二人に視線を戻して意地悪に笑う。

「そうだね、じゃあ条件を提示しよう。鴉は二度と僕の千里に関わらないこと。鳳仙は柎を僕に差し出すこと」

そうすれば二人の命は助けてやろうと、鷺はそう言っていた。だがその条件に対する二人の答えも予測がついているようだ。

「母親のこと、なめてるみたいね。子を持つ女性は強いわよ？」

「俺は…俺が千里から離れるのは構わない。だがお前に千里を預けようとは思わない」

「うん、予想通り。そう言うだろうと思ってたとも」
だから。

「君達には厳正なる処罰を、他の我等に示しがつかないからね」
「きゃあっ！」

一瞬の出来事で佐藤すらも対応できなかった。

いつの間にか鷺が佐藤の隣に移動し、手刀で鳳仙の胸を貫いている。

真っ赤な血が腕を伝い、肘から滴り落ちた。

圧倒的な力の差。鳳仙ですら一瞬で屠る実力。

腕が引き抜かれると同時に鳳仙はまるで人形のように落下していった。

「鳳仙！」

「ふ…ふふ、お早い退場…ね。ごめんなさい…鴉」

華奢な体だ。空中で受け止めることはおそらく容易いが、そんなことをしている余裕はなかった。

次は自分に攻撃がくる。

見越して体を翻すと、案の定そこに鷺の爪が通りすぎた。

「あれ、よく避けられたね」

「…！」

絶句する。力の差があることは充分理解していたが、よもやここまでだとは思ってもよらなかった。

体が、本能が危険だと訴えていた。

「母上！」

倒れている鳳仙は自らの血に埋もれ、まるで真つ赤な湖の真ん中に横たわっているかのようだった。

そこに駆け寄り柊が体を抱き起こす。

「おいおい、大丈夫かよオバサン！」

「…ふふ…後で覚えてなさい紙袋君」

「どうして…鳳仙さん、佐藤は！」

見て驚くほどの出血量だったが、流石我等というべきか…意識ははつきりしている。

白い腕が上がり、指さした。

赤い夜空を背景に、二羽の鳥のようなものが争っているのが見える。黒い翼を持つほうが佐藤。白い翼が鷲だろう。

明らかに佐藤が劣勢だった。

白い翼が彼を追い掛け回し、黒い翼はひたすら相手の攻撃を回避しているという印象だ。

「行け、私は母上を」

「助かる」

「死ぬんじゃねえぞオバサン！」

「あなたも…私に殴られるまで覚えてなさい」

柊が離脱して残ったのは結局千里と紙袋の二人だけ。最初と何も状況が変わっていないな…と嘆息する。

町の中、空を確認しながら走っていると、白い翼から放たれた青い槍のようなものが黒い翼に激突した。

黒い翼が落下する。

「佐藤！」

「急ぐぜ！」

落下した場所を目測し、紙袋と千里は走行速度を上げた。

「逃げるくらいなら僕に千里を差し出せばいいのに」

鷲が攻撃し、佐藤がそれを避ける。

その繰り返しが続いていた。我等にも体力というものが無限にあるというわけではない。

息を荒くしながら佐藤は反論した。

「お前みたいなのが親だと……あいつは知らなくていい」

「ここで滅するってことね」

できるのかな？と挑発的な笑みを浮かべて鷲は大きく翼を羽ばたかせた。

白い羽が抜け落ちる。

青く鈍く発光する槍が鷲の抜け落ちた羽から生まれ、幾つも佐藤を追撃するように飛んだ。

一度避けても槍はまるで意思を持つかのようにカーブし、滑空する佐藤を追いかけてくる。

「後ばかり気にしていいのかな？」

「！」

追いかけてくる槍に気をとられていたが、いつの間にか鷲に前方へと回りこまれていたようだ。

気づいたときには蹴り飛ばされていた。

強烈な一撃を受けて自由な飛行を失い、槍が飛んでくるのに対応できない。

覚悟を決めて目を閉じると鋭い痛みが幾つか走った。

両膝、両腕、両翼を貫かれて地面へと落ちる。

落下中に目を開くと思いつきり体を捻り、激しく両翼を動かすことで槍を強制的に抜く。

血を降らせながら再び上昇し、腕と膝に突き刺さった槍も力ずくで抜き取った。

(だいぶ出血が酷い)

自分の命の危険をどこかで他人事のように感じながら痛み負けそうになる翼を必死に動かす。

もう早くは飛べない。長くも飛べない。

あの時のようだった。

千里に人を食うなど言われ、力が仕えなくなった血肉の不足。

ならば…と一種の賭けにでる。

佐藤は飛び続けながら自分の腕に唇を這わせた。自らの血を飲むことで何かが変わるのではという思いつきだった。

今まで試した事はない。

「自分を食べるのかい？随分狂った化物だ」

「お前を殺すためならなんだってやってやる！」

佐藤の両目が黄金色の強く輝く。

それと同時にぐんつとスピードが上がり、油断していた鷺の懐に入り込む事が出来た。

鼻先が触れ合いそうなほどの近距離で佐藤は叫ぶ。

「ここで尽きる…鷺！」

佐藤の手の内に出現した槍の先端、それが真つ赤な液体を伴って鷺の体を貫いた。

ビクンと体を一度揺らし、続けて弛緩させる。

それつきり鷺は動かなくなった。だらしなく首を佐藤の胸に預け、俯いたままピクリともしない。

「やったか…？」

「…やってない」

「！」

「残念でした」

ニイつと不敵な笑みを浮かべると鷺は佐藤の胸を蹴って距離をとり、胸に突き刺さった槍を抜き出すと投げ、切っ先を切り替えて再び持つ。

それを持ち主に返すよう、佐藤の胸目掛けて投げつけた。

瞬時のことに空中での体勢を整えることすらできず、佐藤は胸に槍を受けると地面へと叩きつけられる。

「ぐっ！」

この程度で死ぬことはないが痛みを感じないわけでもない。すぐ傍に千里と紙袋がいて、倒れた佐藤に駆け寄ってくる。来るな…という声は血に溺れて出ない。

「佐藤！」

ずっと数メートル上空に鷲が現れた。

佐藤を冷たい目で見下ろし、千里を確認すると驚いてから笑みを浮かべる。

突然微笑まれた千里はわけが分からず混乱するが、佐藤は慌てて槍を引き抜くと体を起こした。

ゴポリと嫌な音を立てて血があふれ出して力が抜ける。

「君の始末は後回しだね、鴉」

「千里に…近付くな！」

「千里…おいで、僕は君を生み出した張本人だ。君の親友は後で殺すけど、僕は君が欲しいから君を傷つけるようなことはしたくない」

「断る！…俺は佐藤を見捨てるようなことはしない」

提案が拒否されると同時に鷲の表情がガラリと冷たいものになった。それを見た紙袋は慌てて千里の腕を引こうとするが遅い。

鷲から放たれた佐藤に突き刺さったものよりは一回り小さな槍、それは千里の肩を貫いた。

「痛っ！」

急所を外すつもりはあったのだろう。

だからこそ肩を貫いたわけだが、そこから溢れ出る血の量は擦り傷程度のものではない。

「悪い子には躰でしょ？」

「この！」

体中が貫かれ、傷だらけになった佐藤はもう動くことができない。ならば今この状況で動けるのは自分しかないだろう。そう考え

て紙袋はフォークを取り出した。

「千里に傷つけてんじゃねえぞ！クソヤローがああああああ！」
紙袋が叫んでフォークを振り上げる。

そのまま数歩進むと地面を強く蹴り、鷲の浮かぶ場所に到達するとフォークの矛先を彼の胸につきたてた。

刺さっても死ぬことはない。ならば避ける必要もない。

鷲は無表情で痛みすら感じずに体を貫かれ、そのまま落下して背中から大地に撃墜する。

紙袋の体重がフォークに乗せられより深く彼の体を貫き、結果的に地面に縫い付けることになった。

身動きは取れないが鷲はまったく平静を崩さない。

「どきなよ、僕は千里に用がある」

「残念ながら義父様、千里はてめえにはやれねえんだよ！」

激しく叫ぶとフォークを片手で押さえつけたまま、鷲の上に乗ったまま紙袋は空いている右手で自分の目を覆う袋を破き去った。

十字の瞳が鷲を捉える。

石化の瞳を確認した鷲はひゅつと息を呑むが、すぐに張り詰めた表情を挑発的な笑みへ転換させた。

指先が灰色に変色し一瞬石になるのだが、すぐに肌色へと戻る。

「珍しいものだね、でも僕にそんなものは効かないよ」

「期待してねえよ…最期にてめえの顔を拝みたいなんて思ってねえ。決めてんだよ…人生に終わりがあるとして、最期に見るのは千里の顔だつてよ！」

「紙袋！」

「来るな！」

慌てて駆け寄ろうとした千里を厳しく叱りつける。

「決めてるから必ず戻ってくる…こんなクソ親父の顔なんて見て終わってたまるかよ。だから…戻ってくるから…千里」

「……だ」

「千里」

紙袋の促しが何を意味するのか理解して千里は首を振った。

「嫌だ」

「やれ、千里…俺からの一生に一度のお願いだ」

「…嫌だ！」

目が熱い。きつと泣いている。

それを自覚し、かつこ悪いと思っっているのだが涙が止まらない。止めることなど出来るはずもない。

ここで紙袋と鷲を閉じられた世界へと向ければ、どちらかが死ぬまで帰ってくることはない。

鉄と同じように…紙袋まで戻ってこなくなる。

そんなのはもう嫌だった。

「大丈夫だ、俺は不老不死…んでもって化物は聞いた話だと限りなく不老不死に近いっただけだろ？何年、何百年、何万年かかるか分

かんねえけど、絶対…戻ってくるから」

「…約束だ」

「おう」

千里は俯いて、なるべく紙袋の痛々しい姿を見ないように手を持ち上げた。指先に魔力が集中し、術式を組み上げていく。

千里と紙袋の行動に、やろうとしていることに気づいた鷲は余裕を崩し、激しく暴れ始めた。

「放せ！…愚かなことを！君まで煉獄に閉じ込められることになるぞ！」

「いーじゃねえか、一緒に殺し合いの地獄に行こうぜ…義父様よお」
抵抗する彼を押さえつけるために必死でフォークを抑えた。

自分達を徐々に覆い始める光を見て覚悟を決める。

（こっから先は一人っでことかよ）

一人で本当の化物を相手にして、勝利はありえない戦いでずっと殺され続け、生き返って、殺される。

我等の寿命がどれくらいかは知らないが、きつと気が狂いそうな

ほどの時間、激痛に耐え続けなくてはならないだろう。

それを知って選んだ道だ。

後悔はなかった。

「愚かな！止めるんだ千里！」

「……うああああ！」

目を閉じて術式を組み上げていた千里が目蓋を押し上げ、目を見開くと突き出していた腕を横に振り払った。

発動の合図。

眩しいほどの光が紙袋と鷲を包む。

眩しさから紙袋は穏やかな表情で目を閉じ、ふつと微笑んだ。

（ここから先は地獄だ。本当にお前は莫迦だな、犠牲になるんだ）
心がそう言っただけで自分の自己犠牲を笑った。

だから笑い返してやる。

嬉しいね、千里の役に立てるなら。

（俺は何にだってなってる）

召使いのいない王間。

その中央にある椅子には鳳仙が座していた。

その脇には彼女の息子、柊の姿がある。

「母上、傷は」

「大したことはないわ…とっくに治ってる」

胸元に手を当て、鳳仙は大丈夫だということを示すと柊の手を借りて立ち上がる。

怪我はとっくに治っているというのに、律儀な息子だと関心する人から言わせれば親ばかりに自分も含まれるのかもしれない…と真剣に一瞬悩んでみた。

窓の外を眺めて微笑を浮かべた。

「あの二人は平穏な生活の真っ最中でしょうね」

「……」

「もう着いたところかしら？」

「心配いらない」

仮面を外した柊は、千里と佐藤の驚く様子を思っ
て鳳仙と共に小さな笑みを浮かべた。

この世界は相変わらず雨が降っている。

しとしと…ざあざあ…決まったりリズムを時折変化させ、雨水が地面を打つ音が聞こえる。

無音の室内で水の音に耳を澄ませ、千里はソファに身を投げ出してうとうとと現実と夢の間を彷徨っていた。

あれから何日、何年経ったのかうかがい知る術はない。

カレンダーはあるが、数字は書かれていなかった。

「千里、風邪を引く」

囁くような声で佐藤は声をかけ、薄っすらを目を開けた千里に苦笑して黒いマントを冷えないように肩からかけた。

慣れた佐藤の匂いに千里は微笑んだ。

髪が伸びた佐藤は後で括っている。以前に比べれば随分と穏やかな表情をするようになった。

人を食うことを止めたからだろう。

それほど佐藤にとって、人を殺すということは苦痛になっていたのかもしれない。

それを自分の為に使っていたのだと思うと、佐藤の犠牲に千里は胸が痛くなる思いだった。

「黒也」

「ん？」

「…幸せだな」

「そうだな」

この平穏は決して幸せとは言わず、退屈と呼ぶ人間もいるかもしれない。

しかしこの平穏を佐藤は望み、多くの犠牲を以って生まれたものだ。それを思うだけで心が満たされた。

それと同時にチクリとした痛みが走る。

未だに殺戮を繰り返り広げ続けているであろう誰かのことを思う。首を振って暗くなってしまう思考を追い払った。

雨の日は、雨の音はどうにも気分を滅入らせる。この世界にいる限り逃げ切れない現象ではあるのだが。

「変だな」

言い知れない違和感を覚えて千里は立ち上がり、違和感の正体を探るべく思考をめぐらせた。

何かがおかしい。

漠然とした感情に支配されて窓辺により、驚いて目を見開く。

「黒也…雨が」

「雨？」

「雨が止んでる」

別に珍しいことでもないだろう…と佐藤は言おうとして思いとどまった。

他の世界では珍しいことではないかもしれない。

しかしこの世界では天と地がひっくり返っても起こりえない、そんな奇跡。雨の止むことのなかった世界で雨が止んだ。

トントン。

そんな異常現象に目を奪われていると玄関がノックされた。

千里は立ち上がって玄関に駆け出す。この館に人が訪れてくることも珍しい。そして初めてだ。

何しろ佐藤の知り合いはこの世界にいない。そして鬼と恐れた人間が千里の場所にわざわざ近づいてくるはずもない。

（本当に、変な日だ）

そう思って玄関にたどり着き、鍵をあけたところで肩に手を置かれた。

佐藤がいつの間にか追いついてきていて、警戒した目をしている。悲しいことか…襲われるということに慣れてしまった佐藤。

その手に安心させるように自分の手を重ね、扉を押し開けた。

雨の止んだ世界、そこに一人の男が立っている。

「……っ！」

驚きと感動で声が出ない。息が上手く出来ない。

そこには懐かしい、少し変わった彼の姿があった。

「ただいま」

呟いて微笑む。

硬直した千里の肩をそっと佐藤が押した。数歩彼に近付いて、千

里はあふれ出る思いを隠さずに笑う。

「おかえり」

終・「おかえり」（後書き）

長々と連ねた駄文、ここまで読んでいただいた方がいらっしやったとしたら、もう土下座もんです！！

本当にありがとうございます！

一気に書いた文なのできつと読みにくいところ、たくさんあったとおもいます。それを我慢して呼んでくださった方々に改めて感謝を。私が書き溜めていた「ざわざわ」はここで完結となっております。多重世界という設定上、長々と続けることはできるんですが、少し悩んだ末に綺麗にここで一度ケリをつけることにしました。というより、これ以上は私の手首が腱鞘炎になります・・・。

最後に、呼んでくださった方々に心から感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032v/>

ざわざわ

2011年9月2日03時18分発行